
インフィニット・ストラトス×仮面ライダー～無限の蒼穹、正義の仮面～

無銘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス×仮面ライダー〜無限の蒼穹、正義の仮面〜

【Nコード】

N8119Z

【作者名】

無銘

【あらすじ】

かつて世界征服を企む悪の組織『ショッカー』から『クライシス帝国』までの組織と戦ってきた11人の男達は、女性にしか扱えない究極の機動兵器『インフィニット・ストラトス（IS）』の登場によりそれまでとは大きく変わったこの世界の片隅で13人の少女達とそれぞれ出会った。ISという力を得た巨悪が少年少女達の、そして人類の自由と平和を奪わんとした時、男達は再び少年少女達の、そして人々の前に現れる。

時代が望めば、人々が呼べば、そして誰かが助けを求めれば…彼らは必ず甦り、何度でも立ち上がり、そして嵐と共に…嵐のようにやってくる。

これはそんな11人の仮面の男達…『仮面ライダー』とかつて彼らと出会い、『インフィニット・ストラトス』と何らかの形で関わっている13人の少年少女達、そして彼らを取り巻く人間達の物語である。

本作品は同じ題材の短編『白と銀』と『姉妹の太陽』及び『白騎士の真実』と同じ設定、世界観という前提で書いております。また原作崩壊、キャラ崩壊、独自設定・解釈、時系列矛盾、捏造、誇張、知識不足、不要なネタバレ要素などが多分に含まれております。ご注意ください。

プロローグ（前書き）

本作品は『IS インフィニット・ストラトス』と『仮面ライダー』、『仮面ライダーBLACK RX』までの所謂『昭和ライダー』が同一世界観という設定で書かれています。その為独自設定・解釈などが多数含まれておりますので特にご注意ください。

プロローグ

かつて、この世界には世界征服を企む秘密結社『シヨツカー』が存在した。

シヨツカーはナチス・ドイツを母体に誕生し世界中を股にかけ暗躍した大規模な組織であり、ナチス時代ドイツで盛んに研究された人体改造技術：『改造人間』の製造技術を始めとする優れた科学技術と、組織に忠誠を誓う様に洗脳を施した改造人間：『怪人』という強大な戦力を多数保持している事を背景に様々な犯罪や破壊工作を世界各地で展開していた。

これに対して各国はそれに対抗し得る組織として『ICPO（国際刑事警察機構）』：通称『インターポール』の大幅な規模・権限の拡大及び強化を定めた『リヨン条約』を締結し、インターポールを中心に各国が連携してシヨツカーに対抗しようとした。

しかしシヨツカーは手強かった。その科学力、何より怪人の戦闘能力は人間サイズとは思えぬ程のものであったのだ。

そして多くの人々がシヨツカーによりその命や家族、友人を失い、夢や希望、未来を踏み躪られ、笑顔や生活、幸福を壊され：そして自由と平和を奪われた。

絶望的であった。誰も彼もが絶望するしかない：そう思っていた。

しかし、そいつは嵐と共に…まるで嵐のように突然現れた。

そいつはシヨツカーによりバツタの能力を持った改造人間として改造手術が施されたが脳改造寸前に脱出、人類の自由と平和を守る為『仮面ライダー』を名乗りシヨツカーに戦いを挑んだ。

仮面ライダーはその身一つで怪人を次々と倒していき、単独或いは少数でシヨツカーの計画や拠点を悉く潰していき、遂にはシヨツカーを壊滅させる事に成功した。

更にシヨツカーと戦った2人の仮面ライダーはシヨツカーの後継組織『ゲルシヨツカー』とも戦い、勝利した。

シヨツカーやゲルシヨツカー壊滅後も世界征服を企む『デストロン』から『クライシス帝国』までの組織が出現する度に2人の仮面ライダー、そして組織の出現に呼応するかのようにその都度現れる新たな仮面ライダー達により組織は壊滅していった。

最後の組織クライシス帝国が11人の仮面ライダー達により倒されて以降、世界征服を企む悪の組織が現れる事はなかった。

これで漸くこの世界には自由と平和が戻り、平穏となった筈であった。

だが、そうはいかなかった。

クライシス帝国が崩壊してある程度年月が経つとそれを見計らったかのように、第二次世界大戦前後：シヨツカーとほぼ同時期に誕生し、それまでも散発的に活動が続けてきた謎の国際的秘密組織『亡^{フレ}国機業^{ントム・タスク}』が本格的に活動を開始した。

『亡国機業』は活動内容自体は規模の多寡こそあれシヨツカー以来の所謂『悪の組織』と変わらない。

しかしそれまでの組織と異なり目的からして一切不明であり、科学力こそ劣るもののその分この世界に広く深く根を下ろしており、社会への浸透度や根の深さなら『ゴルゴム』すら上回るというそれまでの組織とは別方向で厄介な存在であった。

更にこの世界を根底から覆えし、大きく変える出来事が起こる…『インフイニット・ストラトス』、通称^{アイエス}ISの登場だ。

ISは元々若き天才科学者篠ノ之束が発明し、次世代の高性能多目的宇宙服『マルチフォーム・スーツ』として開発が進められてきたのだが、その第1号機『白騎士』の発表から1ヶ月後に突如世界中のミサイル基地のコンピュータがハッキングされ、直後に日本に発射された全2341発のミサイルの約半数を『白騎士』が迎撃し、

更に各国が送り込んだ艦隊や戦闘機編隊を一人の死傷者も出さずに無力化するという事態が発生した。

後に『白騎士事件』と呼ばれるその出来事により、ISが現行兵器全てを凌駕する『究極の機動兵器』である事、そして「ISを倒せるのはISだけである」という篠ノ之束の言葉が事実である事が証明され、世界は大混乱に陥った。

しかし同時にISを野放しにすれば核兵器や改造人間：怪人と同じように人類を脅かす危険な存在になる事を危惧した各国は、ISの軍事利用の制限と各国間のISに関する情報公開と情報・研究共有を定めた『IS運用協定』：通称『アラスカ条約』を締結した。

同時に機械工学の第一人者である光明寺信彦博士の提唱で『アラスカ条約』に基づきISの研究開発の促進、各国のIS保有数及び動きの監視などISに関する事項を扱う国際機関：『国際IS委員会』が設立され、世界中から軍事、機械工学、生化学など様々な分野の専門家や有識者が集められ、ISに関する研究や各国との連絡・調整が急ピッチで進められた。

そして国際IS委員会の活動や援助、事前に『白騎士』のデータを提出されていた『国際宇宙開発研究所』が提供されたデータを開示した事、篠ノ之束が中枢部の『ISコア』以外の情報開示や各国へのISコア製造・提供に応じた事が併さりISの研究・開発や環境整備は急速に進み、『白騎士事件』から僅か一年足らずで21の国と地域が参加して行われるISの世界大会：国家の威信をかけたあらゆる種の代理戦争でもある『モンド・グロツソ』の第1回大会開催までこぎつけた。

更にISに関する人材育成の為、あらゆる国家機関から独立し、不

干渉と定められたIS操縦者育成機関として日本に『IS学園』が設置された。

だがISの急速な普及に伴い社会もまた大幅に変わっていった。

それまでの兵器を凌駕する力を持つISは何故か女性しか操縦出来なかった。その為自然と各国軍においては女性が進出していくようになった。

さらに何の巡り合わせか同時期に『ラディカルフェミニズム』の論客レベッカ・ランバートが極端な女尊男卑思想と、その理想社会建設の為には男性から武力を奪えばそれが成ると唱えた事が加わって、世界中に女尊男卑の風潮が急速に広まった。

こうしてそれまで男尊女卑的であった社会は一転して女尊男卑が当たり前の社会となった。

それに加えて世界最初の男性IS操縦者の登場：『オリムラ・シヨック』やそれと深い関わりがある『デュノア・スキャンダル』と言った世界をひっくり返しかねない大事件、そしてISに目を付け、ISという力を入れた『亡国機業』の暗躍により現在のこの世界はますます混乱の度合いは増している。

ある者はその変化を喜び、ある者は変化とその原因となったISを憎み、またある者は急激な変化に戸惑った。

そして多くの者がその変化に乗じて力を入れた『亡国機業』などの悪により自由や平和を脅かされ、助けを求めた。

その助けを求める声に応えるように、彼らは再び立ち上がった。

IS登場以来何もかもが大きく変わったこの世界においても、11人の仮面の男達…仮面ライダーは変わらなかった。

彼らは以前と同じく人類の自由と平和を守るという己の正義を貫く為、そしてそれを脅かす悪から人々を守る為にその怒りや悲しみ、憎しみを仮面で隠し、『亡国機業』を始めとする新たな力を手に入れた悪との戦いを開始した。

そしてその身体を、命を、魂を…全てを燃やして悪の野望を阻止するためにもまた戦い続けている。

これは『仮面ライダー』としてこの世界を守る為に戦う11人の男達と、かつて彼らと出会い、そして助けられた13人の少年少女達、そして彼らを取り巻く多くの人間達の物語である。

プロローグ（後書き）

拙作をお読み頂きありがとうございます。

今回は今までのISと仮面ライダーを題材とした短編を踏まえた上で連載という形式をとる事に致しました。

連載という形式には慣れていない為不手際もあると思いますが指導、ご指摘頂けますと助かります。

では改めまして今後とも拙作を宜しくお願い致します。

第一話 俺の名は（マイ・ネーム・イズ）（前書き）

この話は同じ題材の短編群、特にこの話同様に織斑一夏と本郷猛を主役とした『疾風の心』の内容を踏まえておりますので、予め読んで頂きますと幸いです。

時系列的には『IS』第7巻の無人IS『ゴーレム3』（本来はローマ数字ですがこちらでは表示されない為便宜上この表記とします）のIS学園襲撃から2週間前後経過した頃と設定しています。

第一話 俺の名は(マイ・ネーム・イズ)

世界唯一のIS操縦者育成機関『IS学園』の寮。ここに世界初の男性IS操縦者でありこの学校唯一の男子生徒でもある織斑一夏の部屋があった。

その部屋の中には部屋の主である一夏の他に6人の少女が居た。とうより一夏は縛り上げられた状態で椅子に座らされており、6人の少女が一夏の部屋を荒らし回っている状況だ。

「折角の休日だったのにいきなり叩き起こされて…いきなり縛り上げられて…部屋を荒らされて…一体どういう事か教えてくれ!!」

「……………駄目だ」「……………」

「駄目!?!どうしてだよ!?!」

一夏の魂の叫びを一言で切り捨て少女達は部屋を探索する。

「ベッドの下は無しか…セシリア!」

ベッドの下を覗き込んでいた黒髪の少女…篠ノ之箒が引き出しを探っている長い金髪の少女…セシリア・オルコットに声を上げる。

「こちらにもありませんわ!」

「天井裏もよ!」

「ラウラ！他に隠しスペースみたいなのは見当たらない？」

「いや、私の見立てでは無い」

「つまり残るは…クローゼット…！」

更に凰鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィツヒ、更識簪がそれに続く。

こんな事になったのは一週間前に『銀の福音』や『仮面ライダー』を模した無人ISが学園を襲撃した際に重傷を負った姉で一夏の担任教師でもある織斑千冬の友人…本人達は腐れ縁と言っているが…滝和也を昨日見舞いに行つたのが原因だ、と一夏は推測している。

最初は二人きりで色々雑談していたのだが、例の如く好みの女の子のタイプを和也が聞いてきた所に丁度今この部屋にいる6人が入ってきた。

和也と共闘した他の5人はともかくその時に学園に不在で和也とは面識の無い簪の簪が何故見舞いに来たのかは疑問だが、そんな事はどうでもいい。

むしろ丁度その話を聞いていた6人が何故だか知らないが明らかに殺気立っていたのが問題だ。

しかも悪い事にその直前に和也が一夏にエ…その手のいかがわしい本を持っていないか聞いている所を耳にしていたらしく、その事について執拗に一夏に聞いてきた。

その場は直後に入ってきた和也の担当医で簪と同じく一週間前は学

園に不在だった学園校医の一人『学園最自由』こと緑川ルリ子の活躍…と言っても6人をハグしようと追い掛け回したただが…により収まった。

そして安心していたら翌朝早くにドアをピッキングして侵入してきた6人に叩き起こされ、縛り上げられ、部屋をくまなく探索されて現在に至る。

勿論先ほどからその手の本は隠していないと何度も主張しているのだが、彼女達は無視している。

そうして現在6人はクローゼットをくまなく探索している。すると簷が何かを見つけたようだ。

「何だろう…これ…少し大きめだし…ボロボロだし…？」

そして簷はクローゼットからジャケットを…俗に言う『革ジャン』を取り出す。

簷の言う通りそれは一夏が着るには少し大きめで、至る所に縫った跡がある継ぎ接ぎのものだ。

「それは…」

「『猛さん』から貰った大切なもの、だろう？」

答えようとする一夏の後を引き取り簾が答える。

「猛…さん…？」

「ええ。一夏さんの命の恩人で…『理想のヒーロー』ですわ」

「ほら、昨日滝捜査官のお見舞い行く途中で話したじゃない。一夏が誘拐された時に一緒に居て…そして助けてくれたのがその『猛さん』らしいの」

「と言っても僕達も一夏や織斑先生、滝捜査官から聞いたただけなんだけどね」

「それと村雨さんの話では村雨さんの大先輩であるとも聞いているな」

そして疑問を口にする簪に対してセシリア、鈴、シャルロット、ラウラが続ける。

彼女達の言う通り、一夏は誘拐された際に一夏を人質にされる形で一度は一緒に捕まった『猛さん』こと本郷猛により助けられた。

犯人グループが猛と第2回モンド・グロツソ決勝戦を棄権して弟の一夏救助に現れた織斑千冬、そして千冬の警護に当たっていた滝和也により鎮圧され、一夏が千冬と再会を果たした直後に猛はいつの間にか姿を消していた。

その为一夏と猛が一緒にいた時間はそこまで長くはないのだが、一夏の脳裏には本郷猛という男が自分に見せたその優しさや強さ、正義、信念、生き様、魂が焼き付いていた。

故に一夏にとって本郷猛とは命の恩人であると同時に自分もこうありたいと願った憧れのヒーローでもある。

そしてその事を簪以外の面々は前々から一夏から聞いている。

ちなみにこのジャケットは鎮圧途中で上着を引き裂かれ夜風に吹かれ震えていた一夏に着ていた猛が掛けてくれたものだ。

一夏はこれを宝物として寮に持ち込んで保管しており、破けたりする度に自分で繕ったりしていた。

そこにドアが勢いよく開かれる。

「フフフ…見つけたわよ、簪ちゃん。それと他の皆も…昨日の分までたっぷり可愛がってあげるわ」

「……………ルリ子先生!?」「……………」

緑川ルリ子であった。先程まで更識楯無をハグしようとした地獄の底まで追いかねない勢いで逃げる楯無を追跡していたと聞いていたが、どうやら捕まったらしい。そして続く獲物を求めて此処までたどり着いたのだらう。

そして簪のみならず他の5人もルリ子には気に入られて…『必ず』ハグする対象である。

昨日は病院内という事で向こうが自由に動き回れなかった事もありどうにかして逃げられたらしいが、今度ばかりはそうはいかないだらう。

この中では一番日本の常識に疎いラウラですらルリ子のこの悪癖には辟易している。まして他の5人は言わずもがなだ。

そしてハグしようと飛び掛かるルリ子を躲した6人は蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。

「ちょっと待ちなさいよ！…あら、貴方どうしたの？趣味？」

「…いえ、出来れば解いて欲しいんですが…」

一夏は溜息を付きながらもルリ子に縄を解くように頼むしかなかった。

病院の待合室らしき場所に設置された椅子に一人の女性が座っていた。

いかにもスーツ姿が似合いそうな凛とした雰囲気、伶俐な美貌、メリハリのあるスタイルの良い美女だ。と言っても休日は今もスーツではなく私服姿だが。

暫く座っていた女性だが、やがて病院の病室のある方向から歩いてくる男の姿を見ると立ち上がる。

男はラフなジャケット姿だ。手にはバッグを持ち、頭や顔には湿布らしきものが貼られている。

男は女性の姿を見つけるやそのまま歩み寄る。

「しかしよく考えりや凄い光景だな…かの『ブリュンヒルデ』がわざわざ病院まで出向いて直々にお迎えだなんてな」

「その様子では殆ど完治したみたいですね…それと一応聞いておきます。貴方本当に生身の人間ですか？」

「そう言つなよ、俺だつて驚いてんだから…わざわざ悪いな、千冬」

「いえ、こうなったのも私が原因みたいなものですから気にしないで下さい、和也さん」

そう女性…織斑千冬は歩み寄ってきた男…滝和也と会話を交わす。

織斑千冬はこの病院の近くにあるIS学園の教員であり、現役時代は第1回モンド・グロツソの総合優勝者『ブリュンヒルデ』として名実共に世界最強のIS操縦者として君臨していた。

そして滝和也はFBIから出向してきたインターポール捜査官であり、千冬とは第2回モンド・グロツソ以来の仲だ。

その和也が何故IS学園近くの病院に居たのかと言うと、無人ISのIS学園襲撃の際に負傷し入院していた為だ。

専用機限定タッグマッチ中の無人IS襲撃から一週間後に和也が追っている大規模犯罪組織『亡国機業』ファントム・タスクによる学園襲撃…和也曰く『火事場泥棒』を察知した千冬は和也をIS学園まで呼び出し、協力を要請した。

和也はそれに応じ、『亡国機業』の企みを阻止したはいいが、その翌日に襲撃してきた『仮面ライダー』及び『銀の福音』の姿を模したISに生身で戦いを挑み、重傷を負った。

別に戦いを挑んだのは和也の自発的な意志なのだが、今回事件に巻き込んだのは自分からである事、何より無人機を送り出していたのは自分とは古い付き合いである篠ノ之束だろうと千冬は推測している事…というよりコアの製造法を知っているのが束しかない現状未登録のコアを使った無人機を送り込めるのは束しかないが…から千冬は和也の負傷に責任を感じている。

だからこそ校医の海堂肇や緑川ルリ子に筋を曲げて和也の治療を担当してくれるように頼んだ。どちらも和也とは古い付き合いである為に頼まれなくてもやるつもりだったらしいが。

そして和也は入院して二人による治療を受け、遂に退院と相成った…一週間で、だ。

少なくとも千冬の見立てでは二ヶ月は入院する必要があるそうな重傷だった筈なのだが、いくら肇とルリ子の腕が良くても回復が尋常ではなく早い。昨日和也が退院すると病院から戻ってきた二人から聞かされた時に思わず耳を疑った。何回も肇とルリ子に確認し、最後にはこれは一体どういう事なのかと聞いたりもした。

肇とルリ子も和也の回復力に驚いており、肇も千冬の問いには黙って首を振るだけで終始し、ルリ子に至っては「こっちが聞きたいわよ！」と逆ギレしていた。

もつとも、本人も驚いたらしく、長めに見積もって一ヶ月の療養を本部に申請して受理されたのだが僅か一週間でほぼ完治してしまい

途方に暮れているらしい。

いくらショッカーからクライシス帝国まで出現しどんな作戦を展開していても大抵は一週間で平静を取り戻している日本でも人の身体ばかりはどうしようも無い筈なのだが、どうなのだろうか。

そんな事を考えている千冬に対して和也が口を開く。

「それでよ、わざわざこんな所まで出向いて来たって事はお前の奢りで快気祝いでもしてくれるんだろ？」

「…歳下にたかる気ですか？」

「いいじゃねえかよ、IS学園の教員なら俺より給料いいんだろ？」

「貴方だって本来なら私と同じくらい貰ってる筈じゃないですか」

「いや実はさ、今回派手に暴れちまったお陰で私物の『アレ』全部修理に出しててな…今割と金欠なんだよ」

「貴方って人は毎回毎回…」

いつもの如く軽口を叩く和也に千冬は最早何回目となるか分からない溜息をつく。

いつもそうだった。出会った時も、一夏が誘拐された時も、千冬の教え子であるセシリア・オルコット暗殺未遂事件の際に『メルクリウス号』に乗り込んできた時も、一週間前に千冬の依頼でIS学園まで出向いてきた時も、いつもそうだった。

この男は一見不真面目で、いい加減で…しかし千冬の頼みや一夏やセシリアの命を守る為に処分覚悟で、命を進んで懸けるくらいに熱く、気高く、優しく…対照的に根は真面目な千冬が何だかんだで和也が嫌いになれないのはこれが理由だ。

そして尚も口を開こうとする和也の頭に情け容赦の無いハリセンが落とされる。

「痛っ！何しやが…」

「何が『何しやがる』だ！俺だけじゃなく織斑先生まで心配させやがって！」

ハリセンの主は千冬ではなくその近くに立っていた初老の男性であった。

「…おやつさん!？」

「全く、折角人が見舞いに来てみれば歳下にたかりやがって…元気になって、良かった」

「…すみません、おやつさん。ご迷惑おかけしました」

「気にするな。お前も猛や隼人達と同じで、俺にとっては息子みたいなものだから」

ハリセンで和也の頭を叩いた男性は和也を叱責しながらも最後に柔和に笑ってみせる。すると和也は一転して恭しく一礼する。

「あの、和也さん。立花藤兵衛さんをご存知なんですか？」

「ご存知も何も…前にお前にも話した俺達のオートレーサーとしての師匠で…『おやつさん』さ」

「悪いね、織斑先生。こいつが毎回毎回迷惑掛けてるみたいで」

「それより何でお前がおやつさんの事知ってるんだよ？」

「私の教え子…篠ノ之箒を『亡国機業』の襲撃から保護してくれたのが立花さんでしたから」

千冬が男性…立花藤兵衛について和也に聞くと藤兵衛は苦笑しながら千冬に謝罪する。

藤兵衛はこの街でバイク屋を営んでおり、篠ノ之箒が『亡国機業』にその身を狙われた際には箒を保護した事からIS学園側から藤兵衛に感謝状を送っており、その打ち合わせの為に藤兵衛の店『立花レーシング』まで何度か赴いている。

ちなみに同行した副担任の山田真耶とは古い知り合いらしく、しょっちゅう話が脱線して打ち合わせは予想以上に長く延びたのだが、どうやら昔真耶を身体を張って助けた和也以上にいい加減というかフリーダムなカメラマン…一文字隼人も関わっているとそれとなく察した為敢えて文句は言わず聞き役に回っていた。

そして千冬は和也からレーサーとしての師匠であり、父親のように慕っている『おやつさん』の話はよく聞かされていた。

「そついう事だ。だから今回は俺が快気祝いって事で奢ってやるよ…俺の行き付けの店だな」

「いや、面目ない、おやっさん。ならお言葉に甘えさせてもらっよ
「ついでに織斑先生も一緒にどうか？ 勿論そちらにも都合がある
だろうけど…」

「いえ、ご一緒させて頂きます。どの道そうするつもりでしたし
「なら決まりだな。それじゃ行こうか、二人とも」

藤兵衛がそう言って歩き出すと和也と千冬もそれに続けて歩き出し
ていた。

「おやっさん行きつけの店が何処かと思えば…まさか『五反田食堂』
だったとはね」

「そう言えば、この前…幽霊騒動の時に一度来た事があったと蔵か
ら聞いてたな」

「と言っかおやっさん、大将とは知り合いみたいだけど…？」

「何、まだやんちゃしてた若い頃には藤兵衛さんによく世話になっ

ててね。しかし弾と蘭を助けてくれた兄さん達が藤兵衛さんの弟子とはなあ……」

昼飯時を大分過ぎ、人が殆どいない大衆食堂『五反田食堂』のテーブル席の一角に滝和也、立花藤兵衛、織斑千冬が座り、厨房から顔を出してきた五反田蔵を交えて話していた。

蔵の話ではやんちゃだった若い頃に藤兵衛にはよく世話になっていたらしく、付き合いは長いようだ。

そして藤兵衛も若い時分には五反田食堂によく立ち寄っており、蔵の父親である五反田食堂の先代店主にも世話になっていたらしく、戦いから身を引きこの街に腰を据えて『立花レーシング』を開いてからは再び常連客として店に通うようになったそうだ。

そこに蔵の孫である五反田弾と五反田蘭の兄妹がやって来て和也に話し掛ける。

「お久しぶりです、滝さん」

「久しぶり…弾君。蘭ちゃんも元気そうで良かったよ」

「いえ、滝さんこそ藤兵衛さんから入院したと聞いてたのでどうなつたかと思いましたが…大丈夫そうで良かったです」

そう言って和也と弾と蘭は顔を見合せ笑い合う。

「和也さん…二人とは知り合いなんですか？」

「ああ。お前に頼まれた幽霊騒動の調査の時にちょっと、な」

千冬の質問に和也は簡潔に答える。

セシリア・オルコット暗殺未遂事件解決後は千冬とセシリアに付き添う形で日本まで同行した和也はそのついでにIS学園や周辺の街で話題となっている幽霊の調査を千冬に頼まれた。

千冬の懸念通り幽霊は無人IS…最初にIS学園を襲撃してきたタンプでインターポールなどでは『ドール』と呼称されている…であり、街の近くにある廃墟を拠点としていた。

その際和也は廃墟に赴いていた妹の蘭を探しに行った弾と遭遇しており、弾と協力して無人ISに遭遇、襲撃されていた蘭の救出に成功していた。

「そう言えば滝さんは風見さんが今どうしてるか分かりますか？」

「海外で色々動いてたらしいんだが…最近それに目処がついたみたいでこつちに戻ってくるそうだ。ついでに蘭ちゃんの笑顔がついた日本一の五反田食堂の定食メニューも食いたいとよ」

「そうですか…そんな所も相変わらずですね、風見さん」

そして廃墟で蘭が無人ISに襲撃された際に彼女を保護し一時的行動を共にし、最終的に無人ISを全て撃破したのが和也の後輩に当たる『風見さん』こと風見志郎だ。

その後は盟友の結城丈二と共に『亡国機業』の計画を追ってエジプトやタヒチ、ヨーロッパを転々としていたらしいが、今はインターポール本部を通じて日本に帰国し、2、3日後にはこの街に到着す

るとの連絡が和也に入っている。

「そっか、弾君と蘭ちゃんを助けたのもう一人の方は志郎だったんだな」

そう言っつて藤兵衛は何処か誇らしげに笑う。風見志郎もまた息子同然なのだから当たり前なのだろうが。

そこに店の戸が開き少年が入ってくると弾に声を掛ける。

「弾、席空いて…っつて和也さん！？入院してたんじゃない？？」

「驚くのも無理ないか…お陰でさっき退院出来てね、こうして快気祝いって訳さ」

入ってきたのは千冬の実弟の織斑一夏だった。どうやら弾とは友人らしい。

「何だよ一夏、滝さんと知り合いだったのか？」

「まあな。お前の方こそ和也さんと知り合いなんだな」

「ええ。夏休みの時に風見さんと一緒に私と兄の事を助けてくれたんです」

「しかし驚いたな…まさか一夏君と弾君が友達だったなんてな」

「中学時代からの付き合いなんです…それとあの時はありがとうございました、立花さん」

「気にしなくていいよ。篤ちゃんも元気にしてるかい？村雨良つのに様子見に行くように頼んだんだけど俺に言つの忘れてそのまま海外行っちゃってね」

「はい、お陰様で。というか村雨さん…千冬姉、邪魔なら出ようか？」

「いや、私は一緒の方が何かと都合がいいからむしろ同席しろ。何処かの似非インターポール捜査官の動きも牽制出来て楽だからな」

「まったく、これだからブラコン怪人は…」

「道理で一夏君があんな鈍感になるわけだ…」

そして自分の隣に一夏を座らせる千冬に和也と藤兵衛は溜息を付きながらも再び五反田兄妹を交えて雑談しながら料理が到着するのを待つのであった。

「…今回の件に関するこちらからの報告は以上です」

「お手数をおかけしました、山田先生」

休日の午後にも関わらずIS学園にある会議室の一角で、数人の学園教員と向き合う形で二人の男と一人の女性が椅子に腰掛けていた。

そして教員の一人…山田真耶が報告すると学園校医で男の一人…海堂肇が真耶に頭を下げる。

そして真耶と肇が暫く質疑応答をした後にもう一人の男が口を開く。

「これでヒアリングは全て終了です。今回はご協力頂きありがとうございます」

そうして男もまた教員達に頭を下げる。

「本当、サラも菜月も真耶ちゃんも悪いわね、休日なのに付き合わせちゃって」

「いえ、昨日からヒアリングの準備をされてた緑川先生や海堂先生に比べれば…」

そう言つて真耶はもう一人の校医でありヒアリングに参加していた緑川ルリ子に首を振る。

肇もルリ子も今回は所属する『国際IS委員会』の中でもIS学園に関する事案を担当する『IS学園小委員会』常任委員の一人として先日の無人IS襲撃に関してIS学園側にヒアリングを行っていた。

本来ならば指揮を執っていた織斑千冬からも話を聞くのが筋なのだろうが、この所無人IS襲撃や『亡国機業』のIS学園侵入の対処や後始末で働き詰めである事からそれを知る肇とルリ子の計らい

で今回のヒアリングには呼んでいない。

「それに常任委員なんてただの肩書きみたいなものだし…それより光明寺博士こそわざわざスイスからこちらまでお越し頂いてありがとうございますとわざわざいました」

「気にしないで下さい、緑川博士。IS学園小委員会の委員長として当然の事ですから」

そう言つて頭を下げるルリ子に対して男：光明寺信彦は穏やかに笑つて首を振る。

機械工学の第一人者として世界中にその名を知られている光明寺信彦は『白騎士』事件以前：『白騎士』発表直後から『白騎士』及びISに注目しており、『白騎士事件』直後にISを専門的に扱う国際機関設立を唱え、国際IS委員会設立を主導した人物でもある。

現在では国際IS委員会の創立メンバーの中でも重鎮として創立以来国際IS委員会副委員長を務める傍らIS学園小委員会委員長も兼任している。

なお国際IS委員会委員長は慣例として国連事務総長が就任する名誉職に近い扱いであり、事実上副委員長である光明寺が国際IS委員会の最高責任者となっている。

ちなみにルリ子が言っているように国際IS委員会、特にIS学園小委員会のメンバーは月に一度の定例会と何かIS学園に問題が発生した際の緊急召集以外は仕事が無い為意外と暇である。だからこそ肇もルリ子も普段はIS学園の校医を兼任出来るのだが。

とはいえ副委員長も兼任する光明寺は流石に忙しい筈なのだが、立て続けに無人機に襲撃された事やいずれも未登録のコアが使われていた事などの事態を重く見て肇とルリ子の要請に応じてこうしてIS学園まで出向いた。

「それに友人の…緑川弘の娘の頼みを聞かない訳にもいかないしね」
光明寺は笑ったままルリ子に続ける。

光明寺とルリ子の父緑川弘は大学時代の同期であり、機械工学、生化学と専攻は違えど互いに意気投合した親友同士として家族ぐるみで付き合いがあった。

その為ルリ子と光明寺の実娘で、今は父と同じ機械工学者であり国際IS委員会創立メンバーの一人でもある光明寺ミツ子とは幼なじみであり、互いに色々境遇が似ている事もあって今でも無二の親友同士だ。

「しかし光明寺博士、『亡国機業』が貴方の身柄の確保を狙っているとの情報がインターポールから寄せられています…」

そこに肇が口を開く。

光明寺はその学識と立場故に『亡国機業』が付け狙っているという情報がよく入っており、実際何回か狙われた事もあるのだが、護衛を特に付けていないにも関わらず一度も捕まる所か『亡国機業』側にまともな追いかけられた試しはない。

「ありがとうございます海堂博士。しかしまさか先程貴方を乗せていたタクシーの運転手がその光明寺信彦だとは向こうも思わないで

しょうね」

そう言つて光明寺は事もなげに笑つてみせる。

実は光明寺が捕われない最大の理由がこれである。

光明寺は狙われているという情報が入る度に電気屋、警備員、タクシードライバーなど様々な職種の人間に変装しては上手く追跡を躲してきた。

しかもいずれも本職さながらの腕前である為ますます気付かれなさに拍車がかかっている。

一度『亡国機業』側が誘拐しようとして追つ手を差し向けた際に、光明寺が逃げた方向を教えたホットドッグ屋を、後で追つ手を捕まえたインターポール捜査官が事情聴取しようとした際に実はそのホットドッグ屋こそが光明寺本人だった、という事もある。

ルリ子が父から聞いた話によると元々天才肌かつ多趣味で、しかも凝り性だったらしく大学時代から多くの資格や免許を持っていたらしい。

加えて本人は「昔とつた杵柄」と言っているが、色々怖くてルリ子もいったいどんな事があつたのか聞き出せていない。

「それに今回はこちら側も無策という訳ではありませんから」

光明寺は更に続ける。そして教員達や肇とルリ子を促し光明寺は会議室を後にした。

「いいのか？一夏、お姉さんと一緒じゃなくて」

「千冬姉もこの所忙しかったみたいだし、たまには羽を貰いたいからさ。それに俺がいたんじゃまた和也さんと喧嘩始めそうだし」

「…私は滝さんの主張が正しいと思います」

日が西に傾いた頃、IS学園へと続く道を織斑一夏と五反田弾、それに五反田蘭が並んで歩いていた。

一夏に想いを寄せる蘭に対してもあまりに無神経かつ鈍感な言動を繰り返していた為にもたしてもキレた滝和也と織斑千冬とで喧嘩が始まったのだが、今回は立花藤兵衛によりあっさりと鎮圧された。

そして現在和也と千冬は藤兵衛監視の下で罰として五反田食堂の皿洗いをさせられている。

そしてまたしてもいつもの如く口喧嘩を始めた和也と千冬に藤兵衛が再びハリセンを振り下ろしたのを見て一夏は先にIS学園へ戻る事を決め、見送っていく事を申し出た五反田兄妹と一緒にこうして歩いている。

「けど俺は千冬さんの気持ちも分からないでもないけどなあ…悪い

人じゃないのは分かってるんだけどやっぱり弟とか妹に変な事吹き込む人は近付いてほしくないっていうか」

そう弾は蘭に答える。

実際和也は決して悪い人間ではない、むしろ出会って間もない自分達兄妹の為に命懸けで生身にも関わらず無人ISに挑みかかるくらい熱く、優しい男だとは弾は承知しているのだが、千冬の会話を聞いているとどうやら不真面目さやいい加減さは単なるポーズだけではなく元々そんな傾向があるようだ。

少なくとも千冬の前で一夏に歳上が好きなのか聞いてくるような人はいくら暴力を振るってくる妹でも傍には近寄せたくない。一夏以外にそんな事を聞く気はないようだが。

「けど和也さん、前にも生身でISに立ち向かってたんだな…」
「うかお前もだいたい無茶したんだな」

「そんな大した事じゃないって。あの時は無我夢中でさ…な、蘭」

「うん。何か気が付いたらつい身体が動いちゃったと言うか…」

そう言っただけと蘭は笑って答える。

あの時弾は妹が逃げる時間を稼ぐ為に無人ISに挑んだ上に、追い詰められていた風見志郎を助ける為に弾と蘭は和也と共に生身で無人ISに挑みかけたと一夏は聞いている。

正直弾は怖かったが、何だかんだ言ってもたった一人の大切な妹を守りたいという思いや妹を命懸けで助けてくれた志郎、自分に付き

合って命を張ってくれた和也の力になりたいという気持ちが恐怖を上回った。

「それにお前に比べりゃまだまだだしな」

「俺がか？でも俺は…」

「ただIS乗れるだけだ、って言いたいんだろ？」

頷く一夏に弾は続ける。

「確かにIS、しかも専用機持つてるお前は強いつて誰でも分かる。実際白状しまえば俺もお前みたいにISに乗れたら俺だって、なんて思ってた事は何回もあるさ」

「けどお前さ、世界でただ一人IS乗れる男だからってだけで色々余計な苦勞背負い込んで、痛い目見て、一回死にかけた事だつてあつたし、辛い事も苦しい事もその分沢山あつただろ？それでもお前は逃げ出さずにISに乗る事を選んだだろ？」

弾は一夏に続ける。

弾は一夏の同性の友人として一夏がIS学園に行っても接し続けてきた。

だからこそ一夏が世界唯一の男性IS操縦者であるというだけで色々余計な苦勞をしてきた事を誰よりも知っている。

当然だろう。女性からは地位を脅かす者として敵視されるか好奇の視線に曝され、男性からは裏切り者として恨まれ、或いは単にIS

学園という美女・美少女揃いの『女の園』^{ハイレム}唯一の男子生徒というだけで嫉妬、羨望されるのだ。正直、最初は弾も羨ましいと思っ

た。
だが一夏が『銀の福音』^{シルバリオ・ユスヘル}の暴走事故の際に『銀の福音』と交戦して一時意識不明の重傷を負ったと聞いてからその認識が甘かったと痛感した。

ISはどんなに競技用と言い繕っても兵器だ。いくら搭乗者がシルドバリアや『絶対防御』で守られていても、それが人を殺せる力を持った兵器である以上それを使って死人が出ないとは、自分も死なないと言いきれないのだ。

そんな当たり前とも言える事を、弾は身近な友人である一夏が実際に死にかけるまで気付けなかった。

そして無人ISと対峙した時に初めて感じた死への恐怖と、それを感じても、そして女性のIS操縦者にはない余計な苦労を背負い込んでも尚ISに乗り続ける事を選んだ一夏の強さに気付いた。

そして仮に自分が一夏と同じようにISに乗れたとしても、そんな目に遭ったらISを降りていただろうとも気が付いた。

「そんなお前の苦労も、強さも知らないでただIS乗れるっただけでお前に嫉妬したり、お前を羨ましがったりするだけの腑抜けがIS乗れてもお前みたいには出来ないって…かく言う俺もその腑抜けの一人だけだよ」

「だからさ、俺はお前みたいにIS乗れなくても…そんな苦労背負い込まなくていい俺はお前を羨ましいなんて思ったりしないで、泣

き言一つ言わないでISに乗れないなら乗れないなりに頑張る滝さんみたいな男になりたい、って思ってるんだけど…お前の前で白状しちまった時点でまだまだお前にも、滝さんにも、風見さんにも及ばないよな」

そう言っつて弾は苦笑する。

「っつて、ガラにもなく変な事言っちまったな。要は俺も頑張るからお前も頑張れっつて事だ！」

「弾…ありがとな」

そして一夏と弾は笑い合う。

「お兄…ちよつとズルいよ」

それまで口を出さずにいた蘭は羨ましそうに呟く。

そしてIS学園の前に到着すると一夏と五反田兄妹は別れ、それぞれ帰っていった。

「…使えるな。行くぞ」

それを物陰から見ていた怪しげな男が合図を出すと、黒づくめの男達が一斉に五反田兄妹を追って動き始めた。

寮の自分の部屋に戻った織斑一夏は散々6人の少女に荒らされた自分の部屋の後片付けを行っていた。千冬は既に帰ってきており、こちらに一回顔を出した後自分の部屋へと引き上げている。

どうにかして後片付けは終わり、今は外はすっかり暗くなっている。

「これで終わりつと…ドアも鍵が壊れたみたいだしこれから修理申請も出さないとな…」

一夏は溜息を付きながらも次の事を考える。

よく一夏は部屋のドアを始めとする備品類をよく壊される。その大半は朝方部屋を荒らし回った少女達が原因だ。そしてその度に一夏は備品類の修理申請を出してきた。一週間前みたいにベッドまで壊されなかっただけ良かったでしょう。

そんな慣れたくもない事に既に慣れてしまった一夏が修理申請の用紙を取りに行こうと部屋から出ようとした直後に携帯電話に着信が入る。

五反田弾からだ。こんな時間に何の用だろうか。そんな疑問を抱きながらも一夏は携帯電話を開き電話に出る。

「どうしたんだ？弾。何か言い忘れた事でも…」

『織斑一夏だな？』

「…!？」

電話から聞こえてきたのは弾の声ではなかった。変声機を使っている為性別は分からないが、少なくとも弾ではない。でなければ変声機を使う事も、相手が一夏本人か確認する事もないだろう。

頭が混乱して言葉を発せない一夏に構わず電話の主は言葉を続ける。

『今我々は君の大切な友人の一人を預かっている。勿論生きたままでな…声を聞けば誰かは電話越しでも分かるだろう…』

そして少しの沈黙の後電話口から声が聞こえてくる。

『一夏か!？』

「弾!？」

五反田弾の声だった。

「おいどういふ事だよ弾！何がどうなってるんだよ!？冗談にしちや
夕子悪すぎだろ!」

『冗談だったら俺も良かったんだけどよ…お前と別れて少しした後
に今俺を捕まえてる連中に襲われて…何とか蘭は逃がせたんだけど
俺は捕まっちゃったんだ…』

「弾…」

やがて少し間を置き再び最初の変声機の主が話し始める。

『彼の言う通りだ。我々は彼を預かっている事はこれで理解出来た
だろうか?』

「何の為に弾を!? あんたらは一体なんなんだ!？」

『落ち着きたまえ、織斑一夏。我々としてもこれ以上事を荒立てる
気も、彼に危害を加える気もない。君が我々の要求に従うのであれば
彼は無事に解放しよう。だが君が拒否するのであれば彼の命は保
証しかねる。実に簡単な取り引きだ。では答えを聞こうか?』

何が取り引きだ。ただの誘拐犯の要求じゃないか。しかし今は聞く
より他に道はない。

「…あんたらの要求は?」

『賢明な判断だ、君が話が分かる方で助かるよ。何、君に身代金な
どを要求する気もなければ何か無理難題を押し付けようとか言う訳
ではない…実に単純かつ明快で、簡単な要求だ』

『今から二時間後に君独りでIS学園の北西7kmの場所にあるピ
ル建設現場に來たまえ。君がそのISを持つか持たないかは君の自
由だが、我々としては持つてきてくれた方が何かと都合が良いのだ
がね』

『それとこの事は警察は勿論IS学園の教師や生徒には話さない事
…要するに他言は無用という事だ。もし指定した時間に君以外の人
物が来たり、君に付き添ったり、君を尾行していたりした者が一人
でも居た場合は我々は取り引きが決裂したものと見なして相応の措

置を取らせて貰う』

『実に単純明快で簡単な取り引きだろう？では二時間後に…』

「待て！一体何の目的でこんな事を！？」

『君が知る必要の無い事だ。君には君の都合があるように我々には我々の都合というものがある。君もIS操縦者なのであればそれくらいの分別を持ちたまえ』

『では二時間後にまた会おう。君が我々の要求を聞き入れてこの取り引きが無事に成功し、互いにとって良い結果に終わる事を我々も祈っているよ』

そこで変声機の声は途切れ、電話が切られる。

「ふざけんな…！」

一夏の身体が怒りに震える。あの時と同じだ。まだ小学生だった頃に干冬に自分達の要求を飲ませる為に一夏を誘拐し、あまつさえ干冬の自由と平和を奪おうとした『亡国機業』の連中と同じだ。

許せない。自分一人を巻き込むならまだしも友人の弾まで巻き込んだ事が何よりも許せない。

だが同時にこういった手合いが自分達の要求を聞かなければどんな手段も辞さない事も、そのクセ自分達は取り引きに従う気はハナからないと言う事を一夏は誘拐された時に身に染みて理解している。

あの時のような支離滅裂な人間が他にもいるとは中々思えないが、

このような理由で誘拐を企み、そして実行するような人間がまっとうな神経をしてるとは思えない。

つまり誰かに話せば連中は確実に弾に危害を加えてくる。だが誰にも話さずおとなしく要求に従っても弾を解放するとは限らない。むしろ口封じをしてくる可能性も否定出来ない。

(俺は…どうすればいい？俺は…)

難しい問題だ。思わず一夏は考え込む。

ふと、考え込んでいる時にクローゼットが目に入る。

クローゼットを開けて中から宝物を…本郷猛から貰ったジャケットを取出し、暫く眺める。

「どうすればいいって…決まってるじゃないか…！」

やがて一夏は決心を固める。自分がこれから何をすべきか、答えは最初から決まっていた。後は行動に移すだけだった。

「猛さん…お借りします！」

そして一夏は猛から貰ったジャケットを羽織るとドアを開けて部屋を出る。

その目には、強い決意が宿っていた。

五反田食堂の中で、滝和也と五反田蘭がテーブルを挟んで向き合って座っていた。

今回はいつもと様子が異なりパトカーが五反田食堂の前に何台か止まっており、大将の五反田蔵も自称看板娘の五反田蓮も不安そうな表情を隠さずに警察官と話をしていた。

蘭も例外ではなく、いつもの元気もなく意気消沈し、不安そうな面持ちだ。

和也はそんな蘭に再び口を開く。

「他に君を襲った連中…つまり弾君を拉致した連中の特徴とか覚えてないかい？」

「いえ…あの後はお兄に言われたように振り向かないで必死に走ってたので…」

「そうか…ありがとう。わざわざ辛い事を根掘り葉掘り聞いてごめんな？」

そう言って和也は蘭に謝罪する。

和也が皿洗いを終えて立花藤兵衛と共に『立花レーシング』に引き

上げた直後に藤兵衛を通じて蘭から兄妹が何者かに襲われた事、そして蘭を逃がした弾が戻って来ない事を知らされた和也は蘭に警察に通報するように指示すると同時に五反田食堂へとバイクを走らせた。

そして五反田食堂で通報で駆け付けた警察官に自身の身分といきさつを話し、警察官から目撃情報などから五反田弾が何者かにより拉致された可能性が高いという事を聞いた和也は蘭から事情を聞いていた。

犯人グループから弾の家族に対する連絡は今のところ無い。

蘭の話では犯人グループは皆男性らしく黒ずくめの格好をしており、顔までは帽子を目深に被っていた為見れなかったそうだ。

そもそも何故犯人グループが五反田兄妹を襲い、弾を拉致したのか分からない。

少なくとも五反田兄妹の名前は知らなかったらしく怨恨などの線は薄いだろうが、かと言って営利目的とは思えない。とにかく犯人側からの接触が無い上に分からない事が多過ぎる。

「お疲れ様です、滝捜査官」

「いえ、こちらこそご協力ありがとうございます、速水警部…他に目撃情報などは？」

「いえ、やはり皆同じような事しか…車のナンバー等何かもう少し手掛かりがあれば絞り込めるのですが」

「ええ：或いは犯人グループ単なる素人の誘拐犯ではなくある程度訓練を受けた、しかもかなり組織だった動きをしているようですし」
和也は店に入ってきた警察官の速水と会話を交わす。

蘭や他の目撃者の証言から推測するに、弾を拉致した連中は素人ではない。手際によさから専門的な訓練を受けている事と、その裏にはそれなりに規模が大きい組織が絡んでいるようだ。

そうなるとますます動機が分からない。弾自身は別に特別でも何でもないごく普通の少年だ。そんな組織が拉致などというリスクを伴う行動を取る理由がない。

ほぼ同時にヒアリングを終えてIS学園から出た国際IS委員会副委員長の光明寺信彦博士も誘拐されたという情報が入ってきているが、こちらの方は和也は特に心配していない。

光明寺本人が自身の身柄を狙ってくる事を見越して策を打っていることは和也も承知している。と言うより光明寺の策に和也は協力している。

こちらの方は犯人グループの目星も大体の目的も和也は掴んでいる。

光明寺を拉致したのは十中八九『亡国機業』、もしくはその息のかかった連中だ。そしてその目的も光明寺のその頭脳を組織の為に活用しようなどと考え、あわよくば国際IS委員会やIS学園への牽制しようと言った所だろう。

それにそちらの方はIS学園側も動くようなので、光明寺博士の方は心配いらないだろう。むしろまんまとこちらの策に引っ掛かった

と気付いた時の連中の吠え面が目には浮かぶ。

だから和也にとってはむしろ弾の方が問題だ。何より何だかんだで強い絆で結ばれた罪もない兄妹を引き裂き、織斑一夏の友人を危険に巻き込んだ連中への怒りで腸が煮えくり返りそうだ。

しかし不安そうな蘭の前ではそれをおくびにも出さない。一番辛く不安に思っているのは蘭である筈だ。だからこそ自分は冷静でなければ、少なくともそう振る舞わなくてはならない。でなければ蘭を更に不安にさせてしまうだろう。

「あの、滝さん……」

「大丈夫だ、蘭さん。弾君は俺が必ず助ける。それに、弾君は強い。だから必ず戻ってくるさ」

蘭を慰める和也だが、そこに通信機に通信が入る。どうやら光明寺博士の策は見事に成功したようだ。

和也は一度立ち上がり、店の外に出ると通信に出る。

「こちら滝。どうやらそつちは……何！？本当か！？……ああ。分かった。今すぐそつちに行く」

そして店に戻ると蘭に一言告げる。

「蘭ちゃん、さっき連絡が入った……弾君は無事らしい。今は光明寺信彦博士と一緒に捕まってるそうだが、怪我とかは特にしていないそうだ」

「お兄が！？良かった…」

「安心するのはまだ早いぜ？だからこれから俺が弾君を助けに行ってくる。速水警部、後はお願いで貰っていいですか？」

「お願いします。我々では『亡国機業』関連の事件は手に余りませんから」

そう和也と速水警部が会話を交わすと和也は店を出る。

「お兄を…お願いします！」

そして自分に一礼する蘭に手を挙げて答えてみせると、そのまま店の前に停めてある自身のバイクに乗り込み走り出そうとするが、そこに後ろから誰かが和也に声をかける。

「なあ、俺にも手伝わせてくれないか？弾君の居場所が分かって、これから助けに行くんだろ？」

「…おやつさん」

和也に声をかけたのはバイクに跨がった『おやつさん』こと立花藤兵衛だった。跨がっているのはかつて仮面ライダーが愛用していた『改造サイクロン号』を二個一で修理したものだ。

「足手まといになったりはしないさ。まだまだ衰えちゃいないしな」

「そつちの方は心配しちやいないよ…なら行くこうか」

和也と藤兵衛は顔を見合せ笑い合つとそれぞれバイクのスロットル

を入れて、かつて仮面ライダー達と共にそうしてきたように、弾を悪の手から救い出すべく走り出した。

IS学園の職員室の中に織斑千冬はいた。今は私服姿からスーツへと着替えている。

現在は千冬以外にも他の教員達も召集されて職員室に集まってきたいる。

先ほど入ってきた国際IS委員会副委員長の光明寺信彦博士が拉致されたという情報を確認し、それがほぼ確実であると判明した為だ。本来ならば学園外での出来事である為警察に任せておいてもよいのであるが、よりによって拉致されたのが光明寺がIS学園へのピアリングを終えIS学園の敷地外へと出た直後である為に流石に今回ばかりは体面にも関わるので、IS学園側も解決に向けて動き出しており、現在職員達が情報収集に当たっている。

もつとも、これを見越していた光明寺はあらかじめ対策を立てていた為特に心配する必要はないのだが、それでもIS学園の前で要人が拉致されるという事実そのものがむしろ問題である為にこうして千冬も職員室に詰めている。

「おかしいわね…やっぱり一つ足りないわ…誰かが持ち出したのかしら?」

そこに首を傾げながら一人の教員が職員室へと入ってくる。

「佐原先生、どうかされましたか?」

「織斑先生…いえね、さつき格納ハンガーから予備用のバイザー型ハイパーセンサーがいくらか数えても一つ足りないんですよ」

千冬は入ってきた教師…IS学園整備科主任教員の佐原ひとみに声をかける。

先ほどひとみはISがいつでも出撃出来るように格納ハンガーでISの整備と部品の点検を行う為に職員室から出ていた。

ひとみの話では本来その機体のハイパーセンサーが修復直後等の理由で稼働に不安が残る際に本来のハイパーセンサーの補助や保護の為に使われる共通規格のバイザー型ハイパーセンサーが一個足りていないそうだ。

そもそもそんなものは殆ど使われた事もないので教員の中には存在自体を失念している者すらいる。ひとみが気付いたのは最初からIS整備士としてISに携わってきた故だろう。そこに整備科教員の一人がひとみに声をかける。

「あの、それならさつき持ち出し許可の申請書出てましたよ?」

「それを先に言ってよ…誰が持ち出しの申請を?」

「ちよつと待つて下さい…あ、ありました。えっと、1年1組の織斑一夏君、ですね」

「織斑が…ですか？」

「ええ。確かに申請書も出てますし」

意外な…実弟の織斑一夏の名前が出てくると千冬は思わずその教員に聞き返すが、申請書を見せられると確かに織斑一夏の名前がそこに記載されていた。理由は本体ハイパーセンサーに不調が見られた為となっている。

「けど何か匂うわね…織斑先生、申し訳ありませんが織斑一夏を職員室まで連れてきてくれませんか？少し聞きたい事があるので」

「分かりました。少し見てきます」

ひとみの要請を承諾すると、千冬は立ち上がり職員室を出て寮の織斑一夏の部屋へと歩いて行く。

そして部屋の前まで千冬が到着すると、一夏に想いを寄せている少女達が部屋の前にたむろしていた。

始めはいつものようにどういう手順で部屋に乗り込むか相談している、或いはいかに他のメンバーを出し抜くか考え互いに牽制し合っているかと思つた千冬だが、やがていつもとは少々様子が異なることに気付く。

「お前達、一体何をしている？」

「織斑先生……」

千冬が見かねて声を掛けると皆が千冬の方を見る。そして篠ノ之箒が少女達を代表するように口を開く。

「あの、一夏が何処に行っただか分かりませんか？」

「織斑を？」

「ええ、先ほど部屋に入ったのですが居なくて……心当たりのある場所は皆で探したのですが見つからなくて」

千冬は箒の言葉を聞くと暫し考える。一夏がこの時間帯に部屋にいない事は珍しい。しかも箒達のようにそれなりに一夏とは長い付き合いの面子が心当たりを探しても見つからないというのはそう滅多にある事ではない。

その事に不審を覚える千冬だが、それも校内放送が流れると思考を中断する。

『織斑先生！至急職員室までお戻り願います！先程学園の北西7kmの地点でIS同士の交戦が開始されたという情報が入りました！』

「何!?!」

千冬は驚愕しながらも何か嫌な予感を抱く。しかしそれをすぐ抑えると専用機持ちでもある少女達に指示を出す。

「お前達も命令があり次第すぐに出撃出来るように準備しておけ！」

それだけ言つと千冬は職員室へと戻るべく駆け出していた。

IS学園より北西7kmに位置するビルの建設現場。IS学園から程よい距離にあるこの一帯はIS学園設立後多くのIS関連企業がIS学園からのデータをより円滑かつダイレクトに収集出来るように各社の現地事務所や営業所、支社が軒を連ね、それに伴いビルの新築や解体、改装等が盛んである。

そんな新築途中のビル建設現場にISを装着した女が佇んでいた。今立っている女の他にも同じようにISを装着している女が10人この近くに潜んでいる。

そして建設現場に立っている女はハイパーセンサーの情報を一瞥しながらも時刻を見て通信を入れる。

「そろそろ時間ね…どう？誰か来る気配は？」

『今のところは無いわ』

『本当にあの織斑一夏は来るのかしら？』

「一見そうは見えなくてもかなり頭に血が上りやすい上に情に脆いとプロフィール結果では出てるわ。友人が捕われたのならきつとこちらに来るでしょうね」

女は他の女達の疑問に答える。

ここにいる女達は二時間程前に織斑一夏に電話を掛けてここに来るように人質を利用して呼び出したグループの一味である。

勿論女達は一夏との取り引きに：人質の解放に応じる気など八ナからない。むしろ最初から口封じも兼ねて始末する腹積りだ。

『けどまあ幹部会も織斑一夏つてのに随分とご執心じゃないか：これまでではむしろ命を奪いにかかったのに今じゃ生け捕りにしろって話じゃないか』

『モルモットにでもする気かねえ：おかげで私たちはわざわざ光明寺信彦だけじゃなくてもう一人誘拐なんて手間掛ける必要が出てきたんだからたまったもんじゃないよ』

通信ごしに女達の愚痴が聞こえてくる。

女達は組織の方針を決定する『幹部会』の命令を受けて世界最初の男性IS操縦者である織斑一夏と機械工学の世界的権威で現在は国際IS委員会副委員長の光明寺信彦博士の身柄の確保を命じられた。

光明寺の方はIS学園の敷地から出てきた所を待ち伏せして割とあっさりと捕まえる事が出来たが、IS操縦者、しかも専用機持ちである織斑一夏をIS学園前で学園側に気付かれずに確保するのは難しい。

そう判断した女達の一味は直接一夏を拉致するのを諦めて一夏と話していた兄妹らしき二人を拉致し、一夏に対する人質とする事にした。

妹と思しき少女にこそ逃げられたが、兄と思しき少年はこちらで捕える事に成功しており、現在ではこことは別の場所で光明寺信彦共々監禁している。

とはいえ女達も光明寺はともかく単に男性のIS操縦者、しかも一度は殺そうとすらした織斑一夏を急に必ず生かして捕えると言われた事に困惑している。

だが幹部会の命令は絶対であるのでこちらとしては従う他にない。

それでも誘拐という手段を使うのにはそれなりにリスクが伴う。特にほぼ同時に二人誘拐してしまうとどちらか片方、或いは両方を探られると一気にボロが出かねない。

そしてそのしわ寄せは現場で動いている女達『実働部隊』に来るのだからたまったものではない。

ましてやこの近くには世界各地から各国の代表もしくは代表候補生が生徒として集まり、教員にも一夏の実姉で『ブリュンヒルデ』として知られる名実共に世界最強のIS操縦者である織斑千冬を筆頭に元国家代表もしくは代表候補生クラスが何人もいるIS学園の近くなのだ。

下手に事を荒立てれば確実にIS学園側が黙ってはいないだろうし、インターポールだってこちらの動きを嗅ぎつけてくるだろう。

だからこそ一夏には他言無用と念を押しておいた。聞かなかった場合に備えてちゃんと逃走手段やルートは確保してあるが。

しかしそろそろ時間だと言つのに織斑一夏がこちらに来る気配は無い。怖じ気付いたのであろうか。

「これは一度脅しを掛けた方が…」

「その必要はない」

女が呟くのを誰かの声が遮る。女やその仲間の声ではない。

そして建設現場にジャケットを着た少年がこちらに向かつて歩いてくる。こちらからでは顔が陰に隠れていて見えない。正体は何となく予想が付くが。そして少年は口を開く。

「弾は…五反田弾は何処だ？」

「残念だけど此処にはいないわ…そして貴方が会う事もないわ…おとなしく私達と一緒に来てもらおうわよ？抵抗しても構わないわ…力尽くで連れていくから」

女が合図すると10人も隠れていた場所から飛び立ち、並び立つ。こちらは11機、相手は1人、いくら専用機持ちとは言っても数が違う。これならIS学園側がこちらの動きを察知してISを差し向けてくる前にケリを付けられる。

そんな事を思案している女達を余所に少年は口を開く。

「やっぱり取り引きとか言って最初からそんな事する気は無かったんだな…！」

「ええ、勿論。だったらどうするのかしら？」

「だったら…力づくで聞き出すまでだ！」

すると少年もまたISを展開し装着する。胴体部分はデータ通り少年…織斑一夏の専用機『白式』のものだ。だが顔面部分が違う。漸く見えた顔面部分には…

「…仮面？」

仮面…バイザーが装着されていた。バイザー型のハイパーセンサーも無いことはないが珍しい。第一データでは『白式』のハイパーセンサーがバイザー型であるとの記述はない。

その為、女は一応目の前の少年の名前を確認する事にした。

「一応聞いておくわ…貴方、名前は？」

すると少年は刀を構えて女達を見据えて、言い放つ。

「俺は…仮面ライダー！」

「そう…私たち『亡国機業』の前でその名前を名乗るなんていい度胸ね、織斑一夏…けど、此処までよ！」

そして女達と少年…織斑一夏はほぼ同時にスラスタを噴かして相手に突撃していった。

IS学園の北西に位置する建設途中のビル群の一つ。その前に二台のバイクが止まる。そしてバイクから二人の男が降りると、ビルの内部へと入り込む。

「このビルで間違いないのか？」

「念のため発信源も調べてみたけどここで間違いないよ、おやつさん」

そしてビルに侵入した男の片割れ…立花藤兵衛の問いにもう片方…滝和也は答える。

ある人物からの通信により五反田弾と光明寺信彦がこのビルの一角に監禁されていると知った和也と藤兵衛はこのビルへと侵入し、犯人グループを鎮圧しつつも一夏と光明寺を救出する事にした。

和也も藤兵衛もこういう事は仮面ライダーと一緒にシヨツカ相手についてやってきた事だ。アジトならまだしもこんなビルくらいなら侵入するのはお手の物だ。

そして手早く部屋を探し階段を登り先に進んでいくと、やがて階段

の前に犯人グループの一員らしき男達が何人かいる。背後に立っているこちらにはまだ気付いていないようだ。耳を澄ませた所この男達以外にこの階には犯人グループはいなさそうだ。

ならばと和也と藤兵衛は物音を立てないように男達の背後ギリギリまで迫ると手始めに一番手近な二人に手刀を叩き込み声を上げる間もなく気絶させる。

「何だお前達は!？」

いきなり起こった事態に男達は混乱し、和也と藤兵衛に為す術なく殴られ、蹴られ、投げられて次々と気絶していく。

「こいつら!」

残る一人はナイフを抜くとそのまま藤兵衛を刺そうとナイフを突き出す。

「そうは行くかってんだ!」

しかし藤兵衛はその突きをあっさりといなすと逆にその腕を取り一本背負いで地面に叩きつけ、男を気絶させる。

「侵入者だ!武器を使って構わん!必ず排除せよ!」

すると騒ぎに気付いたのかトンファーやらナイフやら警棒やらで武装した男達が飛び出してくる。どうやら少々派手にやり過ぎて気付かれたらしい。

しかし和也にも藤兵衛にも微塵の恐れも無い。むしろわざわざ捜し

出して叩きのめすよりはこの場で全員相手にした方がだいぶ楽だ。

「流石に少し多いか？」

「俺はまだまだ大丈夫さ…おやつさんは？」

「俺もこれくらい！」

「だったらさっさと片付けて先に進みますか！」

そして和也と藤兵衛は男達に対して臆する事なく敢然と並んで挑みかかっていった。

五反田弾はビルの内部にある部屋の片隅で光明寺信彦と名乗る男と共に鎖で後ろ手に縛られた状態で放置されていた。

弾は織斑一夏に無理矢理電話で話させられた後、光明寺という男が先に閉じ込められていたこの部屋に監禁されていた。その際に光明寺とも簡単な自己紹介を済ませている。

先程から妙に外が騒がしいが、こう縛られていたのでは弾も光明寺も動くに動けない。

「光明寺さん、何が一体どうなっているんですかね…？」

「分からないが…私たちへの見張りすら残さずにどこかに行ったという事は何か重大な事態が…それこそ我々の方に人を割いている余裕すら無いようなかなり重大な事態が発生した、と考えるのが妥当だろうね」

「重大な事態、ですか？」

「ああ。例えば何者かがこのビルに侵入した…しかもただの侵入者ではなく相当の強さを持った、かつこの場所に当たりを付けて故意に侵入してきた者だろうな」

「強くて…故意に…まさか!？」

「或いは我々を救助に動き出した警察かIS学園関係者がインターポールか…とにかく此処からでは情報が少なすぎて私には判断しかねるな」

弾の問いに対しても光明寺は冷静に答える。元々機械工学博士だと自己紹介の時に弾は光明寺から聞いてはいるがそれにしてもこんな状況であるにも関わらずかなり冷静である。

「けど思うんですけど…光明寺さん、妙に冷静じゃないですか？俺なんかまだ状況がよく分かんないというか頭が混乱しててついてけないというか…」

「これでもこういう事には慣れていてね…むしろこんな状況なら君の反応の方が当たり前だよ」

「光明寺さん、本当にただの機械工学者なんですか？場慣れしてるって一体…」

「こちらも少々事情があつてね」

光明寺に対して素直に疑問を口にする弾に対して光明寺は苦笑しながらも特に気を悪くした様子もなく答えてみせる。

そこに足音が聞こえてくる。光明寺と弾は目配せして会話を打ち切ると、直後に弾と光明寺を拉致してきた犯人グループの男数人が乱暴に扉を開けて部屋に入ってくる。

そして弾と光明寺を鎖で後ろ手に縛られた状態のまま立ち上げさせる。

「これは一体どういう事かね？」

「質問に答える義務はない！おとなしく一緒に来てもらおうか！」

光明寺の質問を無視して犯人グループは縛られた光明寺と弾をそのまま引つ立てて歩き始める。

「変な事を喋るなよ！その時は二人共命は無いと思え！」

「…私の命まで奪ってどうする気だね？生け捕りにするように命令されているのだろう？」

「黙れ！だったら先にこいつの首から掻き切つてやろうか！」

興奮状態になっている犯人グループの一人に冷静に指摘する光明寺だが、男が弾の首にナイフを突き付けると黙り込む。

どうやら光明寺の言った通り状態がかなり切羽詰まっているようだ。でなければ弾はともかくわざわざ誘拐までしてきた光明寺まで脅しとはいえ殺すなどとは言わないであろう。それくらいは場慣れしていない弾でも分かる。或いは光明寺が妙に冷静なお蔭でまだこちらも冷静さを保てているというのもあるのかも知れないが。

そうこうしている内に犯人グループが立ち止まり、弾と光明寺も立ち止まる。

「この…うわ！」

そして廊下の突き当たりにある壁に犯人グループの一員らしき男が吹っ飛ばされて叩きつけられ気絶するという光景が弾の目に飛び込んでくる。

「連中め！もう此処まで来たか！」

「駄目だ！他の者と連絡が取れない！もうあいつらにやられたみたいだ！」

「慌てるな！何の為にこいつらを連れてきたと思っている！？まだこちらには人質がいるのだぞ！」

犯人グループが喧しく騒いでいる間に先程男を吹っ飛ばしたと思しき二人が廊下の角を曲がってこちらに姿を見せ、こちらに向かつて歩いてくる。どちらも男性だ。そして弾には二人共見覚えがあった。

「滝さん！藤兵衛さん！」

歩いてきたのは滝和也と立花藤兵衛であった。犯人グループが身構えている辺り、和也と藤兵衛はここに弾と光明寺が監禁されていると嗅ぎ付けてここに侵入し、存分に暴れ回っていたのだろう。にも関わらず和也はともかく藤兵衛も無傷なのは弾も少し驚いているが。

そして和也は犯人グループに歩み寄ると口を開く。

「全く、まさか『亡国機業』が光明寺博士だけじゃなくて弾君まで拉致を計画して実行までしてやがったとはな…ご苦労な事だぜ」

「貴様：何者だ！？何故我々の事を知っている！？」

「自分から正体明かしてくれてありがとうとよ。お礼と言っちゃなんだが：俺はこういう者だ」

そうやって和也は身分証を取り出して犯人グループに提示して言い放つ。

「こいつを見れば分かるように通りすがりのインターポール捜査官さ。お前達の仲間はもうみんな叩きのめしてある…無駄な抵抗は止めて大人しく弾君を解放しろ！」

「ふん！貴様こそ自分の立場が分かっているのか！？此処を嗅ぎ付け此処まで来たのは誉めてやるが：こちらにはまだ人質が：こいつと光明寺博士がこちらにはいる事を忘れるな！」

しかし犯人グループは慌てずに和也の前に弾と光明寺を押し出すよ

うにして立たせる。

「すみません、滝さん…また迷惑かけちゃって…」

「気にするな、弾君。むしろ蘭ちゃんを逃がす為に戦ったんだろ？だから俺は君を誇りに思ってるくらいだ…だから俺も頑張ってる。つらを叩きのめさないとな」

「滝さん…でも光明寺さんも…」

「何言ってるんだい？弾君」

弾が光明寺について言及すると和也はニヤリと…犯人グループに対してしてやったりと言いたげに笑ってみせる。

「君の隣にいるのは光明寺信彦博士じゃないぜ？」

「えっ…?」

「な、何を馬鹿な事を!？」

「狼狽えるな!これはヤツのハツタリだ!」

あまりに意外な和也の一言に弾や犯人グループは混乱する。光明寺は黙りこくつたままだ。

「そのようなハツタリが通用する程甘くはないぞ!いくらインターポールと言えどもそのような嘘など…」

「ハツハツハツハツ!」

しかし光明寺はおかしそうに大笑し始める。

「何が可笑しい!?!光明寺!」

「光明寺?違うな…俺は小野寺さ!」

そして光明寺…いや光明寺に変装していた小野寺を名乗る男はそれまでとは一転して若々しい声で犯人グループに言い放つ。

そして自分を拘束していた鎖を力づくで引きちぎると啞然としている犯人グループを瞬く間に叩きのめし、全滅させる。

全員が沈黙した事を確認すると小野寺なる男は顔部分やスーツに手を掛け、変装を取り払う。

「悪いな、こんな手間かけさせちまって」

「しかしまさかこんな手を使うとはなあ…最初に聞いた時は俺も驚いたが実際やってみると案外上手くいくもんだ」

和也と藤兵衛がそれぞれ声を上げる。

「すまない、弾君。悪気は無かったんだが君を騙す形になってしまった…」

そして弾の目の前には光明寺ではなく変装を解きジャケット…いわゆる『革ジャン』姿の男が、優しげでどこか『太い』笑みをたたえ

ながら立っていた。

満月が闇夜を照らし出しているビルの建設現場上空で、12機のISが激闘を繰り広げていた。1機は仮面：バイザーを頭に装着した白い機体、残る11機は素顔が晒されている黒い機体だ。

白い機体：織斑一夏の装着する『白式』は『亡国機業』側のIS11機を相手に単身奮戦していた。

「クツ、こいつガキのくせに…しつこい！」

女の一人が苛立ちながらもアサルトライフルを構えて一夏に向けたフルオートで乱射する。

「当たるか！」

しかし一夏はスラスターを駆使して銃弾を躲すとそのまま銃撃を放った敵へと接近し、手に持った刀剣型の近接武器『雪片式型』を構える。

「墜ちろよ！」

そして渾身の斬撃を銃撃を放った女へと食らわせ、そのまま地面へと叩き落とす。

「やるわね！けどこれなら…！」

しかしその隙に別の1機が近接ブレードを振りかぶりスラスタを噴かしながら一夏へと突っ込んでいく。

しかし一夏は慌てずにスラスタとバッシュ・イナーシャル・キャンセラーPICを使いその女へと向き直る。

そして左腕の多機能武装腕『雪羅』のエネルギー刃のクローを発生させる。但し左拳を握り、クローのエネルギーを拳に纏うような形にして、だ。

そして突っ込んできた敵が一夏に強烈な一撃を加えようと近接ブレードを振り上げた瞬間、一夏は敵のから空きとなった胴体に敵の突進の勢いを利用したカウンターで左正拳突きを放つ。

「ライダー…パンチ！」

すると自身の突進の勢いまでプラスされたエネルギーを纏った一夏の左ストレートがまともにカウンターヒットする形となり、その女もまた『絶対防御』を発動させながら地面に落下し、叩きつけられる。

「どつした！これで終わりか!？」

そして一夏は残る9人の女に…自身の友人である五反田弾を危険に晒した悪へと咆哮する。

「生意気言うわね…けど貴方の戦闘データは既に収集済みなのよ…
『フォーメーショントルネード』でいくわよ！」

そうリーダー格の女が言うのと9機のISは一夏から距離を取るとスラスターとPICを駆使して一夏を取り囲むように…その名の如く竜巻の如く円を描くように旋回し始める。そして高速で周回しながら一夏に対してアサルトライフルやロケット砲などで一夏に集中砲火を加える。

「ぐっ…」の！」

「無駄よ！貴方の飛び道具は荷電粒子砲しかない事も、それがシールドエネルギーをかなり消費するものだとも知ってるわ！諦めなさい！」

必死に回避し、防御する一夏を嘲るように女が言い放つと、更に砲火は激しさを増す。

「飛び道具なら他にも…あるさ！」

だが一夏は諦めずにやがて旋回のタイミングが一定であると読むや『雪片弐型』を1機に投げ付ける。

「悪足掻きを！」

投げ付けられたISは咄嗟にアサルトライフルを盾にして『雪片弐型』を防ぐ、銃身を貫かれたが、本体にはギリギリ到達していない。

「所詮ガキの浅知恵なんてこんなものか！」

しかし、動きが止まってしまった事が命取りとなった。

一夏は『雪片式型』が敵が盾にしたアサルトライフルに突き刺さった瞬間にスラスターを噴かして突撃していた。そして直後に飛び蹴りの体勢に入り、出力を脚部に回して蹴りを放つ。

「ライダー…キック！」

一夏が放った蹴りは敵ISと垂直になる形でアサルトライフルに突き刺さった『雪片式型』へと蹴り込まれ、その勢いが乗った『雪片式型』の先端が杭の如く敵ISへと直撃し、一撃で撃墜する。

「やるわね…けど隙だらけよ！」

そこに左腕にパイルバンカーらしき武装を装備したISが接近し、無防備となった一夏へ向けて杭を放つ。

「!?!」

必死にスラスターとPICを駆使して回避しようとする一夏だが、躲し損ねて頭部のバイザー型ハイパーセンサーが破壊され、素顔が晒される。

「今よ！」

更に体勢が崩れた一夏に苛烈な集中砲火が加えられる。

「うわあああああ!?!」

防御も回避も出来ずに集中砲火を受け続けた『白式』は絶対防御を
発動させながら地面へと落下し、叩きつけられる。そして展開が解
除され、待機形態であるガントレットに戻る。

「く…くそ…がつ!？」

地面に仰向けに倒れながらも立ち上がるうとする一夏だが、ISを
装着したままのリーダー格の女に踏み付けられ、地面に張り付けら
れる。

「全く、手間掛けさせちゃって…おいたが過ぎたわね、織斑一夏。
そうそう、貴方の友人…確か…五反田弾でしたっけ？さっき彼を預
かっている私の部下達から連絡があったの…」

「命令通り始末した、ってね」

「弾…が…？」

一夏の頭の中が真っ白になる。自分が守ろうとした…助けようとした友人が…

「そう、死んだの」

女はそれを嘲るように言い放つ。

「嘘だ…嘘だ…」

「生憎嘘は付かないわ。だって殺したのは他にもない貴方じゃない」
放心状態の一夏に対して女は笑いながら続ける。

「俺…が…？」

「そう、貴方がよ。貴方が抵抗しなければ、貴方が私達に従ってれば…いえ、もっと言えば貴方がISに乗れない普通の男であったなら、いつそ貴方が生まれてこなければ彼は死ななかった。原因は他にもない貴方よ？」

「そんな…俺は…ただ…弾を…みんなを…守りたいって…助けたい…って…」

「守る？助ける？笑わせないでよ！こうして地面に不様に這いつくばってる貴方に誰を、何を守るのかしら？貴方、自分の命すら守れるかも怪しいくらい弱いなのよ？そんな貴方に他の何かを守るなん

て、他の誰かを助けるなんて出来る訳ないじゃない！その身の程知らずが貴方の友人を殺したの、お分り？」

しかし一夏は答えない。答えられない。

（何が…守るだよ…何が…助けるだよ…俺は…弾を…守れなかった…助けられなかった…そんな俺が…弱い俺が…誰を…何を…守れるんだよ…）

情けなさど無力さから自然と目から涙が零れてくる。

そしてあの時本郷猛から聞いた言葉の意味を思い出す。

（…そうだよな…人は一人じゃ…弱くて…脆いんだよな…俺が…弱くて…当たり前じゃないか…いつも…今みたいに…一人で意気がつて…突っ走って…そんな俺が…強くなれる訳…ないよな…）

そして今度は申し訳なさで一杯になる。また猛さんの言い付けを守れなかった。また、猛さんが自分を信じてくれた心を裏切って…守れなかった…。

「ごめんなさい…猛さん…ごめんなさい…」

自然と謝罪の言葉が口から洩れてくる。

「あら？泣いてるの？さっきまでの威勢はどうしたの？情けないわね…ま、負け犬の貴方にはそれがお似合いね。けど大丈夫よ？私達が貴方を強くしてあげる。守る事より壊す方が楽でいいわよ？だから…おとなしく一緒に来なさいな」

そして女は抵抗する気力を失った。助けを求める声を上げる力すら残っていない。夏を連れていこうと足を退け、手を伸ばす。

しかしそいつは、嵐と共に…まるで嵐のように突然やって来る。

例え助けを求める声すら上げられなくとも、悪に自由と平和を踏み躪られそうになった時…そいつは疾風の如く現れる。

「何!？」

突然走ってきた一台のバイクがISを大きく跳ね飛ばす。女は咄嗟にスラスターを噴かして体勢を立て直す。他の者も一旦後退して乱入者から距離を取る。

乱入者は一夏を守るようにバイクに跨がり、女達の前にいた。ジャケツト姿の男だ。顔はこちらからは影になって見えない。

そして男は女達を無視してバイクから降りると、一夏の目の前に立ち、何とか身体を起こした一夏の目線に合わせるようにしゃがみこむと、穏やかに語り掛ける。

「すまない、遅くなった…立てるか？一夏君」

一夏にはそれが誰だか分かった。かつて自分を助けてくれた…自分と姉の自由の平和を守ってくれた仮面の男…それは…

「…猛さん！」

「…ああ、久しぶり。大きくなったね、一夏君」

一夏の前にはあの時と同じように優しく、しかしどこか『太い』あの笑みを浮かべた男…本郷猛がいた。

(やはり一夏君は優しく、強い子だ…あの時と同じように)

本郷猛は自分の目の前で泣きじゃくっている織斑一夏を見てそう思

う。

事のあらましは予め聞いている。きっと友人の五反田弾を助ける為に、彼の自由と平和を守る為にこうして独りで敵と立ち向かっていたのだらう。

とはいえいつまでも泣かれたままというのはやはり堪えるものだが。

そして一夏は泣きながら猛に謝り続ける。

「ごめんなさい…猛さん…俺…僕…また…また猛さんの言い付け…守れなくて…」

しかし猛は優しく笑ったまま続ける。

「確かに君は今まで一人で頑張ろうとし過ぎたのかも知れない…一人で何でもやろうとし過ぎたのかも知れない…けど、君はそれに気が付いた。だから、これからはそれを直していけばいい。やり方を焦り過ぎただけで、君の気持ちは…君の誰かを守り、助けたいと思う気持ちは間違いないんじゃないさ。俺が…保証するよ」

「で、でも弾を…」

「…人を勝手に殺すなんての…」

そこに一人の少年が歩いてくる。

「ほら、足もちゃんと付いてるから幽霊じゃないぜ？だから泣くなよ、一夏。何かもの凄くばつが悪いというか…」

そう言つて少年…五反田弾は頭を掻く。

「弾…お前…」

「馬鹿な！？何故生きている！？」

「悪いな、ちよつとした手違いつて奴さ」

そこにジャケット姿の男も姿を現す。

「滝…和也…さん…？」

「すまん、一夏君。連中が今おねんねしてる部下達に通信催促してきたからつい『全てご命令通りに行つてます』つて答えちまつてさ。まさか弾君を始末しろなんて『ご命令』が出てたなんて思わなくてよ」

「全く…お前つて奴は…そういう訳だから弾君は俺達が無事助け出したつて訳さ」

更に立花藤兵衛が歩いてきて続ける。

「なんだと…ならば光明寺は…光明寺信彦はどうした！？」

「さて、光明寺さんなんて居たっけかな？人違いじゃないかな…なあ、『小野寺』さん」

「そうだな、俺と弾君以外に捕まっていた人は居なかつた」

そう言つて和也と『小野寺』こと猛は女達に対して不敵に笑う。

「まさか…嵌められた…!？」

「今さら気付いても遅いぜ、間抜けが。本物の光明寺博士は今頃インターポール捜査官に護衛されながらスイス行きの飛行機の中だろっよ」

そう和也は女達に言い放つ。

光明寺と和也が立案した策とは実に単純な『替え玉』だ。ヒアリングが終わるくらいの時間帯に光明寺に変装した猛がいかにも学園の敷地から出てきたように装いながら囷として『亡国機業』の目を引き付け、その隙に本物の光明寺が学園から無事に帰るといふもので、作戦は見事成功し、まんまと『亡国機業』は囷の猛を捕らえ、本物は目も付けられる事もなくその場を後にした。

ちなみに光明寺は猛が捕まってから少し後に学園に出入りしていた清掃業者に変装し、それに紛れて学園を離れインターポール捜査官と合流した。

「とはいえ弾君まで拉致されたのは予想外だったかな」

更に和也が付け加える。

本来ならば猛は敵の本拠地に連れていかれたらまず和也に場所を連絡した後は一暴れして犯人グループを鎮圧する予定だったのだが、そこに一般人である弾まで拉致されてきた事で下手に暴れて弾に危害が及ぶ事を懸念した猛の提案で、和也が陽動してその隙に脱出する手筈になっていた。おやっさんこと立花藤兵衛まで加わり予想以上に派手に暴れた為結局全く違う形での脱出となったが。

そして通信機を逆探知して場所を捜し当てた所丁度一夏がピンチであつた為先行していた猛がバイクで体当たりをかまして…現在に至る。

「猛さん…和也さん…立花さん…弾…」

「一夏君、俺と一緒に戦おう…奴らと…君と弾君の自由と平和を壊そうとした、悪と」

「で、でも…俺…」

「一夏…歯食い縛れ！」

猛に言われても迷う一夏の頬を弾が思い切り殴る。そして続ける。

「目、覚めたか？」

「弾…」

「そんないつまでもウジウジすんなよ、お前らしくもねえ。いつものお前なら俺に言われなくたって、むしろ俺や本郷さん、滝さん、藤兵衛さんが止めたってあいつらに突っ込んでくたさる？それが、お前…織斑一夏なんだから」

「それによ、お前、俺の事守る為に今まで独りで必死に戦ってくれたんだろ？…ありがとう、一夏。俺の為にこんなになるまで頑張ってくれて」

「だからついと言っちゃなんだけど…俺や滝さんや藤兵衛さんの

為にも、俺達の代わりに本郷さんと一緒に戦ってくれないか？俺は強くないしIS乗れないけど…俺もIS乗れない腑抜けなりに頑張るからさ」

「俺からも頼む、一夏君」

続けて和也が一夏に語り掛ける。

「俺は一夏君や弾君が思ってる程強い男じゃない…本郷や一文字達の辛さや苦しさを分かってても、俺も改造人間だったらって思った事なら何回もある。今みたいにこんな辛い目に遭っているって理解してても一夏君みたいにISに乗れたらなんて考えた事だっただけ」

「俺はそんな本郷や一文字、一夏君には到底及ばない腑抜けの一人さ。けど…いや、だからこそ俺はせめて魂だけでも本郷達や一夏君と同じでありたいんだ。確かに俺は力のない生身の人間で、ISに乗れねえ男で…腑抜けの一人だ。それでも人間として、男として、腑抜けとして足掻き続けていくのが腑抜けなりの筋ってもんだと俺は思ってる」

「だから一夏君、頼む。君には本郷と一緒に戦える力が…強さがある。俺も腑抜けの一人としてこれからも、最後の最後まで足掻き抜いてみせる。それが何の慰めになるかは分からないけど…一夏君も一夏君が今出来る事をしてくれないか？」

「和也さん…」

「俺からも…頼んでいいかな？」

「立花さん…」

更に藤兵衛が続ける。

「猛は…本当は口数こそ少なかったけど…明るく、陽気で、素直で…子供みたいな奴だったんだ。でも改造人間にされて…」

「猛は本当は強くない。むしろ弱い一人の…君と同じ一人の人間なんだ。仲間を求めて、後悔して、我慢して…けど誰かに支えられて、助けられて、応援されて…一緒に戦ってくれたから強くなれたんだ」

「だから一夏君、ISに乗れて…猛の隣で一緒に戦える力を、強さを持つている君が猛と一緒に戦ってくれないか？俺も生身の人間だけど…君や猛には及ばないけど、力になるよ」

「それに」

最後に猛が口を開く。

「君は強いさ、あの時俺を信じて、支えて、助けて、応援してくれ…俺に強さを与えてたんだ。君は、強い」

「それでももし君が強くなりたいと、誰かを守りたいと思えば、願うなら…俺が君を信じて、支えて、助けて、応援するよ…俺があの時、君にそうされたように」

「だからもう一度聞くよ…俺と一緒に戦ってくれないか？」

暫しの沈黙の後、一夏は笑顔で答える。

「…はい！」

「…いい返事だ」

そして猛も笑い返すが今まで蚊帳の外に置かれていた女達が騒ぎ出す。

「私達を無視するとはいい度胸ね？けど高々二人に、しかも片方は生身の人間なのに私達を相手にして勝てると思っているの？『ISを倒せるのはISだけである』って言葉を…」

「…黙れ！」

しかしそれまでとは一変して静かな…しかし凄まじい怒気を発して睨み付けてくる猛の前に沈黙を余儀なくされる。

猛は一步前に進み出る。

「『亡国機業』…多くの人々を苦しめ、その自由と平和を奪い、そしてこれからもそうする事を望むお前達を…何より一度ならず二度までも一夏君の優しさにつけ込み…一夏君とその大切な者の未来を…そして自由と平和を奪おうとしたお前達を…俺は決して許さん！」

猛は目の前の悪…シヨッカーと同じく人類の自由と平和を脅かしている『亡国機業』へと咆哮する。

そして、一夏と共に前に出ると、敵を見据える。

俺は、決して強くはない。

だからこそ多くの人々を助けられず、悩み、苦しみ、そして仲間を求めて 10人もの地獄への道連れを作ってしまった。

だがそれでも俺はこの生き方を選んだ事を後悔などしていない。
するはずがない。

それで一文字や後輩達に生きる道を示せるのなら

それで一夏君や弾君、多くの人々の命を、
笑顔を、未来を 自由
と平和を守れるのであれば

そして今日の前にいる人類の自由と平和を奪つ悪と戦い、
打ち倒
せるのであれば

この忌まわしき仮面、喜んで被ろう。この呪わしき身体、喜んで
使おう。この血塗られた拳、喜んで奮おう、そしてこの魂、喜んで
燃やし尽くそう。

俺は

俺の名は

それが俺だ
俺達だ。

俺達は

仮面ライダー！！！！

そして猛は左腕を腰に当て右腕を左斜め上に突き出し、円を描くように右腕を右斜め上まで持っていく。和也と藤兵衛には見慣れた、一夏は一度見た、弾は初めて見る猛の体内のスイッチを入れる動作だ。

「ライダー…変身!!」

入れ替えるように右腕を腰に引き左腕を右斜め上に突き出すとベルトの風車が回り、本郷猛の肉体がバツタの姿を模した改造人間へと変わる。

同時に一夏もISの装甲を展開し、装着する。

そして猛と一夏は敵と対峙する。

「頑張れよ一夏！思い切りやってこい！」

「そうとも！今夜は仮面ライダーがついてるんだからな！」

「…違うぞ、滝」

猛が和也を嗜めるように続ける。

「…と…そうだったな、悪い悪い。」

「そうそう、『ダブルライダー』がついてるんだからな」

和也と藤兵衛が笑って顔を見合わせる。

「ダブル…ライダー…?」

「そうとも、一夏君」

思わず疑問を口に出す一夏に対して猛が答える。

「今夜は俺と君で」

「ダブルライダーだ!!」

そして仮面の騎士の魂を受け継いだ、白き守護騎士…『白式』を身に纏った織斑一夏と

仮面の下に涙を隠し、人類の自由と平和の為に戦う技の戦士…最初の仮面ライダー『仮面ライダー1号』の二人は今宵限りの『ダブルライダー』として自由と平和を奪う悪を打ち倒すべく戦闘を開始し

た。

戦闘が開始されると即座に仮面ライダー1号は手近な相手に突っ込み、アサルトライフルを呼び出す間すら与えぬ突き蹴りの猛攻を加える。

「こいつ…やはり『マスクドライバー』！」

女は必死にそれを防御しながらも相手の正体を悟り舌打ちする。

『マスクドライバー』…『亡国機業』の計画をISに優るとも劣らぬ力で叩き潰してきた11人の仮面の男達。現在『亡国機業』目下最大の脅威であり、悩みの種だ。少なくとも一筋縄で行くような相手ではない。

それを証明するかのように仮面ライダー1号は情け容赦のない連携でシールドを削っていき、巧みに敵を追い詰めていく。

「だが、所詮は飛べないただのバッタ！飛びさえすれば！」

「そう、上手くいくかな？」

仮面ライダー1号から距離を取ろうと上空へと飛び上がるISだが、飛んできた荷電粒子砲により撃墜される。

「何故だ…何故そんなエネルギーがあるんだ!？」

撃ち落としたのは織斑一夏が装着する『白式』の左腕『雪羅』の荷電粒子砲であった。確かにそれだけの威力はあるのだが、女達が見た限りでは『白式』にそんなエネルギーは残っていない筈だった。それが何故使えたのか。

しかし一夏には何となくその理由が分かるような気がした。

(きつと『白式』が…『白式』の意志が猛さんに…仮面ライダーに
応えてくれたんだ)

勿論根拠なんてない。ただの勘だ。だが、『白式』の意志に触れた事のある一夏にはそうとしか思えなかった。

「くっ!何でもいい!もう一回撃墜すればいいだけの話よ!」

そこに1機のISが一夏に狙いを定めアサルトライフルを放とうとする。

「させるか!ライダーパンチ!」

しかし飛び上がって落下の勢いを乗せた仮面ライダー1号の右ストリートをまともを受けて大きく姿勢を崩す。

更に姿勢が崩れた相手に拳や手刀、足刀を叩き込み、一気に攻め立てる。

「11の!」

「やらせるか!」

そこに他のISからの銃撃が加わりどうにかして仮面ライダー1号を引き剥がすと、リーダー格の女が告げる。

「ヤツが『マスクドライバー』なら…アレで行くわよ!」

するとISは一斉に『イケニッションブースト瞬時加速』を使い上空へと逃れる。

「逃がすか!一夏君!」

「はい!」

仮面ライダー1号は自慢の脚力を生かしてビルの壁を蹴りながら、一夏はスラスターを噴かして追撃する。

「これなら回避も儘ならないわね!」

そこにISがアサルトライフルや機銃などで弾幕を張り仮面ライダー1号と一夏を叩き落とそうとする。

「クッ!この!」

一夏は必死に躲そうとして上昇出来ずに止まる。

しかし仮面ライダー1号は逆に銃弾の雨へと構わずに突き進んでいく。そしてビルの頂上にまで達すると身体をスクリューのように高

速回転させて銃弾を弾きながら高々と飛び上がり、女達の上を取る。

「ライダースクリューキック！」

そのままスクリューのように高速回転して威力を増した飛び蹴りを1機に叩き込み、地面へと落とし、沈黙させる。

「だがそれが命取りだ！」

しかし飛び蹴りを放った直後の仮面ライダー1号に残るISは距離を取ると一斉射撃を浴びせる。

基本的に『マスクドライバー』は接近戦になればまず勝ち目はないが、遠距離への攻撃手段など無きに等しい。特に足場のない空中では自慢の脚力も機動力も意味を為さない。だからこうして空中で待機し、敵が一撃放って隙が出来た所に距離を取って集中砲火を加える。これが『マスクドライバー』との戦いで得られた戦訓を生かした『マスクドライバー』対策だ。『亡国機業』もただ黙ってやられている訳ではないのだ。

しかしまさか1機が落とされるとは、そして仮面ライダー1号の防御がここまで固いとは思わなかったらしく、攻めに焦りが見えてくる。

そして一気が勝負を決めようとパイルバンカーを呼び出し仮面ライダー1号へと突撃し、杭を突き出す。

「甘い！ライダー返し！」

その杭を仮面ライダー1号は半身で躲すと逆に腕を取り、一本背負いの要領でそのISを突撃の勢いも乗せ地面へと投げる。

「何の!」

しかしISはスラスターとPICを駆使してどうにかして地面に叩きつけられる直前で踏み止まる。

逆にリーダー格の女が何やら高機動型パッケージを呼び出しスラスターを噴かして仮面ライダー1号を背後から羽交い締めにする。

「武器が無くともISにはこんな芸当だって出来るのよ?」

そう言うと女は仮面ライダー1号を抱えたままスラスターを最大出力で噴かし、『瞬時加速』やPICを併用しながら高速で何回も旋回して飛び回りつつビルの壁などに仮面ライダー1号を何回も叩きつける。

「潰れなさい!!」

そしてスラスター出力を最大に引き上げ急上昇すると仮面ライダー1号を抱えて『瞬時加速』で一気に最高速度まで加速しながら降下し、自身はPICを駆使して地面ギリギリで急上昇しつつ仮面ライダー1号を渾身の力とスピードを乗せて地面がへこみ、大量の土煙が上がる勢いで投げ落す。

「猛さん!?!」

「それより自分の心配をしなよ!」

思わず意識がそちらに飛ぶ一夏に別のISがタックルをかまして地面に叩き落す。

「これで…終わりよ！」

更に女達は地面に落下した仮面ライダー1号と一夏の上空にまである程度降下するとミサイルや機銃など重火器が満載されたパッケージを呼び出し、二人に向ける。

「消し飛べ！！」

そして二人に対して機銃やミサイル、アサルトライフル、グレネードなど全火力を集中させて浴びせかける。

グレネードやミサイルの爆風に機銃が立てる砂煙もあり瞬く間に一夏の姿は煙の中に消えていくが、構わずに女達は派手に、執拗に、念入りに、それこそ塵一つ残さず消滅させん勢いでミサイルや銃弾、グレネードの雨を降らせる。

やがて女達のミサイルは尽き、グレネードは止み、機銃の弾が切れ、ていくと女達はパッケージを排除していき、最終的に全機が弾を撃ち尽くしパッケージを投棄していた。

女達の眼下には濃い煙が立ち込めており、地上の様子は見えない。

「フツ、他愛もない。所詮『マスクドライバー』と言っても男、究極の機動兵器たるISが本気を出せば勝てる訳がないのよ」

「今まではまぐれや不意討ちで勝ちを拾ってきたようなもの、これから10人も軽く捻ってやるわ」

「ISを倒せるのはISだけ…これが真理よ。もつとも、女が乗ったって条件がつくけどね…織斑一夏も所詮は劣等な男。女が駆るISには勝てる筈もないわ」

「しかしわざわざ『ヴォルケーノ』パッケージ使う必要があったのかねえ…『マスクドライダー』対策マニュアルに従ったはいいいけど織斑一夏まで肉片すら残らず消し飛んじまったんじゃない？」

「その辺りはマニュアルに従った結果の事故です、って報告してやればいいわ。むしろ今まで『マスクドライダー』を過大評価し過ぎていたのよ。ちゃんと対策を立てればISの前では敵じゃないわ」

そんな会話をめいめい交わしながら女達は地上の煙が晴れるのを待つ。『絶対防御』のある一夏はともかく仮面ライダー1号は確実にミンチより酷い状況になっているだろうが、死体の確認までが任務である。死体があれば、だが。

そう気楽に考えていた女達の眼下にある煙が徐々に晴れていく。最初はどんな惨状かと面白半分で見っていたがやがて驚愕に変わる。

「嘘…でしょ…？」

「何で…何で…」

「あり得ない！あり得ないわこんな事！」

「夢…じゃないわよね…？」

「夢だとしたら…悪夢よ…」

「これが…これが…」

やがて煙が完全に晴れると地上の様子が完全に分かるようになる。

「…どうした？それで終わりか？」

そこには、一夏の盾になるように立ちはだかる仮面ライダー1号がいた。

よく見ると仮面ライダー1号や一夏の周囲にだけ機銃の弾跡やミサイルやグレネードが破裂した形跡がない。恐らく仮面ライダー1号がことごとく直撃弾を弾き、反らしたのだろう。

「化け物め…！」

女達が誰からともなく驚愕と恐怖を込めて呟く。

「猛さん…大丈夫なんですか？」

「ああ。とはいえ最後の投げばかりは威力を殺し切れなかったけどね」

心配そうに尋ねる一夏に対して仮面ライダー1号は事もなげに答えてみせる。

いくら改造人間と言っても先程の羽交い締めからの叩きつけや投げを全てまともに食らっていたら暫くは立てなかったであろう。

しかし仮面ライダー1号は敵が勢いを付ける為に高速で何回も旋回

する事を…そしてその際に発生する風圧を利用した。

簡単に言えば旋回している間にベルトに風力をため込み、叩きつけられる瞬間に一気に風力を解放してベルトから噴射する事で威力を完全に相殺していた。しかもご丁寧にも何回も高速で旋回してくれたので、威力を相殺するには十分な風力には事欠かなかった。

流星に最後の一撃ばかりはベルトからの風圧だけでは完全に相殺し切れず少なからずダメージを受けたが。

そして一夏が落下し、敵が一斉射撃してくる直前に一夏の盾となりこちらに直撃してきそうなミサイルやグレネードを反らしたり機銃を弾いたり相殺したりして敵の攻撃をやり過ごした。

(とはいえ俺はともかく距離を置いて撃たれ続ければ一夏君のISのシールドエネルギーが保たないだろう…何としてもヤツらに俺達が近付ける隙を作らねば…)

そして仮面ライダー1号は思案をする。

連中はこのまま距離を取って遠巻きに撃ち続けてくるだろう。そうなれば一夏はジリ貧だ。シールドは決して無限ではないのだから。何より仮面ライダー1号とて撃たれ続ければ、いつかは限界を迎える。飛び道具が無い上空中での機動力で圧倒的に劣る仮面ライダー1号には不利な状況だ。

そして女達もそれを知ってか、再びスラスターを噴かして旋回しながら二人に銃撃を加えようと…

「そうは…！」

「させるかよ！」

した瞬間に2機のISの上から二台のバイクが落下してきてのしかかる形となる。

「おやつさん！滝！」

バイクに跨がっていたのはおやつさんこと立花藤兵衛と滝和也だった。恐らく近くの立体駐車場の屋上から勢いを付けてバイクで落下したのだろう。

「弾君！」

「はい！食らいやがれ！ライダー…キック！」

更に和也のバイクの後ろに乗った五反田弾が和也から借りたらしいスタンガンが仕込まれたブーツでバイクの下敷きとなったISを踏み付けるように足を蹴り出し、高圧電流を流し込む。

「今だ！猛！」

「派手にぶちかましてやれ本郷！」

「お前も負けんなよ一夏！」

あまりに異様な光景に呆然とする女達を尻目に、二台のバイクはそのまま地上へと降りて行く。

「おやつさん…滝…ありがとう」

「弾…ありがとうな」

二人はそれぞれ縁の深い者に感謝の言葉を述べると、並び立ち、顔を見合わせ頷き合う。

「行くぞ！」

「はい！」

「ライダージャンプ！！！」

そして仮面ライダー1号はその脚力を最大に生かして、一夏は『瞬時加速』を使って一気に上へと飛び上がる。

「そんな直線的な動きで！」

それを嘲るように2機のISがそれぞれ向かい合う形になった仮面ライダー1号と一夏の背後を取る。仮面ライダー1号にはスラスタはない。一夏も『瞬時加速』の直後で小回りは利かない。そう読んだのだろう。

「纏めて落ちろ！！！」

「そう」

「かな」

その瞬間仮面ライダー1号と一夏は互いの足を合わせると渾身の力を込めて互いを蹴り出し、高速でそれぞれの背後にいる2機へと突っ込んでいく。

そして啞然とする敵に一夏はその勢いのままに再び『瞬時加速』を使い手に持った『雪片式型』で思い切り斬撃を放つ。

「はあああああっ！」

そして敵はスピードが乗った斬撃を受けて一撃の下に撃墜される。

一方、仮面ライダー1号もまた一夏を蹴り出した反動を利用した飛び蹴りを自身の背後にいる敵へと放つ。

「ライダー反転キック！」

それで背後の敵を叩き落とし沈黙させるが、仮面ライダー1号の攻撃はまだ終わらない。

仮面ライダー1号はそのまま先にあつた壁を蹴ってまたも反転すると、呆然としながらも飛び立とうとするISへと反転キックを放つ。

「ライダー！」

まだ終わらない。それでそのISの『絶対防御』を発動させ沈黙させると同時に更に反転して別のISにその反動をプラスしたキックを放つ。

「稲妻！」

そのISも蹴りで沈黙させるがそのまま蹴りの反動を生かしてもう一度反転し更に1機へと稲妻のようなエネルギーを纏いながら、先の2回の蹴りと合わせて稲妻のようにジグザグな軌道を描くように反転キックを放つ。

「キック！」

それを受けてそのISも為す術なく悲鳴と共に『絶対防御』を発動させ地面へと墜落する。

「流石『ダブルライダー』だぜ！」

それを地上で眺めていた和也が称賛の声を上げる。藤兵衛と弾は当然とばかりにそれぞれ猛と一夏を誇らしげに見ている。

「和也さん！」

「お兄！」

そこに織斑千冬と五反田蘭が三人の下へ走り寄ってくる。

「遅かったじゃねえか、千冬」

「蘭！どうして此処が！？」

「各方面との調整に時間がかかりましてね…彼女はたまたまこちらに走っていたのを見かけたので拾ってきました」

「あれだけの騒ぎなら普通気付くよ…けどお兄…本当に心配したんだからね！」

「立花さん！ご無事ですか！？」

「よかった！お怪我はありませんか！？」

「滝捜査官は…その様子じゃ大丈夫そうですね」

「というか本当に退院してたんだ…やっぱり人間って意外と頑丈なんだ…」

「流石は教官の戦友だ。私も見習わなければな」

「…見習う以前の問題だと思っけど…」

「というか何で弾がいるのよ？」

「そう言わないの…私の周りでは心配で心配で堪らなかった人もいるんだから」

「篝ちゃん！真耶ちゃんもか！」

「ご心配どうもセシリア嬢。それにシャルロットとラウラ…あと簪さんだっけ？…もわざわざお疲れ様」

「俺だけ扱いが酷くねえか、鈴。それとありがとございます、楯無さん」

そして会話をめいめい躲している所にISが9機降りてくる。教員の山田真耶の機体を除けば全て専用機：しかも全員織斑一夏に好意を寄せている少女…和也曰く『イチカー軍団』が装着しているものだ。先に民間人である弾や藤兵衛を保護しにきたのだろう。

その『イチカー軍団』の視線の先では一夏が『雪片式型』を振るい最後の1機と戦っていたが、

「この！しつこい！」

咄嗟に女がパッケージを呼び出し自爆させた爆風をもろに受けて一夏は墜落していく。

「……………一夏（さん）、君（！）？」「……………」

慌てて飛び出して行くこととする8機を当の一夏が遮る。

「俺は…大丈夫だ…それより…あいつを…！」

「しかし！」

「大丈夫だ！」

言い募ろうとする篠ノ之箒を和也が遮る。

「一夏君は、君や千冬や蘭ちゃんが思っているより、ずっと強い。だから、大丈夫だ」

「で、でも！」

「一夏君！『電光ライダーキック』だ！」

更に言い募ろうとする少女達を遮るように藤兵衛が一夏に叫ぶ。

「立花さん！？」

「箒ちゃん、一夏君を…信じてやってくれないか？俺は一夏君を…一夏君なら必ず出来ると…信じている…！」

「それによ」

更に和也が続ける。

「今一夏君には…あいつが付いてるんだ」

そう言って和也は逃げるISを追い、呼び出した『サイクロン号』

に跨がりビルの壁をジャンプ台代わりにして高々と宙に舞う仮面ライダー1号を見やる。

「一夏君や弾君、俺達や千冬に君たちが信じて、支えて、助けて、応援してくれるならどんな悪党だってぶっ倒して…そして2341発のミサイルからでも…467機のISからでも…一夏君を…一夏君にとって大切な君たちも、何もかも守り抜いてみせる仮面ライダーが付いてるんだ…一夏君が仮面ライダーを…仮面ライダーが一夏君を信じてるみたいに…君たちも一夏君を、そして仮面ライダーを信じちゃくれねえか？」

それを聞くと皆黙り込む。仮面ライダーの名を出されては黙るしか…信じるしかない。

それに応えるように仮面ライダー1号は逃げようとするISに向かって『サイクロン号』で体当たりを仕掛ける。

「サイクロン…アタック！」

その一撃でISのメインスラスタが破壊され推力を失ったと見るや仮面ライダー1号はサイクロン号からジャンプし、落下の勢いを増しながらISを掴み地面へ…一夏に向けて落下し始める。

「行くぞ！一夏君！！」

「はい！猛さん！！」

一夏は落下しながらも『雪片式型』を地面に思い切り投げつけ、垂

直に突き刺す。そしてスラスタールとPICを駆使して体勢を整え、『雪片式型』の柄の上に足を乗せると同時にパワーアシスト機能を全開にし、『瞬時加速』を使い真上へと勢いよく飛び上がる。

「行っけえええええ！一夏あああああ！」

弾の魂の叫びに応えるように、一夏はそのまま上昇しながら逆立ちのような姿勢でスラスタールを噴かしつつ蹴りの体勢に入る。

仮面ライダー1号はそれを見るとISの腕を取り、『ライダー返し』の要領で一夏の方向に放り投げると同時に踏みつけるような形でISに蹴りを放つ体勢に入る。

そしてISを装着した女は悟る…自分は間もなく一夏が下から放つ蹴りと仮面ライダー1号が上から放つ蹴りとのサンドイッチになると。そしてスラスタールが破壊された自分に逃げる手段が無い事を。チエックメイト、だ。

だがそれでも…いや、だからこそ女は仮面ライダー1号に向かって叫ばずにはいられなかった。

「貴方達は…貴方は一体何なのよ!？」

「俺の名は」

「俺は」

「俺達は」

「仮面ライダー!!!」

「電光おおおライダーアアア!」

「ライダーアアアハンマアアア!」

「キイイイイイイック!!」

『白式』を身に纏った織斑一夏が放った電光の如き渾身の蹴りと、仮面ライダー1号が放った正義の鉄槌に相応しい必殺の蹴撃は同時に悪へと炸裂し、見事その企みを打ち砕いた。

滝和也、立花藤兵衛、そして変身を解いた本郷猛は並んで立っていた。

「お兄のバカ！人に散々心配かけさせて！」

「痛い痛い！止めてくれ！」

そして心配と安堵のあまり半泣きになりながら兄の五反田弾を殴っている五反田蘭を止めに入る。

「蘭ちゃん、そこまでにしてやってくれないか？」

「ああ、誘拐されたばっかなのに俺達の無茶にまで付き合わせちまっただけだからな」

そう藤兵衛と和也は蘭に言うと渋々弾を解放する。そこに猛が弾に言う。

「ありがとう、弾君。君があの時見せてくれた勇気が一夏君に、俺に力をくれた…流石、風見志郎が見込んだだけの事はある」

「風見さんを知ってるんですか!？」

五反田兄妹が声を揃える。

「ああ、大学やオートレーサーとしての後輩で…血を分けた兄弟みたいなものでもあるからね」

猛は笑って続ける。

風見志郎を改造したのは他でもない猛とその盟友一文字隼人だ。その際に自身の機能を参考にしているので猛の表現も間違いではない。「そうだったんですか…後本郷さん、そろそろ一夏も助けてやってくれないか？流石に可哀想になってきたというか…」

そして弾は現在織斑千冬と『イチカー軍団』に『制裁』されている織斑一夏を見やる。

最初は千冬がIS学園教師として勝手な行動をした一夏を鉄拳制裁している…と思いきや、静観の構えを取っていた三人だが、やがて『イチカ軍団』がそれに加わり千冬もそれを止めなかつた事からその認識を改めていた。

現在一夏は和也曰く『会長フランク』こと更識楯無に言葉責めされている。

やがて千冬がもう一発殴ろうかとした所で猛が声をかける。

「そこまでにしてもらえませんか？彼がそのような行動を取ったのには俺にも責任がありますから」

「貴方は…」

「…こうしてお会いするのは初めてでしたね。改めて…本郷猛です。貴女の事は一夏君や滝、それと沖一也から聞いていました。お会い出来て光栄です、織斑千冬さん」

「いえ、私も一夏や和也さんから話を聞いてましたから…ありがとうございます。二度も弟を…一夏を助けて頂いて」

そして千冬は猛に頭を下げて礼を述べる。

「頭を上げて下さい、千冬さん…むしろ俺の方こそまた一夏君に助けられたんですから」

猛は笑って首を振ると続けて一夏に向き直る。

「ありがとう、一夏君。また、君に助けられたよ」

「でも…俺…みんなに迷惑かけて…」

しかし一夏は落ち込んで答える。今回一夏は制裁を甘んじて受けている。自身の無思慮さを恥じているのだろう。

「…それはこれから直して行けばいいさ。もし君がどうすればいいかわからないなら…俺で良かったら君の力になるよ」

「猛さん…」

「それより一夏君、歩けるかい？戦いのダメージもあるだろうし、彼女達の愛の鞭は少々過激だったからね」

「いえ、大丈夫…のわ!？」

歩き出そうとして倒れかける一夏を猛が支える。どうやら予想以上にダメージは大きいようだ。そのまま猛は一夏に肩を貸す。

「本郷、そっぴやお前の用件って何なんだ？来るって連絡はあったけど相当の事なんだろ？」

和也はそのまま猛に尋ねる。和也の下に猛が日本に帰国する事と話があるという事は事前に連絡が入っていたが、話の内容はまだ聞いていない。

猛は表情を引き締める。

「…『亡国機業』が大規模な作戦を日本で展開するらしいとの情報が風見と結城から入った。二人は既にこちらに向かっているそうだ

が後は色々あつて少し遅れるらしい。だから…」

「…俺に迎えに行けつてんだろ？」

「…ああ。また、世話をかける」

「気にすんな、本郷。お前の連絡はいつも入れてくるクセに割と大事な頼みは唐突なのは昔からだしな」

「すまん…」

「その代わりと言つちやなんだが暫く一夏君の傍にいてやってくれないか？いくらおやつさんや弾君、蘭ちゃんが居ても肝心の学園に千冬や『イチカー軍団』がいないんじゃないか？一夏君も寂しいだろうし…何よりお前も一夏君に教えたい事は沢山あるだろうしな」

そう言つて和也は笑つて答えてみせる。

「私達が一夏の傍から…ですか？」

「ああ。だってよ、お前沖一也の事迎えに行けつて言われたら断れるか？」

「それは…確かにそうですけど…」

「俺からもお願いします、千冬さん。それと他の方も…話は一文字や後輩達から聞いています。ですので…」

「一文字隼人を、神敬介を、アマゾンを、城茂を、筑波洋を、沖一也を、村雨良を、南光太郎を…かつて貴女達と出会った『仮面ライダー』を、迎えに行つてはくれませんか？」

「…そう言われたら、引き受けるしかありませんね」

篠ノ之箒が…かつて城茂に助けられた少女が猛に応える。

「ええ、むしろ頼まれなくともそうする気でしたわ」

セシリア・オルコットが…神敬介を父親代わりと敬愛する少女が続ける。

「『トモダチ』の為ならそれくらい、朝飯前ですし」

鳳鈴音が…アマゾンと今も変わらぬ友情を育んだ少女が笑う。

「僕も洋兄さん…仲間と、また会いたいと思つていましたから」

シャルロット・デュノアが…筑波洋を仲間と信じ、兄とも慕う少女が爽やかに言う。

「私達の為に血を流してくれた人…カメラード『戦友』を迎えに行かない程、私も恥知らずではありません」

ラウラ・ボーデヴィツヒが…人間・村雨良と秘密を共有し、その生き様と魂を伝えられた少女が頷く。

「私も簪ちゃんも光太郎さんには…」

「…奇跡を起こしてくれたあの人には…改めてお礼がしたいですから…」

更識楯無と更識簪が…南光太郎にその命や絆を助けられ、守られた姉妹がそれぞれ肯定する。

「私も、一文字さんと会って…最高の一枚を見せて貰いたいですし」

山田真耶が…一文字隼人と出会い、命懸けで救われ、そして変わった少女が微笑む。

「私も助けられた恩返しも…何より『ホワイトナイト』に託した伝言が無事伝わったと沖一也さんに…スーパー1に教えたいですから」

「もつとも、それがなくともどの道こつちのいい加減な方の『カズヤ』さんに付き合わされてたでしょうけどね」

織斑千冬が…少女時代に沖一也に二度も助けられ、今は滝和也と互いに助け合う…二人の『カズヤ』を知る女性が笑って滝和也を見やる。

「…一夏を、お願いします」

「…はい」

改めて一礼し一夏を託す千冬に猛は簡潔に…しかし力強く頷いてみせる。

「それじゃ、行こうか…猛、一夏君、弾君、蘭ちゃん。夜風は冷たかっただろうしコーヒーでもご馳走するよ」

「ありがとうございます、おやっさん…久しぶりだな、おやっさんのコーヒーを飲めるのも」

「本郷さん…滝さんから聞いたんですけど藤兵衛さんのコーヒーってそんなに美味しいんですか？」

「ああ、おやっさんは昔喫茶店のマスターもしてたからね。味の方は俺や風見が保証するよ…それと弾君、君は俺の反対側から一夏君に肩を貸してやってくれないか？」

「分かりました。…しかしお前やつぱ凄いな…最高に格好良かったぜ、あの『電光ライダーキック』はよ」

「よせよ、むず痒いって言うか…それにお前だつてあの時の『ライダーキック』、猛さんや和也さんみたいだったし」

「お兄…そんな事までしてたの!？」

「俺達に付き合う形でね…悪いね、蘭ちゃん。ここは俺に免じて許してくれないか？」

「それにおやっさんや滝、弾君の…そして一夏君のあの姿があったから俺も心を奮い立たせる事が出来たんだ…俺からも、頼むよ」

「…二人からそう言われたら、私は何も言えませんよ」

「ありがとう、蘭さん…けど二人共…特に弾君はこれからあまりあんな無茶はしないでくれないか？ライダーキックは仮面ライダーだから出来る技だ…一夏君もそのせいで足を痛めたみたいだしね」

「面目ないです、猛さん…」

「何、無茶言った俺が悪いのさ。それに言ってくれば俺がライダーキック使えるまで特訓に付き合うさ」

「お兄、藤兵衛さんに特訓して貰ったら？本郷さんや風見さん、滝さんみたいになれるかもよ？」

「…遠慮しとく。何か鉄球とか使いそうだし」

「流石に猛達ならともかく君たちにはそんなもの持ち出さないって」

「って本郷さん達には使ってるんですか!？」

「まあその話は追々しようか。その話も、俺が今まで何をしてきたのか…仮面ライダーとしてどうしてきたかも、弾君にも蘭さんにも…一夏君にも話すよ。そして教えるよ、仮面ライダーという生き方について…俺が昔10人の男にそうしたように、ね」

「…ありがとうございます、猛さん…俺も猛さんと…仮面ライダーとせめて魂だけでも同じになれるように…頑張りますから」

そんな話をしながら織斑一夏、五反田弾、五反田蘭、立花藤兵衛、

そして本郷猛は肩を並べて歩き去った。

それを姿が見えなくなるまで見送ると、和也は声を上げる。

「そんな弾君や本郷が羨ましい、なんて顔すんなよ…恋と友情は別腹さ。じゃ、俺達も行こうぜ？あいつらに…仮面ライダーに会いにな」

そう『イチカー軍団』に言うと篠ノ之箒、セシリア・オルコット、鳳鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィツヒ、更識楯無、更識簀、山田真耶、織斑千冬、そして滝和也も歩き出すのだった。

悪が人々を苦しめる時嵐と共に 嵐のように現れて、悪を倒すと嵐と共に 嵐のように去っていく仮面の男。彼の 彼らの名は

仮面ライダー。

第一話 俺の名は（マイ・ネーム・イズ）（後書き）

拙作をお読み頂きありがとうございます。

この話を読めばお分かりになる通り本作品には

- ・ 仮面ライダーとは改造手術や力の有無ではなく生き方
 - ・ 仮面ライダーはヒーローである
 - ・ 心や魂を宿す者は皆ヒーローになれる
 - ・ 己の正義を貫くヒーローは不死身
 - ・ 信頼されたり、声援を受けたヒーローは最強
 - ・ 命や魂を燃やしたヒーローはチート
 - ・ ヒーロー、ヒロイン、天才は老けない
 - ・ 男女は性別、漢は生き様
 - ・ 男女間の友情は成立する
 - ・ 最後に勝負を決めるのは魂の強さ
- などの勝手な思想や、
- ・ 困った時の石ノ森作品繋がりネタ

- ・困った時の役者ネタ
- ・困った時の他作品ネタ
- ・困った時のインターポール & 国際IS委員会
- ・困った時の『亡国機業』（ゴルゴムの意味で）
- ・困った時の織斑千冬 & 滝和也（狂言回し的な意味で）
- ・恋愛要素はお茶を濁す程度
- ・学園要素はあまり無し
- ・キャラ崩壊
- ・中途半端な群像劇的要素
- ・そもそも既に双方の原作を殺害している

等の悪癖がふんだんに盛り込まれております。極力改善していただけるように努力は致しますが、根本的にはこのようなスタンスで書いていくつもりですのでご容赦願います。

では本話を最後までお読み頂きありがとうございますとございました。

宜しければ次話もお付き合い願います。

第二話 二度目の再会（セカンド・リユニオン）（前書き）

この話は同じ題材の短編、特に同じく篠ノ之箒と城茂を主役にした『少女は雷光を見たか』の内容を踏まえておりますので、事前にお読み頂けますとより理解し易くなると思われまます。

第二話 二度目の再会（セカンド・リユニオン）

一台のバイクが山道を走る。運転しているのはジャケット姿の男、その後には長い黒髪を後ろで一つに纏めた髪型：所謂ポニーテールにした少女が乗っている。どちらも日本人であるようだ。

そのバイクに乗った二人の目的地はこの先にある『庄野山』だ。

バイクを運転している男に少女が声を掛ける。

「わざわざこちらの用事の為に寄り道して頂いて申し訳ありません、滝捜査官」

「気にしなくていいさ、箒。どうせ城茂も『庄野山』に来てるんだ
…そのついでにちょっとくらい寄り道したって変わらねえしな」

少女：箒ノ之箒に対して男：滝和也は事も無げに答えてみせる。

箒は世界唯一のIS操縦者育成機関『IS学園』の1年生、それに対して和也はFBIから出向のインターポール捜査官である。そんな一見すると妙な取り合わせの二人は、先日和也の戦友の一人である本郷猛の頼みを受けて今は『庄野山』にいるという城茂を迎えに行く為に、こうして行動を共にしている。

十日程前に箒はISの開発者でありISコアの製造方法を唯一知る
…それだけではなく『白騎士事件』以来色々と世界中を引つ掻き回している疑いがあるが…姉の束に対する人質として『亡国機業』ファントム・タスクに拉致されかけたが、その際に箒を保護したのが『おやっさん』こと立花藤兵衛と城茂である。

茂はどうか『亡国機業』を撃退し、箒がIS学園から駆け付けた幼なじみで想い人の織斑一夏と合流した後に一夏に茂と藤兵衛を紹介しようとした時には既に姿を消していた。

それ以前にも箒が中学三年生の頃剣道の全国大会に優勝したその日に、土砂降りの雨と雷が降り注ぐ中箒と茂は遭遇している…少なくとも箒の方は茂が『変身』を解除し立ち去っていく所までははっきりと覚えている…のだが、いかんせん事情が事情なのでそれを知っているのは当の本人達以外では話を聞いた藤兵衛くらいしかない。猛や和也の話では海外に渡り『亡国機業』の計画を阻止していたらしいのだが、先日日本で大規模な動きがあると聞くと日本に帰国したらしい。ただ茂は『庄野山』に何か用事があるらしく、その為に箒と和也が迎えに行く事になった。

同時に箒もそのついでとして個人的な用事も済ませるつもりだ。どの道茂が『庄野山』のどの辺りにいるかは連絡がないのでこちらから探さなければわからない状況なので当座の目的地があれば和也も気が楽だと言っていた。

「けどよ、茂はともかく箒は一体何の用があつて『庄野山』に行くんだ？」

「あの山には『篠ノ之神社』の分社があるんです。そこに奉納されている『紅暁^{あかつき}』を『篠ノ之神社』に納める必要がありますから」

和也の質問に対して箒が答える。

箒の実家は『篠ノ之神社』という神社である。現在では土地神伝承

の影響が強く出ている為分かり難いが、元々は『鹿島神宮』の祭神『武甕槌神』と並ぶ武芸の神として知られる『経津主神』を祭る『香取神宮』の分社の一つであったと筭は父から聞いている。

その為元来は篠ノ之神社は『香取神社』の一つ、しかもかなり古くからあった分社だったらしいのだが、鎌倉時代になると宮司の家系が一度断絶し、土地の豪族で宮司の家と姻戚関係にあった篠ノ之氏から養子という形で宮司を出してからは神社がある地の土地神信仰の影響が強まっていき、室町時代頃になると姓を篠ノ之に戻し、神社の名前も篠ノ之神社へと変えた。ただその後も元々の本社であった香取神宮との交流はつい最近まで続いていたそうだ。

篠ノ之神社に伝えられる『剣の巫女』による神楽舞も本社である香取神宮やその近くに立地し、香取神宮とも関わりがある鹿島神宮の神職に伝えられていた『香取の剣・鹿島の剣』と言われる古流剣術と、元々現地で伝えられていた巫女による神楽舞とが合わさって出来た物であるらしい。

「その『紅暁』ってのは一体何なんだ？」

「篠ノ之神社の本社：つまり私の実家に奉納されている『緋宵』の兄弟刀で『篠ノ之流』の開祖：私の先祖でもある『篠ノ之柳心』が愛用していたとされている刀です」

続けて筭は和也の質問に答える。

香取神宮の流れを組む篠ノ之神社には香取神宮から伝えられた古流剣術を筆頭に槍や薙刀、組打、弓、手裏剣など様々な古武術が宮司の家により伝承されており、篠ノ之神社に名前が変わってもそれは受け継がれていた。

室町時代中期頃、篠ノ之家の跡取り息子であった『篠ノ之柳心』：柳心は号で諱は俊直だが：は生来剣術を中心に武芸に長け、若い頃に香取の地へと赴き当時道場を開き身分を問わず指導していた『天真正伝香取神道流』の開祖である飯篠長威斎家直に教えを請い『天真正伝香取神道流』を学ぶと、やがて武者修行の為に各地を巡る旅に出た。

そして柳心は篠ノ之家伝来の古武術の剣技に学んだ『天真正伝香取神道流』、更に篠ノ之神社に伝えられていた『剣の巫女』の神楽舞をヒントに創意工夫をこらした独自の剣術流派『篠ノ之流』を創出し、篠ノ之神社に戻り父の後を継ぎ宮司となると同時に篠ノ之神社の境内に道場を設けて心身鍛練の術として身分を問わず『篠ノ之流』を広く伝授した。

その『篠ノ之流』を開く際に柳心は剣術の開祖の例に漏れず山籠りを行い、厳しい修行の末に遂に悟りを開き、『篠ノ之流』の極意に開眼した地であるとされているのが現在二人が向かっている『庄野山』である。

それ以来『庄野山』には篠ノ之柳心が勧請した篠ノ之神社の分社：と言っても普段は無人の小さなものだが：が立てられており、柳心が愛用した二振りの刀：『緋宵』と『紅暁』が奉納された。

後に二本の刀の内『緋宵』の方は、江戸時代に入り当時の宮司を務めていた篠ノ之柳心により『庄野山』の分社から本社である篠ノ之神社に改めて奉納し直され、その代わりに中国から来日し柳心と親交を持った『嵩山少林寺』の禅僧で、後に『少林拳赤心派』：日本には後に『樹海大師』により『赤心少林拳』の名で伝えられるが：の開祖となる『赤心道玄』より送られた直筆の書画が奉納されている。

る。

今回篇が『庄野山』に赴くのは現在ISの開発者である姉のせいで一家離散状態となり、日本政府の重要証人保護プログラムにより各地を転々とさせられている宮司で篇の父である篠ノ之柳韻に代わって篠ノ之神社の管理をしている叔母の雪子に、老朽化が激しく建て替える必要がある『庄野山』にある分社から由緒ある宝物である『紅暁』と赤心道玄の書画を持つてくるように頼まれた為、という理由も含まれている。その為茂が『庄野山』にいと聞いた篇はついでにそちらの用事も済ませる事にした。

ちなみに『緋宵』が「女のための刀」と言われ、女性用の実用刀とまで言われるくらい軽量で扱い易いのは対照的に『紅暁』は重く見た目も武骨で頑丈、肉厚といかにも男性的な刀となっている。

「しかし城さんはどうしてここに…？」

「さあな、俺にもよく分からん…そろそろ到着だ。この先はバイクじゃ行けねえみたいだし多分歩きになるから準備しといてくれ」

逆に質問してくる篇にそう答えながらも目的地が見えるや和也はそう告げてバイクのスロットルを入れ直した。

『庄野山』の麓にある溪流の河原に、一人の男が佇んでいた。

ジャケットの中に『S』の字が描かれたシャツを着ており、その両手には黒い手袋が嵌められている。

男はやがて動き出し、溪流を遡る形で河原をゆっくりと歩き始める。

「ここはあの時と変わらないままだな。山籠りした時と…また喧嘩した時と…なあ、五郎…ユリ子…」

男…城茂は周囲を見渡しながら誰に言うともなく呟く。

茂にとつてこの『庄野山』は何かと思い出深い地だ。城南大学に通っていた頃の同期でアメリカンフットボール部時代の親友であった沼田五郎と共に、『もつと強く（ストロンガー）』を合言葉に1年の時から4年の時まで毎年欠かさず夏になると二人揃って大学から程近い場所にあるこの山で山籠りと称して色々と馬鹿をやっていた。

熊に襲われかけて必死に逃げた事もある。うっかり飯ごうで炊いた米を全部この河原でぶちまけてしまい一食抜きとなり途方に暮れた事もある。この山の中腹にある神社らしき建物で寝ようとしたら関係者らしき男に泥棒か何かと勘違いされて竹刀でぶつ叩かれた事もある。

二人して喧嘩して、馬鹿やって、笑い合つて…あの時の茂と五郎からすれば当たり前で、今の茂と大地に眠った五郎にはもう二度とそんな機会はない…そんな時間を一緒に過ごしてきた場所だ。

そしてかつて共に悪の組織『ブラックサタン』に改造され、一緒に

アジトから脱出して、協力してブラックサタンと戦って、奇械人をぶっ倒して、手柄を巡って喧嘩して、意地を張り合って…そして心から愛していた岬ユリ子に何故『仮面ライダー』を名乗らないのかを一度だけ本人に直接聞いた場所でもある。

「未練、か…ヘッ、お前も人の事言えた立場じゃねえぜ…城茂。こうして今も未練タラタラじゃねえか…」

ふと茂は自嘲するように呟く。

あの時はユリ子の答えの意味がイマイチ理解出来なかった茂だが、ユリ子が自分を助ける為に命を落とした後になって漸くその意味が理解出来た。

『仮面ライダー』とは命有る限り戦い続ける者の名前だ。そして最後の最後まで『仮面ライダー』として生き続けていく事を宿命付けられる生き方だ。或いは最期を迎えた後も背負い続けるものなのかも知れない。

茂やその先輩、後輩達にはその名を名乗る事への躊躇いも、そんな生き方を選んだ事への後悔など無かったし、今もない。恐らくこれからもないであろう。

この忌々しい改造人間の肉体を使って五郎を殺し、多くの人々を苦しめるブラックサタンの野望を阻止出来るのなら悔いも、躊躇いも無かった。

だがユリ子は違った。孤児だった茂と違ってユリ子には一緒にブラックサタンに拉致されて、そして殺された兄の守がいた。だから兄を殺したブラックサタンとの戦いにも躊躇いも後悔も無かった筈だ。

でなければ喧嘩しながらも『電波人間タックル』として茂と一緒に戦い続ける事も無かったであろう。

だが未練は…『仮面ライダー』の名を名乗り、生き続ける事で『岬ユリ子』という一人の女として、岬守の妹としての名や生き方を捨ててしまうのではないか、という事に対する未練は少しだけあったのだろう。故にユリ子は生前『仮面ライダー』を名乗る事は一度も無かった。

だから茂も仮面ライダーの名を送るか先輩達から一度聞かれた時は反対した。ユリ子の意志を尊重したかったし、何より茂もユリ子にはただの女に戻って、平和な世界を見て、生きていて欲しかった。それが出来なかったのならせめて死んだ後だけは一人の女として…静かに、安らかに眠って欲しかった。だから、身勝手かも知れないが戦い続ける『仮面ライダー』の名前だけはどうしても送りたくなかった。

事情を聞いた先輩達は茂の意見に賛成した。或いは先輩達も、そして茂にもただの人間だった頃への未練が残っているのかも知れない。少なくとも茂には未練はあった。だからこそこうしてこの『庄野山』に来ている。

茂は久しぶりに『おやっさん』こと立花藤兵衛に会いに行った際に『亡国機業』に狙われていた篠ノ之箒を助けている。もっとも、それより前に一度ISに追跡されていた彼女を助けているので都合茂は二度箒を助けている事になる。

箒の前から姿を消した後はオーストラリアに渡り『亡国機業』の計画を追っていたが、先輩の風見志郎と結城丈二より連絡を受けて日本で行われるという大規模計画阻止の為に日本に帰国した。

そのついでにこちらに立ち寄ったのだが、色々と思う所が有り過ぎて自分でも予想外に長居し過ぎた為に本郷猛に頼まれた先輩に当たる滝和也と篤とが自身を迎えに来る事になった。その際寄り道するかもしれないと和也は言っていたがどの道この山に居る事は変わらないので茂としても特に異存は無かった。

「さて、と…いつまでもこんな事してたらわざわざ迎えに来てくれた滝さんと篠ノ之さんに申し訳が立たないな…行くか、寄り道するとしたら神社くらいしか場所は思い当たらないしな」

そう呟くと茂はこの山の中腹にある神社を目指し歩き始めた。

『庄野山』にある篠ノ之神社の分社。いかにも古そうなこの社殿の前に一人の少女が居た。

少女は艶やかな長い黒髪を一つに纏めた髪型：いわゆるポニーテールにしている。その手には抜き身の日本刀が握られている。しかもかなりの業物のようだ。

先程から少女は舞うように刀を虚空へと振るっている。時に静かに風の如く、時に激しく嵐の如く、その剣を振り、構える。

『篠ノ之流』の演武の型：その中でも主に神前で神に捧げる為に行われる型だ。

基本的に『剣の巫女』による神楽舞を基にしているだけあり基本的な所作には似通った部分はあるが、たおやかな神楽舞とは違いやはり雄々しく、勇壮な所作が多く、見た感じの印象はだいぶ異なる。

しかし少女の所作はそうした雄々しさや勇壮さはあまり感じられない。むしろ凛として鋭く、それでいて清楚な：美しさすら感じられる程だ。

その長い黒髪は剣を振るたびに艶めかしくたなびき、紅く瑞々しい唇からは時折鋭い呼吸や吸気が漏れてくる。その無駄なく引き締まった肢体は型を行う度に伸びやかに、しなやかに動く。

やがて演武を終えたのか少女は残心を決め、納刀し、社殿に一礼する。余程集中していたのか頬はほんのりと紅く染まり、額には珠のような汗がある。息も若干上がっているのか女性らしく丸みを帯びた肩と、年齢の割には大きめの膨らみが目立つ胸も呼吸に合わせて上下している。

そこに少女に向かって拍手をしながらジャケットを着た男が歩み寄る。演武の間は鳥居にもたれかかっていた見ていたようだ。

男の立ち姿は一見すると隙だらけでだらしなく、雰囲気からしている加減さと不真面目さをこれでもかとはかりに醸し出している。ここまでくると少女とは別の意味で美しいというか潔い。

しかしそれが単なるポーズに過ぎない事は男をある程度知る者の中

では周知の事実だ。同時にそのいい加減さや不真面目さは元来のものだとも知られているが。

しかしそんな事は特に気にしていない男は構わずに少女に声をかける。

「いや、まさに眼福というかお見事って感じだったぜ？ 箒」

「いえ、こちらこそお見苦しい所をお見せして申し訳ありません、滝捜査官」

「見苦しいどころか一瞬素で見とれるかと思っただぜ…これで目的の物は持つて行って大丈夫なんだよな？」

「はい。奉納の演武は終わりましたから」

ジャケット姿の男：滝和也と話しながら演武を終えた少女：篠ノ之箒は和也と共に社殿の扉を開ける。

篠ノ之神社のしきたりとして奉納された器物を持ち出す際には代わりとして演武を神に捧げる事で神を宥める、という事が必要な為箒は神へと奉納する『篠ノ之流』の演武の型を執り行い、和也は邪魔にならないようにそれを見物していた。

そうやって演武を終えた後は目的の奉納され社殿内に保管されている『紅暁』と『赤心道玄』直筆の書画類を運び出す。

社殿には鍵がかかっているが箒が神社の管理を任されている叔母からちゃんと社殿と保管している長持の錠前の鍵を借りてきてあるので問題はない。

箒が社殿の鍵を開け中に入り奥へと向かうとそのまま長持の前に立ち、鍵を使い長持を開け、中から一振りの刀と掛け軸が中に入っているらしき木製の箱や巻き物を取り出し、風呂敷に包んで持つ。

そして社殿の外で待つている和也に一声かけると二人は並んで境内を出て石段を降り、森に囲まれた山道を歩いていく。和也のバイクで行くには少々狭すぎるのでバイクは現在ここからやや離れた麓に止めてあり、歩きで神社までやってきていた。

「しかし、さっきの演武見てて思い出したんだが…君の使ってる『篠ノ之流』なんだが、千冬の動きと結構似てないか？」

「織斑先生も昔は『篠ノ之道場』に通ってましたから…」

「つまり箒と千冬は同門って訳か…なら納得だぜ、色々な意味で」そして今箒と和也は箒の幼なじみで想い人である織斑一夏の姉で自身が一夏の担任教師である織斑千冬について話している。

千冬とは実家の篠ノ之道場だけではなく最近通い始めたIS学園近くにある武道場『大野練武館』でも同門に当たる。

それに姉の束とは古い付き合いという事もあり千冬とは一時断絶があったとはいえそれなりに長い付き合いだ。

同時に千冬はかなりのブラコン…箒は知らないがとあるカメラマンをして「弟独占を企む姉の組織『おとう党』大幹部にして日本支部長、その正体はブラコン怪人『ブリュンヒルデ』」と言わしめる程度…であり、箒やその恋敵達にとっては一夏本人にシスコンの気が

ある事もあつて目下共通した最大の強敵でもある。

箒はその千冬と現在自身が一緒に居る和也とは第2回モンド・グロツソ以来の仲と千冬や和也、それに一夏から聞いており、決勝戦で起きた誘拐事件の際には千冬と協力して一夏の救出に当たつたらしい。

一見すると厳格で根は真面目な千冬といい加減で不真面目な和也は対照的だ。実際千冬は和也と出会ってから和也に対するツッコミを何回入れたか分からないらしい。というより箒も二人がIS学園での食堂で喧嘩もとい漫才を繰り広げていた姿を目にしている。

学園内ではあくまでIS学園の教師として振る舞い、弟の一夏にも『織斑先生』と呼ばせ厳しく接するくらいには公私の区別を付ける千冬を巻き込んで、だ。和也は間違いなく大物だ…一夏にはああなつて欲しくないが。

というより千冬の懸念通り既に一夏に何かしらの悪影響を与えている気がする。少なくとも恋のライバル達と見舞いの名目で一夏に会いに行った時に、ドアの前に居たとき丁度エ…いかがわしい本を隠し持っていないか聞いているのが聞こえていた上、入る瞬間には好みのタイプを聞いていたような男だ。一夏に何を吹き込んでいるか分かつたものではない。

ちなみに胸が大きいのが好みと言えば鈴やラウラや簪、シャルロットが、小さいのが好みと言えば箒やセシリア、シャルロットが、程よいのが好みと言えばシャルロット以外が一夏を『制裁』するつもりだったので、直後に緑川ルリ子が乱入して命拾ひした結果となつた。その翌日は散々な目にあつたが。

そんな和也だが、千冬との仲は決して悪くはない。というより千冬がわざわざIS学園まで呼び寄せ、和也も千冬の頼みを快諾するくらいには互いに信頼し合っている。

その理由が最初は分からなかったが、和也がIS学園までやって来た翌日に無人ISがまたも襲撃してきた際にその理由が何となく分かった。

連携を寸断された事や動揺が重なって実力を発揮出来なかった事も重なっていたとはいえ自分達専用機持ちすら苦戦させる『仮面ライダー』を模した無人ISに対しても和也は生身で敢然と挑みかかった。

当然生身でISに勝ち目などあるはずもなく、ボロボロになりながらも和也は立ち上がり戦い続けた。篝達を…かつて仮面ライダーが命を懸けて守り抜いた篝達を仮面ライダーの技を使い傷つける偽者から守る為に。

そして篝は悟った。和也はあの不真面目でいい加減な仮面の下に優しく、気高く、熱い正義の心を持っていたのだと。何より…

(私より、ずっと強いな)

今は隣で雑談している和也を見ながら篝は改めてそう思う。

実際戦いぶりを見ていた限りでは生身同士なら自分よりは確実に強い。少なくとも生身同士でなら千冬ともやり合える辺り相当なものだろう。というより千冬同様に並の操縦者が操る量産機くらいなら格闘戦に持ち込めれば、ある程度渡り合えてもおかしくないかもしれない。

勿論和也がISを操縦出来ない以上専用機…しかも各国が漸く第3世代機の開発に着手したのに対してこちらはその先にある第4世代機…を持つ自分の方が戦力的には圧倒的に有利だ。

しかし箒は例えどんな高性能機を使おうが自分では生身の滝和也という男に『勝つ』事は出来ても『負かす』事は出来ないと確信している。

『勝つ』のは意外と簡単だ。ルールに従って一本取るなり1点でも多く入れたりすればいい。だが『負かす』となると話は別だ。

『勝ち』を認めるのは周囲だが、『負け』を認めるのは自分だけだ。だから『試合に勝って勝負で負ける』などという言葉があるのだ。自身が負けを認めなければ…その心や闘志が折れない限り本当の意味では『負け』ではないのだ。

そして箒には和也の心や闘志を折れる気がしない。例えその身体がどれだけ傷ついても、例えば力尽きても和也の心の牙が折れる事など決してないだろう。きっと最後の最後まで食らい付いてきて、戦い続けるのだろう。

(それに比べて私は…弱いな)

同時に箒は内心自嘲する。

滝和也に比べて自分はあまりに弱く、脆い。

幼い頃からそうだった。自分より後に剣道を始めたクセに自分より強くなつた一夏が気に入らなかつた。自分より後に一夏に出会つた

クセに専用機持ちというだけで一夏の…姉のせいで長い間引き離され、執拗に監視され心身共に疲れ果てる辛い目に遭い続けて漸く会えた想い人の隣で共に戦っていた皆に嫉妬していた。

だから自らは力に溺れ、一夏には辛く当たった。自分にも専用機があればと思いついた。そして大嫌いな…『白騎士事件』以来多くのテロまがいの事件への関与を疑われ、自身が家族や一夏を引き離される原因となった姉に力を…専用機をねだり、手に入れた。それどころか今度はそんな『汚い力』を誇示して他の者を見下す事までしていた。

そんな臆病で、卑屈で、汚くて、恥知らずで…弱い自分が滝和也に勝てるはずがない。まして先日和也の信頼に依って一夏が『電光ライダーキック』を放ったのを見た後では尚更痛感する。

もし滝和也が自身と同じ立場になっても力に溺れなかっただろう。

一夏には辛く当たらなかっただろう。他の皆と最初から仲良くできたであろう。

何よりISに乗れないなら乗れないなりに足掻いてみせた彼なら専用機など無くとも泣き言一つ言わずに、最後の最後まで諦めずに足掻き続けているだろう。その前に入学早々問題を起こして千冬と乱闘騒ぎを演じた挙げ句退学させられる可能性も否定出来ないが。

そして今も和也は篠ノ之束の妹である自分と…多くの事件への関与が疑われ、和也自身が負傷する原因となったと推測される女から専用機を手に入れた自分とも分け隔てなく接している。気付いていない筈がない。ああ見えてインターポール屈指の切れ者なのだから。

そんな事を考えている筈に構わずに和也は続ける。

「ところでよ、この辺り熊とか出ないよな？襲われるのはごめんだし」

「この辺りには出ないと聞いています。父や叔母から聞いた話では余程山の奥へ入ってわざわざ熊の縄張りに入る馬鹿でもない限り襲われないと言っていました」

「…その様子じゃ実際にそんな馬鹿が居たみたいだな」

「ええ、確かこの近くにある城南大学のアメリカンフットボール部の部員二人が一度熊の縄張りに侵入して襲われかけたと聞いています。他にも知らなかったとはいえ神社に侵入しようとして祖父に撃退された辺り余程の命知らずというか…馬鹿、なのでしょうね」

「手厳しいねえ…俺も君に聞いてなかったらその馬鹿の仲間入りしかねなかったのよ」

「…もうしてる気がします」

「うるせえ！というか千冬のヤツ等達に一体どんな事吹き込みやがったんだ!？」

こんな風にいつもと変わらず軽口を叩いてくる和也が箒には有り難かった。だから和也の為にも自分もそれに乗る事にした。それしか自分には和也の優しさに応える方法が見つからなかった。

ちなみに千冬からは「人間としては素晴らしいしいざという時は頼りになるが男としては最底辺」と評されている。セシリアはどうやら関係を誤解しているようだが、そのセシリアを含めた自分達…和

也曰く『イチカー軍団』も概ねその見解で一致している。

というより対千冬では和也と協調関係にあるが、一夏に悪影響を及ぼしかねないという点では千冬と一致しており、対和也ではむしろ千冬と同調しているという一時の欧州情勢よりかなり複雑怪奇な状況になっている。

だが箒は思考を中断し、立ち止まり周囲に気を巡らせる。殺気、しかも複数の…それが自分に向けられていると気付いたからだ。

和也も同様らしく立ち止まる。そして殺気の主に対して声を発する。

「…いい加減出てきたらどいだ？シャイなのは結構だが少し視線が痛すぎるんでね」

すると木陰から男達が出てきて、箒と和也を取り囲む。8人。虚無僧のような格好をした男達が現われた。身のこなしからして中々の手練だ。

「どうやらただの托鉢って訳じゃなさそうだな…何の用だ？」

和也は既に雰囲気が見えなまものに変わっている。箒も風呂敷を背中に背負い持ってきていた刀に手をかける。

するとリーダー格らしき男がそれに答えるように箒に告げる。

「…篠ノ之箒、そしてその連れの方よ。そちらに用も恨みもないのでな…その風呂敷の中身をおとなしく渡して貰おうか？」

「断る。仮に渡しても私達を殺す気だろうか？」

「気付いていたか…いかにも。だが手間は省けた…篠ノ之箒、その命、神に還すがいい！」

そう男は言つと鎖鎌を取出し、分銅のついた鎖部分を回し始める。他の者もめいめい武器を手に持ち、構える。

「ケツ、今時こんな時代劇みたいな展開に遭遇するなんてな…いけるか？箒」

「私は大丈夫です、滝捜査官」

「ならお言葉に甘えてこつちも派手に…やってやりますか！」

そう和也が不敵に笑い、箒が鞘から抜刀するのとほぼ同時に全員が一斉に動き始める。

「邪あつ！！」

男の一人が気合いと共に杖で箒を突きにかかるが箒はそれを見切り半身で躲すやそのまま杖を刀で両断する。ベッドすら刃こぼれさせずに両断出来る技量を持つ箒には朝飯前の事だ。

「少し寝ている！」

逆に更に踏み込んだ箒は柄頭で男の水月に一撃くれてやり昏倒させる。

そこに鉄拳をはめた男と角指をつけた男が箒に挑みかかるが、箒は刀の峰で二人の肩を打ち据えてやる。本来は骨を砕くための峰打ち

だが、今回はそこまでする必要はない。それでも尚激しい肩の痛みで動きが止まった鉄拳の男に当身を食らわせ吹き飛ばし気絶させると、残る角指の男の袖を掴んで払い腰で地面に投げ飛ばし、意識を刈り取る。

「お命、頂戴！」

そこに半棒を持った男と鎧通しを持った男がその隙を突いて襲い掛かる。

「俺を忘れてもらっちゃ困るぜ！」

しかし鎖鎌の分銅を躲し、手裏剣を叩き落として逆に蹴りで手裏剣の男を気絶させた和也が飛び蹴りで鎧通しの男を蹴り飛ばすと、半棒の男に正拳突きをモロに入れて地面に沈める。

「くっ！これほどとは…だが！」

残る鎖鎌の男は分銅で箒の刀を絡め取るとそのまま引き出す。しかし箒は刀をあつき放し、鞘を投げ付ける。

「愚かな！そんな手が！」

「馬鹿は…」

「…てめえさ！」

鞘を男が叩き落とした隙に和也が男に飛び膝蹴りを叩き込んで沈黙させる。

「これで全部か…大丈夫か？ 箒」

「私は、何とか…滝捜査官の方こそ無事で何よりです」

そう互いの健闘を称えながらも箒は刀と鞘を拾い上げ納刀するが…

「下がれ！！」

いきなり和也に突き飛ばされる。箒が見るとハンマー…掛矢を持った大男が和也に向かって掛矢を振り回している。和也も躲すのに必死だ。

「油断した…！？」

そして箒が殺気を感じて地面を転がると大斧を持った大男が振るった斧が先ほどまで箒がいた場所へと振り下ろされる。

どうにか立ち上がり鞘から抜かず刀で応戦しようとするが斧で刀を弾き飛ばされ、尻餅をつく。そして箒にトドメとばかりに斧を振り下ろそうと大きく振り上げる。

「箒！ こいつ！」

和也は叫ぶが掛矢が邪魔して近寄れない。つまり終わり、だ。

(…一夏…)

最後に愛する幼なじみの顔が思い浮かべると同時に目をつぶる箒に斧が無慈悲に振り下され…ない。

「…えっ…？」

斧は黒い手袋に掴まれ、途中で止められていた。そのまま黒い手袋の主は斧をひったくるとあっさりと柄をへし折り無造作に投げ捨てる。

「何の騒ぎかと思つて来てみれば…大の男が雁首揃えてか弱い女の子を寄つてたかつて袋叩きかよ。男として恥ずかしいとか、情けねえとは思わないのか？」

そう言つて黒い手袋を嵌めた男は不敵に笑つ。そのまま殴りかかつてくる大男の腕を掴んで捻り上げると言い放つ。

「大男、総身に知恵が何とやら…だな！」

そして一旦手を放すと大男を持ち上げて和也に攻撃している男に向かって思い切り投げ付ける。

その男二人は勢い良く衝突して纏めて気絶する。

「大丈夫かい？」

黒手袋の男は尻餅をついた状態の幕に向き直ると今度は先ほどの不敵な笑みとは一変して温厚そうな笑顔で手袋に包まれた右手を差し出す。

それはジャケットの中に胸に『S』の字が描かれたシャツを着た男…かつて二度に渡り自分を助けた、赤い雷光のような男だった。

「遅いぜ、茂」

「すみません、滝さん。少々寄り道し過ぎてしまつて」

やってきた和也と男は会話を交わす。箒は男の右手を掴み立ち上がると笑って男に礼を述べる。

「ありがとうございます、城さん。また、助けて頂いて」

「気にしないでいいよ、篠ノ之さん。けどまさか二度目の再会をこんな形で果たすことになるとは俺も思わなかったけどね」

そう言つて男：城茂もまた箒に笑い返すのであった。

第二話 二度目の再会（セカンド・リユニオン）（後書き）

第二話をお読み頂きありがとうございます。

本話からは前々から長すぎるとのご指摘がありましたので試験的な意味合いも兼ねて分割するような形での投稿となります。

では宜しければ次話もお願い申し上げます。

第三話 天地人が呼ぶ雷光（前書き）

では第二話の後書きで書いた通り後半部分にあたる話となります。

第三話 天地人が呼ぶ雷光

『庄野山』にある山道の中を二人の男と一人の少女が歩いてゆく。

「そつか…茂がここに来たのはそんな理由があつたんだな」

「ええ。日本に戻つたついでに少しばかり感傷にひたるつもりが色々思い出しちゃいましたね。けど驚いたな、あそこがまさか篠ノ之さんの実家の分社だつたなんてな。とりあえず時効だろうけど…すまない、色々と迷惑かけちゃつてさ」

「いえ、気にしないで下さい。私も聞いた事があるだけですし…」

「けどさ、いくらなんでも馬鹿はないんじゃないかな…悪かつたね、俺が知らずに熊の縄張りに飛び込んだ馬鹿なアメリカンフットボール部員の片割れで」

「…すみません、城さん」

「冗談だよ。それに実際問題あの頃の俺は我ながら馬鹿だつたと思うし、馬鹿やつてばっかりだつたからね」

そう男…城茂は少女…篠ノ之箒に笑つて答える。

茂と箒、それに箒に同行してきた滝和也は今はこうして雑談しながらそれぞれ乗ってきたバイクが停めてある『庄野山』の麓まで並んで歩いている。

その中で茂と箒がめいめい『庄野山』に来た理由を話していく中で、

茂が城南大学アメリカンフットボール部員で、かつ同期で親友の沼田五郎と色々と馬鹿をやっていたこと…つまり熊の縄張りに飛び込んで襲われかけ、篝の祖父に撃退された馬鹿なアメリカンフットボール部員だった事が判明した。

それから先篝は茂に謝っているが、茂は意に介さず冗談めかして答えたり、時折懐かしむように山籠りの思い出を篝や和也に話している。茂の事情を知る二人は茶々やツツコミを入れずに聞き役に回っている。

「けど滝さん、篠ノ之さん…さっきの連中は、一体何だったんですか？」

「よく分からん。襲われる事自体は心当たりはあり過ぎるくらいあるんだが、あんな時代劇めいた格好して武器持った連中に襲われる心当たりはないな…篝、君の方は？」

「いえ、私もああいう手合いに狙われるような心当たりは…」

「しかも話から察するに向こうは篠ノ之さんの事を知っていて、かつ風呂敷の中身…つまり篠ノ之神社の宝物についてある程度知っているんだろ？ますます分からないな…」

そして三人は先ほど自分達を襲撃してきた男達について話していた。今は男達は武器を取り上げた上で近くの木に縛り付けてある。麓に戻ったら通報して救助のついでに逮捕して貰う事にした。

しかし一体襲撃者が何者で、何の目的で分社に奉納されていた宝物を狙ってきたのかは考えがまとまらない。新手的宝物泥棒もとい強盗かとも思ったが、その割には格好が時代がかったし、動きが

良すぎる。何より箒の名前を知っていたという事が気がかりだ。

「まさかとは思うが…」ファントム・タスク『亡国機業』の手の者か？だがそれにしても腑に落ちない点が多過ぎる…」

「何故篠ノ之神社の宝物を狙ってきたのか…そもそも連中ならむしろ篠ノ之さんの殺害より身柄を狙う事を優先してくる筈…連中の目的は未だによく分かりませんが、今までの行動パターンからしても疑問や矛盾が見受けられますね」

「それに連中が私を狙ってくるならやはり前と同じくISを持ち出してくると思います。連中も私が専用機持ちである事も…その経緯も…掴んでいるようでしたから」

そうして今度は前にも箒を狙ってきた『亡国機業』の名が三人から上がるがやはり腑に落ちない点が多い。今までの行動パターンからは当てはまらないからだ。

「なら教えてあげましょうか？篠ノ之箒」

各自疑問を口にしながら歩いている三人に何処からか声かけられる。

「誰だ！？隠れてないで出てきやがれ！」

「騒がなくても出てきて上げるわよ」

「どの道私達にもあなた達に少し用事があったからね」

そして別の女の声が二つ聞こえてくると同時に、男物のフロッグコ

トを着た黒髪の三人の女が木陰から出てきて茂と箒、それに和也の前に立ち塞がる。

「さっきの連中を倒した手並みは中々見事だったわ。まさか他に二人も手練がいるとは思わなかったけどね」

「…ならさっきの連中を送り込んだのは…!」

「ええ、私たちよ」

箒が女達に問うと真ん中のリーダーらしき女は事もなげに答えてみせる。

「何故私の名前を知っている!? 何故宝物を狙う!?!」

「そう慌てないでよ、長くなるから…先に用件だけ言っておくわ。おとなしく背中の荷物を…いえ、篠ノ之流の極意が書かれた秘伝書を渡しなさい」

「…秘伝書?」

「その様子じゃ貴女の家には『篠ノ之柳星』の家には秘伝書に関する伝承は残っていないようね」

「…まさか…お前達は!?!」

「ええ、ご察しの通りよ」

箒はやがて女達の正体を悟ったらしく驚愕を隠せない表情を浮かべている。

「お、おい、何が一体どうしたってんだ…」

「なら私が代わりに説明してあげるわ」

状況が飲み込めない和也と茂に女が笑って答える。

「まあ、自己紹介した方が手っ取り早いかしらね…私の名前は篠ノあまね之天音」

「私は篠ノ之地ちえ慧。天音姉様の妹、よ」

「そして私は篠ノ之人ひとみ美…末妹ってところね」

「篠ノ之って…まさか!？」

「…はい。彼女達は十中八九私の家の分家…篠ノ之柳心こころの跡取り『篠ノ之柳星』の双子の弟、『篠ノ之柳月』の家の者です」

名前を聞き茂が何となく関係を悟ると篤が肯定するように答えを返す。

「しかし篠ノ之柳月の家は既に断絶していると…!」

「そういう事になってるわね、記録上は。けどね、貴女達の家が日向でのんびりと神社を管理している間、私達の家は陰に隠れて汚れ仕事をさせられていたのよ?」

「『裏柳生』ならぬ『裏篠ノ之』って訳かよ…その『裏篠ノ之』がどうして秘伝書を狙うんだ!？」

「あら、分からない？ 私達の家の祖は双子の弟というだけで世間から忌み嫌われ、篠ノ之流の奥義を授けられなかった。私たちが剣の道を選びいくら才能があつて努力を重ねても…ただ柳月の家というだけで篠ノ之流の奥義は伝授されない。そつちの小娘は黙つていても伝授されるのね…こんな理不尽な事なんてあつていいのかしら？」

「ましてや私たちの家は暗部として剣を磨き上げてきたのに、その娘の家はのうのうと宮司をやつて、剣術道場を開いてその剣を鈍らせ、錆付かせている…剣術は所詮どう言い繕つても戦場で生まれたもの。自己鍛練ではなく人殺しの手段に過ぎないもの」

「そんな剣術の奥義を伝授されるに相応しくない家の…しかも未熟な小娘に伝授されるなんてきつと篠ノ之柳応も望んでいない筈だわ。だから代わりに私たちが奥義を受け継いでいくの。本当の意味で剣の道に生きてきた家の私たちの手で、ね」

「だからおとなしく秘伝書を渡しなさいな。そうすればそつちの男二人共々楽に死なせてあげるわ」

「何かと思えばただのひがみじゃねえか…そんなんで命を狙われる身にもなつてみやがれつてんだ！ 大体彼女の…篠ノ之箒の命まで狙う必要がある！？」

「必要はあるわ。その娘が篠ノ之柳星の子孫…篠ノ之流を貶め、腐らせてきた家の人間というだけで十分よ。要するに己の生まれの不幸を、それとそんな娘に関わつてこの場に居る羽目になった己の運命を呪いなさい、つて所ね」

「ふざけるな！そんな性根の腐った人間に秘伝書を…ましてや滝捜査官や城さんにまで手を出させるか！」

「俺もその理由も、やり方も気に食わないな！」

「そういう事だ！生憎だが交渉は決裂だぜ！？」

「そう…ならば、今すぐここで三人共惨たらしく死になさい！楽には殺さないわよ！」

そう天音が言うと天音は刀を取出し鞘から抜き放ち、地慧は柄を伸ばした太刀…長巻を背後から取出し、人美は持っていたカバンから他節棍のように折り畳んでいた槍を組み立てて構え、三人揃って一斉に飛びかかってきた。

「茂！」

「はい！」

それに対して茂と和也は篁より前に出て守るような立ち塞がり、そのまま三対三の戦いが幕を開く。

「さすがにやるわね…貴方、本当にただの人間なのか聞いていいかしら？」

「さあな。そんな事、俺が知るか！」

茂は最前線に出て篁や和也の盾となるように天音の刀による斬撃を逸らし、地慧の長巻の攻めをいなし、人美の槍による突きを弾き、三人分の攻撃をことごとく他の二人に代わって防御する。

「おしゃべりしてる暇はないぜ！」

「こちらにはまだ二人いる事を忘れるな！」

そして和也と箒が盾となつて、いる隙に攻撃に専念し、天音、地慧、人美を責め立てる。

「そう簡単に行くかしら？」

しかし三姉妹は巧みに二人の攻撃を躲し反撃してくる。それを茂が盾となり防御し、再び隙が出来るのを伺う。それを幾度となく繰り返していく。

「クツ、このままじゃ埒があかないな…！」

刀を防ぎ長巻を逸らし槍を弾きながら茂は歯噛みする。敵はかなりの手練、しかも息の合った連携を仕掛けてきている。それに対してこちらは即席のものだ。どうしても連携では劣る。特に茂は三人分の攻撃の矢面に立ち続け、猛攻にさらされてきた為に既に身体の何ヶ所かに傷が出来ている。箒も息が上がってきている。このままではジリ貧だ。

「…止めだ！止め！こんなんじゃないつまで経つても終わらねえ！」

そう茂は叫ぶと刀や長巻、槍を思い切り蹴り飛ばす和也と箒を掴み大きく後に飛び退く、和也と箒は怪訝そうな表情を浮かべる。

「あら、諦めて渡す気になった？今さら遅いけど」

「誰がそんな事言った誰が！俺はな、お前らと違ってアメフト選手だったんだよ！武術なんて土俵で競って勝てる訳がねえ！だったらよ…ここは俺は俺の得意分野で…アメフトで勝負させて貰うぜ！」

「…貴方、頭大丈夫？」

「ああ、勿論。正気も正気さ」

あまりに予想の斜め上に行く茂の一言に三姉妹は呆れ果てて追撃を止め、恐怖のあまり気でも狂ったかとも言いたげな表情を浮かべながら代表して天音がツツコミを入れるが茂は不敵に笑ったままだ。そして今度は同じく茂の発言に啞然としていた和也に尋ねる。

「滝さん、確か小さい頃はアメリカで育ったって前に言っていましたよね？でしたら向こうで『フットボール』の時にQBクォーターバックやった事ありますか？」

「ん？ああ、まあ何回かやった事はあるが…」

「だったら、ちょっと…」

そして茂は和也に耳打ちをする。

「…なるほど！確かにそいつは『フットボール』だ！流石元主将！よくそんなプレイが思いついたもんだぜ！」

「ありがとございます。タイミング合わせる暇はありませんので一発勝負ですがここは一発ロングゲインを狙ってきましょう！」

「あ、あの…城さん…?」

そして未だに状況が理解出来ずに啞然としている筈が恐る恐る茂に声をかける。こちらにも気が狂ったんじゃないかとも言いたげな表情だ。

しかし茂…それに耳打ちされた和也は笑っている。まるで何かとても面白いイタズラを思いついたとでも言いたげな笑顔だ。

「なあ、篠ノ之さん。滝さんが合図したら思い切りあいづらの横を通り過ぎて全力で走ってくれないか?合図は滝さんが『hat』^{ハット}って言った瞬間で」

「で、ですが…」

「騙されたと思って信じてみねえか?それとも何か?ビビっちゃまったのか?大丈夫さ!こっちは『仮面ライダー』がついてるんだからな!」

「…分かりました。やってみます」

「の前に『ハドル』しないとな、ハドル」

そう言つて茂は二人に何やら説明を始める。三姉妹は最早呆れてツッコミを入れる気さえ起こらない。やがて相談が終わつたらしいので天音が口を開く。

「もう終わったかしら?命乞いの相談なら無駄よ?」

「悪いな、待たせて…それじゃ今から俺達のとつておきのプレイを

見せてやるぜ…驚き過ぎて目回すなよ!？」

そう茂が言つと和也は箒から風呂敷を受け取り、箒は和也から離れて和也とは水平になる位置へと移動し、茂は和也のやや離れた後ろに立つ。

そして茂は前に屈み込むように…片手の指で相撲の『仕切り』をす
るように体を支える体勢を取る。アメリカンフットボールで言うRランニング
グバツタフェンススライ
BやOLと呼ばれるポジションの選手がよく取る姿勢だ。

更に和也も風呂敷を持つとまるでQB…というよりQBそのものの
姿勢を取る。

最早絶句するしか出来ない三姉妹を尻目に和也は声を上げる。

「Set…」

「Hat!」

次の瞬間、箒と茂が全力で走り出し、和也は後ろを向いて風呂敷を
左手で自身の左へと走ってくる茂に向かって差し出し、茂と交差す
ると全力で右手にある茂みへと駆け込み、走り去っていく。

茂は差し出された風呂敷をアメリカンフットボールのボールのよう
に両手で受け取り…『ハンドオフ』されたような仕草をするとその
まま風呂敷を隠すように全身で抱え込みながら三姉妹へと全速力で
突っ込んでいく。

「正気!?!まあいいわ!おとなしく渡して貰うわよ!」

最早わけが分からなさ過ぎて放心状態になっていた三姉妹に茂が風呂敷を抱えて突っ込んでくると見るや慌てて武器を各自構える。

そして人美が槍で茂を突こうとするが…

「遅い！」

槍を構え切る前に姿勢を低くして突っ込んできた茂に為す術なく弾き飛ばされる。

「人美！？この！」

それを見るや地慧が長巻で斬り掛かるが、茂は上手く重心を動かして一旦左に行くと思せかけ即座に右に切り返す。混乱していた地慧はそれにあっさり引っ掛かり、攻撃を外す。そしてその横を通り抜けるついでに茂が放ったソバットを背中にまともに食らい、うつ伏せに倒れる。

「いい加減に！」

天音も刀を振り上げ斬り掛かるが、茂は抱えていた腕を解く。そこに風呂敷は…

「ない！？」

「引っ掛かったな、間抜けが！今ごろ風呂敷は滝さんが持ってつてるだろっよー！」

「…！？」

茂はしてやったりと笑う。そして天音はあの手渡しはフェイクであったと確信するが茂は止まらない。

「もう一ついい事教えてやるぜ… 武術はともかくアメフトのプロックならお前には絶対負けないぜ！」

そう茂は言つと左肘を突き上げるようにして天音の顎を打ち抜く。

「ざまあねえな！一昨日来やがれってんだ！行こう、篠ノ之さん！」

それだけ三姉妹に言い捨てると篤と合流して茂は山道を全速力で駆け抜けていった。

「どつやら上手くいったらしいな… ったく、最初は何言い出すかと思っただぜ…」

まんまと茂みに入り敵から逃れた滝和也は森の中を歩いていた。今のところ敵がこちらを追ってくる気配はない。どつやら敵は城茂のプレイに引つ掛かってくれたらしい。あとはこちらも茂と打ち合わせた『アサインメント』通りに動くだけだ。篠ノ之篤の方は茂がついている手筈になっているので特に心配しなくても大丈夫だろう。

「こんな事なら通信機持ち込んでおくんだっただな。そうすりゃ色々楽だったんだけどよ」

そう呟きながらも森の中を暫く歩き回っていた和也だが、やがて殺気を感じて飛び退く。すると何かが煌めき、先程まで和也が立っていた場所の近くにあった木が綺麗に袈裟懸けに斬られる。

「っと…そうこうしてる内にもうお出ましかよ。どうだい、俺たちのプレイは？即席のチームにしちゃ中々のものだっただろ？」

そして和也は体勢を立て直すと、斬撃を放った女…篠ノ之天音に向き直る。妹の地慧と人美も一緒だ。皆手にそれぞれ得物を持っている。

「さっきは油断したわ…確かにお見事だったわ」

「仮にもプロが油断したのが悪いのさ。お前さん達も随分と甘っちょろいんだな。それこそ先祖様が…篠ノ之柳応が泣いてるぜ」

「その減らず口もここまでよ…おとなしく秘伝書を渡して貰おうかしら？嫌なら嫌で構わないわよ？ここで始末すればいいだけの話だもの」

「どうせ渡すと言ってもそうするクセによ…それにそんな事言われども『無い袖は振れない』ってところだしな」

しかし和也は武器を構える三姉妹に対して不敵に笑って答える。そして三姉妹は漸く和也が風呂敷を…秘伝書を持っていない事に気付く。

「…言いなさい、一体何処に隠したのかしら？」

「隠す？何の事やら。その様子じゃ風呂敷もとい秘伝書ならお前たちがまんまと正面から通しちまつたみたいじゃねえか」

「まさか！？」

「当たりか。どうせ茂の奴に俺が持つてるとか言われたんだろ？間抜けが。敵の言うことあつさり信じる奴が武術家なんて金輪際乗るんじゃないよ」

そう言つて和也はホルスターから弾倉下部に電磁ナイフが付いた大型拳銃を抜き放つ。安全装置は掛けたままだしそもそも弾は抜いてある。

和也はちゃんと風呂敷を茂に『ハンドオフ』していた。そしてわざと他の二人とは別行動を取るふりをして走り出した。三姉妹がこちらを追つてくると見越して茂と箒が遠くに逃げられるように森の中を逃げ回りこちらに目を引き寄せていたがまんまと引つ掛かったようだ。

後は茂と箒が下山するまで三人の相手をするだけだ。別に倒す必要はない。電磁ナイフ付き拳銃を取り出したのは流石に無手で使い手三人と戦うのは少々キツイからだ。

しかし三姉妹はそれを聞いても慌てる様子はない。

「そう…ならこつちもとっておきを見せてあげるわ。使つつもりは全く無かつただけどね」

そう天音が言うと三姉妹はコートを取り払う。

「…ISスーツ!?まさかお前ら…!」

「そのまさかよ。私達はIS操縦者よ…『亡国機業』のね。つまり貴方たちの予想は当たってたって訳ね」

そう軍特殊部隊風のプロテクターに似た黒いISスーツを着用した三姉妹を代表して天音が笑ってみせる。そして三人が左手に嵌めた指輪をかざすとそれが『待機形態』であったのが瞬時に黒いISが展開し、三姉妹にそれぞれ装着される。

「そういう訳で貴方に構っている暇はないの。じゃあ後でゆっくりと痛み付けてあげるからせいぜい楽しみにしてなさい」

「待ちやがれ!…うおっ!?!」

慌てて和也が止めようとするが既に三人はスラスターを点火しており、その余波で和也は大きく吹き飛ばされる。そしてそのまま3機のISは茂と篤が逃げた方向へとスラスターを噴かして飛び立っていった。

「茂や篤なら大丈夫だと思っが嫌な予感がしやがる…逃がすかよ!」

それに何となく胸騒ぎを覚えながら和也もまた三姉妹を追って茂と篤が逃げた方向へと走りだした。

城茂と篠ノ之箒は走り回った末に滝の前にまで逃げ延びていた。今は息を整えるために少し休憩といった所だ。

「この様子じゃ連中は俺の言葉を信じて滝さんを追い掛けてっらしいな。ちゃんと見れば違和感に気付くだろうによ」

そう言つて茂はシャツの中から風呂敷を取出し、背中から背負つていた『紅暁』を下ろし、笑つてみせる。

あの時『ハンドオフ』された茂はシャツの下に風呂敷を隠し、手のなかを空にしてみせた。よく見ればシャツが膨らんでいると分かっただろうが混乱や動揺、茂の言葉が重なつて見事に引っ掛かったよ
うだ。

「しかし、そんな作戦がよく思い浮かびましたね」

「さつき滝さんが言つた通り俺はこれでも城南大学のアメリカンフットボール部じゃ主将務めてたしさ。それにこういふ感じで敵を出し抜く事には慣れてるからね。しかし連中のあの驚きようと言つたら…」

感心したように呟く箒に対して茂は笑つて答える。

事実茂はそれまでの電気技がまともに通用しなかつた強敵『デルザ

「軍団」に対しては、『超電子ダイナモ』を埋め込まれて正面からデルザー軍団に対抗出来るだけの力を手に入れるまでは敵の内部対立を利用して上手く立ち回る事でどうにか危地を切り抜けていた。その過程でパートナーの『電波人間タツクル』：岬ユリ子を喪ってしまったが。

だからこそ先程のような単純ながら中々効果的な作戦が思い浮かんだ。とはいえもし敵が構わず突っ込んできていたり冷静に見極めたりしていたら確実に失敗に終わっていたと茂は自覚している。どちらにも出来ないと踏んだからこそ作戦を実行したのだが。

「やはり…城さんは強いですね…私なんかより、ずっと」

それを見ていた篤は茂に対してというより自分自身に対して言うように呟く。

「篠ノ之さん、そんな事は…」

「分かってます」

それを否定しようとする茂を篤は遮る。

「こんな事を言うのは駄目だとも、城さんだつてこんな事聞きたくないって事も、分かってます」

「けど、私は城さんや滝捜査官みたいに強くなりたいって思うんです。力を使えなくとも、使わなくとも…ISに乗れなくとも、それでも最後の最後まで諦めないで戦い抜けるお二人みたいな強さが」

「それに比べて、私は弱くて、脆いです。自分より剣道が強かった

一夏に嫉妬して、一夏と同じく専用機を持った他の皆に嫉妬して…自分にも専用機があつたなら、なんていつも考えたりもして…努力も、工夫も、何よりそれでも専用機が無いなら無いなりに足掻いて食らい付いていこうなんて気概すら無くて」

「そして、城さんはお気付きでしょうけど私は姉の篠ノ之束に…私と一夏を引き裂いて、嫌っていた筈の姉から力を…『紅椿』をねだり、得ました。努力の結果でも、工夫の成果でもない、ただ姉から与えられただけの力です」

「そして私は調子に乗って、一夏を危険な目に遭わせて、他の皆を逆に見下して、一人で意気がつて…正直、力に溺れていました。だから、あの女の…『モッピー』の言葉が嫌という程思い当たって、城さんや立花さん、そして沼田五郎さんや岬ユリ子さんの前である事を口走ってしまったて…」

「だから、分かっているても…城さんがどれだけ辛い思いをしてきて、どんなに苦しい思いをしているのか理解していても、滝捜査官がそれだけの苦勞をされていると頭では分かっているても、改造人間という力に溺れない城さんを、ISに乗れなくとも頑張れる滝捜査官を…そしてその強さを、羨ましく思う事があります。今も、思っています」

「…私は、やっぱり私が好きになれません。一夏について当たってしまふ私も、皆に嫉妬して、見下していた私も、他の人をただ羨んでしまふ私も…何よりそんな私を大切にしてくれている人が沢山いて…恵まれていて…それでもどこか自分を嫌っている弱い私が、弱いと思っっている私が、一番嫌いです」

「…すいません、城さん。貴方にこんな事を話してしまつて。こん

な事だから、私はいつまで経っても城さんや滝捜査官、立花さん、
一夏…他の皆より、弱いんですよね…」

「篠ノ之さん…」

茂には篝の言葉を黙って聞くより他に無かった。きっとあの時自分がいかに大切にされているか理解しても、いやだからこそかつての自分に…力に溺れ、自分や周りを見失う自分に嫌悪感が強まったのだろう。そして自身と似たような経緯で力を得ながらそれに溺れる事の無かった茂が、力がなくとも戦い抜いてきた和也が羨ましくなったのだろう。そして、その背景も考えないでまたそんな事を考える自分にまた嫌悪感を…。

このままでは悪循環だ。本人もそれを分かっているけど止められないだろう。それでは篝本人にとっても、周囲にとっても悲し過ぎる。そして茂が再び口を開こうとするが…

「だったら、今すぐ死ねばいいじゃない」

「この声は！？まさか…！？」

そこに女の…篠ノ之天音の聲が上から降ってくる。やがて篠ノ之三姉妹が装着した黒いISが茂と篝の前に降下してくる。十日前に茂と篝が交戦した『亡国機業』のISと同型らしきものだ。

「そうすれば貴方は悩まなくて済むし、周りにも迷惑は掛からないもの。もつとも、貴女にそんな気概はないでしょうねえ…貴女は弱いもの、そんな事を言えば誰かが慰めて、止めてくれるとか期待してるんだものね…この卑怯者、貴女も篠ノ之の名を持つのなら少しは恥つてものを知りなさい」

「お前ら『亡国機業』の…滝さんをどうした!？」

「あら、貴方いたの?おとなしく逃げてればそんな余計なお荷物背負わなくて良かったのに…ま、逃げてても貴方にも借りがあるから逃がす気はないけどね」

茂は箒を庇うように前に立ちはだかり三姉妹と対峙する。

「篠ノ之さん、話は後だ。今はまずこいつらを片付けよう…いけるね?」

「…はい。『亡国機業』を野放しには出来ません!」

「その意気だ…行くぜ!エレクトロファイヤー!」

そして茂は黒い手袋を外してコイルが巻かれた両手を曝すと地面に当て、三姉妹のISに向けて高圧電流を放つ。

その高圧電流がISに当たり、火花が散り三姉妹の視界を一時的に隠すが、やがて視界が戻る。

「そっちの方はともかく…驚いたわ、まさか貴方があの『マスクドライダー』の一人だったなんてね」

三姉妹の視界の先には専用機である『紅椿』を装着した箒と、赤いカブトムシに似た改造人間…『電気人間』の姿へと変わった茂がいた。

『紅椿』を装着した篠ノ之箒と『電気人間』の姿となった城茂は黒いISを装着した篠ノ之天音・地慧・人美の三姉妹はめいめい交戦していた。

「電…チヨップ！」

茂は高圧電流を纏った手刀を天音に対して放つ。天音はこれを近接ブレードで受け止めるが、そのパワーに加えて流される高圧電流によりシールドが削られる。

「やるわね…！」

「まだ安心するのは早いぜ？電ショック！」

更に茂は天音に対して打撃と共に電流を流し込み追撃すると、押し込んでいく。

一方で箒は地慧と人美の二人を相手にしていた。

「やらせるか！」

箒は手に持った日本刀型の武器『空裂』を振るいエネルギー刃を発射して二人を牽制するとそのまま『雨月』を持ち地慧へとスラスト

―を噴かして突撃していく。

「この！たかが一人に！」

地慧は長巻に似た長めの近接ブレードを持ち箒に応戦するが、『紅椿』の機動性と『雨月』から放たれるレーザーにより一方的に押しまくられる。

「調子に…乗るな！」

そこに人美が槍を持ち箒へと突撃していく。しかし箒はそれを回避して人美に一撃をくれてやる。地上では茂が天音相手に優勢に戦っている。

(これなら…)

「これなら勝てる、とでも思ってるのかしら？」

「!?!」

しかし天音はどうかして茂を引き離し距離を取り、箒に言い放つ。そして一瞬動揺した箒を見るやその隙に地慧と人美も一旦離れて天音の横に並び立つ。

「貴女の悪い癖ね。貴女の力ではないのに…こうして戦えているのは『マスクライダー』とそのISの性能のお陰だと言うのに自身自身の力と勘違いして…貴女自身は何一つ貢献していないと言うのに。だから貴女はいつまで経っても力に溺れて、弱いままなのよ」

「ぐっ…!」

「篠ノ之さん！こいつらの言う事に耳を貸すな！こいつらは君を動揺させようとしているだけだ！」

「あら？私は事実を指摘しまでよ？だから貴女が『マスクドライダー』が居なくなればいかに弱い存在であるかをこれから証明してあげるわ！」

「好き勝手言いやがって！そんな事言つてると痛い目みるぜ！」

「それはこちらの台詞よ、『マスクドライダー』。今まで散々暴れてきたようだけど私たちは違う：ISが本気を出せば貴方に勝ち目など無い事を教えてあげる。貴方のデータは既に解析済みなのだから」

「後で吠え面かいても知らないぜ？食らえ！電キック！」

そう茂は言いながら飛び上がり、空中で前方宙返りをしながら電気エネルギーを集中させ、全身を赤熱させて飛び蹴りを天音に向けて放つ。

「言ったでしょ？貴方のデータは解析済みだと…地慧！」

しかし天音は余裕の表情を浮かべたままだ。そして地慧が天音の前に出るとパッケージらしき四枚の分厚い実体シールドとエネルギーシールドが地慧の前面に展開される。

「それがどうした！」

しかし構わず茂は地慧に対して蹴り込み、電気エネルギーを流して

ダメージを与え…

「それはこちらの台詞よ？『マスクドライダー』」

「!？」

た筈なのだが地慧はダメージを受けた様子が無い。そもそも電流が流れていない。逆に蹴りを弾き飛ばされ空中で大きく体勢を崩す茂に天音は渾身の斬撃を、人美は必殺の突きを浴びせる。防御出来ない茂はどちらもまともに食らい大きく後退し、どうにか着地する。

「城さん!？」

「これで分かったでしょう？ISが本気を出せば貴方に勝ち目など無い、と」

「貴方のさっきの蹴り…確か『電キック』とか言ってたわね…が高圧電流を流しながら蹴りを放つ技だとも解析済みよ」

「そしてこのパッケージ…『イージス改』にかかれはこの通りよ。つまり今の私達にとって貴方の『電キック』などカス、なのよ」

「てめえら…!」

そう三姉妹が茂を嘲るように茂と箒に言い放つ。しかし茂は諦めない。

「ヘッ…だったら…効かせてやるまでよ!」

そう言うと今度は『イージス改』の展開を解除している最中の地慧

へと挑みかかる。展開を解除し終えた直後に茂は地慧を抱え上げる
と滝壺へと放り投げ、着水したと見るや水辺に手を置く。

「これならどうだ!」

「甘いわね!人美!」

しかし茂が放った電撃:『水中エレクトロファイヤー』は人美が呼び出したパッケージから発射され、茂近くの浅瀬に突き刺さった無数の金属製の杭に流れ込み、地慧には届かない。避雷針と同じ原理だ。

「万事休す、ね」

更に人美は杭を茂に向けて連射し、茂に反撃の間も許さずに攻撃する。

「そんな…城さんの…」

「よそ見は…禁物よ!」

呆然とそれを見ていた箒に天音がまともに一太刀入れる。そして体勢を箒が立て直すまえに猛攻を加えて一方的に攻め立てる。

「これで分かったでしょう?『マスクドライダー』が最早頼りにならないと…そしてこの状況になっても『マスクドライダー』に頼って、助けようともしなかつた貴女自身の弱さも」

「!?!」

「だって、そうでしょう？ 貴女はいつでも『マスクドライバー』を助ける機会があったのに…ましてや貴女にはその第4世代機という姉にねだって手に入れた汚いけれど圧倒的な力があるのに…貴女は彼を助けようとしなかった」

「当然よね。貴女は臆病で、卑屈で、汚くて、恥知らずで…何よりも弱い卑怯者だもの。『マスクドライバー』に頼り、姉に頼り、他の皆に頼り、専用機に頼り…貴女自身は何もしないで今まで戦い抜いてきたんだものね。そうすれば貴女は苦しい思いも、辛い思いもしなくていいし、負けたら他の誰かの、専用機のせい出来る。そのクセ勝つたら自分の力と勘違いして調子に乗る…そんな弱い貴女に…貴女自身に何も出来る筈がないもの」

「現に貴女はその専用機を使っていながらこうして私に圧倒されている…分かったでしょう？これが貴女自身の本当の強さなの。その専用機にも、篠ノ之流の継承にも相応しくない、弱く愚かな卑怯者なの。ほら、早く言い訳を考えなさい？次は何のせいにするの？貴女に剣術を…戦う術を叩き込んでくれた篠ノ之柳韻？今も貴女なんかの為に愚痴一つ言わずに戦ってる『マスクドライバー』？妹の為に丹精込めて専用機を作ってくれた篠ノ之束？性能では私達のよりずっと上の第4世代機であるその専用機？ほら、いつもみたいに…言い訳してみなさいよ…！」

そこに地慧まで加わり最早いたぶるように一方的に攻め立てる。箒は答えない。答えられない。

(私は…弱い…だから…)

抵抗する気力などあるはずもなかった。ましてや単一仕様能力を^{ワンオフ・アビリティ}発動させる事など、出来よう筈も無かった。

単一仕様能力…『絢爛舞踏』が発動出来ない『紅椿』の燃費は対になる『白式』に並んで最悪だ。やがてシールドエネルギーが削り切られて『絶対防御』を発動させながら地面に落下し、待機形態に戻る。箒には立ち上がる気力すら無い。

「他愛もない。貴女にその専用機は不釣り合い過ぎるわ。相応しくない貴女の代わりに私達が有効活用して上げるから安心して…地獄に落ちなさい！人美！」

そして茂を攻撃していた人美が箒に杭を連射する。その杭が箒に突き刺さ…

「…がはっ!？」

らない。当たる前に何かが箒の目の前に立ちはだかりその杭を全て受けたからだ。それは…

「…大丈夫かい?…篠ノ之さん…」

「…城さん!？」

城茂だった。赤いカブトムシに似た姿をした茂が箒の盾となっていた。その肉体の至る所を杭が突き刺さり、貫通し、そこから大量の血を流し、元々赤いその身体を更に血で赤く染めながらも、茂は膝すらつかずに立ちはだかっていた。

「…駄目じゃないか…連中の言う事聞いちゃ…お陰で…身体が…勝手に動いちゃった…俺も…ヤキが…」

「喋らないで下さい城さん！」

「なに…心配ご無用…こんなへボつちい…杭なんぞで…くたばるほど…ヤワじゃねえ…さ…」

喋る度にクラッシャーから血を吐き出しながらも茂はいつもの調子で箒に語り掛ける。

「さすがね、けどそれじゃあこれに抵抗する力も残ってないでしょう？」

そう天音は嘲笑するとパッケージを呼び出し茂の全身をワイヤーで縛り上げる。

「へッ…食らえ…電…タッチ…」

「無駄よ、そんなもの効かない…わ！」

茂はワイヤーごしに電流を流すが天音は気にせずスラストを噴かして飛び上がり、拘束した茂を何回も引き摺り、叩きつけた後、そのまま滝壺へと叩き込む。そして地慧と人美が天音の背後に立つとケーブルらしきものが三人を接続する。

「貴方、確か電気人間だったわねえ…だったら私達がたっぷりと高圧電流をご馳走してあげるわ。そうすれば貴方の発電機関も反応して一杯発電してくれるでしょうねえ…」

「ついでに一つ良い事教えてあげるわ。その杭は一定以上の高圧電流が流れると爆発するの。大きければ大きい程盛大に、ね」

すると茂に三姉妹から高圧電流が流される。そして茂の体に突き刺さった杭が反応して、巨大な水柱が立つ程の大爆発が起こる。爆風が消えると、茂の姿はそこに無かった。

「城…さん…」

「あらあら、遂に頼みの綱の『マスクドライダー』さんが木っ端微塵になっちゃったわねえ…貴女が弱いから、貴女のせいでああなったのよ？言い訳のしようがないでしょう？…それじゃ、次は貴女よ？今まで散々こけにしてくれちゃって…楽には殺さないわ！」

放心状態の箒の近くに降り立った天音は箒から待機形態の『紅椿』を取り上げると、思い切り箒を張り飛ばす。箒は為す術なく吹っ飛ばされる。箒は呆然としたままだ。

「抵抗しようとする気力もないか…当然よね、貴女は今まで他人に縋って生きてきたんだもの。縋る他人がいなければ生きていく事も、生きている価値もないものね…さて、次はどう…」

「箒！」

ゆっくりと箒に歩み寄る天音だが、横からの射撃と電磁ナイフがそれを妨害し、天音の前に立ち塞がる。

滝和也だ。和也は箒に向き直ると声を張り上げる。

「しっかりしろ！茂は！？」

「…」

「…クソっ！この野郎！」

「無駄よ」

黙りこくつたままの箒を見て状況を悟った和也は怒りの咆哮を上げて天音に挑みかかるが、近接ブレードの柄頭で思い切り殴られた拳げ句近くの気へと投げつけられ、叩きつけられる。

「…がつ…！？」

その衝撃をまともに受けた和也は意識を闇に手放す。箒は無反応のままだ。

「全く、手間掛けさせてくれちゃって…どんなに意気がろうとも所詮はISに乗れない男、こうなる事は分かっていたというのに」

「『マスクライダー』も同じね。特にあの男…『城さん』とか言うのはその典型ね。弱いクセに意気がって、強がり言って…だからあんな無様な死に方をしたのよ。ああも弱いと笑えてくるわ。今までやられていたのも油断があったからよ。だってあいつ…同情したくなるくらい弱いじゃない」

箒の身体がピクリと動く。

「あの男もあの男よ。生身でISも使えないクセに…どうしようもなく弱いクセに意気がって篠ノ之箒の前に飛び出して…あんな情けない姿を曝している。本当に男って馬鹿で、弱いよね…弱いなら弱いで分を弁えていればこんな事には…」

「…黙れ」

それまで沈黙していた箒が立ち上がり、冷たく言い放つ。表情は伺えないが、怒りに身体が震えている。

「お前達が私の事を何と言おうが構わない…だが城さんや滝捜査官を侮辱する事だけは…許さない」

「あら？私は事実を言ったままでよ？弱いからあんな無様な死に方を…」

「…黙れ！」

箒は天音を一喝する。その剣幕に天音が思わずたじろぐ。そして箒は近くに置いてある刀を…『紅暁』を抜き放ち、構えて続ける。

「言わせない…私の為に二度もボロボロになって戦ってくれた城さんを…私の為に生身でお前達に挑みかかった滝捜査官を…二人の事を何も知らないお前達に侮辱など…弱いなどは、絶対に言わせない！！」

「なら、どうするのかしら？」

「篠ノ之箒…参る！！」

天音の質問には答えずに箒は刀を構えて何の迷いも躊躇いもなく踏み込んで斬りかかる。その剛剣に思わず体勢を崩す天音だが、

「調子に…乗らないで！」

近接ブレードで防ぐとタックルをかけて箒を弾き飛ばす。

「これで少しは…！」

「そんなものか、お前の強さとやらは…城さんや滝捜査官は…こんなものではないぞ！」

しかし箒は即座に立ち上がり再び斬り掛かる。

そこに天音だけでなく地慧と人美も加わり、箒を放り投げ、弾き飛ばし、叩き伏せ、吹っ飛ばすが箒は何度も何度も怯まずに立ち上がり挑みかかる。やがて三姉妹の表情に焦りや混乱の色が見え始める。

「何よ…何なのよ！弱いクセに…ISもないクセに何でそんなに立ち上がったって戦おうとするのよ！？」

天音が思い切り箒を吹き飛ばして罵るように叫ぶ。流石にダメージを受け過ぎたのか箒の足元は覚束ない。服は一部破け、擦り傷や切り傷が至る所に出来ている。しかし箒は尚も立ち上がるうとする。そして、言い放つ。

「確かに私は…弱いさ…だから一夏に当たって…皆に嫉妬して…姉にねだって…滝捜査官や城さんに迷惑をかけて…私は、お前達の言う通り、弱い」

「だが私には…こんな私を大切に思ってくれている一夏がいる」

「…こんな私を心配してくれている皆がいる」

「…こんな私の為に身体を張って、命すら懸けて戦ってくれた滝捜査官や立花さん…そして城さんが…いる…」

「だったら私は…その人達の為にも生き残らなければならない。そして…負けられない…その人達の為にも！私を信じて！生きる価値があると思ってくれている人の為にも！私はお前達に負けられないんだ！」

「確かに私は汚くて！卑屈で！卑怯で！恥知らずで…弱い！だが力に飲まれなかった城さんのより…生身でも諦めない滝捜査官より…誰より弱い私は…力が無くとも！どんなに弱くとも！力が無い者として！弱者として！最後の最後まで足掻き続けるのが筋と言つものだ！！」

「だから私はお前達には負けられない！滝捜査官を、そして城さんを侮辱し！弱いと言い放つたお前達だけには負けられないんだ！！」

そこまで言つて限界が来たのか箒は地面に膝をつく。限界だったようだ。天音は黙っていたが、やがて嘲笑するように言い放つ。

「…高説どうも。けどそれもここで終わりよ？だって貴女はもう…死ぬんだから！」

そう言つて近接ブレードを持って箒に歩み寄ろうとするが、奇妙な音に立ち止まり、周囲を見渡す。

「口笛！？一体何処から！？」

口笛の音だ。女四人しかいない筈のこの場から明らかに違う誰かが吹いている口笛の音が聞こえてくる。

「…ええい！ままよ！」

しかし天音は気を取り直しスラスターを噴かして箒に突撃し、近接ブレードを振り下ろす……

「何！？」

した所を割って入った男に真剣白刃取りされる。その腕にはコイルが巻かれている。そしてその腕から電流が流れると同時に天音は蹴り飛ばされる。

そして男は箒に向き直る。

「大丈夫……かい？」

「……城さん！？」

そこには全身が血で真っ赤に染まり、至る所に傷がありながらも濃厚そうな笑顔を浮かべて右手を箒に差し出す城茂が立っていた。

「何故だ……何故生きている！？」

「……そんな事、俺が……知るか！」

驚愕する篠ノ之三姉妹を切り捨てる。城茂は篠ノ之箒に語り掛ける。

「そんな…幽霊が出たって言いたげな目で見ないでくれよ…箒さん…こつ見えて…意外と繊細なんだ…」

目の前で起きた事態に啞然としている箒に構わず茂はいつものように続ける。

「おつと…失敬…こんな手じゃ握った瞬間に…黒焦げだな…俺もヤキが回ったな…」

「それとも…呼び方…かい？いやさ…篠ノ之さんじゃややこしいからさ…だから俺も…茂でいい…正直…そっちの方がしっくりくるしさ…」

「そつじゃ…」

「なあ、箒さん…強くなりたいつて、思った事ないか？」

箒を遮るように茂が口を開く。

「俺は…あるね。いや、今も…いつも、いつまでも…俺は強くなりたいと…もっと、もっと強くなりたいと思ってる…」

「だから、五郎と…沼田五郎とこの山で馬鹿やって…いつも喧嘩して、やっぱり馬鹿やって…一緒に強くなるうと色々やってきた…」

「だから、ユリ子と…岬ユリ子とブラックサタンと戦って…いつも意地張って…喧嘩して…そしてブラックサタンを倒して…一緒に平

和な世界にして…一緒に平和な世界を見たいと…頑張ってきた…」

「そして、五郎が…ブラックサタンに殺されたら…身体を連中に差し出して改造人間になって…ユリ子が…デルザーから俺を守って死んだら…一分したら爆発する『超電子ダイナモ』を自分から埋め込んでもらって…力を…得てきた…」

「そうさ…俺は…弱いんだ…弱いから…五郎を死なせ…ユリ子を死なせ…改造人間なんて汚い力を手に入れ…超電子ダイナモなんて物騒な代物身体に埋め込んで…ただ誰かから与えられた力で戦い抜いてきた…卑怯者なんだ…」

「でも…いや、だからこそ…俺は…もっと強くなりたいんだ…五郎の分も…ユリ子の分も…もっと強くなって…改造人間の力にも…超電子ダイナモにも負けないくらい…飲まれないくらい…押さえ込めるくらい…もっと強くなって…」

「…そして五郎や…ユリ子に…死んでいった二人に見せてやれなかった…平和な世界を…君や…君の想い人…君の大切な人達に…見せてやれるくらい…もっと強く…強くなって…」

「ヘッ…間抜けだろ…俺が強くなりたいって思う理由は…聞いたように…そんな個人的な…未練タラタラな…周りから見りゃクソ下らない理由さ…」

「けど…約束する…俺は弱いけど…絶対に強くなる…五郎の分も…ユリ子の分も…君を…君が大切に思っている人たちを…守って…平和な世界にして…見せられるくらいに…それ以上に…もっと…もっと強く…強くなってみせる…」

「だから君と一緒に…戦わせちゃ…くれないか…？」

「城…茂…さん…」

箒は暫く沈黙するが、やがて再び口を開く。

「もう一度…お聞きします…どうして私に…そうまでしてくれるんですか？」

「そんな事…いや、多分知ってるな…」

「君は沼田五郎に」

何言ってるやがる…もっと他にいるだろうが！

「 輝子ちゃん 」

ちょっとーもっとそっくりなのがここにいないじゃない！

「 そう、だな 君は何より俺に 昔の、そして今の 意地っ張りで、

素直になれなくて、強くなりたかって思ってる。この俺、城茂に似てるんだ。」

「だから俺がそう思ったから、なのかもしれないな。」

「…ありがとうございます、茂さん。」

箒は茂にそう言つと刀を杖代わりにして立ち上がる。

「私でよければ…こんな弱い私でよければ…一緒に戦つて…いえ、戦わせて下さい！」

「ありがとうございます…箒さん。」

そして茂と箒は顔を見合せ笑い合う。

「ふん！強がりをしてんな事を言った所で…」

「…ごちゃごちゃうるせえぞ三下共！」

天音が何か言おうとした所をそれまでとは一変して茂が荒々しく遮る。

「人様が気絶してた間に彼女を散々可愛がってくれたみてえじゃねえかお前ら…何が弱いだ！笑わせんじゃねえ！寄ってたかって苛めて！『亡国機業』に媚売って力手に入れたお前らの方がよっぽど弱い卑怯者じゃねえか！」

「何より彼女には…篠ノ之箒には織斑一夏って子や友人達…それにそれを見込んでる俺の先輩後輩達…何より俺にとっちゃ生きていて貰う価値があるんだ！それをお前らに…お前ら如きにやらせるかよ！」

「覚悟しろよ悪党共…安心しな、殺しはしねえ…殺す価値もねえからな…だがたつぷりとお仕置きしてやるからよ！」

「つ、強がりや！そんなボロボロの身体で！そんなISの無い足手まといが居て！何が出来るって言うのよ！？」

「…そうかな？油断大敵ってね！」

天音が茂に叫んだ瞬間、何者かが金と銀の鈴がついた紐…待機形態の『紅椿』をひったくり、箒へと投げ渡し、そのまま茂の横へと立つ。

「どうだい？俺の『インターセプト』はよ？」

「普通はパズプレーの時しかないんですけどね…お見事です、滝さん」

滝和也だ。どうやら気が付いたらしい。

「何よ！あなた達は一体何なのよ！？」

最早悲鳴に近い天音の叫びに対して茂、箒、和也は不敵に笑って答える。

「『『そんな事、俺（私）が知るか！』』」

そして茂は一步前に進み出ると前を見据える。

行くぜ、悪党共

お前らには ブラックサタンやデルザー軍団のように人々を苦しめるお前ら『亡国機業』には絶対に篠ノ之箒も その想い人である織斑一夏にも 誰一人やらせない

そしてお前らをぶっ倒して、平和な世界を 岬ユリ子が俺と一緒に見たかった世界を彼女達に見せてやるまで 俺は、負けねえ 死なねえ もっともっと ずっと どこまでも 強くなる

そうさ、それが俺の正義さ 生き様さ 汚い力を得た 弱い男の生き様だ そしてこれから目を見開いてよく見やがれ、全ての悪人共

これが俺、城茂 そして俺達 仮面ライダーの正義だ！！

茂は両腕を右斜め上へと突き出し、そのまま円を描くようにして左斜め上まで持っていく。箒や和也が前に見た、『電気人間』に変わる為のスイッチを入れる動作だ。

「変身」

五郎、そいつは一体何なんだ？

いや、やっぱり山籠もりとかするならスローガンってか合言葉みたいなのがあった方がいいと思ってな。

なるほど、だからか。確かに俺たちにふさわしいな 俺たちはもっと、もっと強くなる だから英語で『もっと強く』 つまり合言葉は

「 ストロングー (STRONGER) ！！」

そして両手を擦り合わせると茂の身体にスパークが走りその肉体を

赤いカブトムシを模した改造人間：『電気人間』へと姿を変える。
同時に箒もISを展開し、装甲を全身に纏う。

同時に三姉妹が茂に挑みかかるが…

「天が呼ぶ！」

天音は茂に蹴り飛ばされる。

「地が呼ぶ！」

地慧は茂に殴り飛ばされる。

「人が呼ぶ！」

人美は茂に投げ飛ばされる。

「悪を倒せと俺を呼ぶ！」

苦し紛れに放った杭は茂と箒に全て叩き落とされる。

「聞け！悪人共！俺は正義の戦士！」

「仮面ライダー ストロングー!!!」

名乗り終えるとその花卉に多くの想いを託され、戦場に気高く、美しく咲く一輪の紅い椿：『紅椿』を装着した篠ノ之箒と、

その身に正義と魂と二人の生きた証を背負い、闇を燦然と切り裂き、悪を苛烈に撃ち据える一筋の赤い雷光：7番目の仮面ライダー『仮面ライダー ストロングー』は目の前の悪を倒すべく並んで挑みかかった。

仮面ライダー ストロングーは真つ先に篠ノ之天音と地慧に対して両足で纏めて飛び蹴りを見舞う。

「ダブルキック！」

それを受けてたたらを踏んだ二人に仮面ライダー ストロングーは突

き蹴りを入れて追撃する。

「調子に乗って！」

地慧はとつさに『イージス改』を展開して天音の前に出る。

「これで貴方も…！」

「へッ！お望み通りにしてやるぜ…電パンチ！」

それに対して仮面ライダーストロンガーは電撃を纏った右ストレートを放つが、『イージス改』に防がれる。

「無駄よ！少しは学習しなさい！」

「何のまだまだ！ウルトラパンチ！」

しかし仮面ライダーストロンガーは怯まずに空中で回転して勢いを乗せたパンチを再び放つ。

「スクリューキック！」

更に仮面ライダーストロンガーは飛び上がり空中で月面宙返りをした後、飛び蹴りを放つ。

「反転キック！」

蹴りの反動で仮面ライダーストロンガーは飛び上がると両足を揃えてもう一撃加える。一ヶ所に攻撃を集中させた事で、実体シールドの表面部分が一部欠損する。

「これで締めだ！ストロンガー電キック！」

そして欠けた部分に仮面ライダーストロンガーが先ほどと同じように電気エネルギーを集中させながら飛び蹴りを放つと今度は『イージス改』が嫌な音と火花を飛び散らしながら大破し、やむを得ず地慧はパツケージを排除する。

「そんな馬鹿な!？」

「ケツ、何が電キックなどカスだな、だよ…ただシールドの表面に絶縁体張りつけてただけじゃねえか…それじゃ、たっぷりとお返ししてやるぜ！」

そのまま仮面ライダーストロンガーは地慧に猛攻をかけ、地慧を防戦一方に追い込む。

一方で篠ノ之箒は篠ノ之人美を相手に攻勢に出ていた。

「この！リーチなら槍のこちらの方が有利な筈なのに…！」

人美は槍を使い日本刀…『雨月』を持った箒を突くが、それをあっさり箒に捌かれ、逆に斬撃を浴びせられる。

『槍止め』は剣術の中で最も難しいとされる事だ。余程の技量差が無いとまず出来ない。しかも箒は『雨月』のレーザーを先程から一切使っていない。つまり純粋な剣技で人美を攻め立てているのだ。

「分からないか？そんな事を言っている時点で…槍の優位に胡坐をかいていた時点で…お前は私より弱いという事だ！」

そう箒は焦る人美に冷たく言い放つと箒は渾身の斬撃を浴びせ、地上へと叩き落とす。

「言うわね…けど私を忘れていたわね！」

そこに天音が不意打ち気味に一撃入れ、『雨月』を叩き落とす。そして『空裂』を呼び出させる間もなく一気に攻勢に出る。

「武器が無ければ第4世代機といえども…！」

「浅はか、だな」

しかし箒は『絢爛舞踏』を発動させると背部『展開装甲』を切り離して交差させる形で斬撃を受け止めさせる。その隙に箒は踏み込んで掌底、手刀、裏拳、足刀、膝蹴りを天音に叩き込んで締めとばかりに払い腰で仰向けにするとそのまま踏みつけてスラスタを噴かして一瞬で地面に叩き付ける。

そのまま地面に踏みつけられる形となった天音は箒を罵倒する。

「この卑怯者！そうやって勝った気でいられるのも今の内よ！貴女が勝っているつもりでいられるのは機体の性能差があつてこそなんだから！」

「卑怯？ありがとう、最高の誉め言葉だ。お前の言う通り武術とはどんなに言い繕つても所詮は人殺しの手段。より相手を効率よく、確実に無力化するのが…相手に卑怯と言わしめるくらい抵抗させずにやるのが武術の要諦だ」

「それに武術とは体格で劣る弱者が強者に勝つ為に戦場で生み出されたもの。弱い者があらゆる武器を、地形を、状況すら利用して勝利する為に生み出したものだ。だから、弱い私はこの『紅椿』を最大限利用させて貰った」

「お前はそんな基本中の基本すら分らずに今まで剣を振るってきたのか？秘伝書を欲してきたのか？篠ノ之流を…武術を嗜む者としてはあまりに未熟だな」

「ぐっ…！」

どこまでも冷淡に続ける筈に天音は言葉に詰まる。

「まあ、私も先程まで気付けなかったのだがな…さっきまでの威勢はどうした？臆して声も出せないか？」

「調子に乗るな！篠ノ之箒！」

そこに体勢を立て直した人美が槍を持って突っ込んでいく。

「そつは…させるかよ！」

だが『雨月』を両手で持った滝和也が思い切り横合いから人美に斬り付け、妨害する。

「男の分際で！」

人美は槍で和也を叩き伏せて蹴り転がす。

「滝捜査官！？」

「ふん！当然よ！こんな薄汚い小娘…しかもテロリストもどきの妹なんか庇い立てして生身で挑むから…！」

「…うる…せえ…！」

しかし和也は立ち上がり、再び人美に挑みかかる。

「何が薄汚い…だ…彼女の…篠ノ之箒の過去も何も知らないくせに…！」

和也は篠ノ之箒が数々のテロまがいの事件に関与している疑いのある篠ノ之束の妹だと知っているし、その過去もどんなものであったかも大体は予想がついている。

その娘はな、お前らがただひねくれてる間に姉がISの開発者としてだけで家族から引き離されて、大好きだった一夏君と会えなくなつて、大人たちには執拗に監視と尋問をされ続けて ずっと独りで過ごしてきた

だからそんな自分の無力さを呪つて 恐怖や淋しさを紛らわせたくて 漸く会えた幼なじみの隣に立てないのが悔しくて だから、力を求めて、溺れた 当たり前だ。誰も助けちゃくれねえんだ あの娘が頼れるのはあの娘自身しかいなかったんだ 強くなりたいと思つて、当然だ。

篠ノ之箒は、俺だ 一歩間違えたら俺がああなりかねなかったも

う一人の俺だ 本郷や一文字の怒りや悲しみを嫌って程見てきて、理解してても 千冬や一夏君がどれだけ余計な苦勞をしてきたか頭では分かっていても 俺も改造人間だったら、ISに乗れたらって何回も思ってきた俺と同じだ。

そうさ、箒は俺と違って本郷や一文字、千冬、それに一夏君が居なかった俺 滝和也なんだ。弱くて 当たり前だ。

だから、例え本郷や一文字達のように改造人間だったらとか思っても 千冬や一夏君のようにISに乗ればとか考えてても 本郷やおやつさん、千冬、一夏君、弾君にそんな事を白状しても

「 だから！この娘の 篠ノ之箒の前でだけは絶対にそんな事は言わねえ！俺は 箒に比べりゃ人に恵まれてた俺は！その分、生身で足掻いてみせるのが筋つてもんだ！！」

そのまま和也は人美へと再び突っ込んでいく。

人美はまたも和也を弾き飛ばす。

「無駄な事を！」

「そうとも限らないぜ…茂！」

そう叫ぶと和也は『雨月』を上へと放り投げる。

「ナイスパスです！滝さん！」

そして地慧を蹴散らし既に人美の上空に飛び上がっていた仮面ライダーストーンガーが空中で『雨月』をキャッチして大上段で構え、落下の勢いを乗せながら振り下ろす。

「箒さん！」

「はい！」

更に『空裂』を呼び出した箒が人美へと突っ込んでいく。

「こいつでー！」

「どうだ！」

そして仮面ライダーストーンガーは上から唐竹割りを、箒は横からエネルギー刃と共に斬撃を同時に放ち、人美を大きく後退させる。

「くっ！ならば！」

「おっと！そうはいくかよ！」

人美は先程杭を放ったパッケージを呼び出すが、仮面ライダーストーンガーは人美を掴むと高圧電流を流し込み始める。

「無駄よ！このパッケージには絶縁素材が使われているわ！そんなもの、効かない！」

「へいへい！丁寧にも…な！」

人美を掴んだまま仮面ライダーストロンガーは高々と飛び上がり、電流を流し込み続ける。すると人美は仮面ライダーストロンガーを振り落とそうとスラスターを噴かすが、仮面ライダーストロンガーは放さずに電流を流し込む。

「貴方：一体何のつもりかしら？」

「分からねえか：なら楽しい楽しい理科の時間の始まりだ：電気抵抗って知ってるか？電気がどれだけ流れ易いかを…」

「私を馬鹿にしてるのかしら？」

「なんだ知ってるのかよ：だったらよ、その電気抵抗が無茶苦茶大きい絶縁体に、長時間高圧電流が流れ続けたら：一体その電気エネルギーは何処にいつちまうんだろうな？」

「さつきから何を…!？」

次の瞬間、バツクバツクとメインスラスターが嫌な音を立てて破損し、推力が失われ、落下を開始する。

「な、何がどうなって…!？」

「『ジュール熱』って、知ってるか？抵抗がでかけりやでかいほど、流し込んだ電流が大きけりや大きいほど、その物体は熱くなるんだ。仮に電気は通らなくとも熱々のパッケージから熱がダイレクトに内側から伝わりや精密機械のIS、特に燃料満載のスラスター部分は無事じゃすまねえだろうな…」

「まさか…最初からそれが狙いで!？」

「今さら気付いてももう遅い!」

そのまま落下しながら仮面ライダーストロンガーは人美を抱えると逆さにして頭から地面へと叩きつける。

「反転ブリーカー!」

その一撃で人美のISは『絶対防御』を発動させ、沈黙を余儀なくされる。

箒もまた仮面ライダーストロンガーにより追い詰められていた地慧を受け取った『雨月』と『空裂』の二刀流、更には『展開装甲』や蹴りを織り交せて徹底的に攻め立てる。地慧は長巻に似た近接ブレードでひたすら防御するだけだ。

「どうした?縮こまっけては勝てないぞ?」

「ちっ!調子に…!」

そこに箒の太刀筋に乱れが出てくる。あれだけ攻め続けていたのだ。疲れが出てきたのだろう。

「その乱れが…命取りよ!」

すかさず地慧は反撃に打って出る。近接ブレードを突き出し、箒に一撃くれようとするが…

「引っ掛かったな…愚か者が!」

そのまま箒は『雨月』で絡め取るようにして地慧の手から近接ブレードを弾き飛ばすと、『雨月』と『空裂』を駆使してレーザーとエネルギー刃を放ちながら地慧を二刀で滅多斬りにする。

「そんな…誘いだつたの…!？」

最早防御すらままならず斬撃の嵐を受け続けた地慧もまた『絶対防御』が発動すると同時に地面に倒れ伏す。

「人美!? 地慧!？」

「後は…お前だけだ!」

動揺する天音に仮面ライダーストロンガーと箒が同時に挑みかかる。天音はパッケージを呼び出しワイヤーを箒に発射するが、箒は刀を駆使してワイヤーを全て切断する。

「ならば…これなら!」

続けて天音は人美のそれと同じパッケージを呼び出して杭を乱射する。

「何も他のパッケージが使えない訳じゃないわ! 連携の都合で…使わなかっただけ!」

そう言いながら杭を発射していた天音だが仮面ライダーストロンガーは不敵に言い放つ。

「ヘッ、鉄さえ含んでりゃこっちのもんさ…電気マグネット!」

仮面ライダーストロンガーは自らの身体を電磁石として杭を引き寄せる。

その隙に箒が一撃を加えてパッケージを破壊する。

「くっ！この屈辱は必ず…！」

天音は歯噛みしながらも『イグニッション・ブースト瞬時加速』を使い、逃げようとする。

「逃がすか！茂さん！」

「任せろ！」

だが仮面ライダーストロンガーも箒も逃がす気は毛頭ない。

「チャージアップ！！」

仮面ライダーストロンガーは体内に埋め込まれた超電子ダイナモを起動させ、1分間の時間制限を代償に通常の100倍のパワーを発揮可能な銀の角にプロテクターに銀色のラインが入った『超電子人間』の姿へ変わる。そして一瞬で大きく飛び上がり、天音の上を取る。

「ならば…！！」

天音は逃げられないと判断するや『イージス改』を呼び出し前面に展開する。

だが、仮面ライダーストロンガーは超電子ダイナモから溢れ出る力

を足に込めて真っ向から飛び蹴りを放つ。

「超電！」

一撃目の蹴りで四枚のエネルギーシールドを消し飛ばし、実体シールドを大きくへこませる。

「三段！」

二撃目の蹴りで残る実体シールドを完全に破壊し尽くし、完全に無防備となった天音の姿が曝される。

同時に天音はハイパーセンサーで背後から箒が両肩の展開装甲を変形させた弓…クロスボウをこちらに狙いを定めて構え、既に発射体勢に入っている事を悟るが、もう遅い。

「『亡国機業』！俺を倒したきゃミサイル、IS何でも持ってこいや！何をどれだけ持ってこようと一つ残らずぶっ壊して！お前らの野望も全部ぶっ潰してやるからよ！！」

「…茂さん…いくらなんでも…元気になり過ぎです…」

「…とても重傷を負ってるとは思えねえな…」

その後仮面ライダーストロンガーこと城茂が気絶した篠ノ之三姉妹を叩き起こして放電で脅して怒鳴り上げながら、滝和也が連絡して応援が駆け付けるまでの間元気に氣勢を上げ続けていたのを和也と篠ノ之箒が呆れ果てて見ていたのは、また別の話である。

夕暮れ空の下、一台のバイクが走っていた。両手に黒い手袋を嵌め、ジャケットの中に『S』の字が描かれた男が運転している後ろに、長い黒髪の少女が乗っている。

「悪いね、箒さん。寄り道に付き合わせちゃってさ」

「いえ、私も寄り道してましたし…何より私も行きたいと思っていましたから」

男：城茂は少女：篠ノ之箒に声をかける。

茂と箒は別の仮面ライダーを迎えに行く滝和也と別れ、篠ノ之神社に戻り宝物を奉納した後、茂の寄りたいある場所に向かってバイクを走らせていた。

その途中秘伝書の中身が白紙と気付いたりもしたが、あまり二人には関係のない話だ。

やがて二人を乗せたバイクが停まり、茂が降りる。箒もまた花束を二つ持ってバイクを降り、茂に続いて木々の間にある道を歩き出す。

花束の一つは『百日草』。その花言葉は『不在の友を思う』、『友への思い』。そしてもう一つの花束は百合の花。その花言葉は…

(…そんな事、私も茂さんも…知るわけないか…)

やがて二人は森を抜け、開けた場所に出る。その先の海に面してやや突き出た岬のような場所に、二つの墓はあった。

『沼田五郎之墓』

『岬ユリ子之墓』

とだけ墓碑に記された墓だ。

茂は箒から花束を受け取ると、百日草を沼田五郎の墓に、百合の花

を岬ユリ子の墓に供えて手を合わせる。 箒も同じく手を合わせる。

やがて茂は口を開く。

「五郎：ユリ子：また来たぜ…と言つても今回は暫く来れないって
報告みたいなものだけだよ」

「俺は今隣にいる篠ノ之箒つて娘やその想い人の織斑一夏、それに
二人の大切な人達…そして多くの人達の為に新しい悪の組織をぶつ
潰して…そして平和な世界を…お前達には見せられなかった平和な
世界を見せてやんなくちゃいけない…それが約束…だもんな」

「だから、それまで俺は此処には来れねえ…けど約束する。俺は必
ず此処に戻ってくる。俺は五郎やユリ子の分も、もつと、もつと強
くなって…この娘達を守り抜いて…そしてユリ子が見たかった平和
な世界を…この娘達やお前達に見せるまで、俺は絶対に負けねえ」

「だから…行つてくるぜ。五郎、ユリ子」

それだけ言つと茂は立ち上がり、踵を返すと歩き始める。

箒も墓に一礼して茂に続けて歩き出す。

篠ノ之箒さん、だったね あいつを 城茂を、頼んだぜ

私からもお願い 昔から茂は意地っ張りで、捻くれ者で、格好つけたがりで、不器用で けど本当は優しく、繊細なヤツだから

聞こえてきた声に箒が振り返ると、墓の前に一人の男と、一人の女が立っていた。どちらも箒には見覚えがなかったが、誰だかは直角的に分かった。

(沼田五郎さんに…岬ユリ子さん！)

「茂さん！」

慌てて箒が茂に声を掛ける。茂は立ち止まるが、振り返らない。

「…ヘッ、俺もヤキが回ったな…」

それだけ言つと箒…そして沼田五郎と岬ユリ子に応えるように手を上げると、再び振り返りもせずには歩き始めた。

再び箒が墓の方へと振り替えると、そこには誰もいなかった。まるで最初から誰もそこには居なかつたかのようだ。

(あれは…幻だったのだろうか…)

箒には分からない。だが少なくとも茂もまた沼田五郎と岬ユリ子の声を聞いていたような気がした。何の根拠もない、ただの勘だ。

やがて篠ノ之箒は改めて沼田五郎と岬ユリ子の墓に深く頭を下げて一礼すると、城茂の後に続いて、同じく振り向くこともなく歩き始めた。

天に召された一人の女の祈りと、大地に眠る一人の男の願いの為に、そして悪を撃ち据え多くの者の自由と平和を守る為に、今日もまた一筋の赤い雷光は人の世を彷徨い続ける

その名の通り、どっまでも強く。

第三話 天地人が呼ぶ雷光（後書き）

本話を最後までお読み頂きありがとうございます。

今回は今までと異なり分割するような形での投稿となりました。

慣れぬ形式でありますのでご意見、ご指摘等ありましたら忌憚なくおっしゃって頂けますとこちらとしても今後の参考となりますので助かります。

では次回もまた宜しくお願い致します。

第四話 蒼海の銀騎士（オーシャンス・カイソーグ）（前書き）

この話は同じ題材の短編、特に同じくセシリア・オルコットと神敬介を主役にした『父子の肖像』の内容を踏まえておりますので、事前にお読み頂けますと助かります。

第四話 蒼海の銀騎士（オーシャンズ・カイゾーグ）

一隻の連絡船がある島へ向けて進んでいく。そのまま船が港へと到着し、棧橋に繫留されるとタラップから船の乗客達が次々と下船していく。

ここは太平洋上の日本領海内にある本土から離れた『美山島』。所謂寒流である『親潮（千島海流）』と暖流である『黒潮（日本海流）』とがぶつかる『潮目』と呼ばれる箇所に位置している。

この島には世界有数の海洋総合研究所である『オルコット海洋研究所』が立地している。

元々この島は海底の複雑な地形などもあつて昔から船の難所として知られる程複雑な海流が島の周囲を流れていた事などから誰も住み着かない無人島であつた。

しかしイギリスの名門貴族『オルコット家』の当主で著名な海洋学者であるジヨナサン・オルコット、その友人であり自身も著名な海洋学者である共同研究者の神啓太郎両博士がこの島に目を付け、海洋観測所を設けたのが『オルコット海洋研究所』の始まりである。

その後ジヨナサンはこの島に別荘を設ける傍ら海洋観測所を次第に拡張していき、ジヨナサンの娘リサが大学に入学する頃には世界有数の規模を持つ海洋研究所として知られ、数多くの優秀な海洋学者を輩出した事で知られている。

ジヨナサンは晩年までイギリスの大学で教鞭を執る傍らこの研究所の所長を務めており、大学の長期休業など暇さえあればこの島の別

荘に滞在しつつ研究所に通い研究に明け暮れていた。

ジヨナサン死後はその愛弟子で娘婿でもある、ジヨナサン門下随一の俊英との誉れ高いジョージ・オルコット…学会では旧姓のシラーの方が通りがいいが…が所長を務めていたが、妻のリサ共々列車事故で亡くなり、現在ではジョージとリサの弟弟子であるリチャード・バーナードが所長を務めている。

この島を訪れるのは大抵海洋学者と相場が決まっている。この島には『オルコット海洋研究所』とその研究員が住む宿舎以外には何も無いからだ。

そして先ほど船から降りてきた一団も皆海洋学者や研究所職員なのだが、今回は二人程例外がいる。

一人はラフなジャケット姿の日本人らしき男だ。いかにもいい加減で不真面目そうな雰囲気醸し出しており、少なくともまともな海洋学者には見えない。

そしてもう一人は長い金髪をなびかせる青い瞳をした少女だ。街行く者が皆振り返りそうな魅力的な容姿をしているが、ジャケット姿の男以上にこの島では異様だ。はっきり言って年齢等を考えれば男よりずっと海洋学者と思う人間は少ないだろう。

そして船から降りて桟橋を歩くジャケット姿の男と一緒に降りてきた金髪の少女に声を発する。

「さてと、それじゃ敬介に合流する前に研究所の方に顔を出しとかないとな、セシリア嬢」

「ええ、滝捜査官。敬介さんが調査を終えるまで時間がありますし」
そして少女…セシリア・オルコットは男…滝和也に答える。

セシリアはイギリスの名門貴族『オルコット家』の現当主…そして
ジョージとリサの娘であり、母国イギリスの国家代表候補生として
専用機『ブルー・ティーズ』を与えられた専用機持ちだ。現在は
IS学園の生徒であり、今着ているのもIS学園の1年生用制服だ。
そして和也はFBIから出向してきたインターポール捜査官である。

一見するとこの二人、何の接点も無いように見えるのだが、『銀の
シルバリオ・コスベル
福音』の暴走事故のすぐ後にセシリアが理事長を務める『オルコッ
ト財団』の設立20周年記念パーティーに際して発生した『セシリ
ア・オルコット暗殺未遂事件』の際に和也が別件捜査の名目でセシ
リア暗殺を阻止すべく会場となった『メルクリウス号』に乗り込ん
だ際に知り合った。

ちなみにセシリアは自身の担任で和也とも旧知の仲でもある織斑千
冬と和也の関係を誤解し、本人達には聞かせられないようなとんで
もない妄想を展開していた…というより今も誤解したままなのだが、
そんな事には気付いていない和也にはあまり関係のない話である。

そして今和也とセシリアは先日出会った和也の戦友でもある本郷猛
の頼みを受けて猛や和也の後輩で、セシリアの両親の友人であり暗
殺未遂事件の際にセシリアの命を救った恩人…そしてセシリアの父
親代わりでもある神敬介を迎えに行く為に、現在敬介が滞在してい
るこの島へとやって来ていた。

敬介はフリーの海洋学者であり、世界中の海を股にかけて海洋調査

を行い、それに関する論文を執筆する傍ら各地の海洋研究所や大学等に頼まれて海洋調査を行う等の手伝いをしている。

今も敬介はオルコット海洋研究所の依頼を受けて海洋調査を行っており、今日で一旦区切りを付けて明日和也、セシリアと共にこの島から発つ事になっている。

その分今回の調査はいつもより長くなるらしく、場合によっては夜までかかるらしい。とはいえこちらでも文句は言えないし言う気もないが。

そして和也とセシリアは研究所へと並んで歩いていく。今回はインターポール及びEIS学園からの正式な要請という形で現在研究所にいる敬介を連れていく事になっている為セシリアも制服姿だ。それに研究所の方にも顔を出して挨拶しておく必要がある。

やがて和也とセシリアは研究所の正面ゲート前に到着すると警備員に身分証を提示し、内部へと案内されていった。

『美山島』の北端に位置する岬の上に、木造二階建のジオナサン・オルコットの別荘が立っている。

ジヨナサン没後はその後を継いでオルコット海洋研究所の所長となつたジョージ・オルコットがジヨナサンの遺品整理をしながらここで生活していたが、遺品整理の目処がつきその事を妻でありオルコット家の当主：ジヨナサンの遺産管財人でもあるリサ・オルコットに報告する為にイギリスに戻つた際にジョージがリサと共に列車事故で亡くなつてからはつい最近まで誰も住んでいなかった。

だが最近ではジョージ、リサ夫妻の友人で先日オルコット研究所にやつてきて海洋調査を手伝っているフリーの海洋学者が寝泊りしている。

その男は別荘の近くの浜辺にある、今は使われていない潮位観測所から何やら紙の束が沢山入つた段ボールを持って別荘へと迎う。

「ジョージ…何が大体目処が着いただよ…まだまだ未発見や未整理のデータがこんなにあるじゃないか」

そう言つて男はドアを開けて別荘に入ると書斎に向かい、机の近くに段ボールを置く。

男の名は神敬介。父の神啓太郎も敬介同様海洋学者であり、ジヨナサンの共同研究者であり友人同士であつたと敬介は聞いている。

敬介がオルコット海洋研究所を訪れたのは海洋調査への協力を研究所側から依頼されたというのもあるが、友人であるジョージが生前行っていたジヨナサンの遺品整理を引き継ぐと同時にジョージの遺品も整理する為である。

「とはいえジヨナサン先生の未発表論文だけでも莫大な量だつたし…中々帰れない訳だよ」

敬介は溜め息を付きながら潮位観測所に残されていた未整理の観測データが記録された紙束を机の上に乗せる。

当初は割と軽い気持ちで：ジョージが一定の目処が着いたと生前言っていた為すぐ終わるだろうと思っていたが、すぐにその認識を改めるしか無かった。

別荘の中だけでもかなりの量の未発表論文や未整理の各種データが残されていた上に、近くの潮位観測所に残されていた観測データは全くの手付かず状態であった。

ジョージは私物類の整理やオルコット家当主としてのジョナサンの遺品は何とか整理し終えたが、海洋学者としてのジョナサンの遺品：論文やデータの方は量が膨大過ぎて整理が追い付いていなかったようだ。

ジョージとリサの生前に二人一緒に会った時遺品が多過ぎて中々一緒に過ごせず別居に近い状態が続いていると二人してぼやいていたがそれも納得だ。しかもこれに加えてジョージの遺品も少なからずあるので結構時間がかかりそうである。

紙束を紐ときメモを取りながらデータを整理していた敬介だが、ふと机に立て掛けられている三つの写真立てに目がいく。

「これは若い頃のジョナサン先生と：親父か：」

一つ目は若かりし頃のジョナサンと敬介の父である神啓太郎が肩を組んで映っている写真だ。

啓太郎はオルコット研究所の前身となった海洋観測所でジョナサンと共に観測や研究に勤しんでいたが、友人である緑川弘により教員として城北大学に招かれ後にしたと聞いている。

ジョナサンの話では啓太郎は昔から頑固で融通が利かなかつたらしいが、反面不器用ながら優しく、勇敢な性格で一度遭難しかけたジョナサンを命懸けで助けた事もあったと聞く。

敬介がジョナサンと知遇を得たのは啓太郎の死後からだいぶ経った後に学会で出会い、たまたま敬介の姓が気になったジョナサンが尋ねた事で敬介が啓太郎の息子で、ジョナサンが啓太郎の友人であると判明した事がきっかけだ。

その後一時期敬介はジョナサンの下に滞在していた時期があり、その際にジョナサンの教え子であったジョージとリサと出会い、互いに意気投合した。

その頃に撮られたジョージやリサを含めたジョナサンの教え子達とジョナサン、そして敬介が写った集合写真が二つ目の写真立てに飾られている。

そして他の二つと違い三つ目の写真立てはジョナサンの遺品ではなくジョージの遺品に分類されるものだ。

「ジョージ…リサ…そしてセシリア…」

敬介は三つ目の写真立てを手に取り写真を眺めながら呟く。

そこに写っているのは在りし日のジョージとリサ、そしてその一人娘で二人の忘れ形見となってしまうた幼きセシリア・オルコットの

親子だ。

敬介は生前のジョージヤリサから話は聞かされていたのだが、セシリアとはオートレーサーとしての兄弟子であるインターポール捜査官の滝和也に頼まれ、和也に捜査協力を頼まれたIS学園教師でセシリアの担任である織斑千冬のフオーも兼ねてオルコット財団設立20周年パーティーに招待され、出席するまで会った事は無かった。

会った当初のセシリアは先代当主であり、女の身でありながら有能な実業家としてオルコット家に繁栄をもたらしたりサの事は尊敬していたが、押しが弱く、IS登場前でまだ男尊女卑の傾向があった時代に女の身でありながらオルコット家の当主となった妻を気遣い人前では娘を含めて卑屈に振る舞っていたジョージの事は侮蔑し、疎んじていた。

だがセシリアの身柄を狙っていた『亡国機業』の陰謀に巻き込まれ、その最中に敬介がセシリアを身を呈して庇った事がきっかけとなり、セシリアは父親の本当の姿に気付く事が出来た。

そして敬介はその時自分に…かつてセシリアと同じように父を嫌い、反発し、そして失うまでその本当の姿と愛情に気付けなかった自分に、父親の…ジョージの姿を見たセシリアの父親代わりとして彼女を見守っていく事を決めた。

今でもセシリアとは定期的に連絡を取っており、今はこの島に滞在している事と、ジョナサンとジョージの遺品整理も行っている事は教えている。

「似てるな、どちらにも」

写真を見ながら敬介は呟く。

セシリアは確かにジョージとリサの血を引いていると実感するくらい二人に似ている。

見た目は全体的にリサによく似ているが目はジョージにそっくりだ。

中身も一見プライドが高く大人びているように見えてその実子どもっぽく、情に篤いのはリサの若い頃そのままだし、普段はその素振りも見せないが裏では必死に努力する努力家というのはジョージと同じだ。

ただジョージの料理下手に加えてリサの豪快さまで変に受け継いでしまったのには閉口したが。あのコーヒーはきつとにがり砂糖か何かと勘違いしてコーヒーに入れてしまったのだろうが、あそこまでにがり独特の苦さが出ていたという事はきつと相当な量のにがりを入れたのだろう。仮にあれが砂糖でも甘すぎて結局むせたかも知れない。

それにリサの思い込みの激しさやジョージの早とちりも受け継いでいるらしく、和也と千冬を見て何やら妄想を繰り広げていた気がする。実際は敬介も妄想に登場していたのだが、敬介は知る由もない。

そして今日自身を迎えに来たセシリアと和也とこの島で合流し、明日この島を発つ手筈になっている。

先輩の風見志郎と結城丈二からは既に『亡国機業』が日本で何か大掛かりな事を企んでいるらしいとの連絡を受けているが、志郎や丈

二の勧めもありこちらの海洋調査と遺品整理に一定の目処を付けてから向かう事にした。

海洋調査の方は今日の分を終わらせれば良いので、遺品整理の方も和也と自分を迎えに来たセシリアに今日明日辺りにジョージの遺品を選別してもらって区切りとする。

「そろそろ時間だな：今回の調査ポイントなら研究所からより此処から直接向かった方がずっと早そうだ」

一通りデータに目を通し時計を見るとそろそろオルコット海洋研究所から頼まれていた調査の開始予定時刻に近い。

そこで紙束を一旦閉じてペンを置くと敬介は立ち上がり、今回の調査ポイントへ向かう準備を始めた。

オルコット海洋研究所の所長室に置かれているソファーに腰掛けながらセシリア・オルコットと滝和也、そして所長のリチャード・バーナードがテーブルを挟む形で対面し、話していた。

「今回はご協力ありがとうございます、バーナード博士」

「いえ、お気にならないで下さい、オルコット理事長。我々の方もインターポールやIS学園、それに神敬介博士本人から大体の事情は聞いておりますから」

丁寧に頭を下げるセシリアに対してリチャードは首を振る。

セシリアが理事長を務めるオルコット財団はジョナサン・オルコットの遺言により学問の振興を目的に設立された財団であり、ジョナサンの経歴から特に海洋学関連の支援に力を入れている。

オルコット海洋研究所もジョナサンが設立したという経緯もありオルコット財団からの支援を受けている。

加えて所長のリチャードもジョナサンの弟子であり、同じくジョナサン門下のジョージ、リサ兩名とは兄弟弟子として互いに面識があるしその娘のセシリアとも何度か会っている。

和也とセシリアは研究所に顔を出し、リチャードに挨拶を済ませ和也が用件を伝えリチャードがそれを承諾するという形式的なやり取りを済ませた後は、現在研究所から頼まれて調査を行っている神敬介が研究所に戻ってくるまで所長室で待つ事にした。敬介は寝泊まりしながらジョナサンやジョージの遺品整理を行っているジョナサンの別荘から直接今回の調査ポイントへ向かったとリチャードから聞いている。

そこに和也が口を開く。

「しかし敬介がここまで重宝されてるなんて正直少し驚いたぜ…」

「敬介さんの…『カイゾーグ』の力は海洋学の分野でこそ真価を発

揮しているんですよ？」

それにセシリアが笑って答える。

お飾りに近いとはいえまかりなりにオオルコット財団の理事長であるセシリアは、祖父の友人である神啓太郎が設計した深海開発用改造人間『カイゾーグ』については知っていたし、啓太郎が生前書いていた『カイゾーグ』に関する論文からそのスペックについてもある程度は知っていた。

ただその『カイゾーグ』が両親の友人である神敬介である事やその改造に到るまでの経緯、何よりISにも劣らぬ戦闘能力を持っているとは敬介に会うまで知らなかったが。

「特にこの島近海の海底は他の探查方法では調べようがないので敬介さんに任せるしかありませんから」

「詳しいんだな…セシリア嬢」

「これでもオオルコット財団理事長ですし…バーナード博士や敬介さんからの受け売りですけど」

セシリアは感心したように呟く和也に首を振ってみせる。

セシリアの言っている事は事実だ。この島近海は昔から船の難所と呼ばれる程かなり複雑な潮の流れが存在し、近代に入り蒸気機関などの動力船が導入されるまでまともに上陸する事すら出来なかった。

それだけならまだしも親潮と黒潮が合流する地点である事や海底の地形が少々複雑な事もあって一定以上の深さになると激しい上昇海

流が発生しており、有人・無人問わず探査船を下ろす事が出来ない。その上この辺りの海底はかなり深くなっている箇所が多い上暖流と寒流がぶつかるという都合上海水の温度差がかなり大きい為ソナーやレーダーでも海底までは探査出来ない。

そこで深海開発用改造人間『カイゾーグ』の出番である。

『カイゾーグ』は人間サイズでありながら1万mの深海でも活動出来るようになっていて。更に最新鋭の潜水艦とほぼ同じ機能が何らかの形で搭載されている。

特に脚部に搭載された推進装置『エア・ジェット』は地上でも自由落下状態からの再上昇が可能な出力を持ち、水中では無類の推進力を発揮する。それこそ海流に容易く逆らえる程の、だ。

その為オルコット海洋研究所では敬介に依頼し『カイゾーグ』の姿でこの辺りの海底探査を代行して貰っていた。

更に敬介自身の海に関する知識や経験も豊富なお陰で、それまでは殆ど分かっていなかったこの島近海の海底の地形がかなり詳細に分かるようになった。そして今回の調査でほぼマッピングは完了するとの事だ。

そんな自身の父親代わりの事を誇らしげに語るセシリアに更に和也が続けて質問する。

「そこら辺は沖一也と…スーパードールと一緒にだ。沖一也で思い出したんだが元々ISってのは宇宙開発の為に作られたんだよな？だったら海底探査とかにも応用出来ないのか？宇宙飛行士も訓練は水中

で行つくらいだから結構通じる所があるだろうし、最近じゃ原点に立ち返つて宇宙開発での使用を念頭に置いたISなんてのもあるって聞いているしな」

和也の言っている事もまた事実である。

元々IS…正式名称『インフィニット・ストラトス』は次世代の高性能多目的宇宙服『マルチフォーム・スーツ』として開発された。

現に世界最初のIS『白騎士』はそれを前提に設計・開発されており、『白騎士事件』直前に戦闘用はかなり大規模に改修される前に『国際宇宙開発研究所』の協力で月面基地にて宇宙空間や月面での運用テストを行っていたと聞いている。

『白騎士事件』後は兵器としての有用性を認められた事もあり軍事もしくは競技用として研究・開発が進められていたのだが、元々ISの性能を高く評価していた一也を始めとする国際宇宙開発研究所の働きかけもあり、各国の承認を経た上で姿を消す前の篠ノ之束から特別にコアを提供され、本来の宇宙開発を前提としたISの設計・開発が行われていた。現在では試作第1号の実機が完成し、間もなく問題を洗い出す為の運用テストが行われるという段階にまで到達していると和也は耳にしている。

和也の質問はそれらを踏まえてのものだ。今度はリチャードが笑いながら和也に答える。

「実は滝捜査官がされたような質問は他の方からもよくされるんです。私もそう思った事がありますし、実際この研究所が中心となつて海底探査用のISを開発する計画があったのですが、結局中止になつてしまつて」

「やはりコアの問題で？」

「それもあります。最大の理由は技術的制約ですね。こればかりは実際に経験して貰った方が良さそうですね。試しにあそこに置いてあるミルク缶を持ってみて下さい」

リチャードはそう言って所長室の隅に置かれているミルク缶を和也に示す。

和也は怪訝そうな表情を浮かべながらもソファから立ち上がり、ミルク缶の前まで歩み寄り、持ち上げようと把手に手を掛ける。

「結構重っ!？」

その重さに驚く和也だがどうにか持ち直しそのまま持ち上げた後床に降ろす。

それを見ながらリチャードが更に続ける。

「大気もそうですが水…海水にも重さがあるんですよ？水からの圧力…『水圧』と言った方が分かり易いですかね。仮にISが海に潜るとこの水圧が周囲から継続的に押し寄せてくるんです。勿論ISにはシールドバリアがありますけど、この水圧は深く潜れば潜る程より大きくなっていくんです」

「そしてある程度の深さまでいくとシールドエネルギーにも影響が出るくらいの水圧がIS全体へとかかってくるんです。深く潜れば潜る程大きく。シールドエネルギーが有限である以上別に自前の生命維持機能や耐圧殻を持つか、気軽にシールドエネルギーを補給可能な手段が無ければ浅水域での潜航はともかく、海底探査を行うに

は潜れる時間が短過ぎてあまり実用的ではありませんから」

「なるほど、世の中そう上手くはいかないってか…ありがとございまして」

そう言つて和也はリチャードに礼を述べる。

「私も一度敬介さんに同じ事をお尋ねしたら同じような答えが返つてきましたわ。そう上手くはいかないからこそロマンがあつて…ロマンがあるからこそ祖父や父、それに敬介さんが海洋学の道を選んだのでしょね」

セシリアが笑いながら付け加える。

海は地球上にありながらまだまだ未開拓で謎が多い事で知られている。だからこそ多くの男達がロマンを求めて海に惹かれ、潜っているのではないかとセシリアは考えている。

同時に今まで両親から受け継いだ遺産を守る為に必死に努力していたセシリアにはそんな夢を持ち続け、そして今もまた追い求めている敬介が羨ましいと少しだけ感じていた。

(駄目ね、そんな事を考えては)

しかしセシリアはそれを打ち消す。敬介が今こうやって夢を追い掛けていられるのも敬介自身の努力があつたからだ。そして多くの悲しみや苦しみを味わい、犠牲を払って漸く手に入れた平和なのだ。

そしてセシリアは所長室の窓から見える海を眺める。

間もなく西日が水平線の下へと沈もうとしていた。

日が沈んで夜となり月明かりが海面を照らす中、月の光が殆ど届かぬ海の底を銀色の昆虫に似た『カイゾーグ』の姿をした神敬介が潜航していた。

「しかし驚いたな…地形が複雑なだけじゃなく『メタンハイドレート』の鉱床まであるとは」

そして海底に露出している『メタンハイドレート』の塊を見て敬介は呟く。

メタンハイドレートとはメタンを中心に周囲に水分子が囲む形で氷のような結晶となった物質で、新たな燃料として注目されている。

基本的にメタンハイドレートは高圧低温下でしか存在出来ないのが大抵海底の更に地下にあるのだが、たまに海底に露出した状態で発見される事もある。今回もまさにそれだ。

メタンハイドレートが存在するのはそれなりに深い海底なので今は夜という事もあり光は殆ど入ってこないのが非常に暗いのだが、『カイゾーグ』である敬介には特に問題無い。元々1万mの深海で行

動する事を前提に設計されている。感覚器官もそれに合わせて強化されているのだから。

行く手を阻むように流れる海流をエア・ジェットや専用マシン『クルーザー』を駆使して突破しながら敬介は海底をマッピングしながら調査を進めていた。

この近海の海底は高低差が激しい上に速い海流により削られたのか岩などがいびつな形になっている。それに加わり海底がすり鉢状になり海流がそこに集中して流れ込む事で強烈な上方向への海流が流れている箇所がいくつもある。

いくらカイゾーグの敬介と言えども中々骨が折れる仕事ではあったが元々好きでやっている事だ。やりがいややりごたえこそ感じているが辛いなどと思った事は一度もない。

それも間もなく終わる。他の海域のマッピングは大体終わったのでもう少しこの辺りを潜航しマッピングを済ませればオルコット海洋研究所から委託された海底探査は終了だ。

今回は予想以上に探査が長引いてしまった為現在は夜だ。

「研究所に戻ったらセシリアと滝さんに謝っておかないとな…」

そして自身を迎えに来たはいいが現在待ちぼうけを食らっているであろうセシリア・オルコットと滝和也の事を思い浮かべて呟く。二人とも立場上忙しいのに自分の我が儘に付き合わせる形になってしまったのだから当然だ。

そんな事を考えてながら敬介はエア・ジェットを噴射しながら海底

を進む。そして粗方マッピングを終えて海面まで上昇しようとした矢先、オルコット海洋研究所から緊急通信が入る。

『神博士！至急研究所まで帰還して下さい！現在研究所が何者かによる襲撃を受けているんです！』

「何！？」

通信の主は所長のリチャード・バーナード博士からだった。声からしてかなり切迫した状況であるようだ。

「分かりました！直ちにそちらに向かいます！バーナード所長は所員の方達と共に安全な場所へ退避を！」

それだけリチャード答えると敬介は深海から上昇を開始しつつクルーザーを呼び出した。

月が『美山島』とその近海を仄かに照らし出す空の下：海の上で4つの影が飛び回っていた。

影の1つはイギリス代表候補生のセシリア・オルコットが装着した専用機：第3世代機『ブルー・ティアーズ』、残る3つは二週間程

前：専用機限定タッグマッチの時にIS学園に侵入し散々学園内を荒らし回った黒いマネキンのような無人ISだ。

セシリアはスラスターを噴かして距離を取りながら手に持ったレーザーライフル『スターライトmk3』を無人ISへ向けて撃つが、3機はシールドユニットを展開して防いだ後左腕からビームを放ちつつ、肘から先が大型ブレードとなった右腕を閃かせセシリアへと突撃していく。

「くっ！まだやられる訳には…！」

セシリアはそれをどうにかして躲すと対応策を練るべく頭をフル回転させる。

夜になった後も滝和也やリチャード・バーナードと一緒に紅茶…和也は泥水もといコーヒーが良いと言っていたのでセシリア自らがコーヒーを入れて渡した所、何故か吐き出して結局紅茶をリチャードに所望したが…を飲んで神敬介が研究所に戻ってくるのを待っていたのだが、突如として無人ISが出現した為セシリアは迎撃に出た。現在では敬介がリチャードからの知らせを聞いてこちらに向かっていると聞いている。リチャードや他の職員は和也の誘導で全員退避が完了している。

そうしてこの無人IS3機との戦闘を開始したセシリアだが、苦戦を強いられていた。

この無人ISには絶対防御を無視して操縦者に直接ダメージを与える機能が付いている。その為妹を庇ったとはいえ『学園最強』の生徒会長更識楯無が負傷するという事態が発生している。

しかもこの『ブルー・ティアーズ』最大の武器である機体名の元となった遠隔操作攻撃端末『ブルー・ティアーズ』は事実上使えない。

『ブルー・ティアーズ』の操作には他の武器の使用は勿論回避や防御も出来ないくらいの集中を要する。それをフォローする味方がいない状況で、しかも『絶対防御』を無視してくる敵の前で使うなど自殺行為以外の何物でもない。

つまりセシリアは最大の攻撃手段を封じられた状態かつ一発でも当たれば危ないというかなり不利な状況で、1対3というハンデまで背負って戦っている。それでもこうして持ち堪えられているのは一重にセシリアの才能と努力、経験があつてこそだ。

そんなセシリアの不利を見越してか無人ISはシールドユニットを展開しながら再び突撃を仕掛けてくる。

「なら…これは！」

セシリアはそれを見るや再びレーザーライフルを発射する。シールドユニットで防げると見たのか先頭の無人ISはそれに構わず突っ込むが…

「背中がお留守ですよ！」

正面に展開されたシールドユニットに当たる直前にビームがねじ曲がり一瞬で先頭の無人ISを背後から撃ち抜き、爆散させる。

セシリアの『ブルー・ティアーズ』が搭載しているBT兵器は最大稼働時にそのビームの軌道を『偏向射撃』フレキシブルにより操縦者の意志で自

由自在に操る事が出来る。

勿論レーザーライフルとてその例外ではないのでセシリアはシールドが正面に集中していると見てこの手を使った。これも『サイレント・セフィルス』との死闘をきっかけに会得した才能と努力と経験の賜物だ。

だが続く無人ISがブレードを振るい攻撃してくるのをどうにか躲すが、姿勢が崩れる。そこにもう1機が巨大な左腕を…ビームの砲口が付いた左腕を向ける。

『絶対防御』すら正面きつてぶち破れる威力を持ったビーム砲だ。体勢が大きく崩された今では回避もままならない。将棋で言うところの詰み、だ。

セシリアが思わず目をつぶると同時に無人ISからビームが放たれセシリアに当たらない。

セシリアにビームが放たれる直前に下…海からセシリアと無人ISの間に風車のように高速回転する『何か』が割って入り、ビームを防ぎ切ったのだ。その『何か』は回転しながら更に上昇する。セシリアには『何か』に見覚えがあつた。それは…

「ライドル!？」

それは『カイゾーグ』の腰部に収納されている多目的ツール『ライドル』だった。長さからして長大な棒状の『ロングポール』に変形させた状態だろう。それがセシリアの盾となる形で風車のように高速回転しながら上昇してタイミング良くビームを防いだのだ。

更にライドルが飛んできた海の中からそれを追うように何かが飛び出してくる。

「あれは…敬介さん!？」

それは銀色の騎士…『カイゾーグ』の姿の神敬介だった。

敬介は脚部のエア・ジェットや足下のクルーザーを蹴った反動を利用してライドルを追う形でセシリアと無人ISの間を通り高々と飛び上がり、無人ISの上を取る。

そして空中で回転を止めたライドルを掴み、スイッチを操作して『ライドルステイク』へと変形させると、そのままライドルステイクを使い大車輪の要領で回転し加速度を付け、『X』の字を体勢になりエネルギーを集約すると前方宙返りをする。

それを躲せないと見ると無人ISはシールドユニットを展開して防御する事を選択する。

そして敬介は集約されたエネルギーを足に集中させ必殺の蹴撃をシールドユニットを展開する無人ISに対して真っ向から放つ。

「X必殺キック!」

かつてセシリアが見た『Xキック』とほぼ同じ動作ながら倍以上の威力を持った飛び蹴りはシールドユニットを正面から突破し、そのまま無人ISの胴体を上下に寸断し、爆散させる。

しかし残る1機が右腕の大型ブレードを構えてスラスタを噴かして敬介へと突撃していく。

「そう簡単に！ライドルホイップ！」

敬介は再びライドルのスイッチを操作するとライドルはレイピアに似た『ライドルホイップ』へと変形させると無人ISと斬り結び、鏢競り合いへと持ち込む。

そこに無人ISは敬介を押し込むべく鏢競り合いをどうにか脱すると、スラスターを噴かして敬介に体当たりをかましそのまま自身共々敬介を島の地面まで運び叩き付け、盛大に土煙が上がる。

「敬介さん！」

慌てて敬介を助けようとスラスターを使い未だ土煙が立ち込めている敬介と無人ISが落下した地点まで近付くが、その直後に土煙が一気に吹き飛ばされ、それと同時に何かが地面を走る。

敬介と無人ISだった。敬介が無人ISと共に地面を高速回転しながら無人ISの頭部を何度も地面に叩きつけていた。しかも無人ISが下になる度に敬介が思い切り地面へと押し付けるように頭部などを叩きつけている事もあり、無人ISのスラスターは破損し主に後部の装甲がひしゃげている。

「真空…地獄車ああ！！！」

何度も叩きつけて敵に十分なダメージを与えたと見ると敬介はそのまま無人ISを上へと思い切り投げ、自身もまた追撃に入る為に続けて無人IS目がけて飛び上がる。

「Xキック！」

そしてとどめとなる飛び蹴りを無人ISへと炸裂させると無人ISの五体は無惨に弾け飛んだ。そのまま敬介は地面へと着地する。

セシリアも敬介の目の前に着陸すると『ブルー・ティアーズ』を待機状態へと戻し、微笑みながら声をかける。

「ありがとうございます、敬介さん。危ない所を助けて頂いて」

すると敬介も『カイゾーグ』の顔面部分から『パーフェクター』が外れ、『レッドアイザー』が半分ずつ取れて素顔が曝され、スーツも解除される事で『カイゾーグ』の姿から人間の姿へと戻る。

「気にしなくていいさ。セシリアこそ無事で…良かった」

そう言うと敬介はセシリアに爽やかな…しかしどこか穏やかで優しいな笑みを浮かべるのであった。

第四話 蒼海の銀騎士（オーシャンス・カイソーグ）（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

今回も前後編のような形での投稿とさせて頂きまますのでご了承願います。

では宜しければ次話もお願い致します。

第五話 父の想いは波の中（前書き）

では前話の後書きで書いた通り後半部分にあたる話となります。

本話には独自設定・解釈が多分に含まれておりますので特にご注意願います。

第五話 父の想いは波の中

無人ISがオルコット海洋研究所付近に出現した翌朝、ジョナサン・オルコットの別荘の中では一人の男と一人の少女が何やら作業をしていた。

「敬介さん！この段ボール箱はいかがいたしますか？」

「それは潮位観測所のデータだから後回しで！それよりセシリア、ちよつと来てくれないか？君に確かめてほしいものがあるんだ」

作業をしているのは神敬介とセシリア・オルコットだ。

昨晚再会を果たした後暫く再会と互いの無事を喜び合っていた二人だが、その場は一旦引き上げ、今朝方敬介が寝泊まりしているジョナサン・オルコットの別荘にセシリアが訪問し、そのまま遺品整理に取り掛かっている。

とはいえ時間は今日までなので流石に全てを整理するなど不可能だ。そこで未だに殆んど手が付けられていないセシリアの父…ジョージ・オルコットの遺品を優先して整理していく事を決めた。その中でも論文類は後回しで私物を最優先としている。

今は別荘の書斎に残されているジョージの遺品を整理している。

「これは…ジョージの日記か。記事の日付からすると事故の少し前からのヤツだろうな」

「こちらも日記でしょうか…の割には色々ガチャガチャと言つか…」

「そつちは多分フィールドワークで使ってたノートだね」

そんな事を話しながら作業を進めていた二人だが、ふとセシリアは机の上に立て掛けられている写真立てに気が付き、立ち上がる。

「敬介さん、この写真は…？」

「ああ、それが…右のは若い頃のジヨナサン先生と神啓太郎…つまり君のお祖父様と俺の親父が、真ん中のは俺や先生、それにジヨージとリサが、そして一番左は…」

「私と父と母…私達家族三人の写真、ですわね」

敬介の答えを聞くとセシリアは自身が写った写真を手に取り、暫し眺め始める。

それを敬介は黙って見ていたが、やがて再び遺品の整理を開始する。

「ごめんなさい敬介さん……つい手が止まってしまっ…」

「いいさ、それは君の家族写真なんだし、その反応はむしろ当然だよ」

我に振り返り申し訳なさそうに言うセシリアに敬介は笑って答える。

「さて、セシリアも朝早くから作業ばかりで疲れただろ？だから少し休憩しようか…ちょっと待っていてくれ、泥水もといコーヒーはともかく紅茶の方はあまり自信がないけど…」

「ありがとうございます、敬介さん。ですが敬介さんの分でしたら私が…」

「いいんだよ、気にしなくて。ここでは君の方が客人みたいなものだしさ。それにこの前のコーヒーのお礼だと思ってくれればいいよ」

「ですが敬介さん…」

「…いいんだ」

「…分かりました。ではお言葉に甘えさせて頂きますね」

敬介の一言でセシリアが折れると、内心また『にがり』入りコーヒーを振る舞われるような羽目にならなくて良かった、などと安堵しつつ敬介は立ち上がりキッチンへと向かっていった。

朝を迎えたオルコット海洋研究所の所長室に滝和也はいた。

セシリア・オルコットは神敬介が滞在しているジヨナサン・オルコットの別荘へと赴き、敬介と共にジヨナサンやセシリアの父であるジヨージの遺品整理を行っている。元々この島を訪れたのは敬介を迎えに行く為というのもあるが、遺品整理の為という目的もある。

とはいえ部外者の和也にはあまり関係の無い話だ。現在は所長のリチャード・バーナードと話している。

「バーナード所長、無人ISに襲撃されるような理由とか何か心当たりはありませんか？」

「いえ、我々は単なる研究機関ですし…特に何か政治的・軍事的に重要なものは何も…敢えて言うならこの島の近海にあるメタンハイドレート鉱床がそうだと言えますが、それもつい最近の神博士からの報告で漸くこちらにも気付けた上に、採掘には技術的課題が多過ぎるに過ぎない。…」

話題となっているのは昨夜襲撃してきた無人ISについてだ。無人ISを誰が送り込んできたかは大体予想がついている。と言うよりこの広い世界中を見渡してもそんなものを製造出来るのは唯一ISコアの製造方法を知っている篠ノ之束しかない。

だが襲撃の目的が分からない。確かに前にも何度かあった無人ISによるIS学園襲撃に関してもその目的については今一判然としない。少なくとも単なる破壊工作が目的、という訳ではなさそうだ。

もつとも、和也は先の無人ISによるIS学園襲撃事件、それにIS学園の臨海学校とほぼ同時期に発生したアメリカ・イスラエル共同開発の第3世代機『銀の福音』シルバリオ・コスベルの暴走事件：アメリカ軍の公式発表では『事故』となっているが、実際は『何者か』がコアに不正アクセスした事で発生して意図的に起こしたものである…とそれによる臨海学校中のIS学園生との交戦にはある共通点がある事に気が付いている。

それは篠ノ之箒と織斑一夏：篠ノ之束の実妹とその幼なじみの存在だ。

確かにそれ以前にも『白騎士事件』：こちらは厳密にはとある組織の残党も絡んでいるので少々複雑だが：など多くのテロまがいの事件への関与が疑われてきており、決定的な証拠が無い為あくまでマークするに止まっているが、インターポールも彼女に目を付けているくらいには色々やっっている疑いはある。

しかし無人ISを投入したりコアをハッキングしたりと言ったここまで露骨な、かつ直接的な行動を取るようになったのは、織斑一夏が男性でありながらISを操縦可能と判明し、IS学園へと入学した：そして同じく篠ノ之束の妹だからという理由で家族や幼なじみで想い人である一夏から引き離された篠ノ之箒が日本政府によりIS学園に入学させられて以降の事だ。

しかも厄介な事に妹の箒に頼まれてご丁寧にもコアから新造した第4世代機：一応一夏の専用機『白式』も第4世代に分類されるが、あくまで要となる『展開装甲』が使われているのはごく一部である：の『紅椿』などという『爆弾』まで製造している。

未だに世界各国では漸く第3世代機が開発されたという状況で一足飛びに完全な第4世代機だ。しかも当然コアは未登録なので『紅椿』並びに篠ノ之箒の帰属を巡って今後織斑一夏共々その身柄を確保しようとする各国の動きが活発化してくるだろう。中には非合法的な手段を取ってくる組織もあるかも知れない。『亡国機業』に至っては既に狙ってきているが。

そんな妹やその幼なじみ、それにその友人達を危険に晒し、あまつさえ妹には彼女自身が力を望んでいたとはいえ、核弾頭級の爆弾を

手渡した篠ノ之束について和也は内心思う所がある。

和也は兄弟姉妹がないから分らないが、仮にも家族…姉ならば妹の頼みが間違っていると思うのであれば、敢えてそれを突っぱねる事も必要なのではないかと思う。家族の為を思うなら尚更だ。現に篠ノ之束はそのお陰で余計な苦しみや悩みを抱え込んでしまっている。

（だが今回は少し毛色が違うな…この研究所には織斑一夏も、篠ノ之箒も直接関わっている訳じゃない…敢えて言えば一夏君や箒の友人でもあるセシリア嬢くらいだが…やはり妙だ）

しかし今回は一夏も箒も特には関わっていない。一応それ以前にもそうしたケースは多々あるのだが、無人ISまで持ち出したケースは今のところ和也は知らない。

だから和也は暫く思考を巡らせる。何か見落としが無いか、何か意外な発見がないかを確認する。

リチャードの方も今回の件に関してはやはり重く見ているのか、研究データを眺めている。

ふと和也が研究データが書かれた書類の一つを無造作に取って中身を見してみる。

「バーナード所長、このデータなんですけど…」

「それですか？それは昨日お話した海底探査用ISに関する実験データですね」

「このデータとか見た限りでは実機も制作されたみたいですが…」

「ええ。実際に国際IS委員会の協力でなんとか試作機が完成して何度かこの島の近海で運用試験を行ったのですが…やはり上手く行かなかったのでコアを初期化して返却して、それっきりです」

確か昨日リチャードやセシリアと話していた海底探査用ISの稼働データであるらしい。専門的な事は分からないが、実際に実機が製造されて実験されたという事くらいは和也にでも分かる。

そうしてパラパラと書類を捲っていた和也だが、ふとあるページに目が止まる。

そしてリチャードに向き直り、尋ねる。

「あの、このページの記述によるとこの海底探査用のIS開発には神敬介が協力している旨が書かれていますか…？」

「ええ。神博士には確かに協力を依頼しました。やはり深海開発用改造人間…『カイゾーグ』の生きた稼働データや経歴ばかりは論文では理解のしようがありませんから」

すると和也は何か思い当たる節があったのか身を乗り出しながらリチャードに尋ねる。

「もしかしてこの研究所には敬介の…『カイゾーグ』の稼働データは残ってますか!？」

「ええ…電子媒体のものは何個か消去されていますが紙媒体のものでしたら大体は…」

「…それだ！…バーナード博士、襲撃の理由は恐らく海底探査用IS、そして『カイゾーグ』の生きた稼働データです」

そして和也は無人ISの…それを送り込んだと思しき篠ノ之束の目的を推測する。

恐らく狙いは世界広しと言えどもこの研究所くらいにしか存在しない海底探査用ISの…そして『カイゾーグ』のデータだ。

『カイゾーグ』は論文自体は普通に公開されている為学会ではその存在を認知されてはいるが、『国際宇宙開発研究所』に所属している『スーパー1』と異なりどの組織にも属していない事や大々的に公表されてはいない事もあり学会以外での認知度が低い上、まとまった稼働データがどの組織にも存在していないという特徴がある。

そしてオルコット海洋研究所が中心となり開発を進めてきた海底探査用ISにはその『カイゾーグ』の構造や稼働データ、それに敬介のアドバイスなどが参考にされて盛り込まれており、その為に必要な稼働データをまとめた形で測定している。

「しかし、そんなものの為にどうして襲撃など…？」

「確かに博士達からしてみれば『そんなもの』なのかも知れませんが…海底探査用ISのように『ある程度の深さを潜航可能なIS』というものの価値は大きいんです。特に軍事的には」

疑問を差し挟むリチャードに対して和也は首を振り答える。

確かにISは究極の機動兵器とされ、篠ノ之束の「ISを倒せるの

はISだけである」という言葉に象徴されるように既存の兵器を凌駕する『最強』の兵器として君臨している。

だがいくら性能面では既存の兵器を凌駕はしていても取って代わる事など不可能だ。ISはあくまで『最強』であって決して『万能』ではないのだ。

確かに戦車や戦闘機、軍艦と直接戦えば余裕で勝てるくらいには強い。その為特に戦闘機の立場を奪ってはいるが、だからと言ってそれらが担っている役割まで完全には奪う事は出来ない。

人間サイズに毛が生えたような大きさしかないISでは到底戦車のように歩兵に随伴して時に歩兵の盾となる事は出来ないし、気軽に空中給油が出来ない以上やはり長距離移動が必要な任務では戦闘機の方に分がある。軍艦に至っては論外だ。これは強さの問題ではなく兵器の特性、運用の問題だ。

その中でも少なくとも革命的な技術革新が起こらなければISではそもそも取って代わりようがないものがある…それは潜水艦だ。

『白騎士事件』後にISが兵器として運用が開始して暫くは、ISの評価試験を兼ねてそれ以外の兵器の模擬戦が数多く行われた。殆ど全てがIS側の圧勝で終わり、大半はIS側被撃墜ゼロとなっているが、逆にIS側が撃墜されたケースが全く無い訳ではない。実は過去に3例だけその事例がある。

その内の2例：日米合同演習、中露合同演習でIS側を撃墜したのは他でもない潜水艦だ。

ちなみに残る1例である英仏独合同演習ではなんと歩兵により撃墜

されたのだが、その撃墜した歩兵側が連携すれば怪人すら撃墜可能な対バダン戦闘部隊『SPIRITS』第10分隊元メンバーの3人であった事やIS側の連携や指揮系統に混乱や乱れがあった事、IS側の優位が大きく削がれる市街戦に持ち込まれた事、歩兵側のゲリラ戦術により当初の予定を大幅に超過して1週間もの長丁場になった事など、あまりにイレギュラーな要素が多過ぎて普通はカウントされない。

勿論残る2例も他兵種との連携やIS側の操縦者の練度の低さ、ISに対潜兵器が搭載されていなかった事などの装備面・技術面での問題、登場したばかりでまだ運用方法や戦術が確立していなかった事、連携の拙さなど多くの要因が絡み合っているのだが、やはり潜水艦のみが既存兵器の中で唯一ISを撃墜せしめたというのは大きい。

そんな事が出来た理由は潜水艦の最大の特徴であるその隠密性にある。

ISが『究極の機動兵器』ならば潜水艦は『究極のステルス兵器』とされている。その評価はIS登場後も覆っていない。

そもそも潜航した潜水艦を探知するには困難が伴う。水上でも水中でも目視では捉えられない。ソナーやレーダーが登場した後も潜水艦自体の静粛性や電子戦能力の向上に伴い発見はまだまだ困難だ。

現代でも平時から敵潜水艦の『音紋』を採取し、世界各地の海洋調査により海面下の自然状況を常に把握した上で、潜水艦を早期発見する事を重視した『空飛ぶコンピュータ』とも言われる高度な電子戦装備を搭載した哨戒機を二十四時間体制で飛ばしているくらいだ。

一方でIS側の潜水艦探知能力はお世辞にも高いとは言えない。

ISは元々宇宙開発用の次世代型高性能多機能宇宙服として開発され、広大な宇宙空間で行動する事を前提にしていた為その索敵能力自体はあらゆる兵器の中でもトップクラスなのだが、その機能の多くは特に視覚の補正に偏っている。

宇宙では大気などによる光の偏向がない為理論上視力が良ければ良い程より遠くまで見える。加えて音などを伝達する手段が無い為ハイパーセンサーは宇宙で最も必要とされる視覚の補正を重視している。

勿論他にもレーダーやソナー等のハイパーセンサーの補助を目的とした探知用装備は一通り搭載しているが、あくまで同じISや戦闘機や戦車等地上や空中の敵：つまり同じ土俵に立てる相手を前提としたものであり、潜航した潜水艦を捉えられるものではない。

勿論潜水艦単独では対空攻撃手段の乏しさもあり撃墜までは至らなかっただろうが、2例共にIS側が潜水艦を発見出来ずに手間取っている間に他の兵器により足止めされ、その隙に急浮上してきた潜水艦を直前まで探知出来ず、そのまま対空ミサイルの集中攻撃を受けて撃墜される、という流れであった。

とはいえ近年ではIS側も対潜装備の搭載や戦術の確立などによりこうもいかなくなっている。そもそも奇襲ならともかく真っ向から戦えば潜水艦側に勝ち目など無いに等しい。実際潜水艦側も殆どが浮上後にISにより一方的に撃破されたのだから。故に現在では比較的厄介ではあるがIS側としてはさほどの脅威ではない。

だが潜水艦の潜航能力：隠密性を持ったISが登場した場合は話は

別だ。下手をすると世界のパワーバランスがひっくり返りかねない。ISに対抗出来る兵器はISだけだ。だからこそ各国共に新型開発競争にしのぎを削っているのだ。

一方でIS自体の隠密性はさほど高くはない。少なくとも空中を飛んでくるISならハイパーセンサーや他の手段を使えばいくらかでも探知出来るので、仮に何処かの国が別の国にISで侵攻しようとしてもISで余裕を持って迎撃出来る。それは『銀の福音』暴走事件で証明されている。撃退出来るかは別問題だが、少なくとも交戦して足止めや時間稼ぎくらいなら出来る。

だが潜水艦同様に潜航された場合ISのハイパーセンサーでは探知出来ない。かと言って従来の対潜水艦システムもあまり期待出来ない。

サイズが小さ過ぎるのだ。潜水艦はサイズが大きい分まだ探知しやすい。だがISは人間サイズに毛が生えた程度の大きさしかない。ソナーやレーダーの死角にはいくらかでも入り込めるし、魚などと誤認する可能性もある。

つまり潜水艦と同等の潜航能力を持ったISが潜航して侵攻してきた場合、事前に探知するのは困難だ。しかも探知出来ても敵はIS。発見さえ出来ればいくらかでも対処のしようがある潜水艦と違って発見出来ても対処法が殆ど無いのだ。

それを各国軍が見逃すはずがなく、アメリカ・イスラエル共同開発の『銀の福音』には浅水域に限られるとはいえ水中潜航能力が試験的に付与されているし、イギリスではやはり浅水域限定だがISに潜航能力と水中戦能力を持たせるパッケージ『ソードフィッシュ』

が試作され、運用試験が行われていた。

そして静粛性では潜水艦に劣り比較的探知し易い筈のそれらですら模擬戦では従来のISに対して一定以上の隠密性を発揮していたとのデータも出ているし、『銀の福音』暴走事件でも水中に潜航した『銀の福音』を一時見失うという事態も発生している。

ましてや潜水艦と同等の潜航能力を付与出来ればもうISでもどうしようもない。日本やイギリスのように海に囲まれた国は勿論、アメリカやロシアなど海に面している国はいきなりISが自国領内に現れるかもしれないという恐怖を味わう事になるのだ。

そしてオルコット海洋研究所が開発していた海底探査用ISはデータを見た限りでは最大潜航深度が海底探査をするには浅過ぎるというだけで、平均的な潜水艦の潜航深度を航行するくらいなら問題無く可能であるらしい。

そのの各種データに加えて深海1万mで行動可能な深海開発用改造人間『カイゾーグ』の稼働データまで加われば潜水艦並の潜航能力を持ったISの完成へと大きく前進するだろう。これらのデータ群にはそれほどの価値がある。

(とはいえこういうの狙うとしたら篠ノ之東よりはむしろ『亡国機業』の連中だろうな)

リチャードに自らの推測を述べながらも和也は内心疑念を抱く。

リチャードにはそう話したし、自身もそう推測はしたが、これは他に無人ISをけしかけるに足る理由が見当たらないからだ。単なる気まぐれなどであれば和也の予想は破綻する。

それに比べれば『亡国機業』がこれを狙うのなら分かる。元々表沙汰には出来ないような事を色々とやっている連中だ。潜航能力を持ったISが世界で一番欲しいであろう。

だからこそイギリスで評価試験を終え、制式採用が決定した直後の『ソードフィッシュ』を同じくイギリス開発の第3世代機でBT兵器搭載機『サイレント・ゼフィルス』と同時に強奪したのだろう。或いは『銀の福音』を狙ったのも単に第3世代機だから、と言うだけではなく『銀の福音』の水中潜航能力にも目を着けたからなのかもしれない。

しかも『亡国機業』は欲しいと思えば強奪などの非合法的な手段も辞さない何処かの音痴なガキ大将みたいな連中だ。海底探査用ISや『カイゾーグ』のデータを強奪しに来てもおかしくないのかもしれない。

そんな事を内心考えていた和也だが、所長室に研究員が入ってきた事で一旦思考を中断する。

「どうしました？何か問題が起きたんですか？高野君」

「いえ、この海域に漁船が入ってきましたね、先程こちらから無線を入れて追い返したんですが…」

「どうかしたのですか？」

「それが…どうやら漁船側は現在この海域が航行禁止海域に指定されたままとは気付いてなかったみたいで…何でもつい先程無線で禁止解除が通達されたので漁に出たとの事で。勿論違うので事情を

話してお引き取り願ったのですが…」

「おかしな話ですね…我々からそのような連絡を入れている筈が無いのですが…？」

入ってきた高野という研究員の報告を聞きリチャードは首を傾げる。

この海域は昨晚無人ISが襲撃してきた影響で日本政府に通達した上で現在は航行禁止海域に指定されている。

(…出されていない禁止解除の通達…漁船…何か引つ掛かるな…)

和也は再び思考を開始する。

今回のような事例を和也はいくつか知っている。例えば『銀の福音』暴走事件に際して封鎖海域内を航行していたとされる『密漁船』だ。

当初は単なる密漁船とみなされていたその船だが、国際IS委員会の光明寺ミツ子博士をリーダーにした『銀の福音』暴走事件の調査・検証チームがその漁船に改めて聴取した所、『銀の福音』とIS学園の専用機持ち達が交戦する少し前に封鎖解除の通達が来たとの事だ。勿論IS学園側はそのような通達は出していないので、伝達過程で何らかのミスがあったのではないかと報告書には書かれていたが、和也は引つ掛かりを覚えていた。

何故ならその漁船が封鎖海域に侵入したのとほぼ同時にその付近を哨戒していた国防軍の哨戒機が潜水艦らしきものを探知したという話も入っているからだ。

それに『サイレント・ゼフィルス』及び『ソードフィッシュ』強奪

の際にも似たような事が起こっている。これは単なる偶然なのか、それとも…

（何にせよ敬介には連絡を入れた方が良さそうだな…）

和也はそう決めるとリチャードに敬介に通信を入れる旨を告げて所長室を辞すと、通信機を取り出した。

間もなく時刻が正午を回る頃、ジョナサン・オルコットの別荘のリビングで、神敬介とセシリア・オルコットは遺品整理を一旦中断して早めの昼食を摂っていた。

「ご馳走様でした。けど驚きましたわ…敬介さん、料理もお上手なんですわね」

「お粗末様でした。なに、一人暮らしは長かったし、よく海辺で野宿してたからね。それにそんな大したものには作れないしさ」

セシリアの称賛に笑って首を振りながら敬介は食器を片付ける。

先程まで二人が食べていたのは魚介類のパエリアだ。本場のパエリアは山の幸を使う料理だと敬介は知っているが、生憎ここは海に囲

まれた島なので釣ってきた魚介類を材料にした。

「けどおっしゃって頂けたのなら私も手伝いましたのに……」

「いいよ、気にしなくて。それより早く遺品の整理も終わらせないと。もうジョージの分は半分くらいは整理し終わった筈だし、残りも早く済ませないと」

食器の片付けを終えると敬介はテーブルに置いておいた遺品の目録に目を通す。一応最初に目録だけは取っておいたお陰で作業の進捗状況が分かるだけ良かったのかもしれない。

遺品の整理の方は予想より早く進展していた。やはり家族……ジョージの實の娘であるセシリアが居ると何かとやりやすい。

そうしてセシリアを促すと敬介は再び遺品の整理を開始する。遺品の中には

「これって……父が母に宛てて送ったラブレターみたいですね。けど父がここまで情熱的な人だったなんて……」

「そう言えばリサが保管してたのをジョージが引き取ったって前に言ってたっけ。ジョージってわりとそんな所があったからね。まあこれを大切に保管してたりサモリサで結構情熱的な……」

「……きつと父と母はこうして手紙のやり取りだけでなく、海辺で何回も何回も逢瀬を重ねて……そして和也お義兄様や千冬お義姉様のように最初は喧嘩をしながら、でも徐々に素直になって……ああ羨ましい……私と一夏さんも父と母、それに和也お義兄様と千冬お義

姉様のような関係に早く…」

「…セシリア？セシリア、聞こえてる？…駄目だ、完全に向こう側にトリップしてるみたいだ」

ジョージがリサに送り、リサが大切に保管していたものをジョージが引き取ったラブレターの数々や、

「これは…ジョージの大学時代のレポートか。ちゃんと返却されたのを粗方残してるなんてジョージらしいな。俺も時々ジョナサン先生に頼まれてレポートの添削の手伝いをしてたっけな」

「それに字がかなり綺麗ですわ…きっと学生時代から几帳面だったのでしょうね…それでこちらの妙に字が汚いのは…？」

「…それはリサのだね。多分そっちはジョナサン先生が残しといたヤツだと思うよ。リサは返却されるとすぐ捨ててたし。まあ一回見ればすぐ覚えて忘れなかつたし、次のレポートには反映されてたから取っておく必要はなかつたのかもね」

「…母はやはり豪快な方でしたのね。私、正直母のようににはなれそ
うな気がしませんわ…」

大学時代のレポートや、

「これは…俺とジョナサン先生、それにジョージとリサとで海洋調査に行つた時の航海日誌か。よくこんなもの取っておいたな…」

「確かに記録者欄に敬介さんの名前もございますわね…何か途中から敬介さんと祖父しか書かなくなってきたんですが…？」

「ああ、二人共調査に夢中になり過ぎて順番で航海日誌書いてくつて事すっかり忘れてたらしくてさ。仕方ないから俺とジョナサン先生とで交代で書く事にしたんだ」

「そういう所はやはり似たもの同士でしたのね、父も母も…」

敬介がジョナサン、ジョージ、リサと海洋調査に出かけた際の航海日誌などが遺されていた。

そんな敬介にとっては他愛もない…しかし懐かしい遺品の数々はセシリアにとっては新鮮なものであつたらしく作業に没頭している。

それを微笑ましく思いながら見ていた敬介だがそこにポケットに入れている通信機が鳴る。恐らく滝和也からだろう。

「ごめん、セシリア、少し一人で作業してくれないか？滝さんから何か連絡があるみたいだし」

「分かりました。これくらいなら私一人でも続けられますわ」

セシリアに断ると敬介は遺品整理の邪魔にならないように別荘の外へと出る。そして通信に出る。

『取り込み中のところ悪いな、敬介』

「いえ、こつちこそわざわざ時間を取らせてしまって…何かありましたか？」

『いや、何かあつたつて訳じゃないんだが…少し気になる事があつ

てな。「亡国機業」の連中が…」

「…俺の…『カイゾーグ』の稼働データと海底探査用ISのデータ奪取に動き出さないか、という事ですね？」

『何だ、お前気付いてたのかよ？』

「ええ。先輩方からそうした情報も入ってきていますし、それがどれだけ軍事的に価値があるものかは俺も理解はしているつもりですから」

『だったら話は早いな…今から動けるか？遺品整理があるならいいんだが…こいつは俺の勤みたいなものだ』

「いえ、俺もそろそろ動き出すのではないかと思ってましたし…整理の方はセシリアに任せますから」

『…いいのか？セシリア嬢に言わなくて』

「…これは元をただせば俺が原因みたいなものですから…彼女を巻き込みたくありません。それに…セシリアがリサやジョージの思い出にひたれる貴重な一時を、ふいにはしたくないですから」

『…分かった。ならば後はお前に任せる。研究所の方は俺がバーナード所長と話して対策はしておくからお前は連中の動きにだけ対処してくれ』

「…お願いします」

そこで通信を切ると再び別荘の中へと戻る。

「セシリア、悪いけど暫く一人で作業続けててくれないか？少し研究所の方から呼び出されたんだ」

「私は構いませんわ。ただ出来ればお早めに戻ってきて下さいね？」

「ああ、努力はするよ」

（ごめん、セシリア…）

騙す形になるセシリアに心の中で謝罪しながら敬介は再び別荘を出ると、停めておいたバイクに跨がりエンジンをかけて走り出した。

『美山島』東部の海岸。切り立った崖が並ぶ複雑な地形をした此処にウエットスーツを着た9人の女達がいた。

その中でもリーダー格らしき女が通信機で何やら話し始める。

「こちら『マーリン1』。予定通りポイントE-1地点に上陸に成功。引き続きこれより『ポセイドン』並びに『トリトン』のデータ確保に移行する。以上」

それだけ言つと『マーリン1』と言つた女は通信を切る。

女達は所属する組織の命を受けてこの島にある『オルコット海洋研究所』に存在する『ポセイドン』：深海開発用改造人間『カイゾーグ』と『トリトン』：海底探査用ISの稼働データを確保する為に潜入してきた。

近くの港町の漁港に関係者を装い禁止指定解除を傳達し、それにつられて漁に出て海洋研究所側がその対応に終われている内に潜水艇で接近しながら隠密上陸を決行し、こうして無事に成功した。

後はオルコット海洋研究所へと潜入し、目的のデータを入手した後、に再び此処に集合してからこの島を脱出する手筈になっている。

一応目立ち過ぎて向こうには気付かれないように武装は殆ど持つてきていない。だが万が一の為にISも待機形態にして所持している。ISを展開すれば目立つので隠密作戦としては失敗になる。だからあくまで気付かれた場合：特にこちらにもISを持ち出さなければ対抗出来ないISや『マスクドライダー』と遭遇した時くらいにしか使う気はない。

「ふん、ちよろいもんさ。と言つても民間の研究所なんだから当たり前か…」

「少なくともIS学園みたいに余程厳しい所じゃなきゃISも持ち込める分まだまだ楽さね」

「…無駄口を叩くな。気付かれたらどうする?…とにかくこの後は予定通りに散会するぞ。情報ではインターポール捜査官の滝和也やイギリスの代表候補生であるセシリア・オルコットもこの島に滞在

していると聞く。その二人にバレると厄介な事になる」

「特にセシリア・オルコットは『サイレント・ゼファイルス』や『ソードフィッシュ』を私達にまんまと奪取された国の代表候補生だからね…私達が『亡国機業』の一員と知ったら目の敵にしてくるでしょうね。そうなると相手は仮にも代表候補生。専用機を持ち出されると色々と厄介だわ」

「そうね。だからこそセシリア・オルコットがこちらに気付く前に事を終わらせるわよ。そうすれば…」

「そう、上手くいくかな？」

女達が話している所に男の声が掛けられる。

「誰!？」

「一体何処から!？」

「あそこよ!」

女達は騒然とするが、やがて男の姿を見つけると身構える。

男は崖の陰から出てくると女達の前に立つ。それに対してリーダー格らしき『マーリン1』が男と対峙して言葉を発する。

「何故、私達が此処に上陸すると気付いたのかしら？」

「この島の近海は調査済みだ。地形的にもある程度潜水艇で接近可能な水深があつてかつ物陰があつて上陸が気付かれにくい場所と言

「つたら此処しかないからな」

「流石と言うべきね、『カイゾーグ』…神敬介」

『マーリン1』は男…神敬介にそう言つと他の女達がどよめき出す。当然だ。データどころか『カイゾーグ』そのものが目の前に現れたのだから。

しかし敬介は構わずに続ける。

「目的は…聞く必要はないか。俺や海底探査用ISのデータの奪取が目的だろうからな」

「ご名答。でも状況が変わつたわ…此処に生きてデータがあるのだから。おとなしく私達と一緒に来て貰うわよ？神敬介…嫌なら嫌で良いわ。力尽くで連れて行くだけ…それに死体を解析出来るだけかなりのデータを得られるでしょうし」

「そのついでにこの島にいるセシリア・オルコットの身柄も確保しておこうかしら？別に殺してしまっても構わないのだけれどもやはり専用機持ちだものね」

「安い挑発だな…言いたい事はそれだけか？」

敬介は険しい表情で女達を睨み付ける。構わずに『マーリン1』は他の女達に告げる。

「各員、ISを展開。これより作戦を変更して対『マスクドライダー』戦闘に移行する」

「し、しかし!？」

「…言ったでしょう? ヤツは深海開発用改造人間『カイゾーグ』…
そして組織の邪魔をしてきた『マスクライダー』の一人よ。対人
火器では歯が立たない…そもそもISでなければ対抗しようがない
わ」

「もつとも、今の我々は今迄と違って勝ち筋は十分にあるけれどね
…行くわよ!」

そう『マーリン1』が合図すると9人の女達は一斉に黒いISを装
着する。外見から察するに敬介が前に『メルクリウス号』などで戦
った機体と同型だろう。

しかし敬介は臆しない。敵がISを装着すると見るやそのまま両腕
を腰まで引き、上に突き出した後に『X』の字を描くように開き、
左腕を腰に引き、右腕を左斜め上に突き出す。

「大変身!！」

すると敬介の身体が銀色の『カイゾーグ』のそれへと変わり、顔面
に『レッドアイザー』と『パーフェクター』が装着され、仮面を形
作る。

「…行くわよ、『カイゾーグ』」

「…来い、『亡国機業』」

姿が変わった敬介とISを装着した女達はそう呟くとどちらからと
なく相手に向かって動き始めた。

『美山島』近海の海中で10の影が水中を動き回る。

その内9つは水中戦用パッケージ『ソードフィッシュ』を装備した黒いISだ。その姿は上半身を中心に装甲や追加武装、増槽などが装備され、頭部にも追加装甲が施された姿はソードフィッシュ…メカジキよりもどことなく海亀に似ている。

一方で残る1つは銀色の『カイゾーグ』の姿となった神敬介だ。

『ソードフィッシュ』を装備した9機のISは手に持ったアサルトライフルに似た銃器から魚雷を発射するが、敬介はそれを躲すと脚部のエア・ジェットを駆使して接近する。

「Xスクリュードライバー！」

そのまま敬介は錐揉み回転しながら片足で蹴りを繰り返し、9機を蹴散らす。

「10のー！」

IS側もスラスターを使って敬介に向き直り攻撃しようとするが、

その動きは敬介に比べて鈍い。

そのまま敬介は漸く追尾してきた魚雷を上手く誘導してISへと当てる。

「ライドルホイップ！」

更に敬介はベルトに装着された『ライドル』を引き抜きレイピアに似た『ライドルホイップ』を片手に敵の間を縫うように移動しながらライドルホイップで斬り付けていく。

「ちいつ！この距離では魚雷が…！」

女達は齒噛みしながらも近接ブレードを呼び出し敬介に切り掛かるが、自由自在に海中を舞うように上下左右にひらりと躲し、素早く動き回る敬介を捉える事が出来ない。

「ライドルスティック！」

そのまま敬介はライドルのスイッチを操作して両端に握りのついた棒状の『ライドルスティック』へと変形させ、敵が体勢を立て直す暇も与えずにエア・ジェットを駆使して突撃する。

「ライドルアタック！」

そのまま1機に渾身の突きを見舞うと敬介はライドルスティックでその1機を突き、薙ぎ、殴り、攻め立てる。

「これでも食らいなさい！」

女達はバツクパツクから魚雷を乱射し敬介をどうにかISから引き離す。

敬介は追尾してくる魚雷を引き離し、魚雷の間をくぐり抜け、ライドルステイックで叩き落とし、どうにかしてやり過ぎすと再び女達の所へと突撃する。

「Xジャイロキック！」

そのまま回転しながら回し蹴りの要領で周囲のISに纏めて蹴りを入れる。

「やはり数がいても水中戦では分が悪いか…」

リーダー格の女はそう呟く。いくら水中戦用と言ってもこちらは追加スラスターなどを使ってどうにか水中を動き回れるだけ、向こうはまるで空でも飛んでいるかのように三次元的な機動で動きまくり、魚雷を撃つ前に間合いに入り込んだかと思えばブレードを構える前にリーチから離れる。IS側は今までとは逆に敬介の水中における機動力の圧倒的優位の前に苦戦を強いられていた。

「けどこちらにも対応策はあるわ…いくわよ、皆！」

そうリーダー格の女が言うと9機は一斉に魚雷を発射し、敬介の前で炸裂させ、視界を塞ぐ。

その内5機が魚雷を乱射して敬介を牽制していく内に残る4機は上昇し、水上に出るとスラスターを噴かして飛び上がる。

「これなら…どうー！」

そのまま4機はバックパック部分から対潜ミサイルを発射する。ミサイルは目標付近に到達すると弾頭から魚雷を切り離して着水させ、そのまま敬介の上から降り注ぐように魚雷が追尾してくる。加えて水中の魚雷も敬介を追い込むように追尾してくると、やむを得ず敬介はライドルを使い防御する。

その際に敬介は前後左右と上から魚雷や対潜ミサイルの雨を受け、防戦一方となる。

しかし敬介は下へと逃れ、魚雷を引き離す。それを5機が水中から追い掛け、空中から4機が追い掛け魚雷の雨を降らせる。

だが敬介はそれらを巧く躲し、『ソードフィッシュ』では潜航出来ない深度まで潜航し、急速旋回や急潜航、急浮上、急回頭など素早くを繰り返して魚雷を欺瞞し、やり過ごす。

そのまま再び浮上して水中の敵をライドルを駆使して追い詰めながら敬介と女達は激しく交戦し続け、当初いた場所からどんどん遠ざかってきている。

(まずいな…)

敬介は内心舌打ちする。この海域は敬介が調査し続けてきた場所だ。海底の地形や水流の向きや速さで大体今いる場所が島のどの位置に当たるかは分かる。

現在敬介達はセシリア・オルコットがいる別荘へと近付いてきている。出来れば引き離したい所だが、水中はともかく空中を自在に飛び回って対潜ミサイルを撃ってくる敵が邪魔で思うようにいかない。

空中での機動力では圧倒的に劣る上、飛び道具の無い敬介はこのまま水中、空中の両面から攻め続けられればジリ貧だ。

(なら…またこちらのフィールドに戻って貰うまでだ！)

敬介はそう決めるとISの1機へとエア・ジェットを噴射して急接近する。

敵はバツクパツクから魚雷を発射しようとするがさかさ敬介は上へと動き、そのまま敵の背後を取る。

「ライドルロングポール！」

そしてまたもライドルのスイッチを操作すると棒高跳び用のポールに似た長大な棒状の『ロングポール』へと変形させると、敵の背中を地面代わりに突き立ててエア・ジェットを併用して一気に空中へと飛び上がる。

「クツ!?!」

空中のISがそれに気付くや今度はアサルトライフルを呼び出し攻撃しようとするが…

「そっは…行くか！」

敬介はロングポールを振るい、纏めて海中へと叩き落とす。

同時に海中から対空ミサイルが発射され、敬介に向かってくる。

「魚雷だけではないか…！」

自由落下中でミサイルを回避出来ない敬介は防御を選択し、ミサイルの嵐に曝される。それをどうにかして切り抜けると再びライフルのスイッチを操作してライドルスティックに戻すと再び海中に潜り、手近な敵にライドルスティックを思い切り突き立てる。

「エレクトリックパワー！」

そのままライドルスティックから高圧電流を流し込む。その一撃で限界を迎えたのかそのISは『絶対防御』を発動させて沈黙する。

そのISを無造作に掴んで陸地まで放り投げると、敬介はライドルを残る8機へ向けて構え直す。

「お前達の企みは…俺が止めてみせる！」

そのままエア・ジェットを噴射して敬介は残る敵へと挑みかかっていた。

ジョナサン・オルコットの別荘の中でセシリア・オルコットはその中に遺されていたジョージ・オルコットの遺品の整理に没頭していた。

セシリアの実家には母であり、オルコット家先代当主であるリサ・オルコットの遺品は多数残っていた。そちらの整理はセシリア自身も行っていた為リサゆかりの品は見た事があるし、今もセシリアの実家やIS学園学生寮のセシリアの部屋にはセシリア自身が引き取ったリサの遺品が少なからずある。

だが婿養子であり、途中からはリサと事実上の別居状態が続いていたジョージに関する遺品は殆ど遺されていなかった。それにセシリアも遺品を整理していた頃には…神敬介に会い、父の本当の姿に気付くまではジョージの事を疎んじ、軽蔑していた事もあって僅かな遺品も皆他人に譲り渡してしまい、セシリアの手元には一つも残っていない。

(馬鹿ね、セシリア・オルコット…貴女が今まで軽蔑していた人は、こんなにも強くて、優しくて…素晴らしい人だったと言うのに…)

ジョージの遺品を手に取りながら内心セシリアは自嘲する。

ジョージの遺品を整理していく内に、今までもろくに省みようともしなかった父がどんな人間であったかがよく分かってきた。

穏やかで、温厚で、一見気弱だが芯は強くて、海と妻と…そして娘をこよなく愛していて…遺品にあった日記や写真、手紙などを見てそれがしみじみと感じられた。

同時にセシリアは臆気に残っている父と母、そして自分の家族三人と一緒に過ごした思い出を頭の中から引き出し、それに浸っていた。

「きつと、敬介さんも…」

そして自身の父親代わりである敬介の事を思い浮かべる。

敬介もまた父親でセシリアの祖父ジョナサンとは友人で研究仲間であつた神啓太郎の事を嫌い、反発していたと聞いている。

話を聞く限り啓太郎はかなり厳格で、頑固で、気難しく、口うるさくて、不器用な人物だったらしい。敬介が嫌って反発したくなるのも少し分かる。

だが同時に優しく、温かく、勇敢で…何より息子を深く愛していたのだとも分かる。だからこそ自らの命を投げうって敬介を『カイゾーグ』へと蘇生させたのだらう。

そして今の自分と同じ気持ちになつていたのかもかもしれない。この別荘には生前啓太郎がジョナサンに送つた書簡など啓太郎の遺品とも言える物が僅かだが残っている。きっと敬介もそれを見て色々な思いに耽つていたのだらう。

今いる書齋に立て掛けられている若き日のジョナサンと啓太郎の写真もその内の一つだ。

「この写真は…敬介さんにお譲りした方がいいでしょうね」

そう言つて一旦作業の手を止め、写真立てに手を掛けようとした瞬間、爆発音と衝撃が響く。

「何!？」

慌ててセシリアは別荘から飛び出すとそのまま敬介がバイクで走っ

ていった道を駆け出す。

嫌な予感がする。敬介が何か自分の知らない所で危ない目に遭っている気がする。別に何の根拠もない。ただの勘だ。

そのまま走り続けていたセシリアだが、やがて海辺にある開けた道へと出る。それと同時に海から5つの影がほぼ同時に飛び出してくる。

「IS！？それに…敬介さん！？」

海中から飛び出してきたのは4機の黒いISと銀色の騎士…『カイゾーグ』の姿をした敬介であった。

「あのISはまさか…それにあのパッケージは『ソードフィッシュ』！？」

同時にセシリアはその黒いISがかって自分や敬介と交戦した『亡国機業』の機体と同じ機種である事、そしてそのISが装着している海亀を思わせるパッケージがかつてイギリスから『サイレント・ゼフィルス』共々奪取された水中戦用パッケージ『ソードフィッシュ』であると気が付く。恐らく奪取したものを複製したのだろう。セシリアが見た『ソードフィッシュ』とは細部が異なるので微妙に変更や改良を施したのかもしれない。

今敬介はライドルスティックを振るい4機のISと渡り合っている。4機は距離をとってアサルトライフルを放つが、ライドルに弾かれ、逆にロングポールに変形させたライドルで1機を海へと叩き返す。

そこに海中から対空ミサイルが、空中の残る3機からも空対空ミサ

イルらしきミサイルが敬介へと浴びせられ、回避する手段の無い敬介はやむを得ず追撃を諦め防御に徹する。それを今までずっと繰り返してきたのか、敬介の身体には何ヶ所も焦げ跡があった。

やがてIS側はそれを唾然としていたセシリアに気付いたのかアサルトライフルを向ける。

「セシリア！？やらせは…！」

その直前にセシリアに気付いた敬介はエア・ジェットを使いセシリアの下に向かうと、そのまま盾となるようにセシリアの前に立つ。

「ライドルバリア！」

そしてロングポールの形状にしたライドルを風車のように高速回転させて、アサルトライフルから放たれる銃弾を全て弾いて防ぎ切る。ライドルを回転させて敵の攻撃を防ぎながら敬介はセシリアに声をかける。

「無事か！？セシリア！」

「何とか！敬介さん、あのISは…！」

「ああ！『亡国機業』の連中で…『ソードフィッシュ』だ！」

「そうですか…ならば！」

「駄目だセシリア！後退するんだ！」

それを聞いて左耳のイヤークラスに手をかけるセシリアを敬介が制

止する。

「今こんな所でISを展開したら装甲が装着されるより君に銃弾が当たる方が早い！だから今は大人しく退くんだ！」

「しかし！」

「それに君は連中に対して冷静に対処出来るのか！？『サイレント・ゼフィルス』や『ソードフィッシュ』を君の祖国から奪い、名誉を傷つけ、あまつさえ奪取した『ソードフィッシュ』を使ってくる連中に！」

「私は冷静ですわ！こんな連中！徹底的に……」

「全然冷静になれてない！むしろ頭に血が昇り過ぎだ！言いたくは無いが冷静さを完全に無くした今の君じゃ足手纏いにしかない！今は大人しく引き下がって、頭を冷やすんだ」

「で、ですが敬介さんは……！？」

「セシリア・オルコット！君は……貴女はイングランドの名門貴族、オルコット家の当主だ！その当主たるものが先祖の……亡きジョナサン・オルコットを蔑ろにしているのか！？」

「それに貴女のお父上の遺品を放っておくのは親不孝じゃないのか！？お母上のご遺志を無駄にしているのか！？」

「だから此処は俺に任せて貴女は遺品の整理を！それがオルコット家当主として、ジョナサン・オルコットの孫として、ジョージ・オルコットトリサ・オルコットの娘として貴女がやるべき事だ！」

「で、でも…」

「それに」

それまでとは一変して敬介は穏やかな口調でセシリアに語りかける。

「あそこにはジヨナサン先生やジョージ、リサ…俺の恩人や友人の遺品がある。何より神啓太郎…俺の親父の遺品もほんの少しだけあるんだ。だから、今は俺の代わりにそれをお願いしてもいいかな？」

「それと、俺は君にはジョージの思い出の品をちゃんと選んで持っ
てもらいたいし…何より家族揃ってた時の事、思い出してもら
いたいし…俺は、それさえ出来なかったから、セシリアにはそうし
て欲しいんだ…そんな俺の個人的なわがままなんだけど、ついでに
聞いてくれないか？」

「敬介さん…」

「それに…大丈夫さ！こういう事は慣れてるんだ。こんな奴らに
は負けはしない。連中には君にも、君の家族の思い出にも指一本触
れさせたりはしない。そして、俺も必ず戻ってくる。それくらいは
…信じてくれないか？」

「…お願いします！」

それだけ言うとセシリアは振り返らずに走り出す。

そこにISが攻撃を加えようとするが、敬介のライドルや呼び出し

た『クルーザー』により3機とも海へと叩き落とされる。

「彼女に…セシリアに手出しはさせない！」

そのまま敬介はISを追ってまたも海の中へと飛び込んでいく。

そのまま別荘へと駆け戻ったセシリアは、敬介に言われた通りに遺品整理を再開した。

「敬介さんの好意を…無駄にする訳には…！」

無駄にする訳にはいかない。敬介が身体を張って稼いでくれている貴重な時間だ。足手纏いなどとまで言って叱咤激励してくれてまでこちらが少しでも長く父の遺品と…父の思い出と共に居られるようにと取り計らってくれたのだ。その敬介の好意を、意志を、自分の感情で無駄にする訳にはいかない。

だからオルコット家の当主として、ジョナサンの孫として、ジョージとリサの子として…そして敬介の『娘』として今自分がやらなければならない事…ジョージ・オルコットの遺品整理を行わなければならない。

だから、再び爆発音が聞こえてきてもセシリアは構わずに敬介が作ってくれた遺品の目録に目を通す。

またも…今度は先程より大きい衝撃が辺り一帯から響いてきても無視してジョージの書いた書簡を確認する。

窓からISのミサイルがこちらに飛んでくるのが、見え、それを敬介が叩き落とすのを見ても我慢して目録を開き整理済の項目にチェ

ツクを入れる。

こちらに…別荘目がけてやってくるミサイルや銃弾の雨をライドルや時に自らの身を盾にして防ぎ続ける光景が視界に入ってきてても、振り払って次の遺品に手をかける。

そして、それらを防ぎ切り、幾度となく海中や空中からのミサイルに曝され身体の何ヶ所も傷付き、黒焦げになって尚構わずに『クルーザー』を駆り空を駆けて奮戦する敬介の姿が見えても、ジョージが書いたノートを捲る…

「もう…沢山よ…!」

手が止まる。限界だった。そのままノートを放り出し、一目散に外へと走り出す。

そのまま別荘の近くで交戦している敬介とISを見上げると岬のように海に突き出ている先に走り出す。

「じめんなさい、お祖父様、パパ、ママ、敬介さん

私は、もう敬介さんが、私の為に傷付く事が我慢出来ません

オルコット家当主として、ジョナサン・オルコットの孫として、
ジョージ・オルコットとリサ・オルコットの子として、神敬介の意
志を託された者として、これから私がやることは間違っているのか
もしれません。それは、分かっています

けれど、これ以上あの時父や母を失った時と同じ悲しみや痛みを

そして敬介さんが 今、生きて私の父親代わりとなってくれてい
るあの人が傷付くのは私が 一人の人間セシリア・オルコットとし
ての私が許せなくて、耐えられないのです

家名を汚し、先祖の顔に泥を塗る私を、親不孝な私を許してくれ
などとは申しません ですが、見ていて下さい

これが、私 セシリア・オルコットの生き様ですわー!!

崖から飛び降りながら左耳の青いイヤークラスを右手で引きちぎるように取り払い、掲げる。

「SET UP!!」

そのまま緊急起動用の音声コードを叫ぶとセシリアのIS学園制服が即座に青いISスーツへと入れ替わり、イヤークラスから量子化されたISが展開され、セシリアの身体に蒼い装甲が装着され、武装が装備される。

緊急起動用コードにより即座に装着可能な代償として一瞬システムの起動が遅れるが、そのまま崖下に落下する直前に全システムが起動に成功した事で、ギリギリでスラスタとPICを駆使して踏み止まり、そのまま急上昇を開始する。

「ぐっ…まだ…やられる訳には…！」

セシリアを守るべくミサイルや銃撃にその身を晒し続けた敬介の肉体にはダメージが蓄積されつつあった。

動きも鈍り始め、海中と空中から放たれるミサイルをライドルステイクで防ぐが、何発かは直撃し、動きが止まる。

しかし敬介は怯まずに『クーラーザー』に跨がり空中の4機の敵とライドルで激しく打ち合う。そこに残る4機がアサルトライフルで銃撃しながら空中へと上昇してくる。そこに空中の残る4機も銃撃を加え、集中砲火を浴びせる。

どうにかして防御する敬介だが、攻撃は中断される。やはり空中と海中から同時に攻撃されると敬介と言えども厳しい。

（せめてどちらかに敵を集中させられれば…！）

敬介は舌打ちしながらもまだ諦めない。簡単に倒れるつもりはない。自分の後ろにはセシリアがいるのだから。

それを見越してかりーダー格らしき『マーリン1』が口を開く。

「流石は『マスクライダー』、しぶといな。だがこのまま行けば

お前は消耗し、我々も必要の無い痛手を受ける…どうだ？ここで手打ちとしないか？お前が大人しく我々と共に来るのであれば、我々はセシリア・オルコットに手を出さずに手を引こう」

「断る。俺が盾になると見越していたとはいえセシリアのいる別荘に向けてミサイルを撃ってきた人間の言う事など、信用するに値しない。どうせここで狙うか、どんなに良く見積もっても機会を改めてセシリアを狙うだけだろう」

「なるほど、頭自体は悪くないらしいが…やはり貴様は大馬鹿だな。我々も今まで貴様達に一方的にやられてきた時と同じではない。機体の性能を上げ、練度を上げ、装備を作り、戦術を練り上げ…貴様達に対抗し、越え得る力を手に入れた。その結果が、貴様の今のそのポロポロの肉体だ。意地を張るな。我々は寛容だ。我々に協力するのであれば命は保証しよう。忠誠を誓い、望めば地位も力も思うがままだ。貴様の力、その頭脳、無為に殺すには惜しい…我々の軍門に下れ。そして我々の為に…我々の理想の為に働くといい。それが互いにとって最善の道であると貴様もいずれ解るだろう」

「…ふざけるな…！誰がお前達の…親父を殺した『GOD機関』と同じ手口を使う『亡国機業』の言いなりになど！」

「そうか…残念だ。ではここで死ぬ。貴様の言う『正義』とやらを抱いて勝手に溺死しろ。もう私は止めん」

「その言葉待ってたわ！覚悟しなさい、『マスクドライダー』！あんな達がISの敵じゃ…私達の敵じゃないとここで証明してやるんだから！」

「それと安心しな！あんたの仲間達もセシリア・オルコットも後で

纏めて地獄に送ってやるんだからな！」

そう言っつて女達はめいめいバツクバツクを展開し、ミサイル発射口を敬介へと向ける。

「…やらせるものか…そのような暴挙、例えこの身体が砕け散ろうとも！この命に替えても！絶対にやらせるものか！！」

そう敬介は咆哮すると傷付いた身体にも構わずにライドルを女達に向けて構え直す。

それを嘲笑うように女達はバツクバツクからミサイルを…

「身体が砕け散るとか…命に替えても…そんな悲しい事を言わないで？」

その言葉と同時に上空からISに対してレーザービームとミサイルが降り注ぎ、バックパックからのミサイル発射が妨害される。

そして蒼い装甲を身に纏った長い金髪を美しくなびかせながら一人の女性が敬介と女達の前に舞い降りる。

「そんな言葉、貴方には似合わないわ？敬介」

「…リサ…？」

違つと頭では分かつていても思わず敬介は呟くが、やがて口を開く。

「まさか、君にそんな事を言われるとは思わなかったよ、セシリア」

「ごめんなさい、敬介さん…けどもう少し騙されて頂けても良かったのでは？」

「それは…難しいな。リサは俺を呼び捨てになんかしらないし…第一君は確かにリサによく似ているけど、その目はジョージにそっくりだからね」

そう言いながら敬介は自分の目の前に降り立った女性もとい少女…セシリア・オルコットへと向き直る。それを見るとセシリアが再び口を開く。

「お願いします、敬介さん…私も一緒に戦わせて下さい。敬介さんは私にとって祖父や両親…家族と同じ、大切な人なんです。ですか

ら、私はもうこれ以上敬介さんが私の為に傷付く姿を…見たくないんです」

「セシリア…ありがとうございます、俺の為にそこまで言ってくれて。俺で良かったら…君と一緒に戦うよ」

「ありがとうございます、敬介さん！」

そう言って微笑むセシリアと敬介は顔を見合せる。

「セシリア・オルコットか…貴様も随分な物好きだな。何故その男の肩を持つ？貴様ほどの実力があれば…」

「お黙りなさい！狼藉者！」

割り込むように口を挟む『マーリン1』に対してセシリアが途中でキツパリと言い放つ。

「『サイレント・ゼフィルス』やその『ソードフィッシュ』を強奪したのみならず、多くの無辜の民を傷付け…そして敬介さんを傷付けたその悪業、許し難いですわ！このセシリア・オルコット…最早容赦は致しませんわよ！」

「言ってくれるな！ならば望み通りその『マスクドライダー』死ぬがいい！」

「そう易々と死んでたまるか！行こう、セシリア！」

「はい！」

そして敬介は気合いを入れるようにライドルをライドルホイップへと変形させると、虚空に『X』を描くようにライドルを振る。

「『亡国機業』ある限り！私…セシリア・オルコットは！！」

「そして俺…仮面ライダーXは死なん！！」

そのまま父と母の愛した海の色を受け継いだ、誇り高き蒼の雫…『ブルー・ティアーズ』を装着したセシリア・オルコットと、

父から受け継いだ心と魂を仮面に換え、授けられた肉体で正義の為に陸海空を駆ける銀色の騎士…5番目の仮面ライダー『仮面ライダーX』は蒼と銀の怒濤と化して悪を打ち砕くべく動き出した。

仮面ライダーXは『クルーザー』に跨がり敵へと突撃していく。それに対して敵機はミサイルを集中させてくる。

「クルーザー大回転！」

しかし仮面ライダーXは空中で回転してミサイルを回避すると、そのまま前部に設置されたプロペラを逆回転させて猛烈な旋風を発生させ、敵を吹き飛ばす。

そのまま体勢が崩れた1機へと仮面ライダーXはクルーザーを向ける。

「クルーザーアタック！」

そのままクルーザーによる体当たりで1機を撃墜し、浅瀬へと落下させる。

「だが…これなら！」

そこに再び追尾を開始した先程発射したミサイル、それに再び発射したミサイルで仮面ライダーXを撃墜しようとするが…

「残念ですが、そうはさせませんわ！」

即座にセシリア・オルコットが機体名の元となった遠隔操作攻撃端末…『ブルー・ティアーズ』を操作し、そこから放たれたレーザービームを『偏向射撃』によりねじ曲げ、仮面ライダーXを守るように取り囲みミサイルを全て撃墜する。

「だが、それが狙い目だ！」

そこにISが2機セシリアの下へと飛来し、近接ブレードで斬りかかる。どうにかして操作を中断したセシリアだが、2機の連携を前に反撃出来ずにシールドが削られていく。しかしセシリアは慌てない。

「ライドルロープ！」

その内の1機を仮面ライダーXがライドルのスイッチを操作して変形させた『ライドルロープ』で縛り上げると、もう1機と衝突させた上でセシリアから引き離し、そのまま真下へと投げながら高压電流を流し込み、沈黙させる。

「味な真似を…！」

もう1機は体勢を立て直し再びセシリアへ向かっていこうとスラストを噴かす。

「接近戦なら勝てる」と踏みましたか…間違いではありません…ですが、『ブルー・ティアーズ』にはこんな使い方もございますのよ！」

しかしセシリアは『ブルー・ティアーズ』を自分の周囲に配置して正面から向かってくる敵に銃口を向けると、間髪入れずにレーザービームとミサイルを発射してその1機を叩き落とし、沈黙させる。

確かに『ブルー・ティアーズ』は操作に多大な集中力を必要とさせるが、全方位攻撃を仕掛けるならまだしも、このようにある種の固定砲台として展開・攻撃する分には比較的早く攻撃に移れる。

そのまま端末を戻したセシリアだが、その隙に海中に戻った2機のISから発射される対空ミサイルを受けて足が止まる。

残る2機はライドルスティックを持った仮面ライダーXに接近され押し込まれていたが、仮面ライダーXがセシリアの救援に戻るや体勢を立て直してミサイルの発射体勢に入る。

「セシリア！」

仮面ライダーXはセシリアの盾となりミサイルをライドルを駆使してどうにか防ぎ切る。

「これでも食らいな！」

そこに空中からのミサイルまで仮面ライダーXとセシリアに襲いかかる。空中と海中から来るミサイルをどうにかして防ぐ二人だが、このまま行けば特にセシリアが危ない。

「このまま行けばいずれ…敬介さんは海の敵を！私は空の敵を…！」

「そうは…行くか！」

そこに空中の敵はミサイルの目標を別荘へと変えて発射する。

「さあ、どうする？『マスクドライバー』、そしてセシリア・オルコット…甘い貴様らの事だ。ミサイルの迎撃を…！」

「構いませんわ」

しかしセシリアは平然とその隙を突いてレーザーライフルを発射して2機を引き離す。

同時に発射されたミサイルが別荘へと着弾し、ナパームもあったのか、激しく炎上し始める。

「馬鹿な！？あそこには貴様の家族の…！？」

「その通りですわ…申し訳ありません、敬介さん…貴方の好意を…踏み躪ってしまつて…」

「…セシリアの方こそ…いいのかい？」

「…私には祖父や両親から頂いた『血』と…『思い出』がありますから…」

(ごめんなさい…お祖父様…パパ…ママ…)

目を閉じ内心謝罪するセシリアを一瞥すると仮面ライダーXは決断する。

「…すまない、俺が…分かった。海中の敵は俺に任せろ！」

そのまま空の敵をセシリアに任せると、仮面ライダーXはまたも海へと飛び込む。

海へと飛び込んだ仮面ライダーXは2機のISが魚雷を発射してくると見るやライドルスティックで叩き落とし、逆に接近すると自在に水中を動き回りながらライドルで2機を打ち据える。

その内1機が近接ブレードで仮面ライダーXに斬り掛かるが、逆に仮面ライダーXは腕を取る。

「ライダーハンマーシュート！」

そのまま一本背負いの要領で下へと投げ飛ばすとかさず追撃してISを掴むと一気に急潜航や急浮上を繰り返す。元々浅水域での活動しか想定されていない『ソードフィッシュ』は限界深度を超えて潜航させられる度にシールドが削られていく。僚機も自由自在に水中を動き回る仮面ライダーXに手を出せない。

そして仮面ライダーXはその1機を水中から空中へと放り投げると即座にもう1機へと接近し、ライドルスティックを鉄棒に見立てて回転する。

「Xダブルキック！」

そのままもう1機も空中へと蹴り上げ、自身も飛び上がると同時にセシリアが『ブルー・ティアーズ』のレーザービームを蹴り上げられたISへと集中させ、撃墜する。

「隙だらけだ！こいつで消毒してやるよ！」

そこに別の1機が火炎放射器を呼び出しセシリアに向けて放つ。

「ライドル風車火炎返し！」

しかしエア・ジェットを使い割り込んだ仮面ライダーXがライドルスティックを風車のように高速回転させて火炎放射を押し返し、そのままそのISへと浴びせると同時にISを掴み飛び込む形で水中

へと引き摺りこむ。

そのまま敵の近接ブレードとライドルホイップで激しく斬り結ぶが、やがて敵の防御を切り崩す。

「X斬り！」

そこに仮面ライダーXが『X』の字を描くように斬撃を浴びせると敵は『絶対防御』を発動させ、沈黙する。

更に空中ではセシリアがレーザーライフルから放ったビームを偏向させて1機をお手玉するように打ち上げながら沈黙まで追い込む。

そこに残る1機…『マールン1』が海中の仮面ライダーXに向けて対潜ミサイルを発射する。

仮面ライダーXはそこから魚雷が着水すると同時に魚雷を回避しようとして潜航するが…

「…くおっ!？」

超高速で追尾してくる魚雷を回避も防御も出来ずにまともに食らう。

「『スーパーキャビテーション魚雷』か!？」

「…試作型で実戦で使用する気はなかったが…問題なさそうだな」

そのまま『マールン1』は仮面ライダーXへとスーパーキャビテーション魚雷が搭載された対潜ミサイルを連射する。

仮面ライダーXはどうかしてそれを妨害機動で誘導を切ったり、欺瞞したり、防御したりするが動くに動けない。

「私をお忘れとはいいい度胸ですわね！」

そこにセシリアが『ブルー・ティアーズ』を展開して攻撃を仕掛けるが、『マーリン1』は対潜ミサイルをありつたけ撃ち尽くすと仮面ライダーXがいる海中へ向けてパッケージを高速で射出する。

「あのパッケージは魚雷にもなるのか：ならば！」

飛んでくる対潜ミサイルとパッケージ：恐らく魚雷としての機能も付加されている：を見ると仮面ライダーXは一気に海底に向けて急潜航を開始し、追い掛けてくる魚雷と共に海底へと突き進む。

一方、『マーリン1』は近接ブレード以外の武装が破壊され、スラストスターが一部破損しながらも『ブルー・ティアーズ』の攻撃をくぐり抜けて近接ブレードで斬り掛かり、『ブルー・ティアーズ』を呼び戻しどうにかしてショートブレード『インターセプター』の呼び出しに成功したセシリアと斬り結び、つばぜり合いの形となる。

そのまま膠着状態に陥る二人だが、暫くすると『マーリン1』が口を開く。

「：一つ良い事を教えてやる。先程あの『マスクドライバー』の反応が消えた。恐らくあの魚雷でやられたのだろう。あの魚雷は摩擦を低減して超高速で目標に到達する。いくら『カイゾーグ』と言えども逃れられまい」

セシリアを動揺させようと敢えて口に出して告げる『マーリン1』

だが、セシリアは動じない。

「あら、それは大変ですわね…けど、本当にそうなのでしょうか？」

「ハツタリはよせ。貴様のハイパーセンサーとて『マスクドライダー』の反応が消えた事を既に探知している筈だ」

「確かにその通りですわ。その通りですが…私も貴方にいくつか良い事を教えて差し上げますわ」

「まず一つ。ISのハイパーセンサーでは海底まで探知出来ませんのよ？しかもこの近海は深い上に水温の変化も激しくてソナーやレーザーも頼りませんわ」

「二つ目、この海中には並の潜水艇ではまともに降下出来ないほどの強烈な上方向の海流が流れています。いくら高性能な魚雷と言えども『カイゾーグ』に海底到達前に着弾するのは難しいでしょうね」

「そして三つ目、この海底には大量のメタンハイドレートの鉱床が露出した状態で存在していますわ。それが魚雷と接触して爆発したら…しかも上方向への海流が流れている海域で爆発したら…さて、どうなるでしょう？」

そうセシリアが言った瞬間、『マーリン1』の背後で、まるで間欠泉のように海中から巨大な水柱が空高く吹き上がる。

それに動揺しながらも尚動こうとはしない『マーリン1』にセシリアは更に続ける。

「四つ目、『カイゾーグ』は水の中であれば空中でのISに匹敵す

る機動力を発揮出来ますわ。十分な浮力を確保出来る水量さえあればナイアガラの滝だって余裕で遡れますのよ？ましてや、この突き上げる海流であれば…」

その直後、二人のハイパーセンサーが右手にライドルスティックを持ちこちらを向く形で水柱の中を通って…まるで滝を遡っているかのように上昇する仮面ライダーXの姿を捉える。

そのまま仮面ライダーXは最高点に到達すると、空中へと飛び立ち、ライドルスティックを使い空中で大車輪を決める。

「…させるか！」

その光景に動揺していた『マーリン1』だが、すかさず仮面ライダーXへと向き直り、近接ブレードを構えて『イグニッション・ブースト瞬時加速』を使い仮面ライダーXへと突撃する。

『亡国機業』と『マスクドライダー』との戦闘データの数々から、あの動作が飛び蹴りを放つ為の動作であるとは知っている。それにあの蹴りは威力こそあるが前動作が長い。それに向こうは空中ではまともに回避も出来ない。だから前動作の内にスラスターを駆使して接近して、蹴りを放つ前に潰す。それもまた戦訓から得た対策の一つだ。

「…なっ!?!」

しかし突撃中に背後から強烈な衝撃が襲いかかり、スラスターが破損し、近接ブレードを取り落とす。

セシリア・オルコットだ。レーザーライフルを構えたセシリアがほ

ほぼ同時に『瞬時加速』で『マーリン1』を追い掛け、そのまま加速の勢いを乗せて背後から思い切りレーザーライフルの銃身を突き立てたのだ。

そのままセシリアは更にスラスタを噴かして『マーリン1』を盾にするようにして仮面ライダーXへと突撃していく。

「何のつもりだ！？味方の好機を潰すなど…！」

『マーリン1』は動揺しながらも疑問を差し挟む。当然だ。仮面ライダーXの元へとこのまま突撃すればその飛び蹴りを放つ前に潰す形となる。仮にも国家代表候補生がそんな事も理解出来ない筈がない。

しかしセシリアはそんな『マーリン1』の疑問に対して意外な返答をする。

「あら？敬介さんが『Xキック』を使うとどなたがおっしゃいましたの？」

その言葉の直後に大車輪を終えた仮面ライダーXはライドルを構え直して振り上げる。

「…!？」

そして『マーリン1』は仮面ライダーXとセシリアを狙いを悟る。飛び蹴りならともかくライドルをあのまま振り下ろすのならこのまま突撃して行ってもタイミングよくこちらにライドルを振り下ろす事が出来る。仮にセシリアに邪魔されなくとも同じようにライドルの一撃が振り下ろされていただろう。

大車輪につられて敵は飛び蹴りを放ってくるだろうとこちらが思い込んでいた時点でこうなる事は…負けは決まっていたのだ。

「ライドル…脳天割り!!」

そのまま仮面ライダーXは『マーリン1』目がけてライドルを振り下ろす。

それが『マーリン1』にヒットする直前、セシリアはしてやったりと言いたげに笑ってみせ、突き立てたレーザーライフルの引き金に指をかける。

「バーン」

そして仮面ライダーXが放った渾身の一撃とセシリア・オルコットが零距离から撃ったレーザーライフルが同時に最後の悪へと直撃し、沈黙へと追いやった。

夕日が赤く照らす海の上を『クルーザー』が運転する神敬介とその後ろに乗るセシリア・オルコットを乗せて走っていた。

この後敬介とは別の仮面ライダーを迎えに行く事になっている滝和也は『亡国機業』の構成員を応援に引き渡した直後にヘリで次の目的地へと飛び立っていった。

本来ならば敬介とセシリアは連絡船で本土まで戻る予定だったが、襲撃の影響で便が出ない事になったので、急遽『クルーザー』を使う事になった。敬介もセシリアも万更ではないが。

「しかし…滝さんは本当に凄いな。ミサイルから生き残っただけじゃなくて写真までちゃんと確保したんだからな」

「ええ、滝捜査官には感謝してもし足りないくらいですわ」

そう言つてセシリアは懐から写真立てに入つたセシリアとその両親が写つた写真を取り出す。

ミサイルの直撃により別荘の遺品はほぼ全て灰となつたのだが、たまたまセシリアと入れ違いになる形でセシリアに襲撃を知らせに来た和也がミサイルが直撃するギリギリ手前で咄嗟にこの写真立てだけは持ち出して別荘から脱出し、無事残つた。その後別れ際に和也によりセシリアに無事渡されていた。

和也曰く一枚くらい父子の肖像くらいはあつた方がいいだろうという事でこの写真立てを持ち出したとの事だ。

「俺もきつとあの写真の中で一つ持ち出すとしたら滝さんと同じものを持ち出してただらうけどね…それとごめん、セシリア…俺の力が足りなかつたばかりに…」

「謝らないで下さい、敬介さん…私にはこれがあれば十分ですし…それに祖父も父も母も…きつと敬介さんに感謝していると思いますわ。第一原因は私ですもの」

そのまま謝罪する敬介にセシリアは首を振る。

「私の方こそ…ごめんなさい。敬介さんの好意を無駄にしてしまつて…」

「…気にしないでいいよ、セシリア。それが君が君自身で決めた事なら、俺はいいよ。それにジョナサン先生もリサもジョージも君の事を誇りに思っているだらうしね」

「ですが…あそこには敬介さんの…」

逆に謝罪するセシリアに敬介は笑って首を振るがセシリアはまだ言い募ろうとする。

敬介にとってジョナサンは恩人であるし、ジョージとリサは大切な友人だ。何よりあそこには敬介の父親である神啓太郎ゆかりの品まであつたのだ。それらの遺品はほぼ全て無くなってしまった。しかも写真はあるセシリアと違って敬介の手元には何一つ残っていないのだ。

しかし敬介は気にしていない風に笑って続ける。

「俺は…いいさ。俺には神啓太郎…親父がくれたこの身体がある。ジョナサン先生やりサ、それにジョージの血と想いを受け継いだセシリア…君がいる。それだけで…俺は十分だよ」

敬介の言葉に偽りはない。何か人や物が無ければ記憶や思い出は風化するものだとしても、この身体がある限り、セシリアがいる限り敬介の中でジョナサン、リサ、ジョージ…そして啓太郎の記憶や思い出が敬介の中で色褪せる事はない。敬介はそう確信している。

「それに、セシリアが無事なら何よりだよ」

「ありがとうございます、敬介さん…けど今度からあのような無茶はあまりしないで下さいね？今回は本当に心配したんですから。父親たるもの娘を心配させ過ぎないのも立派な務めですわ」

「手厳しいな…その点までリサに似てるとは思わなかったよ」

「誉めても何も出ませんわよ？」

「…そんな所はジョージそっくりだな、君は」

自分をやり込めるセシリアに敬介は苦笑する。

ふとセシリアは海を眺める。祖父や両親、敬介が愛し、自分もまた好きになった海だ。

そしてジョナサン、ジョージ、啓太郎、それに敬介：『父』達が夢を追い求め、この波の中に多くの想いを抱き、そして想いを込めた母なる海だ。

今回セシリアはジョージだけでなくそういった『父』達の想いを、敬介を通して垣間見たような気がした。

そしてセシリアが再び口を開く。

「敬介さん、私…頑張りますね。父や母、祖父に…敬介さんが私に託してくれた想いに応えられるように…これからも、ずっと」

そう言っつてセシリアは敬介に微笑む。

「ああ、俺も応援するよ。ジョージやリサ、ジョナサン先生の分も…これからも、ずっと…君の父親代わりとして」

そう言っつて敬介もセシリアに笑い返す。運転中で前を見ている為後ろに乗っているセシリアからはあまり表情は伺えないが、その笑顔は爽やかで…しかしどこか優しく、穏やかで…そして娘の成長を喜ぶ父親の笑顔をしているようにセシリアには見えた。

やがて陸地が見えてくる。そろそろ海上の旅は終わりだ。後は陸路でセシリアが心から愛する織斑一夏の下へ向かうだけだ。

それを知っているからかセシリア・オルコットを後ろに乗せた神敬介は『クルーザー』のスロットルを入れて道を急ぎ始めた。

愛する海と、空と大地　そしてそこに生きる人々の自由と平和を

守る為に、そして悪の企みを阻止し、その野望を粉碎する為に銀色の騎士は今日もゆく

波の音に父の叫びを聞きながら　そして波の中に父の想いを感じながら。

第五話 父の想いは波の中（後書き）

本話を最後までお読み頂きありがとうございます。

今回も前話同様分割するような形での投稿となりました。

今回も未だ慣れぬ形式故にご意見、ご指摘などありましたら忌憚なくおっしゃって頂きますとこちらとしても勉強となります。

では次回もまた宜しくお願い致します。

第六話 鈴と案内人と天才科学者（ガール・ミーツ・ボーイズ）（前書き）

この話は同じ題材の短編、特に同じく凰鈴音とアマゾンノ山本大介を主役にした『この地球の裏側で』の内容を踏まえておりますので、事前にお読み頂きますと助かります。

第六話 鈴と案内人と天才科学者（ガール・ミーツ・ボーイズ）

『成田国際空港』の旅客ターミナル。日本から出国しようと、或いは日本へ入国してきた人間でこつた返しているこの建物の中を一人の少女と一人の男が並んで歩いている。

少女の方は髪を二つに纏めた所謂ツインテールにしている。小柄な体格や八重歯が映える事もあり見た者全てに可愛らしいという印象を抱かせそうな魅力的な美少女だ。

一方男の方はラフなジャケットを着ている。先程から絶えず生欠伸をしている事や纏っている雰囲気もあり見た者全てにいい加減で不真面目という印象を抱かせそうな日本人らしき外見をしている。

「滝捜査官、大丈夫ですか？なんか昨晩はあまり寝れなかったって聞いてますけど」

「何、大丈夫さ。こういうのには慣れてるからな。鈴の方こそわざわざ悪いな、連絡取ってもらってさ」

少女：鳳鈴音と男：滝和也は人混みを上手く避けてターミナル内を歩きながら会話する。

IS学園の1年生である鈴とインターポール捜査官の和也は、和也の戦友である本郷猛の頼みを受けて、アマゾン川のジャングルからインターポールが用意した飛行機に乗って帰国し、この空港へ到着するアマゾン：本名は山本大介という日本人だが…を出迎える為にこの空港へとやって来た。

中国の代表候補生でもある鈴はIS学園へと転入する1ヶ月程前にアマゾン川流域で行われた中国軍とブラジル軍の合同演習に参加した際、『ファントム・タスク亡国機業』に襲撃され、アマゾン川流域のジャングルで遭難しかけた経験がある。

その際に気絶していた鈴を保護して一時的に行動を共にし、散々振り回し…そして何度も鈴を助け、鈴と『トモダチ』になったのがジャングルで現地ガイドをしているアマゾンである。

IS学園に転入した後も鈴は中国軍からの依頼で鈴を迎えに来たガイドで、鈴と同じくアマゾンと『トモダチ』である岡村マサヒコと連絡を取り合っている。

今回本郷猛を含む11人の『仮面ライダー』の中でもっともインターポール側で所在を掴むのに苦労したのは他でもないアマゾンである。アマゾン川流域のジャングルにいる事は分かっていたのだが、アマゾン川自体が世界最大の流域面積を誇る上にアマゾン自体が元気にジャングルを駆け回り続けている為、ジャングルの何処にいるのか全く掴めなかったのだ。

結局他の仮面ライダー達によるテレパシーや鈴から連絡を受けた同じくガイドをしているマサヒコの尽力もあり、漸く来日…素性的には帰国と言ってもいいが…という運びになった。

現在は付き添いついでに実家に一旦戻るマサヒコと共にインターポールがチャーターした飛行機に乗って間もなくこちらに到着する予定となっている。流石に一般の航空機に『ギギの腕輪』を着けたアマゾンが乗るには無理がある。

和也は昨夜鈴と合流した後も各方面との調整もあつた為まともに寝

れていない。そのせいで先程から和也の口からは生欠伸が時折出てきている。

「とりあえずアマゾンと合流したらコーヒーでも飲んで眠気覚ますか…いつそ一眠りするか」

そう言いながら和也は一回大きく伸びをする。

そうこうして歩いていく内にターミナルにある国際線の到着ロビー前まで来る。後はここでアマゾンを待つだけだ。

着くと同時に鈴は周囲を見渡すと何か違和感に気付き、和也に尋ねる。

「あの、滝捜査官。何かいつもより警備がものものしくありませんか？少なくとも私がこっちに戻って来た時よりはだいぶ」

「そういやすっかり忘れてたな…今日は『国際ISS委員会』からビクトル・ハーリン博士が来日するんだった」

そう言って和也は頭を掻く。

ビクトル・ハーリンはまだ若いながらも遺伝子工学や精神病理学の世界的権威であり、現在では国際ISS委員会創設メンバー中最年少ながら国際ISS委員会の一員として精力的に活動している。

現在は国際ISS委員会の中でも主に国家間の問題を取り扱い、委員会メンバーの過半数が常任委員として所属し、各国から選任された多数の非常任委員を交えて討議を行う国際ISS委員会最大の部署『国家小委員会』の常任委員であり、企業関連の問題を管轄する『企

業小委員会』へ志度敬太郎博士が移籍した上で『デユノア社』へと出向した後は光明寺ミツ子、カール両博士共々『国家小委員会』最古参メンバーとして重きを為している。

ただビクトルも世界最初の男性操縦者である織斑一夏の登場以降その身柄確保を目論む各国の思惑がぶつかり合い、それ以外の議題が軽視されている現状には頭を痛めているようだが。

その傍らでビクトルはISが女性しか操縦出来ない理由、そして開発者の篠ノ之束すら知らないと言われている織斑一夏がISを操縦可能な理由を主に遺伝子工学的な観点から探ろうと研究を続けている。

とはいえISの中枢部でありその謎を解くカギとなるであろう『ISコア』がどんな基礎理論で創られたかすらも判然としない事実上のブラックボックス状態であり、かつ解析しようにも門外漢のビクトルにはどうしようもない為そちらの研究はあまり進んでいないが。

そして和也はビクトルとはかつて世界征服を企んだ悪の組織『バダン』との戦い以来の『戦友』でもある。ビクトルは頭脳労働担当であった為に直接武器を手に取り戦った訳ではないが、それでも共に『バダン』相手に戦い抜いた事には変わりはない。

「しかしビクトルも大したもんだ。あの生意気なガキが今じゃ国際IS委員会の創設メンバーだって…」

「…生意気なガキで悪かったですね」

そう感慨深く呟く和也の背後から男性の声が掛けられる。

それに和也と鈴が振り向くとそこには声の主らしき男性がいた。金髪で背は和也よりやや高い。スーツ姿に鞆を持ち、眼鏡をかけている。

最初は鈴も和也も誰か分からず怪訝そうな表情を浮かべていたが、暫らく顔を見ている内に和也は思い出したように声を上げる。

「お前：ビクトル・ハーリンか!？」

「ええ、その通りです。あの時は色々とご迷惑をおかけしました、滝和也さん」

そう言つて男性：ビクトル・ハーリンは穏やかそうな笑みを浮かべる。

「…お前、大きくなったなあ…しかもあの時は人をオッサン呼びわけてたのに『滝和也さん』、かよ」

「お陰様で。そう言わないで下さい…あの頃の僕は心も身体もまだ子どもでしたからね。けど滝さんはあの頃から変わってませんね」

そしてかつての戦友との再会を喜び合う和也とビクトルだが、そこに鈴が口を挟む。

「あの、滝捜査官…この方、もしかして…?」

「…と…悪いな、鈴。お察しの通りこいつがビクトル・ハーリンだ。バダンって組織との戦い以来の付き合いだな…こうして直接会ったのは『SPIRITS』の解散式以来だったな」

「ええ。あの、鈴さん…とおっしゃいましたよね？もしやと思いませんが…貴女のフルネームは『凰鈴音』さん、じゃありませんか？」

「え？あ、はい…そうですけど…どうしてそれを…？」

自身とは初対面であるはずのビクトルが自身の名前を知っている事に鈴は首を傾げる。

「こつ見えて僕は国際IS委員会『国家小委員会』の常任委員ですから…国家代表や国家代表候補生の顔や名前は一通り覚えてますから。それに…」

「それに俺が鈴さんの事を教えましたからね」

更に鈴と和也とビクトルに別の男性が声をかける。こちらは日本人の男性だ。ビクトルに比べればいくぶんラフな格好をしている。

「その様子じゃ元気そうだな、ビクトル。それとお久しぶりです、鈴さん…それと滝さん」

「『マサヒコ（さん）！』『』」

その男性…岡村マサヒコを見て鈴、和也、ビクトルが同時に声を上げる。

「こつちは何とかね…そつちこそ相変わらずだな。その様子じゃリツ子さんが心配するまでも無さそうだ」

「当たり前だろ？俺だってお前と同じで昔のままじゃないんだ…それと『ムシビト』達も元気でやってるよ」

「そっか…また世話をかけたな」

「いいさ、それくらいどうって事ないしさ」

そう言ってマサヒコとビクトルは顔を見合せ笑い合う。

マサヒコの姉である岡村リツ子は科学の道へと進んでおり、現在は科学者としてビクトル同様国際IS委員会創設メンバーの一人として『企業小委員会』の常任委員を務めている。もともと、ビクトルがリツ子とマサヒコの関係を知ったのはマサヒコと知り合ってからだいぶ後…国際IS委員会創設準備の際に同じ科学者としてリツ子と知り合っただけで、暫くしてからこの事だ。

そこに鈴がマサヒコに声をかける。

「マサヒコさん、ハーリン博士と知り合いだったんですね」

「知り合いというか…『トモダチ』、ですね」

「ああ。僕とマサヒコは貴女と同じあいつの…アマゾンの『トモダチ』ですから」

そう言ってマサヒコとビクトルは鈴に両手の指を組み合わせてサインを…マサヒコがアマゾンに教え、ビクトルと鈴がアマゾンから教わった『トモダチ』のサインを作ってみせる。

「ハーリン博士も…アマゾンと？」

「ええ、しかも経緯も貴女と少し似たような感じですね。マサヒコ

から大体の事情は聞いてます。だから貴女もアマゾンと『トモダチ』
だとも、僕は知っています」

そう言っつてビクトルは鈴に微笑みかける。

ビクトルはまだ子どもの頃…バダンが本格的に動き出す少し前に『
ギアナ高地』に赴いた際にやはりガイドをしていたアマゾンに出会
い、鈴同様散々振り回され…そしてアマゾンに助けられ、『トモダ
チ』となった。

マサヒコと知り合うのはバダンとの戦いを繰り広げていたアマゾン
を救援する為に『ムシビト』…その正体は遺伝子操作により生み出
された生体兵器『ラスト・バタリオン』であり、ビクトルはその遺
伝子を元に生み出された…と共に日本にやって来た時だ。

当初は互いに色々思う所があり対立していたビクトルとマサヒコだ
が、戦いの中で和解して親睦を深め、バダンとの戦いが終わる頃
には固い友情で結ばれた親友となっていた。

その後もビクトルとマサヒコはメールや電話などで度々連絡を取り
合っており、バダンとの戦いの後はこれ以上戦いに巻き込まれて欲
しくないというビクトルの意向でギアナ高地で生活している『ムシ
ビト』達の様子をアマゾンと共にマサヒコが見に行き、時折ビクト
ルに報告している。

「そう言えばビクトルはどうして日本に？」

「簡単に言えばやはり篠ノ之束絡み、かな」

「…度重なる無人ISによるIS学園襲撃、『銀の福音』暴走事件

…国際IS委員会が本格的に調査団結成して動き出すには十分な理由だ。今回はさしずめその事前調査って訳か」

「はい。ですからまだ非公式かつ一個人での調査という名目ですし、篠ノ之束や『亡国機業』の連中には極力感付かれないように警備はいつも通りにして欲しいと要請したんですが…」

「そう言うな。国際IS委員会の肩書きはお前が思っているより重いつて事だ」

そこに和也が口を開きビクトルに続ける。

和也の言う通りビクトルが日本へやって来たのは篠ノ之束について調べる為だ。

篠ノ之束は稀代の天才だ。ビクトルや公開されているISやそれ以外の分野に関する論文には一通り目を通して、いくら同じ天才といえども専門が違うビクトルでさえその内容がいかによいかを理解出来、舌を巻いた程だ。

同時に篠ノ之束は『白騎士事件』…こちらは少々複雑だが…以来数多くのテロまがいの事件への関与が疑われている『天災』とも言える人物だ。しかも厄介な事に人格的にも対人関係に限って言えばある意味昔のビクトルよりも問題がある。

国際IS委員会も今までは確たる証拠が無い事や相手がISの開発者である事、何より各国の思惑や国際IS委員会が動く事による影響の大きさから動くに動けなかった。

それを見越してか篠ノ之束はIS学園の臨海学校の際に堂々と姿を

現すなど大胆に動いていた。しかも東自身が起こした疑いが強い『
銀の福音』シルバリオ・ゴスベルの暴走事件とほぼ同じタイミングで、だ。

そんな事をされてもIS学園も各国も国際IS委員会もインターポ
ールも対処に非常に困る。

IS学園には自治はあっても身分は民間人に過ぎない束を逮捕する
権限は無いし、仮に侵入者として捕えても抑留する事までは出来な
いので尋問したらさっさと国籍のある日本に引きとって貰うしか
ない。

かと言って日本としても束をIS学園側から引き渡されても対処に
困る。重要人物として『保護』してISに関する情報を独占的に『
提供』して貰いたいのは山々だが、そんな事をしたら『IS運用協
定』…『アラスカ条約』違反だと国際社会から非難されるし、実際
理念に真っ向から反しているので国際IS委員会から厳しい処分が
下される事になるだろう。

ならば犯罪者として逮捕すればいい、という意見もあるがそもそも
日本側には立件出来ないか、立件出来ても証拠が無い。例えばIS
学園への無人IS襲撃はISコアが篠ノ之束だけしか作れない現状、
そんな事を出来るのは束一人しかいないとはビクトルも分かる。

だがそれは状況証拠に過ぎず、物的証拠は何一つ存在しない。コア
も束が「他の誰かが自分の知らない所で勝手に解析して作った」と
白を切り通される可能性もある。いくらブラックボックスと言っ
ても指紋などと違って作った個人まで特定出来るものではない。

第一襲撃されたのはIS学園である為に『外部不干涉』の国際規約
により日本の警察に捜査権が無いので立件すら出来ない。

つまり日本としてはIS学園から束を引き渡されてもさっさと釈放する事しか出来ない。それか家族を使つた人質作戦を展開するしかないが、悪い事に束の肉親の内最愛の妹の篠ノ之箒はIS学園に入学させてしまつていて現状迂闊に手が出せないし、かと言つて父親の篠ノ之柳韻は束としてはギリギリ身内として認識出来る程度なので人質にするには弱い。それにあくまで重要人物として『保護』している手前そんな事をしたらやはり国際社会から袋叩きだ。

かと言つて他国が身柄を確保出来るかと言えばやはり答えはノーだ。どの国も犯罪者として日本に身柄引き渡しを要求しようにもやはり証拠が無さ過ぎて立件しようがない。それは『銀の福音』暴走事件の当事者であるアメリカとて同じだ。疑いは濃厚であつてもやはり確たる証拠が無ければおとなしく釈放するしかない。拉致などの非合法的手段に至つては論外だ。

そうなると篠ノ之束の身柄確保に動けるのは『亡国機業』を除けばもうICPO（国際刑事警察機構）：インターポールと国際IS委員会しか残つていない。

この内インターポールは篠ノ之束が国際手配されていない現状マークする事しか出来ないの、事実上篠ノ之束関連の事案は国際IS委員会で対処するしか無い。

だが国際IS委員会が動くとなると各方面に与える影響は大きい。

個別の事案を国際IS委員会からメンバーを派遣して調査・検証チームを編成するくらいならともかく大規模な調査団を編成して調査を行うとなればその影響は甚大だ。

国際IS委員会は過去に1度だけ『VTシステム』に関して志度敬太郎博士を団長とした調査団を編成し、各国に派遣し調査を行った。そして調査団の勧告により『VTシステム』に関する研究を全面的に禁止する国際条約が締結された。

つまり調査団を編成して派遣するという事は新たに国際条約が締結されるくらいには各方面に影響を与える一大事なのだ。『VTシステム』に関しても各国に少なからぬ混乱と衝撃を与えていたのだ。ましてや篠ノ之束ともなれば事と次第によつてはまた世界が根底からひっくり返りかねない。

そもそも今の国際IS委員会は織斑一夏という『爆弾』を抱え込んでいる状況だ。ただでさえアラスカ条約は男性のIS操縦者が出現する事を想定していなかった為条約の規定に触れているか判断に困り、その取り扱いに苦慮しているのだ。そこに世界初の男性IS操縦者を確保しようとする各国の動きが加わる事で事態が一層複雑になっている。

各国の利害を代表する非常任委員は勿論世界各地から有識者らが集う常任委員間でも意見は割れていた。

ビクトルや光明寺ミツ子、カール、緑川ルリ子らは各国にその身柄を狙われている事を鑑みて一夏の保護も兼ねて先手を打って国際IS委員会の方で身柄を確保して各国の動きを牽制すべきと主張していた。

一方で光明寺信彦、海堂肇、志度敬太郎らは身柄を国際IS委員会の方で確保しても後々どうしようもなくなる、むしろ更に事態が複雑化し、一夏に更なる厄介事が増えるのも懸念して今は静観し、本人の自由意志に任せるべきとしていた。

双方共に「織斑一夏の身柄が各国に渡つたら確実に実験動物扱いされる」、「その前に国際IS委員会所属という形で安全を確保するのが今のところ一番確実」、「しかし身柄を確保しても問題の先伸ばしどころか更にこじれるし国際IS委員会としてもどうしようもない」、「故に身柄確保は一時しのぎにしかならずより根本的な解決が必要」という見解は一致している。

要するに「当面の危機を凌ぐ代わりに問題を更に複雑化させる」か、「問題をこれ以上複雑にしない代わりに当面の危機を見過ごす」かという苦渋の選択だ。はつきり言ってこんな決断誰一人としてしたくはないがそうは言っていられない。

結局妥協案としてIS学園側に織斑一夏の引き渡し命令を、引き渡し期限を設けないで出すという形に落ち着いた。つまり国際IS委員会で織斑一夏を確保する意志がある事を見せて各国を牽制しつつ、期限を設けない事で事実上命令に拘束力を持たせないという苦肉の策だ。

向こう側もこちらの意図を理解したのか命令を明確には拒否せず受諾したが、引き渡す気配は見せていない。もし拒否されたり、即座に引き渡されたりしたら、対応に追われて今頃ビクトルも来日どころか研究すらまともに行える状態ではなかっただろう。

そんな不馴れな政治的配慮までしなければならぬ状況で篠ノ之東という『核弾頭』まで持つてこられたら本業は科学者が多い国際IS委員会のメンバーとしてはたまったものではない。

だが度重なる未登録コアを用いた無人ISによるIS学園襲撃という事態はこれ以上見過ごす訳にはいかない。それに世界中で暗躍し

ている『亡国機業』が何か大きな動きを見せるといふ情報も入っている。背後の憂いを断つ為にも同じく世界中を引つ掻き回している篠ノ之束を野放しにしておく訳にはいかなかった。

だから国際IS委員会では調査団を編成して本格的に動き出す方向で各方面と調整を進めている。ビクトルの来日はその前段階として事前調査として日本で篠ノ之束について調べる為だ。更にインターポールを通して現在IS学園近辺の街に滞在している結城丈二に協力を要請した。

聞いた話では丈二は篠ノ之束の実家『篠ノ之神社』に程近い所に住んでいた丈二の師…田所博士の自宅に一時滞在しており、更に生前の田所博士は幼少時から篠ノ之柳韻やその妹で現在は柳韻に代わり篠ノ之神社の管理している篠ノ之雪子を何かと可愛がっており親しい仲だったらしく、その縁を使って調べて貰う事にした。

「それに妹の篠ノ之箒についても少し日本政府から聞く必要もありますから。けど姉妹揃って厄介事を増やすのは正直止めて欲しいですね…」

そうビクトルは続けて溜め息を付く。

篠ノ之束の実妹である篠ノ之箒もまた厄介な『爆弾』を抱え込んでいる。

箒は姉から専用機『紅椿』を受け取っている。別にそれだけならば国際IS委員会は動かない。道義的には数多くの犯罪に関与している疑いがある姉から専用機を受け取るのは問題だが、あくまで『疑い』であるし別に篠ノ之束から直接専用機を受け取ってはいけないという規則がある訳ではない。IS学園の自治独立の観点からも国

際IS委員会がしゃしゃり出てくる方がむしろ問題だ。

だがその『紅椿』はよりによってコアから新造した機体であり、しかも完全な第4世代機であるとなると話は別だ。

現在世界中に存在している467個のコア全ては国際IS委員会のデータベースに所属国やコアナンバーなどが登録されており、何らかの理由でコアの登録が抹消された場合はその年月日や理由なども記載された上で『ロストコア』として467個のコアとは別にカウントされている。

だが『紅椿』のコアはそのどちらにも属さない最初から未登録のコアだ。当然どこの国に帰属しているかなど記載されていない。つまり帰属国が未定の状態であり、どの国でも操縦者共々迎え入れられる状態にある。

しかも未だ各国が第3世代を開発したという段階で一足とびに完全な第4世代機だ。その圧倒的な性能のみならず『即時対応万能機』という机上の空論レベルの代物を現実化した使用技術も世界の水準を大きく超越している。

もつとも、それで世界中の努力が無意味なものになったという意見にはビクトル達は同意しかねる。そんな事を言う人間に学問や研究を語る資格はない。

第一そうであるならば『改造人間』が開発された時点で生化学者が、光明寺信彦博士が登場した時点で他の機械工学者の努力が無意味なものとなっていただろう。実際そうではなかったのは現在の状況を見ればよく分かる。そもそも篠ノ之束も『スーパードール』がいるにも関わらずに諦めないで努力した結果ISを創り上げたのだ。

とはいえそんな言い訳をして…或いはそれさえせずに安直に篠ノ之
篤…というより『紅椿』やその力を手に入れてゆくゆくはその技術
を一足早くものにしたいと考えない国が無いはずが無い。

実際織斑一夏の問題が国際IS委員会の身柄引き渡し命令により一
先ず落ち着いたのに、今度は『紅椿』がそれに匹敵する新たな火種
となりつつある。

「しかも『紅椿』をねだった理由が他の専用機持ちを見返してやり
たいなんて理由らしいですから…こんな事言いたくはないですけど、
少しは自分を取り巻く状況や周りの事も考えろって話ですよ」

「そう腐るな。本人も今はそれを嫌って程痛感してるんだ。ただ俺
もお前も彼女と似たような経験をしたからな…だからこそ、お前が
彼女にそう言いたくなる気持ちも分かるけどな」

「篠ノ之篤という人の事はよく分かりませんが…やはり複雑です
ね。ビクトルや滝さんの話を聞いた限りですが…篠ノ之篤さんの
気持ちは俺も痛いほど分かります。けど…いえ、だからこそ踏み止
まって貰いたかったという気持ちもありますね」

「ただ彼女は僕やマサヒコと違ってアマゾンも村雨さんも滝さん達
『SPIRITS』の皆も…何より僕にとってのマサヒコ、マサヒ
コにとつての僕が居なかったからね。そうなっても仕方ないとは頭
では理解出来てるんだけど…やっぱりそれでも納得し切れない部分
はあるというか」

「そこまでにしてやれよ…今度はもう一人複雑な表情浮かべてるヤ
ツがいるぜ？」

「あ、すいません鈴さん…変な話題になってしまつて…こんな話してたらそんな顔したくもなりますよね」

「いえ、ただ私も彼女…篠ノ之箒とは友人なのでちよつと…といふかかなり複雑な気持ちになつちやつて」

そう言つて鈴は苦笑する。

篠ノ之箒が力を求めた気持ちはマサヒコにもビクトルにもよく分かる。

マサヒコは復活した『ゲドン』や『ガランダー帝国』との戦いの最中にアマゾンが一度死の淵に立たされた時に自分には何も出来なかつた事、ビクトルはその時に『ムシビト』達を犠牲にしてしまった事から戦う力の無い己の無力さを呪い、力が欲しいと思つた事がある。

それでもマサヒコとビクトルが踏み止まれたのは、改造人間の身体という力を得たが故に地獄のような…むしろ地獄すら生ぬるい苦しみを味わつていた村雨良と比較的早く出会つた事や、改造人間には及ばずとも最後まで生身の人間として戦い抜いた和也を始めとする『SPIRITS』の面々と一緒にいた事、何よりアマゾンという『トモダチ』がいた事が大きい。

だからそんな事がなかつた篠ノ之箒が力を求めるあまり姉にねだつて『紅椿』を手に入れた事も理解は出来るのだが、その理由が理由であるが為にやはり納得いかないものがある。

それに本人としてはほんの軽い気持ちでねだつたのかもしれないが、

自分の立場や姉がどれだけ重要かつ厄介な人物で、自分が姉に専用機を貰うという事がどれだけ大きな意味を持ち、周囲に影響を与えらるかは今更言っても仕方はないが、やはり実行する前に気付いて踏み止まって欲しかった。或いは本人もまさか姉がとんでもない爆弾を自分に寄越してくるとは思いもよらなかったのかもしれないが。

そんな話を聞く鈴も鈴で複雑な心境だ。鈴は別に篤や和也、マサヒコ、ビクトルと違いそこまで力を求めた経験がある訳ではないからよく分からない。

ただビクトルの言う事は正論だしその気持ちも何となくだが理解も出来るのだが、やはり篤が悩んでいた事も知っているし、そのせいで内心苦しんでいる姿も間近で見えてきた為にどうしても複雑な気持ちになってしまふ。

或いは和也も今鈴が抱いている気持ちに近いものを内心篤に抱いているのかもしれない。むしろ自身もマサヒコやビクトルと同じ感情を抱き、篤とも身近に接した後だけにこの中では一番複雑な気持ちになっているのかもしれない。

だがそんな素振りも見せずに和也は話題を変える。

「ま、その話は後にしようぜ…アマゾンはどうしたんだ？」

今回和也と鈴がこちらまで来たのはアマゾンを迎えるためだ。肝心のアマゾンが居なければお話にならない。しかしマサヒコは意外な答えを返す。

「え？もう滝さん達と会ったんじゃないんですか？」

「いや、会ってねえから聞いたんだけどよ…」

「おかしいな…纏めて手続き済ませてくるから先行つてくれ、って言うて戻ったら居なかつたからてっきりもう行ったのかと…」

「…滝さん、鈴さん、何か嫌な予感がしませんか？」

「奇遇ですね…きっと私もハーリン博士と同じ事を考えてると思います」

「まったく、あいつは相変わらず…」

「…すいません、目を離してしまっていて…」

やがて全員が同じ結論に達し、代表する形で和也が口を開く。

「あいつを…アマゾンを探すぞ！見つからなくても1時間後には此処に一旦集合だ！」

「相変わらずマイペースというかフリーダム過ぎるのよ、アマゾン」
「！」

「いいのかビクトル？仕事だつてあるんだろ？」

「構わないさ、時間はあるし。それにアマゾンの事はほっとけないからね」

そう言いながら四人は何処かへ行ってしまったアマゾンを探すべくそれぞれ別方向へと駆け出していた。

結論から言えばこの人がごった返している広大な空港の中にいるたった一人を四人だけで探す、しかも相手は自由気ままに動き回る事を考えれば四人はよく頑張った。

四人が何処かへ言ってしまったアマゾンの搜索を開始して1時間後、四人はめいめい旅客ターミナルの到着ロビーへと再び集合してきた。

「鈴、どうだった？こっちはさっぱりだった」

「駄目でした。レストランとかそっちの方は全然。マサヒコさんとハーリン博士は…やっぱり見つかってないですよね」

「面目ないです…一通りアマゾンが行きそうな場所は探したんですけど。それよりビクトル、大丈夫か？」

「…大丈夫さ。昔に比べたらだいぶ頑丈にはなったけど…それでもこの所はデスクワークばかりだったからこんなに走ったのは久しぶりでさ」

四人…滝和也、凰鈴音、岡村マサヒコ、ビクトル・ハーリンは集合するとそれぞれ首尾を報告し合う。誰一人としてアマゾンを見つけていない。それぞれアマゾンが行きそうな心当たりを探してい

たがやはり探し出すのは難しいようだ。

全員が既にアマゾンがこの旅客ターミナルから出てしまった可能性を考慮し始めるのとほぼ同時に旅客ターミナル内に迷子の案内を知らせる館内放送が流れる。いっそアマゾンもそうしてもらおうかと思つた矢先、マサヒコが口を開く。

「…いや、もう一つだけ心当たりがあります。アマゾンの事です、俺や鈴さん、それに滝さんの事まで置いてきぼりにしてまで動き回るとしたら…」

「ああ…なるほど。確かにそれなら納得がいくよ。むしろそれが一番自然だろうね、アマゾンの性格的に」

「…すっかり忘れてたぜ。あいつは、あの時からずっとそうだったもんな」

「そうなんですか？ならアマゾンは昔から変わってないんですね…私と出会う前から、そして私と出会った後も」

マサヒコと同時に他の三人も思い当たる節があつた為か顔を見合せ頷き合つ。

そのまま四人はその心当たりへ向かいアマゾンを迎える為に今度は並んで歩き始めた。

空港の旅客ターミナルにある案内センターに一人の男が一人の子供と共に居た。子供の方は迷子になっており、それをたまたま見つけた男が子供を保護してこの案内センターまで連れてきた。だが連れてきたは中々いいが中々泣き止まない子供に職員達が手を焼いていた所、男が子供を上手くあやして泣き止ませ、そのまま子供の親が放送を聞いて引き取りに来るまで男は子供と一緒にこの案内センターで待つている事にした。

迷子の保護以外にも業務があり多忙な空港職員達としても泣き止まない子供を上手くあやしてくれた男が子供と一緒に居てくれるとその分他の業務に差し支えが出ないので何かと有難い。今は男にその迷子を任せて時折様子を見るに止まっているが、今のところ子供がまた泣き出す気配はない。

ただ、その男の格好は職員達から見ると少々：いやかなり変わっている。

黒地に赤いラインが入ったどこかトカゲを連想させる模様の上着に腰布のように思える短パン、それに上腕部と膝から下に上着と似た模様の布が巻かれている。腰には妙な形をしたベルトを巻いているし、左腕には何やら腕輪らしきものを付けている。

そんな少々珍妙な格好をした男だが、子供には怖がられるどころかその陽気で天真爛漫：むしろ子供のようなその男の言動もあってむしろなついているようにすら見える。

やがて迷子の親が放送を聞きつけてやってくると男は親と共に案内

センターを去っていく子供を笑顔で見送ると職員に一声かけて案内センターから歩き去ろうとする。

「やっぱりここに居たか…ま、迷子を見つけたらこうするよな…アマゾン」

「マサヒコ…ごめん、あの子が泣いてたからつい」

そこに男…アマゾンに歩いてきた岡村マサヒコが声を掛ける。

「本当だよ。お陰でこの広い空港の中を散々走り回る羽目になったんだから…久しぶりだね、アマゾン」

「ビクトル！久しぶり！前より大きくなってないか！？」

「ちょ、アマゾン！？もう僕は子どもじゃ…って言っても無駄か」

そこに続けて声を掛けたビクトル・ハーリンにアマゾンは笑顔で駆け寄るとその頭を撫で始める。最初は抵抗しようとしたビクトルだが、アマゾンが無邪気な笑顔を見ると抵抗を諦める。

「お前な、迷惑かけたのはその二人だけじゃないんだぞ？人様が寝不足だつてのに散々走り回らせやがって…」

「あ、タキも久しぶり。タキもちゃんと寝なきや駄目だ。身体に悪い」

「半分くらいはお前のせいだお前の…！…ったく、ここまで来ると調子狂っぜ…」

呑気な事を言うアマゾンにツッコミを入れながらも滝和也は頭を掻く。

そしてアマゾンは残る一人の少女に向き直ると少女が口を開く。

「迷子もいいけど…アマゾン、約束破るのも遅刻も駄目よ？」

「ごめん、リン」

咎めるように言う少女…鳳鈴音にアマゾンはどこかしゅんとして答える。だがすぐにほぼ同時に笑みを浮かべて続ける。

「けど久しぶり、リン！元気にしてたか？」

「うん！私はこの通り元気よ。アマゾンはあの時と同じだね」

「けどリンもやっぱり大きくなったな！前より一回りくらい！」

「…アマゾン、それ嫌味？少し腹立つんだけど」

「違う、背じゃない。ここ…心が大きくなった。なんとなくだけどオレには分かる」

「…ありがとう、アマゾン。それでもまだまだアマゾンには勝てないけど」

屈託のない…それでいてどこか優しい笑顔で自身の胸を示すアマゾンに鈴も微笑み返す。

「それよりごめんね？アマゾン、もっとジャングルで…」

「大丈夫、あいつらと戦うってことはオレが決めたことだから。それにタキやリンがそうして欲しいなら、そうする。オレ達は『トモダチ』だから」

謝罪する鈴に笑って首を振り、アマゾンに答える。

鈴としてはアマゾンには元気に笑ってジャングルを駆け回っていて欲しかった。そっちの方がいいに決まっている。いくら頭ではアマゾン自身が戦う事を決め、またアマゾンの力が必要と分かっているもやはり少々複雑な気持ちだ。

その話題を転換するように和也が口を開く。

「しかしアマゾン、何か日本語も結構片言になってないか？いや、バダンの時に比べたらマシだけどよ……」

「ジャングル入ると基本人とは誰も話さないから……マサヒコ、今回はどれくらい入ってた？」

「確か4ヶ月だね」

「それだけ入ってりゃそうなるわな……」

「けどアマゾンらしいじゃないですか」

「僕も鈴さんと同意見です……むしろ最初に日本語流暢に喋ってたの聞いたときの違和感が……」

「そつだ！タキ、リン、アイエス学園行く前に寄りたい所あるんだけどいいかな？どうしても行っておきたい場所があるだ」

「…『あそこ』か。俺は構わないんだが…鈴、どうする？何なら先学園に戻ってくれていいんだが」

「いえ、私は構いませんよ？どうせこの後に何かある訳じゃないですから」

「なら僕も一緒に行くよ…調査を始めるのは明日からだし、どうしても一度寄ってきたかったからね」

「俺もやっぱり顔を出しときたいし…じゃ、行きましょつか」

そうマサヒコが言うと五人は連れ立って歩き出した。

空港から出たアマゾン、鳳鈴音、滝和也、岡村マサヒコ、ビクトル・ハリンはそれぞれバイクやタクシーに分乗して目的地へと到着した。

そしてアマゾンはバイク『ジャングレー』の後部から花を下ろすと歩き出す。和也とそのバイクに同乗してきた鈴、タクシーから降りたマサヒコとビクトルもそれに続く。

暫く歩いてゆくと何かが見えてくる。そしてアマゾン達はその前で立ち止まる鼻先がまるで花のように開いたモグラの頭に似た何かの模型が置かれており、『ひと勇気の士モグラ獣人の墓』と書かれたプレートが置いてある。

そこにアマゾンは花を供えると目を閉じる。和也、マサヒコ、ビクトルも思い思いに墓の主…『モグラ獣人』を弔うように黙禱を捧げる。

「久しぶり、モグラ…オレもマサヒコモリツ子もタキもビクトルも…みんな、今も元気だ。それとやっとな此処に来れたから…これは、お土産だ」

そしてアマゾンは穏やかな笑みを浮かべながら墓…いや、モグラ獣人へと語り掛ける。鈴はそのモグラ獣人が何者かは知らない…少なくとも獣人と付くあたりただの人間ではなさそうだが…が、アマゾンやマサヒコ、ビクトルにとっては大切な存在だったのだからとは分かる。和也は他の三人とは少し反応が違うが、やはりモグラ獣人とその死を悼んでいる辺りやはりそれなりに親しかったのだろう。

そこで鈴は思い切って和也に尋ねる事にした。

「あの、滝捜査官」

「モグラ獣人の事、だろ？」

「はい…」

「…あいつの…アマゾンのダチさ。二度に渡りあいつと、あいつの

大切なものを守って、そして命を落とした…な」

そう言っただけで和也はアマゾンと同じようにモグラ獣人に向かって語り掛けるマサヒコとビクトルを見やる。モグラ獣人は元々秘密結社『ゲドン』の獣人…アマゾンの敵だったのだが、ゲドンに処刑されかけた所をアマゾンに救われ、それ以来アマゾンやマサヒコ達の『トモダチ』としてアマゾンと共に戦ってきた。しかしゲドン壊滅後に出現した『ガラnder帝国』の作戦を阻止する際に解毒剤入手の過程で猛毒を浴び、解毒剤の完成により多くの人々が救われるのと引き換えに、その命を落とした。

後になって『バダン』の手により『ゲドン』、『ガラnder帝国』が復活した際にモグラ獣人も再生させられた…もつとも、こちらは魂の入っていない別個体に近いが…後もアマゾンやマサヒコと再び、更にはビクトルとも『トモダチ』となった。

『ゲドン』、『ガラnder帝国』との戦いこそ生き残ったモグラ獣人だが、『バダン』との最終決戦の最中に窮地に立たされたマサヒコとビクトルを身を挺して庇った際に致命傷を負い、またも命を落とすことになった。

この墓はモグラ獣人が最初に命を落とした後に立てられたものであり、再びモグラ獣人が倒れた後も改めて此処に葬られた。

以来アマゾンやマサヒコ、ビクトルは日本に来る用事がある度に欠かさず此処に墓参へ訪れている。特にアマゾンとマサヒコにとっては二度も失う形になってしまった『トモダチ』だ。その心境は察するに余りある。

やがてアマゾンとマサヒコ、ビクトルは立ち上がる。そのままアマ

ゾンが口を開く。

「ごめん、リン。もう大丈夫だから」

「アマゾン…本当にいいの？」

「うん。オレはモグラが居た此処を守らなくちゃいけないから」

「それに俺達がいっまでもクヨクヨしてたら、それこそモグラが悲しむと思います」

「それが僕たちに出来るモグラへの弔いだと、僕は思っていますから」

アマゾンの言葉にマサヒコとビクトルも続ける。

そのまま五人が停めてあるバイクや待たせてあるタクシーの下へと向かおうとした矢先、アマゾンが近くの木々に向けて唸り始める。同時に和也と鈴が身構えながら声を張り上げる。

「いつまでも隠れてねえで出てきやがれ！」

「あんだ達がそこに隠れてるのはお見通しよ！」

その言葉に応えるように木々に隠れていた男達が続々と現れる。マサヒコとビクトルを守るように立つアマゾン、鈴、和也を無視するように、その中のリーダー格らしき男が口を開く。

「ビクトル・ハーリン博士、おとなしく我々と来てもらおう」

「一体何の権限があつてそんな事を？第一そちらが何者が名乗るのが筋というものじゃないのか？」

「質問に答える義務はない。来る気がないのであるならば遺憾ながら力づくで連行させて貰う。勿論邪魔立てするのであればそちらの連れも排除させて貰うがな」

そう言つて男達はナイフや特殊警棒などそれぞれ近接武器を取り出す。

「どうせ懲りずにビクトルを拉致しようとか考えてる『亡国機業』の回し者だろうがよ…行け！二人共！此処は俺達で引き受ける！」

「分かりました！後はお願いします！」

マサヒコが和也にそう言つとビクトルと共に駆け出す。

「リン、行けるか？」

「前も言つたでしょ？これでも代表候補生なんだから…アマゾンや滝捜査官ほどじゃないけど腕っぷしには自信があるんだから！」

「そいつは心強いぜ…なら、行くぜ！」

そのままアマゾン、鈴、和也の三人は一斉に男達へと挑みかかる。

一方でマサヒコとビクトルは既に迎えに来て待っていたタクシーに飛び乗ると、ビクトルは携帯電話を取り出し、マサヒコは運転手に話しかける。

「すみません！無線機で連絡して頂けませんか！？今俺達の連れが…！」

「お断りします。他に知られてもらっては困りますからね」

しかし運転手はすげなく答える。違和感に気付いたマサヒコとビクトルがタクシーから出ようとするが、ドアがロックされていて出れない。しかもよく見ると運転席と後部座席の間にガラスらしきもので仕切られている。

マサヒコやビクトルがしまったという表情を浮かべると同時に運転手が何やらボタンを操作する。

「ですから暫く眠って頂くと致しましょう」

すると後部座席にガスが噴射される。催眠ガスだ。

マサヒコとビクトルは最後の抵抗を試みるがやがて再び意識を闇へと手放し、ほぼ同時に倒れ込む。

運転手はそれを確認すると一旦外に出て後部座席のドアを開けるとビクトルの手から携帯電話を取り上げ、踏み潰すと再び運転席に乗り込みタクシーを走らせる。

「マサヒコ…ビクトル…！」

男達に獣のような動きで飛びかかり、噛みつき、引つ掻いていたアマゾンと同時に何かに気付いたようにマサヒコとビクトルが走っていった方を振り返る。

その隙に男達が飛び掛かるが、纏めてアマゾンが吹き飛ばす。

「これでラスト！」

同時に和也が男達に正拳突きや足刀蹴り、払い腰を決めて気絶させる。

「こっちも！」

同じく鈴も金的を蹴り上げたり、水月に頭突きをぶち込んだり、足を掛けて倒した敵にストンピングを決めたりして気絶させ、遂に敵を全員沈黙させる。

そのままアマゾン、鈴、和也は走り出す。

するとタクシーが停車していた筈の場所にはタクシーはなかった。もうタクシーに乗って離脱したかとも思ったが、踏み潰されたビクトルの携帯電話を見て認識を改める。

やられた。恐らく先ほど伸した連中が失敗した時に備えてタクシー無線を傍受して予め手を回して偽のタクシーを回して、ビクトルとついでにマサヒコを拉致したのだろう。

歯噛みする和也だが、アマゾンは即座に『ジャングラー』に跨がる。

「アマゾン！？何処行くの！？」

「マサヒコとビクトルを助けに行く！」

「でも何処に居るかも…！」

「大丈夫！」

鈴が止めようとするがアマゾンの表情を見て諦める。

「待ってる、マサヒコビクトル…絶対に俺が行く！俺が…助ける！」

その表情にいつものような呑気さや天真爛漫さはなかった。

そこには『トモダチ』を危険に巻き込んだ悪への怒りと、二人の『トモダチ』を必ず助けるといふ強い意志を秘めたアマゾンの姿があ

つ
た。

第六話 鈴と案内人と天才科学者（ガール・ミーツ・ボーイズ）（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

今回も前話同様前後編のような形となりますのでご容赦下さい。

ではよろしければ次話もお願い申し上げます。

第七話

強くてマダラで優しい野獣（前書き）

では前話の後書きで書いた通り後半部分にあたる話となります。

第七話 強くてマダラで優しい野獣

タクシーの後部座席で催眠ガスを吹き掛けられ意識を失っていたビクトル・ハーリンが気がつくと、薄暗い部屋の中で後ろ手に縛られた状態で椅子に座らされていた。一緒に居た岡村マサヒコの姿は見当たらない。

（油断したな…こういう二段構えを作戦を取ってくる事くらい考慮しておくべきだった）

自身の置かれた状況を理解し、部屋の中を一通り観察し終えたビクトルは内心己の迂闊さに舌打ちする。ここは自分を拉致したとおぼしき『亡国機業』のアジトだろう。

ただ起きたばかりで頭が上手く働かない。それについ先ほど眠っていたからそれ以前の状況など分かる筈が無い。部屋の中を観察してはみたが、何か現在地の手がかりになりそうなものも無い。窓も無いので外の景色もこちらからは見えない。

そうしてビクトルが思案を巡らせている内にドアが開き、三人ほど入ってくる。三人とも女だ。恐らく自分たちを拉致した連中の仲間だろう。そのまま女達はビクトルを囲むように立つ。やがて一人がビクトルに話しかける。

「気分はどうかしら？ビクトル・ハーリン博士」

「最悪だね。いきなりこんな場所に無理矢理連れてこられた挙げ句気が付いたらこんな薄暗い場所に、しかも後ろ手に縛られた状態なんだ…他にどう答えようがあるか？」

「あら、ごめんなさい。出来れば穩便に事を運びたかったのだけれども…」

「白々しい。追っ手を差し向けてきて何が穩便だよ…それで、わざわざ僕を拉致してきた理由は？まさか僕の顔を見たかったからなんて理由で拉致してきた訳じゃないだろ？」

女達を睨みながらもビクトルは言葉を続ける。

「話かが早くて助かるわ。まあ貴方も分かっているでしょうけれど…私達にほんの少し力を貸して欲しいの。勿論お礼はするわ」

「なら僕の答えも分かっているだろう…絶対に嫌だね。お前達の…『亡国機業』に手を貸すなんてごめんだ」

女の申し出をビクトルがバツサリと切り捨てると残る女二人がビクトルの肩を掴むが、ビクトルと話している女が手で制すと渋々手を離す。そのまま女は続ける。

「どうしてかしら？貴方が首を縦に振ってくれれば私達は貴方に最高の研究環境を提供するわ。勿論、今の国際IS委員会と違って変な政治的判断みたいな余計なしがらみだって存在しない」

「そして僕にお前達の思うままに研究をさせて用済みになったら始末するんだろう？割に合わないね。第一お前達に加担して味わう事になる良心の呵責も加味すれば僕がお前達に手を貸す事に対するメリットなんて無いも同然だ」

「良心の呵責、ねえ…そんなもの感じる必要があるのかしら？貴方

はただ研究していればいい。その研究成果を活用するのは私達の勝手。その研究成果が例え何人殺そうがそれは私達の責任で貴方は関係無いじゃない」

「本気でそう言っているのなら一度ノーベルの伝記でも読むんだね…それと僕の専門は兵器を作る事じゃない。残念だけど仮に僕に研究させてもお前達が望むような成果は逆さに振っても出てきはしない」

「あら、あるわよ。とても重要な成果が」

しかし冷たく言い放つビクトルに対して女は平然と返す。

「僕が？まさか遺伝子操作で生物兵器でも作らせるつもりか？それとも『バダンシンドローム』を発症させる新兵器でも開発させる気か？そんなものは無理だし死んでも御免だ」

「そんな割に合わないもの作らせる訳無いじゃない。非効率的だわ。それよりもっと効率的で、もっと絶大な力を持つものよ。それに貴方の興味関心とも一致していると思うわ？」

「…読めたぞ。お前達は僕にISコアの解析をさせようって腹積もりなんだな？」

「ご名答。貴方が何故ISが女性しか操縦出来ないのか、そして何故織斑一夏が男性でありながらISを操縦出来るのか調べていることは知っているわ」

「その為にはコアの解析が必要な事も、か…浅はかだな。僕の研究そのものじゃなくてその副産物であるコアの解析結果が欲しいって

訳か。生憎だがコアの解析ならば僕より適任がいる。そっちに当たってくれ」

「貴方の研究成果そのものも貴重よ？何故織斑一夏が乗れるかが判明すれば他の男性が乗れるか否かも自然と分かるもの。他に乗れる男性がいるのであれば全力の調達はもつと容易になるし、乗れないならば乗れないで私達女のIS操縦者は優位は揺るがないのだからデメリットは無いもの」

あくまでも首を縦に振らないビクトルに女は尚も続ける。

「そこまでポジティブ思考なのはある意味尊敬するよ…どうする？僕の答えは変わらない。いっそ痛み付けるかい？僕は勿論マサヒコを痛み付けても無駄だ。僕はこう見えて意固地でひねくれ者なんだ。そんな事したらますます臍を曲げるだろうさ」

「そんな野蛮な事はしないわ？ただ私達と話す時間が長引くだけよ？」

そう言つて女が笑ってみせる。長時間の尋問で疲弊させようと言っただろう。

ビクトルの予想通りに女は再び口を開き話し始める。説得…という名の長い尋問はまだ始まったばかりだ。

漸く催眠ガスの効果が切れて意識を取り戻した岡村マサヒコは自分が牢獄らしき場所に閉じ込められている事に気がついた。三方向を壁に囲まれており、残る一方向にはいかにも牢獄といった感じの鉄格子が設置され、出入口となるらしい格子と直結した扉がついている。どうやら扉の施錠には南京錠が使われているようだ。

部屋の中には簡素なベッドが二つ置いてある。それ以外の物は特に見当たらない。窓も無いので外の様子も分からない。格子の方から外を見てみると無機質な壁に廊下くらいしかない。少なくともこの近くにはこの牢獄以外には部屋はなさそうだ。

(ここには見張りもいないし監視カメラとかも無さそうだ…逃げだせはしないと高を括ってるんだろうな。それよりもビクトルは何処に行ったんだ？連中の様子から察するにビクトルを殺す気は無いだろうし…)

一通り自身の置かれた状況を把握すると今度は暫く思考を巡らせる。恐らく自分達を拉致したのはモグラ獣人の墓の近くでビクトル・ハリンを無理矢理連れていこうとした男達の仲間だろう。そして連中はビクトルを生け捕りにするつもりだった。狙いはビクトルの天才的な頭脳だろう。それくらいはマサヒコでも簡単に推測出来る。

ただビクトルが今何処に居るのが分からないのが最大の懸念材料だ。何処か自分とは別の場所に監禁されているのか、尋問か何かを受けているのか、はたまた既に自分があるアジトらしき場所からは移送されているのか…殺されたという可能性は低いが、まずビクト

ルの無事が確認出来なければお話にならないし、今後どうするかも変わってくる。

それに連中がビクトルの頭脳を狙った目的が分からない。或いは『シヨツカー』以来連綿と続いている世界征服を企む新たな悪の組織だろうか。

ベッドに腰掛けながらそんな事を暫く考えていたマサヒコだが、足音が聞こえてくると思考を中断し、廊下の方に視線を向ける。

すると複数の男と三人の女に後ろから追いつ立てられるように後ろ手に縛られたビクトルが歩いてくる。見た限りでは怪我などは無さそうだ。

そのまま男の一人が南京錠の鍵を開けて扉を開くと、ビクトルを押して牢獄の中へと押し込む。

「そこで少し頭を冷やしてよく考えなさい、ビクトル・ハーリン博士。私達の提案におとなしく頷いておいた方が貴方の為にも、その貴方の連れにとっても最善の選択だと分かる時が来るわ。後悔先立たず、って事よ。じゃ、また後で」

女の一人がそれだけ言うつとやがて一団は歩き去っていく。やはり見張りは残していかない。

足音が十分遠ざかった事を確認するとマサヒコはビクトルを拘束しているロープをほどく。

「大丈夫か？ビクトル」

「ありがとう、マサヒコ。まあ、何とかね…」

「その割には結構疲れてるみたいだけど…?」

「あいつらのしつこさにうんざりしてたのさ。何回も何回も同じ事を言われたら疲れるよ」

そう言っただけでビクトルは溜め息をつく。

元々遺伝子操作の副作用で虚弱体質だったビクトルだが、『バダン』との戦いやその後のマサヒコやアマゾンの尽力もあって成長した現在では人並み以上に体力がついている。

というよりマサヒコ共々アマゾンに振り回されてジャングルを駆け回り続けていたら嫌でも体力がつくし、やはり研究者も徹夜や肉体労働も意外と多いので自然とタフになってくる。

ただそれでもビクトルが閉口する辺りかなりしつこく『説得』が行われたのだろう。そんな事をされたらマサヒコだってもたないだろう。

「けどあいつらは…俺たちをこんな場所に連れてきて閉じ込めた連中は一体何者なんだ?」

「十中八九『亡国機業』の連中だろうね。他にこんな手を使ってくる組織は無いだろうし」

「滝さんも言っただけでその『亡国機業』ってのはどんな奴らなんだ?」

「まだまだ分からない事が多いけど…簡単に言えば世界中で暗躍してる秘密結社だね。色々犯罪行為はやってきてきているけど最近だとISに目を付けてるらしくてね…これは此処だけの話だけど、イギリスの第3世代機『サイレント・ゼファイルス』を強奪したのも連中なんだ」

「強奪って…『サイレント・ゼファイルス』は事故で大破して失われ たってニュースで見たんだけど…？」

「そんな不名誉極まりないニュースをイギリス…いや、ISを保有してる国家が大々的に流すと思うか？」

マサヒコの疑問にビクトルが推測を交えながら答える。

マサヒコが言った通り世間一般ではイギリスが開発した第3世代機『サイレント・ゼファイルス』が強奪されたという事実は隠蔽されている。その為各国の軍関係者やIS関係者、それにインターポールやごく一部の事情通にしか『亡国機業』による『サイレント・ゼファイルス』強奪の事実は知られていない。

当然だ。国の威信をかけて開発した第3世代機が謎の組織により強奪されたなどという失態を自ら公表したがる国などない。ましてやそんな第3世代機を強奪出来る組織の存在が世間に明るみに出たら各国の権威は軒並み失墜するだろう。

「つまりは『亡国機業』って連中は『シヨッカー』とか『バダン』の連中と似たようなものって事でいいのか？」

「それは中々難しいな…そうであるとも言えるし、そうでないとも言えるな」

「珍しくはつきりしないな…どうしてなんだ？」

「簡単に言えばやってる事自体は規模の違いはあるけどバダンとかとそんなに変わらないよ。ただ現在分かっている限りでは組織の最終目的がハッキリしない所とか組織の構造なんかはそういった組織とは違うみたいだし、これは何となくだけど何より本質的な所で違うような感じがするんだ」

「目的がハッキリしないっていうのはともかく組織の構造ってのはどういう事だ？」

「まだこつちでも実態は掴めてないけど『大首領』みたいな明確なトップがない非ピラミッド型の組織である可能性が高いね…かなり乱暴に言えば『デルザー軍団』に近いって言った方がマサヒコには分かりやすいかな」

マサヒコの質問に答えながらもビクトル自身も思索する。

『亡国機業』のやっている事自体は何らシヨッカー以来の組織と変わっていない。だからこそインターポールも『大規模犯罪組織』に指定しているし、『仮面ライダー』達も戦いを開始している。

ただそれまでの組織と違い、実態が掴めないという事もあるが『シヨッカー』以来の組織と違って組織の理念や最終目標がない。少なくとも見えてこない。シヨッカー以来のいわゆる悪の組織はむしろ理念や最終目標はかなりはっきり掲げている事が多いのとは対照的だ。

それに組織の構造もかなり異なっているようにも思われる。

シヨツカーから最後の組織『クライシス帝国』までの組織は軍隊や警察などと同じく『大首領』なり『創世王』なり『クライシス皇帝』なりを絶対的トップとしたピラミッド型の組織だ。

一応トップからかなりの権限が委譲された対等の大幹部が数人いる事もあるが、それでも大幹部は大抵トップに絶対の忠誠を誓っている上に、トップの命令は厳守が原則だ。逆らえば当然、場合によっては不興を買っただけで大幹部が処刑される事もある。

一方、『亡国機業』の組織構造はシヨツカーからクライシス帝国までとは異なりどちらかと言えばギャングやマフィアに近い非ピラミッド型の組織だ。

簡単に言えば大首領のような明確なトップがおらず、シヨツカーからクライシス帝国まで言う対等の立場と権限を持った大幹部が組織の意志決定を行う組織構造だ。明確なリーダーが存在しないという点では、団員の一人一人が大幹部相当の力と対等な立場と権限を持ち、規模こそ小さいが構成員一人一人の単純な戦闘力平均なら歴代最強クラスとまで言われる『デルザー軍団』、特に明確なリーダーが存在していなかった初期のそれが比較的近い。もともと、『デルザー軍団』には表には出なかつただけで裏で操る黒幕たる大首領は存在し、団員もそれぞれ大首領には忠誠を誓っているので厳密には違うが。

『亡国機業』の組織構造についてはまだ分かっていない事が多いが、組織の意志を決定する『幹部会』とその決定に従い作戦など実務に当たる『実働部隊』に大別される事、原則『実働部隊』は『幹部会』直属という形になっており、幹部一人一人は『実働部隊』に対して『幹部会』の命令を伝達する命令権はあっても幹部個人に従っていない

る訳では無い事、例外として優れたIS操縦者かつ専用機持ちである12人の幹部には直属の部下としてIS操縦者を抱える事が許されている事、原則対等な『幹部会』の中でもその12人は別格でそれまでの組織で言う『大幹部』相当の権限、力を持ち、事実上『亡国機業』を取り仕切っている最高幹部である事、その12人の中には明確なヒエラルキーが無い対等な立場である事などが推測される。

その最高幹部の中でも特に前線に積極的に出てきているが故に比較的情報が多く、その作戦立案・指揮能力及び戦闘力の高さ、そしてその無差別性と冷酷さから『見境無しレオン・レーヌの雨』、『獅子の女王』など様々な異名で呼ばれるスコール・ミューゼルの例が一番分かりやすい。

スコールは自身が抜きん出たIS操縦者である…少なくともIS学園生徒会長でロシアの代表操縦者でもある更識楯無から容易く逃れられる実力はある…と同時に専用機持ちの直属の部下が最低二人はいる。

しかも判明している二人の部下が持つ専用機：『アラクネ』と『サイレント・ゼフィルス』はどちらもスコールが強奪を計画・立案・指揮し、首尾よく成功させたとされる代物だ。特にイギリスの最新鋭機である『サイレント・ゼフィルス』は操縦者の技量も相まってIS学園を襲撃した際には複数の専用機と渡り合える程の力を持っている。それ程貴重な存在を直属の部下として、制裁の判断すら一任されているらしいスコールの立場や権限の大きさは推して知るべし、だ。

ただ組織の明確なトップこそいないものの、初期の『デルザー軍団』における『ジエナルシャドウ』のように最高幹部間の意見調整や取り纏めを行ったり、『幹部会』会合の議事進行役など、『幹部会』

の運営が円滑に運ぶようにリードする幹部は存在しているようだ。こちらは立場こそ最高幹部と対等であり役割上その発言力も最高幹部を含む他の幹部以上に大きい。直属の部下を持つ事は勿論『実働部隊』に関する権限は殆ど与えられていないようだ。リーダーではなくあくまで調整役であるという事なのだろう。

このような非ピラミッド型の組織はピラミッド型の組織に比べて絶対的トップが潰される事で組織が壊滅するというリスクが無い、最高幹部を含めて幹部に万一の事があっても他の幹部の存在や新たな幹部の昇格などにより補完・補充され組織全体のダメージが少なくなるなど、主に外部からの攻撃に強い構造になっている。『亡国機業』にはうってつけだ。

だが欠点が無いわけではない。それは重要な問題であればある程意志決定が遅れる事、そして何より外部からの攻撃には強い分組織内の内紛や内部分裂にはとことん弱いという事だ。

特に『デルザー軍団』はそれが顕著であり、前者に関しては「仮面ライダーストロンガーを倒した者がリーダーとなる」という単純明快なルールを定めて一時的に本来の目的である世界征服に関しては棚上げする事で何とか切り抜けたが、後者ばかりはどうしようもなく、内紛、手柄争い、抜け駆け、謀殺などが横行し、結束どころか仮面ライダーストロンガーにまんまとそれを利用して窮地を切り抜けられた挙げ句、パワーアップまで許してしまい次々と団員が倒されていくという醜態を晒し、組織存続の危機に立たされた。

その後テコ入れとして軍団随一の実力者である『マシン大元帥』がその実力にものを言わせて『ジエネラル・シャドウ』らを従え、軍団の指揮を執る事で組織再編を図ったが、既に軍団員の過半数が倒されていた事やその『マシン大元帥』も実力こそ確かにあつた

が『ダブルライダー』の存在を疑い警戒すらしめないなど詰めが甘い部分があった事、何より『ジエネラル・シャドウ』が反発していた事などが重なり結局は仮面ライダー達により壊滅に追いやられた。

『バダン』により復活させられた際には学習したのか最初は皆共同歩調を取っており、指揮を執るマシーン大元帥の復活後はその指揮に従い仮面ライダー達をあと一步まで追い詰めた。

だがマシーン大元帥が今度は仮面ライダーZXの存在を失念・軽視していた為に仮面ライダー達を仕留め損なつた事が原因となり、それまで不満はあつたが仮面ライダー打倒の為に必要があつたから仕方なく従っていたジエネラル・シャドウを始めとする団員達の不満が一気に噴出し、マシーン大元帥派とシャドウを中心とする反マシーン大元帥派の対立が勃発、そこに各々の因縁や怨恨まで加わる事で再び軍団は四分五裂の状態となった。

更に『バダン』に潜入していた結城丈二の活躍や風見志郎が自らを改造したダブルライダーと合流・再改造を受けて『仮面ライダーV3』として戦線復帰した事、何よりバダンや同じ地区にいたシヨツカー以外の組織が壊滅した事で仮面ライダーZXら各地で戦っていた仮面ライダー達が続々と集結してきた事が重なって、内紛続きでまともに連携すら取れない軍団員は仮面ライダー達により各個撃破されていき、またも組織は壊滅した。仮にまた復活しても今度はその時新たに生まれた因縁や怨恨からそれまで以上に結束出来ない状態でスタートするだろう。

流石に『亡国機業』はそこまで極端には行かないだろうが、絶対的なトップ…言い換えれば強権を発動して異なる意見を強引に纏め上げ、それを徹底させられる権限を持った者がいない以上内部分裂や内紛のリスクは常につきまとう。

『亡国機業』の目的や理念がわからない以上何とも言えないが、やはり最高幹部間でも見解の相違や温度差は少なからず存在しているようで、例えば織斑一夏の命を狙ったかと思えば今度は生け捕りを目論むなどその行動にはちぐはぐな面も見受けられる。やはり意見が集約し切れない事や各人の思惑に相当の隔たりがあるという事があるのだろう。

「随分と詳しいんだな…」

「連中は積極的にISを奪取したり悪用したりしてくるんだ。ISを取り扱う国際IS委員会としても篠ノ之束と同じくらいには無視出来ない存在だからね。嫌でも詳しくなるさ」

感心したように言うマサヒコにビクトルはため息をついて答える。

「ところでマサヒコ、そろそろ此処から出ないか？足音は聞こえてこないし…アマゾンが大暴れするにも下準備がいるだろ？」

「そうだな。わざわざ見張りも監視カメラも置いてないんだから『脱走して下さい』って言うてるようなもんだしな…ビクトル、発信器は頼めるか？」

「任せてくれ。『アレ』には気付いてなかったのか取り上げる素振りすら無かったからね。その様子じゃマサヒコも…」

「ああ、寝てる所をそのまま放り込んだみたいで無事だよ」

「だったら決まりだ。善は急げ、さ」

そう言つてマサヒコは懐から鞘に収まつたやや小振りのサバイバルナイフを、ビクトルは折り畳み式のツールナイフを取り出す。

そのままマサヒコは上着に付けられた発信器を外してビクトルに渡すと、ナイフを鞘から抜き鋸刃の付いた刃の背を扉のすぐ隣にある鉄格子の上に当てて、まるで木材でも斬るかのように引き切り、下も同様して鉄格子…というより一本の長い鉄棒だが…を取り外し、更にもう一本外してスペースを作ると、そこから手を回して片手で南京錠を押さえながらの掛け金も同様にして切断する。

マサヒコが今使っているサバイバルナイフはアマゾンを追う形でジャングルのガイドになったばかりの頃にジャングルを動き回るなら必要だろうとアマゾンやブラジルの大学に通っていた事があり、マサヒコがブラジルに慣れてガイドになるまでブラジルに滞在し何かと面倒を見ていた村雨良の頼みを受けた結城丈二が製作し、アマゾンを通して手渡された『特注品』だ。

元々軍用に開発されているサバイバルナイフの中には墜落した航空機からの脱出に使うために金属を切断可能な鋸刃がついたものも存在する。丈二が製作したものにも同じ機構がついており、更に電磁ナイフ製作や修理の際に使用した技術を応用してナイフの刃自体の剛性や耐久力が通常のものより大幅に向上している。その分切れ味はかなり落ちるが別に戦う訳ではないし、普段は山刀や鉋が破損したり紛失した際の予備に使うくらいなので切れ味は最低限あればいい。

そして現在発信器を解体しているビクトルが使っているツールナイフも同じく結城丈二の特製だ。こちらはビクトルが成人した際に出先での作業用にと製作して丈二自ら手渡したもので、切れ味はあまりないがその分様々な工具の機能がついており、出先で実験機器の

調整をしたり不調があったりした時などに重宝している。このよう
なちやちな発信器に細工を施すくらいならこれだけあれば十分だ。

そのまま何やら作業をし終えたビクトルにマサヒコが鉄棒を渡す。

「それは？」

「ほら、ナイフよりはこっちの方がリーチがあるだろ？念のために、
さ」

「なるほど、武器って訳か…こんな事に慣れたくは無かったけど、
仕方ないな」

「俺もさ…じゃ、行くうか」

そのままビクトルはマサヒコから鉄棒を受け取ると細工を施した発
信器を懐にしまい、南京錠が外れた扉を開けて二人揃って牢獄から
抜け出した。

山道の中を二台のバイクがひた走る。一台はアマゾンが乗る『ジャ
ングラー』、もう一台は滝和也が運転しその後ろに凰鈴音が乗る和
也の改造バイクだ。和也のバイクは前に行く『ジャングラー』に先

導されるような形でその後を走っている。

岡村マサヒコとビクトル・ハーリンがタクシーに偽装した『亡国機業』の手の者とおぼしき連中に拉致された後、アマゾンには即座にジヤングラーに乗って走り出していた。それを見た和也と鈴は同じくバイクに跨がりすぐに追いかけて、現在はこうしてマサヒコとビクトルを救出すべく動いている。

恐らくアマゾンはその鋭敏な五感や野生の勘などからマサヒコとビクトルが何処に連れ去られたのか本能的に理解したのだろう。だから和也と鈴はアマゾンを信じてそれについて行く事にした。

やがてアマゾンは舗装されていない山道へと入り、そのまま『ジヤングラー』から降りると山の木々の間にある細い道を走り出す。和也も目立たないようにバイクを『ジヤングラー』の近くに停車させ、鈴と共にアマゾンを追って走り出す。

暫く先に進むと洞窟らしき空洞が目の前に見えてくる。そこでアマゾンは近くの茂みに飛び込み隠れる。和也と鈴もそれに続けてアマゾンの近くに同じように隠れる。洞窟の前には見張りらしき男達が数人いる。恐らくあそこにマサヒコとビクトルは監禁されているのだろう。

「けどよくこんな場所にあるって分かったわね、アマゾン」

「こういうこと慣れてるから。それに此処はガンダーとか『ネオシヨッカー』とかがアジトの一つにしてた事もあったし、この辺りでマサヒコとビクトルを閉じ込めておけるとしたらここしかないから」

感心したように言う鈴に対してアマゾンはこともなげに答えてみせる。

元々アマゾンはその経歴や能力から単独で敵のアジトを発見・探索・侵入する事が多く、仲間達からもその実績を信頼されて単独行動や別行動で潜入や救出に当たる事も少なくなかった。

アマゾンがこの場所を特定出来たのは感覚的なものだけではなくそう言った経験によるものでもある。

「しかし見張りの連中は少し厄介だな…さつさと片付けるなり注意を反らすなりしないと援軍なんか呼ばれたりしたら面倒だし、何よりも二人に危害が及んだら不味い」

「だったら、オレがやる」

そう和也にアマゾンは答えると、茂みに隠れたり木々の間を飛び回ったりして見張りに接近していき、やがて和也や鈴の視界からもその姿を消す。

暫く待っているとアマゾンは男達の背後に音もなく飛び降りる。そのまま男達に声を上げさせる間もなく気絶させ、和也と鈴に手招きしてみせる。

二人はそれを見ると茂みから出てアマゾンへと合流し、洞窟の中へと入っていく。

中は暗いが全く中が見えないほどではない。時折何人が洞窟の中から歩いてくるが、敵に発見される前に全てアマゾンが声すら上げさせずに眠らせる。

そうして奥に進んでいくと、下に続くリフトらしきものを発見する。三人はリフトに乗り込み、和也が計器を操作すると、リフトは下へと向けて動き出す。

「なるほど、この地下にアジトがあるって訳か」

降りていくリフトの中でそう和也が呟くと同時にリフトは地下へと到着する。三人が降りて少し歩くと、金属製のドアがある。電子ロックが使われているようだ。

「カードキーが無いと入れなさそうだな…別の入り口探すか？」

「大丈夫、さつき気絶させた奴らこれ持ってた」

そう言ってアマゾンには和也に男達のものとおぼしきカードキーを数枚取り出して和也に見せる。

「アマゾン…ちょっと手慣れ過ぎじゃない？」

「ま、そのお陰で無事侵入出来るんだ…一応二人も持っててくれ。施設内部でもカードキーが必要になる場所があるかもしれないからな」

和也がカードキーの内一枚をロックに通すと無事ロックは解除される。そのまま二人にもカードキーを渡すとアジトへと侵入する。

三人は監視カメラや巡回をやり過ごして手近な部屋に入り込む。どうやら現在は使われていない部屋のようだ。

「とにかくまずは二人の居場所を探すのが先決だな…：一手に別れて探すぞ。アマゾンと鈴は一緒に二人を頼む。俺はついでにモニタールームも探してくる」

「滝捜査官、一人で大丈夫ですか？」

「馬鹿にすんな。俺はこういうのはショッカーから続けてきたんだ。年季ならアマゾンより上さ…：それにモニタールーム探しとなるとむしろ一人の方が目立たなくて済む分色々やり易い」

「分かりました…：気を付けて下さいね？」

「ああ。それよりお前こそ気を付けるよ？初めてだろ？」

「大丈夫ですよ。アマゾンがいますし」

「うん、オレがリンを守るから大丈夫」

「分かった…：なら行動開始だ」

そのやり取りを最後にアマゾンと鈴は天井のハッチを開けて天井裏へと入り込む。和也もまたそれを見届けると近くのダストシユートを伝って二人とは別方向へと潜入を開始した。

岡村マサヒコとビクトル・ハーリンは先ほどまで監禁されていた牢獄から抜け出した後は自身を連れ去り、そして監禁していた『亡国機業』のアジト内を探索していた。監視カメラや巡回をどうにかやり過ぎしつつ、現在は使われていないとおぼしきブロックに二人はいた。

「どうやら連中の姿を見かけないところから察するにここは使われていないみたいだ…つまりこのアジト自体は連中が建設した訳じゃなくて前からあったのをそのまま…或いは多少改修して使っているって事なんだろうな」

「ビクトル、この機械なんだけど…それにこの部屋…」

「察するに恐らく改造手術に使う部屋なんだろう。他に器具とかは残ってないしカルテやデータの類も残ってないか…」

「改造手術…連中はISだけじゃなくて改造人間も使ってるのか？」

「いや、そんな情報は入ってきていないね。第一改造人間の製造が出来るのは志度敬太郎博士くらいだし…使われた形跡がないところを見るにむしろ最初からこの施設に設置されていたんだろうね」

「つまりここは悪の組織のアジト跡って訳か…」

そう言ってマサヒコとビクトルは部屋の中を見渡す。

確かにこの独特の雰囲気はそういった悪の組織のそれだ。

ビクトルは暫く近くにあった机をあさっていたが、特に何か見つかった訳ではないようでそのまま止めてマサヒコと共にその部屋から出て続けて隣の部屋に入っていく。

こちらは研究室として使われていたらしく、机や本棚などが置かれている。マサヒコとビクトルは机や本棚を調べてみるが、やはりめぼしいものは残っていない。ふとビクトルが壁の方を見ると何やら備え付けの情報端末が設置されている。『亡国機業』が改修がてら設置したのだろうか。

ビクトルは端末に向かうと端末を起動させ、そのままキーボードを操作し始める。

「どうする気だ？」

「少し現在地とか調べるところと思っただけ」

「セキュリティとか突破出来るのか？」

「今やってるところさ…流石にちゃんとセキュリティは一通り備えてるか…だけど、僕相手には甘いな。見てるよ…篠ノ之束ほどじゃないけどクラッキングも…！」

そう呟きながら端末を操作していたビクトルだが、暫くするとディスプレイに様々な情報が表示され始める。

「よし、出来た…ここは中心部から外れてるみたいだな…中央制御室はここで…昔の指令室はモニタールームとして使われてるみたいだ」

「この下にも何か…貯蔵庫か。今は使われてないみたいだ…つてこ
つちには爆薬！？自爆用って訳か…」

マサヒコとビクトルは画面を見ながらめいめい呟く。

だが外が騒がしくなつてくるとビクトルは端末を再び操作する。

「流石に脱け出したのに気付かれたか…ただこっちにいる事までは
気付かれてはないみたいだ」

「予想はしてたけどこの先は動きにくいな。ここからは天井裏から
いくしかないな」

「待つてくれ。ちょっとお返しを…よし、これで完了つと。あいつ
ら、後であわてふためくぞ」

ビクトルは端末を何やら操作すると画面を閉じてハッチを開けて先
に天井裏に入り込んだマサヒコに続けて天井裏に入る。

「次はどうする？このままじゃ出るに出れないし」

「だったらもう少し暴れてやるか…モニタールームに行こう。そこ
なら此処以上に出来る事はある筈だ」

そのままマサヒコとビクトルはモニタールームを目指して天井裏を
進み始めた。

「アマゾン、ここは？」

「多分、何かの実験してた場所。結構さっきの場所から離れたところだけと…」

「マサヒコさんもハーリン博士もまだ見つからないわね…」

『亡国機業』のアジトに侵入し天井裏を伝ってアジト内に監禁されているであろう岡村マサヒコとビクトル・ハーリンを探していたアマゾンと凰鈴音は天井裏のハッチを開けてアジトの一部へと降り立ち、部屋の中を調べていた。

今まで同じような事を何回もやっているが、マサヒコやビクトルの監禁されている場所には出ていない。それどころか運が良いのか悪いのか誰とも出くわしていないのでマサヒコとビクトルの手がかりすら掴めない。

今居るのは恐らく悪の組織のアジトだった頃に何かの実験場として使われていたらしき場所だ。

ここも外れのようなだ。そのままアマゾンと鈴は再びハッチから天井裏に戻るうとするが、周囲が騒がしくなってきた事に気付くとそれを中断すると二人とも耳を澄ませる。

「ハーリン博士は!?!」

「こちらにはいない！」

「クソ！博士と連れれの男に仕込んでおいた発信器はどうしたんだ！？」

「それがちゃんと作動しているならこんな事にはなっていない！だから見張りを付けると俺は言ったんだ！全く、ISが操縦出来るからと言って…！」

男達の怒号と足音が徐々にこちらに近付いてくる。音から察するにドアを開けて部屋の中を調べながらこの部屋に向かってきているようだ。間もなくこの部屋にも入ってくるだろう。

アマゾンと鈴は黙って目配せすると、アマゾンはドアのすぐ右の壁に、鈴はすぐ左の壁にそれぞれ張り付き、息を殺して待ち構える。そこにドアが開き、男達が飛び込んできると同時にアマゾンと鈴はドアを閉じてその音に振り返った男達が対応出来ない内に一斉に飛びかかり、叩きのめす。

最後の一人が逃げようとするがアマゾンが襟を掴んで引き戻すとそのまま胸ぐらを掴んで壁に押し付ける。

「言え！マサヒコとビクトルは何処だ！？」

「だ、誰がそんな事を言うか！」

アマゾンの剣幕に思わずたじろぐ男だが、白を切る。そこに鈴が加わる。

「とぼけても無駄よ！」

「知らんものは知らん！殺すなら殺せ！」

「あつそ…だったらあんたの言う通りそうして上げるわ！」

そのまま鈴は自身の専用機を部分展開させると右の拳を固める。

「ま、待て！話す！話すから止めてくれ！」

「さっきまでの威勢はどうしたのよ、情けない…まあ良いわ。ほら、さっさと話しなさい」

「そう言うな！口で説明出来る事じゃない！俺がハーリン博士とその連れが監禁されてる場所に…」

そう男が言ってアマゾンの手を退けて腰から特殊警棒を抜き放とうとした瞬間、鈴の部分展開された拳が男の顔のすぐ真横にある壁に炸裂する。

「残念だけどあんた達がマサヒコさんとハーリン博士に逃げられたって話も、二人の居場所も掴めてないって話もちゃんと聞いてたわ。正直に言ったら生かしておくつもりだったけど…仕方ないわね。さあ、何処がいいか選びなさい？顔？胸？腹？」

鈴はそのまま特殊警棒をねじ曲げると投げ捨て、男に冷たく言い放つ。

「待ってくれ！いい、命だけは！」

「そう！顔がいいのね！？ならお望み通りそうしてあげるわ！」

そして逃げようとする男の顔に部分展開された拳を思い切り叩きつける…直前で寸止めされる。男の方は恐怖のあまり寸止めとほぼ同時に気絶している。

「アマゾン、どうする？」

「なら多分隠れてもあんまり意味ない。あいつらマサヒコとビクトルを捕まえようと必死だからむしろオレ達が暴れた方が逃げやすくなる」

「なら正面突破に決まりね！だったら一丁派手に行くわよ！」

「それはいいけどアイエス使ったらダメだぞ？アイエス使ってマサヒコとビクトルのところに当たったら危ないから」

「分かってるわよ、アマゾン。今度はきちんと言うこと聞くわ」

そうアマゾンと鈴は会話を交わすと今度はドアから堂々と部屋を出て走り出した。

「さて、と…モニタールームを見つけたはいいが…どうするか、だな」

滝和也はアジトの中央部にあるモニタールーム…恐らく昔は指令室として使われていた場所だと和也は経験的に分かったが…の出入口となるドアの前へとやって来ていた。

暫くダストシユートなどを伝いながらアジト内を探索していた和也だが、岡村マサヒコとビクトル・ハーリンが閉じ込められていたらしき空の牢獄を発見した後は暫くモニタールームを探していたが、やがてマサヒコとビクトルが既に牢獄から脱出した後だという事を館内アナウンスやマサヒコとビクトルを探して走り回り始めた男達の会話から悟るや、モニタールーム探索をしながらマサヒコとビクトルも探していた。

途中で一味の男を数人捕まえてモニタールームの場所を吐かせた後は時に監視カメラから姿を隠しながらどうにかしてモニタールームの前にまでやってきた。

ただモニタールームの中には未だ数人の男達が詰めているので気付かれずにモニタールームに侵入するのは事実上不可能だ。

ならば奇襲をかけようとモニタールームにも繋がっている天井裏に入ろうとハッチに向かった矢先、入ろうとしたハッチが内側から開く。

思わず敵かと身構える和也だが、即座に違うと思ひ直す。わざわざ敵が天井裏に入り込むとは考えにくい。そしてハッチから床に降りてきた二人を見て和也は安堵する。

「マサヒコ！ビクトル！無事だったか！」

「滝さん！はい、俺もビクトルも大丈夫です！」

「それよりアマゾンと鈴さんは！？」

「今頃お前達を助ける為に一暴れしてるんじゃないか」

降りてきたのは他でもないマサヒコとビクトルだった。どうやら牢獄から脱走した後は天井裏を伝って逃げ回っていたようだ。

互いの無事を喜んでいた三人だが、やがてマサヒコが口を開く。

「滝さん、あのモニタールームに何人いるかは分かりますか？」

「さつき見えた限りじゃ5、6人は居たな。死角も考えれば他にも何人かいる可能性もあるな。お前らはどうする？」

「勿論滝さんに付き合いますよ。というより僕もマサヒコも最初からそのつもりで此処まで来たんですから」

「ったく、随分とアグレッシブな奴らだぜ…だったら話は早いな。天井裏からとっておきのサプライズを届けてやるうぜ？」

そう和也が言つてハッチから天井裏に入り込むとマサヒコとビクトルも和也に続いて天井裏へと入り込み、ハッチを閉める。

天井裏を伝つていくとモニタールームの真上に到着し、和也はハッ

手を開けて天井裏から飛び降りて手近な敵に反応する間もなく手刀を打ち込み、気絶させる。

「グッ！侵入者か!？」

そのまま和也はマイクを取ろうとした男を蹴り飛ばすと挑みかかってくる男達に突きや蹴りを見舞い沈黙させ、ドアから逃げようとした敵には飛び蹴りを浴びせて沈黙させる。

マサヒコとビクトルはそれを見届けて安全が確保されたのを見ると和也に続いてハッチを通って天井裏から床に降り立つ。

そのままビクトルはモニタールームの端末を操作し始める。

「よし、さつき送ったウイルスプログラムは効いてるな…これでシステムのコントロールはこっちのものだ。どうやらアマゾンと鈴さんもこの近くで暴れてるらしいね」

端末を操作しながらビクトルは次々とモニターに情報を表示させていく。

「驚いたぜ…地下なのに輸送機の発着場まであんのかよ」

「どうやら施設の一部は地上にまで出てきているようですね…意外とこんなものがあったても気付かれないものですね」

「人間の心理つてのは案外そんなもんだよ。身近にあるほど思い込みや先入観、慣れで却って気付きにくいものさ…よし、システムの全ロック解除、アジトの自爆コードも生きてるな。こいつをセットして、と…」

端末を操作しながらビクトルは呟くと画面が赤く点滅し、画面に力
ウントダウンが表示され、アジト内に放送が流れ出す。

『警告！只今自爆コードの入力を確認！このまま解除コードが入力
されない場合には一時間後にこの施設は自爆します！直ちに解除コ
ードを入力するか安全な場所へと待避して下さい！繰り返します…』

「自爆か…だったらさっさと逃げ出さねえとな」

「その前に一仕事残ってますよ…マサヒコ」

「よしきた！」

そう言ってマサヒコとビクトルは切断された鉄格子の一部…鉄棒を
それぞれ手に持つ。

「ウイルスプログラムでこれ以外の他の端末からはシステムをコン
トロール出来ないようにプログラムを書き換えましたがこの端末を
使われたら意味が無いので、物理的に破壊するんですよ」

「なるほどね、そいつは名案だぜ」

そう言って和也もまたホルスターから結城丈二が製作した大型拳銃
とその弾倉下部に電磁ナイフが組み合わせられた複合武器を取り出
す。

そのまま二人はめいめい手に持った武器を駆使して端末を破壊して
いく。

「この！いつもいつも僕達に政治的判断とかそんなものばかりさせて！僕達の本業は科学者なんだ！そんな事慣れてないし慣れないしやりたくないに決まってるだろ！ただでさえあの篠ノ之束のせいで厄介な問題や面倒な仕事が増え続ける一方だっていうのに…！」

「ビクトル…かなりストレスが溜まってたんだな…」

その際にビクトルが日頃の鬱憤をぶちまけるように大暴れして鉄棒を振るっていたのは、また別の話である。

岡村マサヒコとビクトル・ハーリンが滝和也と合流してモニタールームからアジトの自爆装置を起動させた頃、アマゾンと凰鈴音はアジト内部で敵を蹴散らしながら先に進んでいた。そこに新たに男達その他に6人の女もアマゾンと鈴の前に現れる。様子から見ると女の方が立場が上なようだ。

女の一人が代表してアマゾンと鈴に言い放つ。

「何の目的で、どうやって侵入してきたのたかは知らないけれど…今まで散々荒らし回ってくれたようには行かないわ！せめてもの情けよ、おとなしくしてれば痛みは少なくしてあげるわ！」

「何好き勝手言ってるのよ！そっちこそ人の『トモダチ』浚つてタダで済むとか思うんじゃないわよ！」

「マサヒコとビクトルは返してもらおう！邪魔するなら手加減しない！」

逆に鈴とアマゾンが女達をにらみ返して飛び掛かろうとするが、そこに自爆コードが入力されこのアジトが一時間後に自爆する旨のアナウンスが流れるとそれを中断する。

どうやら女達にとっても想定外の事態であつたらしく、アナウンスから暫くは沈黙：むしろフリーズ状態だったが、慌てて女が指示を出す。

「な、何をしてるの！？解除コードを入力しなさい！それと貴方達はモニタールームの様子を！」

指示に合わせて男達は動き出す。男の一人が手近な壁に備え付けられた端末を操作し始めるが、表情が青ざめていく。そして悲鳴のような叫びを上げる。

「だ、駄目です！こちらからではシステムのコントロールが…解除コードの入力が出来ません！」

「何ですって！？」

更にモニタールームの様子を見に行くように指示されていた男達があわてふためいて報告にやってくる。

「モ、モニタールームの端末が何者かにより破壊されました！恐らく解除コードの入力は不可能…つまり我々の手でこの自爆を阻止する事は…」

その言葉に女達の顔が青ざめる。その様子を見ていたアマゾンと鈴はやがて状況を理解して、確信する。

「アマゾン、もしかしなくてもこれって…」

「タキとマサヒコとビクトルがやったんだと思う。それに三人とも無事に会えたみたい」

だがアジトが自爆するという事はアマゾンや鈴にも危険が迫っているという事でもある。幸いまだ自爆までには比較的時間に余裕はあるが、かといってここでぐずぐずしている暇も無いのも無いのも事実だ。

同時に女も指示を出す。

「総員待避！私達は輸送機で離脱するわよ！」

そう言うと男達と女達はそれぞれ一斉に別方向へと走り出す。

「逃がすか！」

それをアマゾンは追いかけてようと走り出す。

「アマゾン！？」

「リン、心配するな！オレは大丈夫だから！それよりリンは早く此

処から出てタキとマサヒコとビクトルに合流するんだ！」

「で、でも…！」

「オレはまだ死なない！モグラとの約束まだ守ってないし、タキとマサヒコとビクトル…それにリン…『トモダチ』の為に、まだ死ねない！だから、大丈夫！」

「アマゾン…！」

「だから早く行け！リンはリンを待ってる人の為…リンの『トモダチ』の為に、まだ駄目だ！」

「…後は、お願い！」

そう鈴はアマゾンに告げると意を決して出入口へと走り出す。

アマゾンはそれを見届けると再び逃げた女達の後を追いかけて走り始めた。

アジトの自爆装置を起動させて無事にアジトを脱出して地上に出た滝和也と岡村マサヒコ、それにビクトル・ハーリンは同じく地上に

出てきてこちらに戦いを挑んできた一味の男達を片っ端から叩きのめしては縛り上げて、木にくくりつけていた。間もなくカウントダウンが終わりアジトが自爆する頃だ。

「滝捜査官！マサヒコさん！ハーリン博士！」

そこに同じく地上へと無事に脱出出来た凰鈴音が三人へと駆け寄ってくる。こちらはこちらで特に怪我もなさそうだ。

「鈴さん！ご無事でしたか？アマゾンは何？」

「それが…逃げる敵を追い掛けるって言って…」

「あいつ、またそんな事を…ま、アマゾンなら大丈夫だと思うけどな」

「ええ。アマゾンのことですから無事に僕たちのところに顔を出すに決まっていますよ」

鈴の話の聞いてもマサヒコ、和也、ビクトルは慌てる様子も見せない。

「それに自爆させた張本人が言うのも何ですけど…アマゾンは『トモダチ』の為ならどんな時にも、どんな場所でも駆け付けてくれますからね。貴女もそう思いませんか？」

「そう言われたら…私も納得するしかないですね」

ビクトルの言葉に思い当たる節のある鈴は苦笑する。

同時に近くの山から輸送機が離陸して上空を旋回すると同時にそこから6機のISが出現し、四人の前に降り立つ。ビクトルを尋問し、アマゾンと鈴の前に現れた女達が、かつてアマゾン川流域のジャングルで鈴やアマゾンと交戦した事がある機種らしき黒いISを装着している。

和也と鈴がマサヒコとビクトルを守るように前に立つ。鈴はISを展開しようと右手に嵌めた黒い腕輪に手をかけるが…

「動くな！」

同時に女の一人がアサルトライフルをマサヒコとビクトルのすぐ横に発射するのを見て、鈴はおとなしく展開を諦める。この状況では鈴がISを展開して盾になる前に他の三人が蜂の巣にされる可能性が高い。今は諦めるしかない。それを見てリーダー格らしき女が口を開く。

「全く手間掛けさせてくれるわ：ハーリン博士、それとその専用機持ちの貴女も…私達と一緒に来て貰うわよ。嫌なら力づくで連れて行くわ、この状況ではいくら専用機持ちでも抵抗する力なんて無いでしょうけどね」

「嫌だね！」

「そんなの、断るに決まってるじゃない！」

しかし鈴とビクトルは毅然とした態度で拒否する。

「貴方達、少しは状況を理解しなさい？何ならそっちの連れの男二人は今すぐ殺してやってもいいのよ？」

「ヘッ、そんなのどうせハッターだろうが…そんな脅しは通用しねえぜ！」

「それに俺達にはまだあいつが…アマゾンが居るんだ！お前達の思い通りにはいかないぞ！」

和也とマサヒコも女達に言い放つが、逆に女達は四人を嘲笑して告げる。

「アマゾン…あのしつこいケダモノみたいな奴はそんな名前だったのね。まあいいわ。丁度いい見せしめが出来たわ。そのアマゾンだけど…そろそろ死ぬわ。あの男、私達を追いかけたはいいけどタツチの差で逃げられてね。今頃あのアジトの中よ。そして…」

女達がアジトがある洞窟を見やった瞬間、爆発音と鈍い衝撃が響き渡り、洞窟が崩れ去る。

「今死んだわ。貴方達が起動させた自爆装置のせいでね。どう？貴方達が頼りにしていた男を自分たちの手で殺した気分は？これで貴方達はもう後戻り出来ないわ。だって私達と同じ…いいえ、私達よりゲスで薄汚い人殺しになったんだから。そんな貴方達を何処も受け入れたりはいわないわ…でも安心して、私達はそんな事を気にしないわ。私達は貴方達という人間が欲しいんじゃないの。貴方達の才能が、専用機が…その能力が欲しいのよ。だから貴方達の過去は気にしないわ」

女は勝ち誇ったように続けるが鈴もビクトルも何も答ええない。よほどショックを受けたのだらうと判断した女は更に畳み掛ける。

「それに私達は公平よ？逆らえばあのアマゾンとかいう馬鹿な男みたいな目に遭う事になるけど、組織に忠誠を誓って功績を挙げればどんな褒賞も望むがまま。地位も力も手に入るわ。どう？悪い話じゃないと思うわ。貴方達にはそれだけの力があるのだから、ゆくゆくは組織の幹部としてこの世界を裏で操る事だって出来る可能性だって十分にあるわ。だから…」

「…地位？力？世界？いらないね、そんなもの」

しかしビクトルはショックを受けるところか不敵に笑ってみせる。

「そうよ。そんなものいらぬ。私には一夏や他のみんなが…それにアマゾンが居ればそれで十分よ。みんなが居ないなら地位も、力も…みんなが居ない世界なんて、死んでも御免よ」

更に鈴が力強く女の言葉を否定する。

「それとさつきから好き勝手言ってくれてるけどな…アマゾンは死んじやない。この程度じゃ…お前達じゃ、殺せない」

そこにマサヒコも加わる。そしてマサヒコ、ビクトル、鈴は女達を睨み据えて言い放つ。

「あいつは…アマゾンは！俺の…俺達の為に！」

アアアア！

「僕の…僕だけの！そして僕達の為に！」

マアアア！

「それに私の…私達の為に来てくれて！これからも来てくれるんだから！」

ゾオオオン！！

「……それをお前達に……お前達なんか止められるか……!」

「ほざいてなさい! だつたまずその男から……!」

女達はそう言つてアサルトライフルを構えてマサヒコに狙いを定め、銃撃を……

「ガアアアツ!」

加える直前に女達の真下にある地下から『何か』が飛び出してきてアサルトライフルを切り裂き、先頭の女を蹴り飛ばす。

「何!? あいつは一体……まさか……『マスクライダー』!?」

女達は咄嗟にスラスタを噴かして距離を取ると同時に鈴、マサヒコ、ビクトル、和也の前にその何かが降り立つ。

まだら模様のトカゲに似た姿をしたトカゲ男だ。その左腕には腕輪……『ギギの腕輪』が、腰にはベルト……『コンドラー』が巻かれている。そのままトカゲ男は話始める。

「マサヒコ、ビクトル、タキ、リン…大丈夫か？」

「ありがとう、アマゾン。俺は大丈夫だよ」

「勿論僕もだよ。僕からも…ありがとう、アマゾン」

「私からもありがとう…けどもう少し早く来てくれても良かったんじゃない？あんな事言ったけど…正直少し心配だったんだから」

「ごめん、リン」

トカゲ男…アマゾンはいつものように三人と受け答えをする。続けて和也が口を開く。

「俺は気にしちやいないさ。仮面ライダーってのは少し遅れて最高のタイミングで来るものさ。それより…アマゾン！鈴！マサヒコとビクトルは俺が引き受けるから二人共思い切り暴れてこい！」

「ああ！リン！」

「はい！アマゾン！」

アマゾンと鈴が答えると三人は下がり、鈴は腕輪に手を掛け、量子化されたISを展開して装甲を装着する。

「行くわよ！悪党共！」

「オレ達がいる限りマサヒコもビクトルもタキもリンも…」トモダチは、やらせない！」

そう啖呵を切ると咆哮と双牙で友に仇為す悪を討ち倒す機甲の龍…
『^{シエンロン}甲龍』を装着した凰鈴音と、

獣と人の心を併せ持ち、密林を駆け友の為に悪を狩る強く気高く優しい野獣…6番目の仮面ライダー『仮面ライダーアマゾン』は友を狙う悪を倒すべく並んで挑みかかった。

仮面ライダーアマゾン我真っ先に手近な敵へと躍りかかるや、それに合わせて敵が放った近接ブレードの刃に噛みついて受け止める。

「なっ！？こいつ！」

慌ててブレードを引き離そうとする女だが、仮面ライダーアマゾンはしっかりと食らい付き、びくともしない。

逆に仮面ライダーアマゾンはクラッシュャーに更なる力を込めて近接ブレードの刃を噛み折ると、そのまま近接ブレードの主に飛び掛かり、馬乗り状態になって爪を使った攻撃『モンキーアタック』を繰り返す。

「離れる！トカゲ野郎！」

そこに残る5人が横から射撃を浴びせてどうにかして仮面ライダーアマゾンを引き離す。そのまま6機は飛び上がるとスラスターを駆使して空中を飛び回りながら仮面ライダーアマゾンに集中砲火を加える。仮面ライダーアマゾンは反撃出来ずに防御しながら銃撃を受け続ける。

「ふん！お前が飛べないのはお見通しだ！このままなぶり殺しにし

「てやる！」

敵も仮面ライダーアマゾンに飛行能力も飛び道具も無いことも分析済みだ。故にこうして離れて銃撃を加えていれば勝てるとも分かっている。これが獣には決して理解出来ない戦術というものだ。そう思いながら女達は仮面ライダーアマゾンに銃撃を加え続ける。だが、女達にはもう一人厄介な敵がいる事を忘れていた。

「人を無視するなんていい度胸じゃない！」

突如として『何か』が女達を纏めて吹き飛ばす。凰鈴音だ。鈴が『甲龍』の肩部を展開して『何か』を放ったのだ。

「くっ！『龍咆』か！？」

「ご名答…分かったところでもう遅いけどね！」

そのまま鈴は空間自体に圧力をかけて砲身として衝撃波を放つ不可視の砲撃…『龍咆』を乱射して女達を一方的に砲撃する。

砲弾は勿論砲身も不可視である為砲口による攻撃予測も出来ずに女達は一方的に攻撃され続ける。

「だが…これなら！」

しかし女達は散会し、その内の一人が真後ろに回り込み、攻撃を仕掛ける。

「いくら不可視の砲撃でも真後ろには撃てまい！」

「確かに撃てないはね…『肩のは』、だけど」

しかし鈴がそう言うと同時にその女に衝撃波が叩きつけられ、吹き飛ばす。

腕部の『龍咆』だ。『龍咆』は空間そのものを砲身とする関係上砲身の稼働限界が殆ど無い。流石に設置場所の都合上肩部『龍咆』は後方には放てないが、比較的自由が利く腕部のそれならそれこそ死角なしで発射出来る。

「だが所詮は砲撃機！接近戦なら…！」

「それが…甘いのよ！」

更に接近してきた敵に対して鈴は二振りの青龍刀『双天牙月』を呼び出し、敵の近接ブレードを弾くや両手の『双天牙月』を駆使して逆に攻め立てる。

『龍咆』による不可視の砲撃に目が行きがちだが、『甲龍』はパワーがある上格闘戦能力も平均以上にはある。おまけに格闘戦なら鈴の高い身体能力も存分に生かせる為、むしろ格闘戦の方が強いくらいだ。

鈴はスラスターを上手く駆使して敵を翻弄しながら斬撃を加え、時に虚を突いて蹴りや裏拳を見舞うなど緩急織り交ぜて一方的に敵を攻撃し続ける。

そこに別の1機が銃撃を加えようとするが、鈴は咄嗟に『双天牙月』を連結させてブーメランのように投げつける。

「正気か！？だが、貰う！」

「それが甘いつて…言ってるでしょ！」

武器を投げ捨てたも同然な鈴に敵は一転して攻勢に出ようとするが、鈴は半身でかわし、逆に禽打で敵の腕を掴むと、捻り上げる。

そのまま手を離して体勢を崩すと鈴は無手のまま蹴り、手刀、掌打、裏拳、肘打、貫手を叩き込むと、締めにも崩拳で敵を弾き飛ばし、戻ってきた『双天牙月』を掴んで再び分離させて両手に持つ。

（拳法を教えてくれたウェイ・パイ先生には今度会ったらお礼言わなきゃね…）

内心鈴は自身を始めとする中国代表及び代表候補生の専属医で、かつて自身に中国拳法を基礎とはいえレクチャーしてくれた『師父』でもあるウェイ・パイを思い浮かべる。

それに構わずに女達は同時攻撃を仕掛けようとするが、仮面ライダーアマゾンがその内1機に飛び付き、地面へと引き摺り降ろす。

「くっ！しっこい！」

「ほら！うかうかしていると後ろからバツサリよ！」

それを引き離そうとする女達だが、同時に攻撃を仕掛けてきた鈴により妨害される。

「将を射んとすればまず馬を射よ、ね…作戦変更よ！」

リーダー格の女はそう言う一旦鈴から距離を取りパッケージを呼び出すとミサイルを滝和也、岡村マサヒコ、ビクトル・ハーリンへと向けて発射する。

「マサヒコ！ビクトル！タキ！」

それを仮面ライダーアマゾンが見ると敵を即座に放り出して三人の前に回り込み、ミサイルから身を挺して三人を庇う。

「だったらこれも…防いでみなさい！」

そこに残る5機も並び立ち、同じようにパッケージを呼び出すと三人へ向けてミサイルやアサルトライフルを乱射する。

「いくらなんでも…汚なすぎじゃない！」

そこに鈴もスラスターを噴かして仮面ライダーアマゾンに並び立つと同じく三人の盾になりながら『龍咆』を撃ってミサイルを迎撃しつつ敵へと撃ち返すが、敵からの攻撃が激しく中々上手くはいかない。

「汚い？貴女…これはスポーツじゃなくて戦争よ？命の取り合い、殺し合いよ？生き残った方が、勝ち残った方が正しい…正義なのよ！」

女達は嘲笑いながらミサイルやアサルトライフルを仮面ライダーアマゾンや鈴へと浴びせる。しかし鈴はどうにかして『龍咆』で攻撃を中断させる。

「やはりその『龍咆』は厄介ね…回避や防御が難しいもの。それに

目潰しも兼ねて…アレを使うわよ！」

そうリーダー格の女が言うと再び6人がミサイルを発射すると今度は仮面ライダーアマゾンと鈴の足元へと着弾し、二人は煙に包まれる。

「こんなもので！」

しかし鈴は構わずに『龍咆』を発射するが…

「残念だけど当たらないわ！」

しかし女達はまるで砲撃が見えているかのように『龍咆』を回避しながら逆に銃撃やミサイルを浴びせる。

「そんな！？どうして!?!」

「なら特別に教えてあげるわ。確かに貴女の『龍咆』は砲撃はおろか砲身すらも見えない。だからこちらでも防御も回避も難しい。けどね…いくら砲身が見えないと言っても、空間に圧力をかけて砲身を形成する以上、どうしても気流の流れに乱れが生じるわ」

「まさか…この煙幕は!?!」

「そのまさかよ。この煙幕は貴女の『龍咆』を見えるようにする為よ。この煙が巻き上げられれば貴女が『龍咆』を使うと分かる。更に言えば煙の流れで砲身と貴女の狙い、発射するタイミングだって分かり易くなる。『龍咆』の最大のメリットはその不可視という点…それさえ無ければ回避も防御も簡単、恐れるに足らないわ。残念だったわね」

驚愕する鈴を女達は嘲笑いながらミサイルやアサルトライフルを仮面ライダーアマゾンや鈴へと浴びせ続ける。鈴は尚も『龍咆』を撃ち返すがことごとく回避され、意味をなさない。

「くっ！このままじゃアマゾンも鈴さんも…！せめてこれの届く距離まで降りてくれば…！」

その様子を見てビクトルは齒噛みしながらポケットからマサヒコや自身に仕込まれた発信器を改造したらしき何かを取り出す。それを見てマサヒコがビクトルに尋ねる。

「ビクトル、それがあれば…どうにかなるんだな!？」

「ああ、どうにかなる…少なくとも二人がこの状況を打開出来るだけの時間稼ぎくらいなら出来る…けどその為にはこいつを連中の近くで炸裂させないと…！」

「だったら…届かせてやるだけだ！」

ビクトルの言葉を和也は不敵に笑って遮ると続けて仮面ライダーアマゾンに声を張り上げる。

「アマゾン！悪いがお前のジャングレー！少し貸してくれ！悪いようにはしねえ！必ず突破口を開いてみせる！」

「タキ…分かった！ジャングレー！」

和也の言葉に仮面ライダーアマゾンは頷くと自らの愛車『ジャングレー』を呼び寄せて和也の前に停車させる。和也はそのままジャン

グラーに跨がる。

「マサヒコ！乗れ！」

「けど滝さん！ジャングラーに乗れるんですか！？」

「これでも昔はおやつさんの下でレーサーもやってたんだ！アマゾンよりも年季は上だぜ！それにこういうバイクは…仮面ライダーのバイクは慣れてんだ！新サイクロン号は俺も開発に参加したしよ！それくらい信じやがれ！」

「分かった…ビクトル！」

「ああ、滝さん！マサヒコ！後は！」

そう言ってビクトルは和也の後ろに乗ったマサヒコに発信器を改造したものを二つとも渡す。

そのまま和也は『ジャングラー』のスロットルを入れると『ジャングラー』を走らせ、そのままカウルからロープが付いた鍬を敵へと発射して1機の足へと巻き付け、そのままロープを巻き上げて『ジャングラー』を上昇させる。

「一体何のつもりだ！？」

しかし女は慌てずに近接ブレードでロープ部分を切り離そうとする。

「マサヒコ！」

「はい！」

ロープが切り離される直前にマサヒコは手に持ったものを思い切り投げ付ける。そこに和也は大型拳銃を抜き放ち撃って炸裂させる。

「一体何を…なっ!？」

そのまま落下していく『ジャングラ』を訝しげに見ていた女達だが、やがてハイパーセンサーに異常が発生し、やがてブラックアウトする。

「どうだ！僕特製のジャミング爆弾は！」

それを確認するとビクトルはしてやったりと言いたげな笑みを浮かべる。

ビクトルは発信器を改造し、破裂するとISのハイパーセンサーを妨害する効果があるシグナルを発する一種の爆弾とした。

勿論ISのハイパーセンサーを封じられるのはごく短時間だが、その間は攻撃もままならず、混乱している。

それを見ると仮面ライダーアマゾンが鈴に話しかける。

「リン！オレが合図したらソレを撃つんだ！」

「でもアマゾン…！」

「大丈夫！ビクトルもタキもマサヒコもリンもオレを助けてくれた！だから今度はオレがみんな助ける！」

「アマゾン…分かったわ、任せて！」

鈴の答えを聞くと仮面ライダーアマゾンは左腕の『ギギの腕輪』を掴み、力を腕輪に圧力をかける。

すると仮面ライダーアマゾンの手足のヒレや背鰭が激しく振動を開始し、そのまま煙幕を吹き飛ばす。腕輪に圧力が掛かると手足のヒレや背鰭を振動させてあらゆるものを突き破る。先程地面から飛び出してきたのと原理は同じだ。それを応用して煙幕を突き破り、吹き飛ばしたのだ。

「リン！今だ！」

「ありがとう！アマゾン！」

煙が完全に晴れると同時に鈴は『龍咆』を展開して、上空の敵を纏めて吹き飛ばす。

「しまった！だがまだ！」

漸くハイパーセンサーが回復した女達は何とか体勢を立て直し、アサルトライフルを二人に向けて発射する。

「ウオアアアア！」

しかし仮面ライダーアマゾンは独楽のように高速回転して銃弾を弾きながら飛び上がり、上空の敵に向けて突撃し、蹴散らす。

更に仮面ライダーアマゾンは女達の上を取ると今度は足を敵の一人

へと向けて高速回転して銃撃をことごとく弾き飛ばして、その敵へと飛び蹴りを放つ。

「スピッキク！」

その高速回転により威力が増した飛び蹴りをまともに食らった敵はそのまま落下し、『絶対防御』を発動させながら地面へと叩きつけられ、沈黙する。

「流石アマゾン！私も負けられないわ！」

すかさず鈴も『瞬間加速^{イケニッション・ブースト}』を使い敵に接近すると、『双天牙月』を構えて敵を滅多斬りにして撃墜すると、近接ブレードを構えて突撃してきたもう一人の敵に『龍咆』を至近距離からぶち込み叩き落として沈黙させる。

「ケケエエエエ！」

一方、仮面ライダーアマゾンは腰のベルト『コンドラー』を操作しロープを射出すると敵を絡めとり引き寄せせる。

そのまま地面に敵を投げ落とすと引き寄せられるロープの反動を生かして飛び蹴りを放ち、蹴りの反動で再び飛び上がる。そのままロープと蹴りの反動を駆使して連続して飛び蹴りを浴びせ続け、敵を沈黙へと追いやる。

「くっ！このままでは…！」

残る二人の内、リーダー格の女は輸送機の方へとスラスターを噴かして飛行し、残る一人は低空飛行で逃れようとする。

「あいつは私に任せて！アマゾンはそのいつを！」

「分かった！」

鈴はスラスターを噴かして上空に逃げたリーダー格の女を追う。

「ジャングレー！」

仮面ライダーアマゾンは低空飛行で逃れようとする敵にジャングレーを体当たりさせて叩き落とすと飛び上がり、右手のヒレ『アームカッター』に力を込める。そのまま敵に対して自由落下の勢いを乗せて『アームカッター』を降り下ろす。

「大切断っ！！！」

仮面ライダーアマゾンの渾身の斬撃を受けたその敵は『絶対防衛』を発動させると同時に沈黙する。

一方、鈴とリーダー格の女は輸送機の周辺で壮絶なドッグファイトを繰り広げていたが、やがて女の方は近接ブレード以外の武装を失う。

「ここまでよ！」

「いえ！まだよ！」

そのまま女は輸送機のエンジン部分へとスラスターを噴かして回り込む。それを鈴も追いかける。

そのまま女はエンジンを背に近接ブレードを構えて鈴と対峙する。
鈴は肩部『龍咆』を展開する。

「私の勝ちよ！」

「いえ、残念だけど私の勝ちだわ！」

そのまま鈴が『龍咆』を発射する直前に近接ブレードでエンジンを破壊し、直後に女は『龍咆』をモロに食らい墜落していく。

「例えその専用機と言えどもこの特殊金属製の輸送機は破壊出来ないわ！せいぜい目の前であるの三人が下敷きになるのを指をくわえながら見てるがいいわ！」

「!?!」

女はそう捨て台詞を残すと地面に叩きつけられ『絶対防御』を発動させると同時に沈黙する。

女の言う通り輸送機の墜落コースには和也、マサヒコ、ビクトルがいる。輸送機の乗組員達は既に全員脱出したようだ。今からスラストを噴かして先回りしても鈴の腕は二つしかない。一度に連れて離脱出来るのは二人までだ。そして二人を安全な場所で降ろして、もう一度戻って残る一人を連れて離脱出来る時間は…ない。

ならば空中で粉碎しようと鈴は『龍咆』を何度も撃ち込むが、輸送機はびくともしない。このままでは…

「リン！後はオレがやる！」

そこに仮面ライダーアマゾンがリンに声を張り上げる。

「無茶よ！こいつは…！」

「無茶じゃない！オレは、出来る！」

「けど…！」

「リン、頼む。オレを、信じてくれ」

そのまま鈴と仮面ライダーアマゾンの目が合う。

「…そんな目をしてそう言われたら、信じるしかないじゃない…けどアマゾン、必ず、生きて戻ってきてよ！」

「任せろ！誰も死なない！死なせない！」

鈴が離脱すると同時に仮面ライダーアマゾンはジャングラーのカウルから『ガガの腕輪』を取り出し、『ギギの腕輪』と組み合わせる。すると腕のヒレが大型化し、仮面ライダーアマゾンの身体にインカの超古代文明のパワーが満ち溢れる。

「アマゾンの…ヒレが…？」

「鈴さんは見たこと…ないみたいですね」

「当たり前だろ？あれは人の乗ってるISに使うには威力が有り過ぎる。鈴さんが見たことなくって当然さ」

「まさかまた見ることになるとはな…鈴、腰抜かすなよ？」

近くに降り立った鈴が初めて見る仮面ライダーアマゾンの姿に目を見開くのに対して、既に見たことがある三人は笑って口を開く。

仮面ライダーは有人ISとの戦いに際しては搭乗者までは殺さないようにギリギリで手加減をしている。

搭乗者を殺さないのは仮面ライダーの正義や信念に反するという事もあるが、何より怪人と同じ力と姿を持ち、多くの同類の血に塗れてきた彼らが怪人と同じく人間性を喪失した存在にならないようにという最後の抵抗という意味合いもある。

その為極力技の威力もギリギリで手加減しているのだが、技によっては技そのものが手加減しようがない、或いは手加減しても死ぬようなものも存在し、その技は『禁じ手』として有人ISに対する使用を自ら禁じ、まず使う事はない。

その『禁じ手』には技の入り方や掛け方自体の殺傷力が非常に高く、手加減しても使っても危険な投げ技や締め技の類が多く、仮面ライダー1号の『ライダーヘッドクラッシュャー』や仮面ライダーXの地面を転がり敵を叩きつけるタイプの『真空地獄車』などはその典型だ。

しかし中には仮面ライダーV3の『V3火柱キック』のように打撃技ながら手加減しても死ぬくらい威力が有り過ぎる故に『禁じ手』とされている技もある。

これから仮面ライダーアマゾンが使う技も『禁じ手』の中では後者

に属するものだ。

そのまま仮面ライダーアマゾンが輸送機へと真つ正面から突撃していくとそのままヒレを全力で輸送機へと降り下ろす。

「スウウウウパアアアツ！大ツ！切ツ！だあああんツツ！！」

インカ超古代文明のパワーを込めて膨大なエネルギーを纏わせながら仮面ライダーアマゾンが放った必滅の一撃は、龍の咆哮や双牙すら通さぬ鋼の怪鳥を容易く両断し、更にその斬撃の余波や余剰エネルギーで粉微塵に完全粉碎せしめた。

夕日が空を照らし出す中、変身を解いたアマゾンと『甲龍』を待機状態に戻した鳳鈴音、それに滝和也、岡村マサヒコ、ビクトル・ハリンの五人は山道を歩いていった。

停めてある和也のバイクの所に向かう為だ。そこにビクトルの保護も兼ねて和也が要請した応援が到着し、和也から犯人グループの居場所を聞くと和也に敬礼して纏めて和也達がふん縛っておいた犯人グループを引っ立てるべく向かって行った。

「けどアマゾン、あんな姿もあつたんだ！正直びっくりしたわ。しかもあんなに威力があるなんて思わなかった」

「うん。オレも最近使ってたし、アレも後ろにマサヒコやビクトル、タキ、それにリンが居たから出せたようなものだから。」

多分オレ一人だったら危なかった。だから、ありがとうリン、タキ、ビクトル、マサヒコ」

「お礼を言いたいのは俺の方だよ、アマゾン」

「ありがとう、アマゾン。ただ僕もあればっかりは腰が抜けるかと思っただよ」

礼を述べるアマゾンにマサヒコとビクトルは笑いながら首を振る。和也は黙って照れ臭そうに鼻の下を指で擦り首を振る。

そこに鈴がポツリと呟く。

「私、そんな事も知らないで…ちょっとマサヒコさんとハーリン博士が羨ましいです…言っちゃダメだって分かってるんですけど…」

「そんな事、気にしないでください。俺もビクトルも気にしてませんし。それに…白状しちゃうと、俺もビクトルも鈴さんが羨ましいって思ってしまったから」

「マサヒコさんと…ハーリン博士が私を、ですか？」

「ええ。僕もマサヒコも貴女が…アマゾンと肩を並べて戦える鈴さんが羨ましいと思ったんです。僕達はアマゾンに守られてばかりで、鈴さんみたいにアマゾンと対等な立場で一緒に戦う事は出来ませんでしたから…白状したついでに僕とマサヒコのお願ひ聞いてくれますか？」

マサヒコとビクトルは苦笑しながらそう言つと表情を改めて鈴に向き直る。

「お願いします、僕とマサヒコの代わりにこれからもアマゾンの隣で一緒に戦ってくれませんか？貴女にはそれだけの力が…アマゾンの横で、時にアマゾンを手助けして戦えるだけの力があります」

「俺からもお願いします。俺もビクトルも違う場所で、違うやり方でアマゾンや貴女と一緒に戦っていきます。ですからアマゾンの側で、アマゾンの事をお願いしてもいいですか？あいつ、昔から無茶ばかりするヤツでしたから…」

「マサヒコさん…ハーリン博士…私、まだまだアマゾンやマサヒコさん、ハーリン博士、滝捜査官、それに一夏や他の皆に助けられてばかりですけど…頑張りますね。マサヒコさんやハーリン博士、それにアマゾンの…『トモダチ』の為に」

そう言って鈴はマサヒコとビクトルに微笑むと、マサヒコとビクトルも笑い返す。

「それと僕の事は『ハーリン博士』じゃなくて『ビクトル』でいいですよ？やっぱり慣れませんし…それに僕もマサヒコやアマゾンと同じく貴女と『トモダチ』ですから」

「ありがとうございます…ビクトルさん。これからもよろしく願いしますね」

一方、アマゾンは次の仮面ライダーを迎えに行くべくバイクに跨がる和也と話していた。

「じゃ、俺が居ない間鈴や一夏君、それにその友達は任せませ？本郷や風見達はもう合流してるから大丈夫だと思うが…」

「うん。任された。タキは泥舟に乗った気持ちでいいから」

「大船だ！全く、本当に泥舟に乗った気分だぜ…」

相変わらずマイペースなアマゾンにツッコミを入れた和也は頭を抱える。

「それよりタキも気を付けろよ？タキに何かあつたらオレもみんなも…『トモダチ』が心配する。だから、無理はするな」

「お前にそんな事を言われるなんてな…分かったよ。これからは気を付けるさ。じゃ、また後でな」

互いに顔を見合せ笑い合うと、やがて滝和也はバイクのエンジンを入れてそのまま走り去っていった。

「アマゾン！」「」

それを見送ったアマゾンに鈴、マサヒコ、ビクトルから同時に呼び掛けられる。

「今、行く！」

その呼び掛けに天真爛漫で、明るく、陽気で、屈託のない、楽しそうな…それでいてどこか優しいな笑みを浮かべながら手を上げて応えると、岡村マサヒコ、ビクトル・ハーリン、そして凰鈴音の下へと山本大介…アマゾンは歩き始めた。

人々の　そして『トモダチ』の自由と平和を汚す悪への怒りと正義の魂を胸に秘め、強く気高く優しい野獣は鬼となり、悪を狩り尽くすその時まで戦い続け、自らの存在と生存を証明し続けるだろう。

それを、友が望むのなら。

第七話

強くてマダラで優しい野獣（後書き）

本話を最後までお読み頂きありがとうございます。

今回も前回同様分割するような形での投稿となりました。

やはり未だ慣れぬ形式ですのでご意見、ご指摘などございましたら忌憚なくおっしゃって頂けますと大変参考になります。

では次回も宜しければお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8119z/>

インフィニット・ストラトス×仮面ライダー～無限の蒼穹、正義の仮面～

2012年1月6日19時34分発行